岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第615集

堤（つつみ）遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業都鳥２期地区関連遺跡発掘調査

２０１３

岩手県県南広域振興局農政部農村整備室

（公財）岩手県文化振興事業団

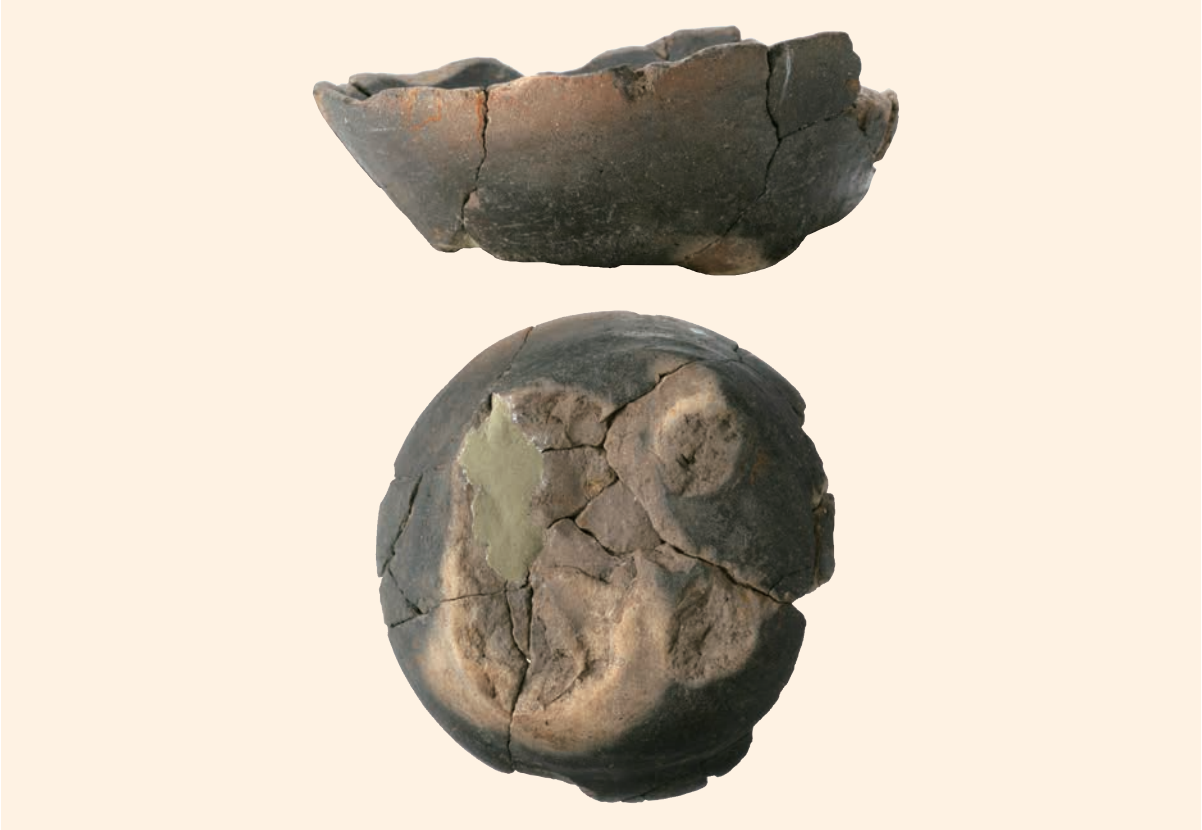
堤遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業都鳥２期地区関連遺跡発掘調査

B区　遺構群全景（東から）

20号土坑　土師器・高坏出土状況（北西から）

出土した古代の遺物



脚付の土師器坏

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多くのこされております。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料であります。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らねばなりません。

一方、県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要とされます。それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財の保護との調和も求められるところであります。

（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行ない、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は奥州市胆沢区における、経営体育成基盤整備事業都鳥２期地区に関連して平成 23 年度に発掘調査された堤遺跡の調査成果をまとめたものであります。今回の結果、奈良時代の集落遺跡であることが判明し、竪穴住居や土坑などの遺構を検出するとともに、８世紀代のものと考えられる土師器を中心とした遺物群が多量に出土しています。

また江戸時代の陶磁器や砥石、金属製品が出土し、その周辺からは掘立柱建物跡や井戸、土坑も見つかっており、江戸時代の民家跡を中心とした集落遺跡であるという側面もあわせもつことが分かりました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県県南広域振興局農政部農村整備室をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成 25 年 3 月

公益財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　　池　田　克　典

例　　言

1　本報告書は、平成23年度に行った堤遺跡（奥州市胆沢区南都田字四ッ柱201番地ほか）の発掘調査の成果を収録したものである。

2　今回の調査は、経営体育成基盤整備事業都鳥２期地区に関わる事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と岩手県県南広域振興局農政部農村整備室との協議を経て、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。

　なお、費用負担は岩手県教育委員会が岩手県県南広域振興局農政部農村整備室に農家負担分を補助している。

3　遺跡台帳に登録されている遺跡番号は「NE25 － 0226」である。

4　遺跡略号、発掘調査期間、担当者、調査面積、委託者名は以下の通りである。

　遺跡略号：ＴＴ－11

　調査期間：平成23年4月25日～6月13日

　調査担当者：須原　拓・佐藤あゆみ

　調査面積：1,671㎡（本調査1,410㎡・確認調査261㎡）

　委託者：岩手県県南広域振興局農政部農村整備室

5　室内整理期間と担当者は、以下の通りである。

　整理期間：平成23年11月1日～平成24年2月15日

　担当者：佐藤あゆみ

6　調査および整理における委託業務については次の機関に依頼した。

　基準点測量：株式会社　東開技術

　航空写真撮影：株式会社　東邦航空

　石材鑑定：花崗岩研究会

　炭化物年代測定（ＡＭＳ）：株式会社　加速器分析研究所

7　本遺跡の調査成果は、すでに『平成23年度発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第603集）において発表しているが、内容については本書が優先する。

8　土色の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修1993）を使用している。

9　本報告書の執筆・編集は須原が行った。

10　本報告書で使用した地形図は、国土地理院発行１：25,000「供養塚」を使用している。

11　本遺跡の調査で得られた一切の資料、出土遺物・撮影写真・遺構実測図・遺物実測図は岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡　　例

1　遺構について

（1）本文中の図版縮尺

以下を原則とし、各図版にはスケールを付している。

平面・断面：1/40　炉の平面・断面：1/20

（2）遺構断面の土層注記

野外調査の際、土層の観察記録については以下の項目を基本とし、記録した。

色調（『標準土色帖』（農林水産省農林技術会議局監修）を基準とする）

粘性（4段階表示：強い、やや強い、やや弱い、弱い）

しまり（4段階表示：密、やや密、やや疎、疎）

混入物の有無（混入量は5段階表示：微量　1～10%・少量　11～20%・中量21～30%・やや多い31～40%・多量41～50%）

2　遺物について

（1）本文中の図版縮尺

以下を原則とし、各図版にはスケールを付している。

土師器・須恵器：1/3・土製品1/2

剝片石器：2/3・礫石器：1/3

（2）遺物の各部位の呼称について

土器の各部位の呼称については次ページ凡例図に示したものを基準とした。また石器・石製品の各部位の呼称についても同様である。観察表にある法量は凡例図矢印の通りに計測を行い、記している。

（3）観察表の表記項目について

遺構名、層位・種別器種・残存部位・胎土混入物・法量（口径・底径・器高）・調整技法（内面・外面）・焼成・外面、内面色調について観察し、記載している。

調整技法：口縁部（「口」と表記）、頸部（「頸」と表記）胴部（「胴」と表記）、底部（「底」と表記）に分けて記載している。図中における調整技法の表現は凡例に示した通りである。

焼成：土器断面にみられる野焼きの際の火回りの悪さを示す黒色層を基準として下記4段階に分類した。

良　好→断面に黒色層がみとめられず、断面の色調が橙色を帯びるもの。火回りが良いか、あるいは二次焼成により断面色調が変化したと考えられる。

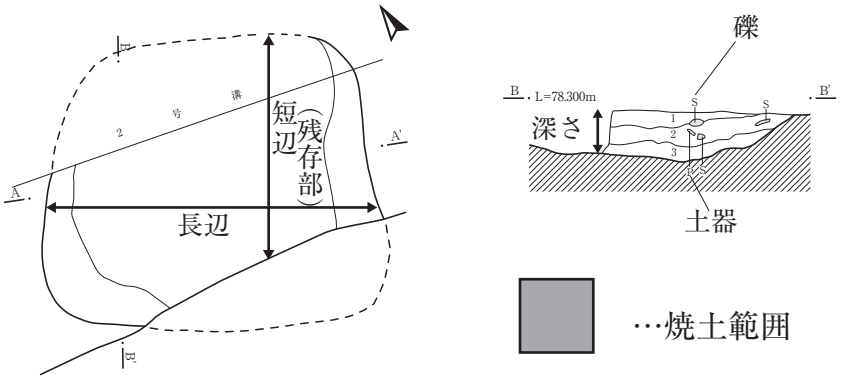
やや良好→断面に明瞭な黒色層は認められないが、土器の内外面色調と比べ、やや暗い（黒色味がかっている）もの。

やや不良→断面の中央部にのみ黒色層がみとめられるもの。外面の焼成は良好であっても内面に火が回っていないもの。

不　良→断面の半分以上に黒色層が認められ、火回りが悪いもの。

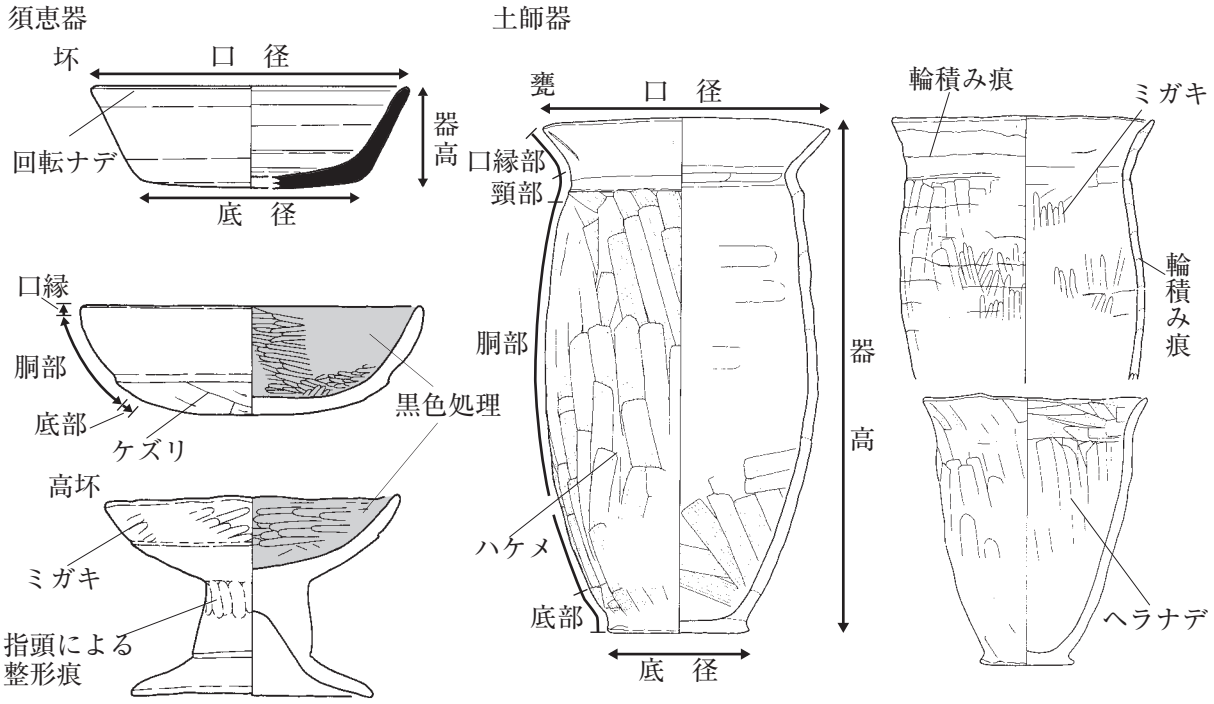
色調：外内面について観察し、『標準土色帖』（農林水産省農林技術会議局監修）に示される色調を記した。

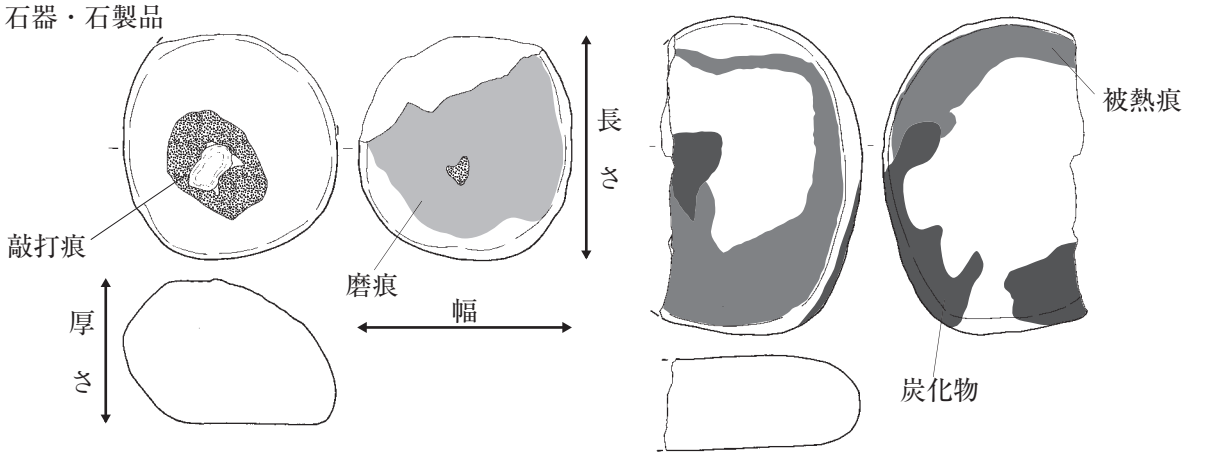
遺構



※残存部の数値は（　）で示している

遺物





凡　例　図

目　　次

Ⅰ　発掘調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　遺跡周辺の地理的環境

1　遺跡の位置 …… 1

2　遺跡の立地 …… 1

3　周辺の遺跡 …… 3

Ⅲ　調査の経過と方法 …… 6

1　野外調査 …… 6

2　室内整理 …… 6

Ⅳ　検出した遺構・遺物 …… 8

1　調査区の概要 …… 8

2　A　区 …… 9

3　B　区 …… 14

4　C　区 …… 52

5　D　区 …… 57

6　E　区 …… 59

7　F　区 …… 69

Ⅴ　自然科学分析 …… 80

Ⅵ　総　括 …… 83

報告書抄録 …… 124

図 版 目 次

凡例
第１図　遺跡位置図…… 2
第２図　周辺の遺跡…… 5
第３図　調査区位置図…… 8
第４図　A区全体図…… 10
第５図　A区１～３号土坑・１号溝…… 11
第６図　A区１号掘立柱建物跡…… 13
第７図　A区遺構外出土遺物…… 13
第８図　B区全体図（１）…… 15
第９図　B区全体図（２）…… 16
第10図　B区全体図（３）…… 17
第11図　B区１号住居…… 18
第12図　B区１号住居出土遺物…… 19
第13図　B区２号住居…… 20
第14図　B区３号住居…… 21
第15図　B区３号住居出土遺物…… 21
第16図　B区４号住居…… 23
第17図　B区４号住居出土遺物（１）…… 24
第18図　B区４号住居出土遺物（２）…… 25
第19図　B区５号住居・１号住居状遺構…… 27
第20図　B区１号住居状遺構出土遺物…… 28
第21図　B区２号掘立柱建物跡…… 28
第22図　B区４～９号土坑…… 30
第23図　B区10～16号土坑…… 32
第24図　B区17～21号土坑…… 34
第25図　B区22～28号土坑…… 36
第26図　B区29～35号土坑…… 38
第27図　B区土坑出土遺物（１）…… 40
第28図　B区土坑出土遺物（２）…… 41
第29図　B区土坑出土遺物（３）…… 42
第30図　B区２号溝…… 44
第31図　B区２号溝出土遺物…… 45
第32図　B区１号性格不明遺構…… 46
第33図　B区１号性格不明遺構・柱穴出土遺物…… 46
第34図　B区遺構外出土遺物（１）…… 48
第35図　B区遺構外出土遺物（２）…… 49
第36図　B区周辺調査区外出土遺物…… 51
第37図　C区全体図…… 53
第38図　C区36号土坑…… 54
第39図　C区36号土坑出土遺物（１）…… 54
第40図　C区36号土坑出土遺物（２）…… 55
第41図　D区全体図…… 58
第42図　D区37・38号土坑…… 59
第43図　E区全体図…… 60
第44図　E区39～45号土坑…… 62
第45図　E区土坑出土遺物（１）…… 63
第46図　E区土坑出土遺物（２）…… 64
第47図　E区46・47号土坑・３～５号溝…… 67
第48図　E区遺構外出土遺物…… 68
第49図　F区全体図…… 70
第50図　F区３号掘立柱建物跡・48・49号土坑…… 71
第51図　F区６～９号溝…… 72
第52図　時代毎にみた出土遺物…… 84
第53図　調査区位置図…… 86

表　目　次

第１表　周辺の遺跡一覧…… 4
第２表　遺構名変更表…… 7
第３表　A区遺構外出土遺物観察表…… 13
第４表　B区１号住居出土遺物観察表…… 20
第５表　B区３号住居出土遺物観察表…… 22
第６表　B区４号住居出土遺物観察表…… 25
第７表　B区１号住居状遺構出土遺物観察表…… 28
第８表　B区土坑出土遺物観察表…… 43
第９表　B区２号溝出土遺物観察表…… 45
第10表　B区１号性格不明遺構…… 47
第11表　B区柱穴出土遺物観察表…… 47
第12表　B区遺構外出土遺物観察表…… 50
第13表　B区周辺調査区外出土遺物観察表…… 51
第14表　C区土坑出土遺物観察表…… 56
第15表　E区土坑出土遺物観察表…… 64
第16表　E区遺構外出土遺物観察表…… 68
第17表　柱穴一覧表…… 74

写真図版目次

写真図版１　調査区全景（１）…… 92
写真図版２　調査区全景（２）…… 93
写真図版３　基本土層…… 94
写真図版４　A区検出遺構（１）…… 95
写真図版５　A区検出遺構（２）・B区検出遺構（１）…… 96
写真図版６　B区検出遺構（２）…… 97
写真図版７　B区検出遺構（３）…… 98
写真図版８　B区検出遺構（４）…… 99
写真図版９　B区検出遺構（５）…… 100
写真図版10　B区検出遺構（６）…… 101
写真図版11　B区検出遺構（７）…… 102
写真図版12　B区検出遺構（８）…… 103
写真図版13　B区検出遺構（９）…… 104
写真図版14　B区検出遺構（10）…… 105
写真図版15　B区検出遺構（11）…… 106
写真図版16　B区検出遺構（12）…… 107
写真図版17　B区検出遺構（13）…… 108
写真図版18　B区検出遺構（14）…… 109
写真図版19　B区検出遺構（15）・C区確認調査区…… 110
写真図版20　C区～E区検出遺構…… 111
写真図版21　E区検出遺構（１）…… 112
写真図版22　E区検出遺構（２）…… 113
写真図版23　E区検出遺構（３）…… 114
写真図版24　F区検出遺構（１）…… 115
写真図版25　F区検出遺構（２）…… 116
写真図版26　A区出土遺物・B区１～４号住居出土遺物…… 117
写真図版27　B区４号住居・土坑出土遺物…… 118
写真図版28　B区土坑出土遺物…… 119
写真図版29　B区土坑・遺構外出土遺物…… 120
写真図版30　B区遺構外・C区土坑出土遺物…… 121
写真図版31　C区土坑・E区土坑出土遺物…… 122
写真図版32　E区土坑・遺構外出土遺物…… 123

Ⅰ　発掘調査に至る経過

経営体育成基盤整備事業都鳥２期地区のほ場整備工事に伴い、その事業区域内に堤遺跡が存在することから、発掘調査を実施することとなったものである。

都鳥２期地区は、奥州市胆沢区南都田地内に位置し、水田の大部分は昭和 26 年～ 29 年にかけて積雪寒冷地土地改良事業により 10a 区画に整備されているが、農業機械の大型化が進む中で小区画となったこと、農道は幅員 2 ～ 3m と狭小で通行に支障があること、水路は用排兼用土水路であるため用水不足や排水不良であり維持管理に多大な労力を投じていることなどから、地域営農の確立に十分な対応ができない状況である。このため本事業により水田を標準区画 1ha の大区画化とし、併せて用排水路、道路の整備を行い、地域農業の中心となる経営体を育成し活力があり生産性の高い地域営農の確立を目指しているものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、岩手県県南広域振興局農政部農村整備室から平成 22 年 10 月 6 日付県南広農整第 128-5 号「経営体育成基盤整備事業都鳥２期地区に係る埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成 22 年 10 月に試掘調査を実施し、工事に着手するには、堤遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成 22 年 11 月 4 日付教生第 946 号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当農村整備室へ回答してきた。

この回答をうけ、当農村整備室は、平成 22 年 11 月 25 日付県南広農整第 128-7 号「埋蔵文化財試掘調査に係る工法協議について」により、盛土工法による保存箇所と、発掘調査による記録保存箇所について協議を行った。

その結果を踏まえて、当農村整備室は、岩手県教育委員会の調整を受けて平成 23 年 4 月 1 日付で公益財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（岩手県県南広域振興局農政部農村整備室）

Ⅱ　遺跡周辺の地理的環境

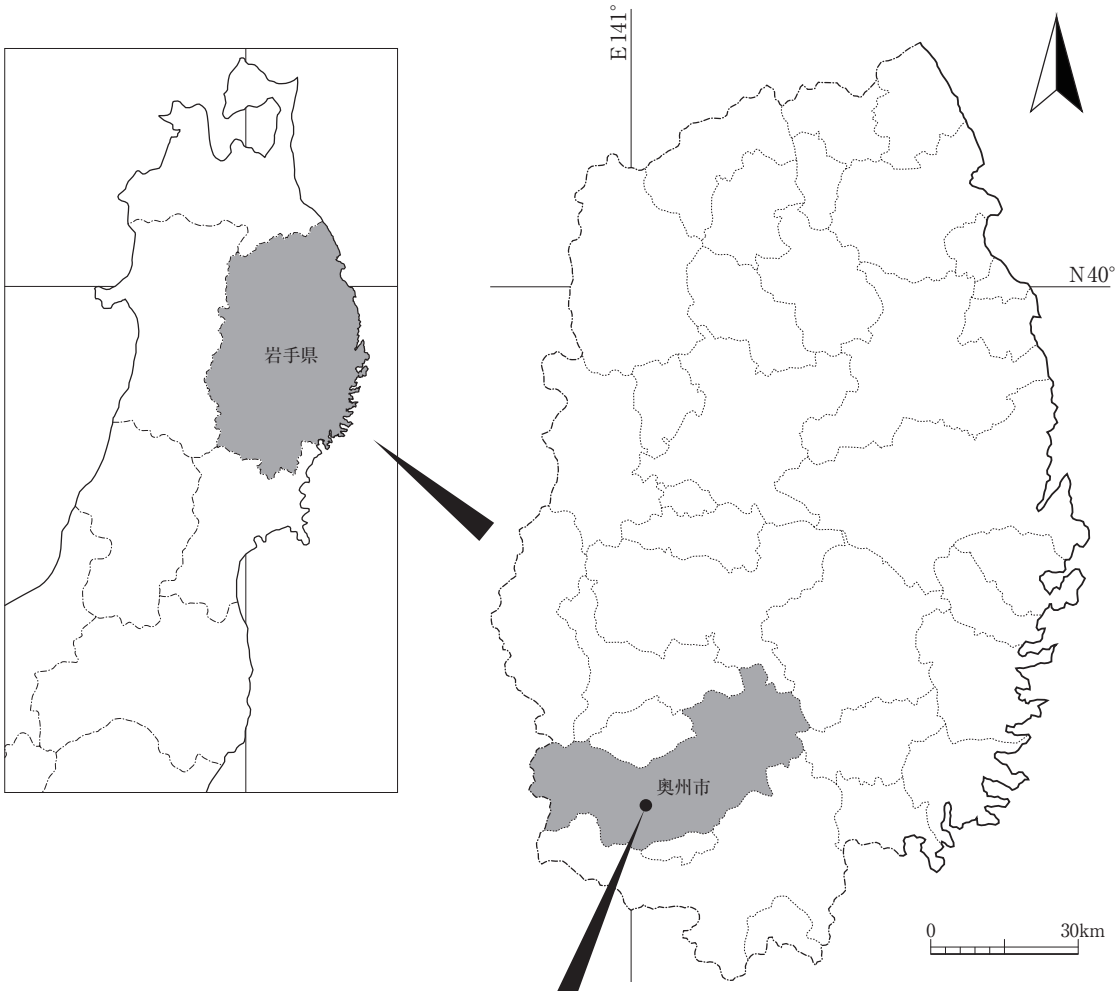
１　遺 跡 の 位 置

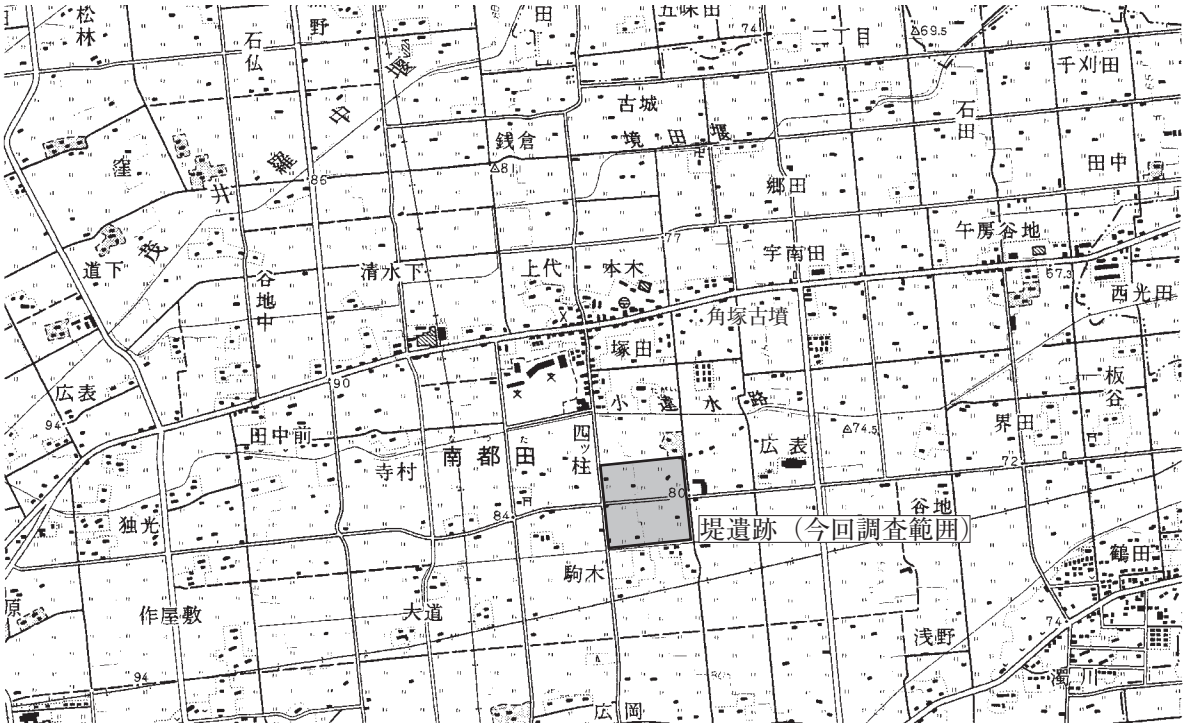
堤遺跡は奥州市胆沢区の南西部、北緯 39 度 8 分 13 秒、東経 141 度 5 分 26 秒付近の地点に位置し、国土地理院発行の２万５千分の１地形図「供養塚」NJ-54-14-14-3 の図幅に含まれる。胆沢川の南側 2.5 ｋｍ、北上川の東側６ｋｍである。

本調査は、経営体育成基盤事業に伴い、パイプライン用地、排水路、田区を対象として調査が行われた。調査前の現況は水田・畑地である。

２　遺 跡 の 立 地

堤遺跡は胆沢川と衣川・北股川に挟まれる胆沢扇状地の北側、水沢段丘高位面に立地する。遺跡の標高は 78 ～ 79.5 ｍ（遺構検出面の標高）で、平成 22 年度調査区と比べほぼ同じである。なお西へ１ｋｍに位置する作屋敷遺跡の標高と比べると約 10 ｍ低くなっている。





1：25,000「供養塚」

第１図　遺跡位置図

3　周 辺 の 遺 跡

岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の平成18年３月31日現在のまとめによると、奥州市の遺跡は1,069箇所にのぼり、このうち胆沢区内では185遺跡を数える。遺跡の時代を見てみると、旧石器時代から近世まで、各時代の遺跡が存在する。なかでも縄文時代に比定される遺跡は多く、別の時代との複合遺跡まで合わせると、全体の７割近くを占めている。このうち発掘調査（試掘調査を含む）が行われた遺跡は50箇所以上にのぼり、区内の遺跡全体の３割弱に相当する。

ただしその一方、堤遺跡の位置する胆沢区南都田地区に関しては古墳時代から古代の遺跡が多い。古墳時代の遺跡では、国史跡の角塚古墳をはじめ、蝦夷塚古墳、椛谷古墳、鶴田古墳群が著名であるが、古代に比定される遺跡は角塚古墳の周辺に多く分布する傾向が見受けられる。近年、経営体育成基盤事業に伴う発掘調査が続いており、南都地区およびその周辺に分布する古代の遺跡の内容が明らかになりつつある。

作屋敷遺跡は平成20年度の発掘調査で平安時代の竪穴住居８棟、掘立柱建物跡１棟、土坑21基、また中世などの溝18条が見つかり、同遺跡が平安時代における大規模集落であったことが明らかになり、また加えて出土遺物の中に緑釉陶器片などの貴重な資料も含まれていた。同遺跡は平成23年度にも調査が行われ、同時代の竪穴住居がみつかった他、豪族居館の可能性が高い掘立柱建物跡数棟の分布も確認され、集落の大きさだけではなく、地域の有力者の存在が窺える貴重な遺跡であることが分かった。

尼坂遺跡は昭和26年から平成20年までに旧胆沢町教育委員会と当センターにより、計５回の発掘調査が行われ、その結果、平安時代の竪穴住居や土坑、周溝（円形周溝か）が見つかっている。また尼坂遺跡と地続きとなっている牡丹野遺跡でも平成20年の調査で平安時代の竪穴住居２棟、土坑４基などが見つかっており、両遺跡はおそらく同一集落と考えられる。それぞれからみつかったものは少ないものの、２つの遺跡を合わせると、規模の大きい平安時代の集落であったことが考えられる。

小十文字遺跡は昭和50年代に旧胆沢町教育委員会が２回発掘調査し、奈良時代から平安時代にかけて継続する集落遺跡であることが分かった。また他に、古代と思われる鍛冶炉も見つかっている。

漆町遺跡も昭和50年代に旧胆沢町教育委員会によって調査が行われ、奈良時代の竪穴住居を多く検出し、該期の大きな集落であることが分かった。また同遺跡は出土遺物から奈良時代以前から続く集落遺跡であった可能性も考えられる。

銭倉・要害遺跡は平成23年度に調査され、平安時代の竪穴住居を多く検出した。水路部分のみの調査であり、調査区外にも集落は広がる可能性が高い。

石田Ⅰ・Ⅱ遺跡も平成23年度に調査され、古墳時代から平安時代の竪穴住居が多数みつかっており、長い間継続した大規模集落であることが分かってきた。そして竪穴住居などの遺物の他にも、貴重な遺物が出土している。

地続きとなる沢田遺跡も同年調査が行われ、古墳時代の円墳が検出されている。両遺跡合わせて、居住域と墓域が分かる集落として貴重な資料となり得る。また沢田遺跡では沢状の低湿地から、木製品なども出土した。

こういった、主に古代の集落遺跡に囲まれる環境の中に堤遺跡は位置している。したがって堤遺跡の性格や意義付けも本来、周辺遺跡との関連から捉えるべきであろう。

堤遺跡は古くから登録されていた遺跡であり、『胆沢市史Ⅰ　原始古代編』にも記載された遺跡があ

る。『胆沢市史Ⅰ』によれば、遺跡範囲からは土師器片や銅鏡を模したと思われる土製品が出土していたという（遺物は火災により焼失）。また当センターでは平成22年に発掘調査を行い、今回調査区より西側の範囲を調査し、平安時代の竪穴住居を検出している。水路部分のみの調査のため、集落全体の様相は定かではないが、竪穴住居の配置から考えても、ある程度の規模を有する集落であったことが想像される。

今回の調査も多くの遺構を確認した。これらの遺構群が、堤遺跡にみられる古代以降の集落の広がりにどのように反映されるのか、次章以降、遺構・遺物を概観した上で、後述することとする。

第１表　周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	遺構	備考
1	西光田Ⅰ	散布地	平安	土師器、須恵器		
2	西光田Ⅱ	集落跡	平安	土師器、須恵器		
3	西光田Ⅲ	散布地	平安	土師器		
4	鶴田Ⅱ	散布地	縄文、平安	縄文土器、石器、土師器、須恵器		
5	濁川	集落跡	縄文、平安	縄文土器、土師器、須恵器		
6	浅野前	集落跡	縄文、古代	縄文土器、土師器、須恵器		
7	浅野	散布地	縄文、古代	縄文土器、土偶、弥生土器、土師器、須恵器		
8	袖谷地Ⅱ	散布地	平安	土師器、須恵器		
9	合野	散布地	縄文、古代	縄文土器、石器		
10	見分森	生産跡	平安	土師器、須恵器		
11	片子沢	散布地	縄文、古代	縄文土器、石器、土師器、須恵器		
12	糀谷田	散布地	縄文、古代	縄文土器、土師器		
13	石田Ⅰ・Ⅱ	集落跡	古墳、奈良、平安	土師器、須恵器、土製品、羽口	竪穴住居、土坑など	H23・24 年度調査
14	堰田	散布地	平安	土師器		
15	机地	散布地	奈良、平安	土師器		
16	沢田	古墳、散布地	古墳、平安	土師器、須恵器、玉、黒曜石剥片	古墳、竪穴住居	
17	宇南田	集落跡	平安	土師器		
18	机地館	城館跡	中世		堀	
19	銭倉	散布地	平安	土師器		
20	銭倉	散布地	奈良、平安	土師器、須恵器		H23 年度調査
21	要害	散布地、城館跡	奈良、平安、江戸	土師器、須恵器	土塁	胆沢町教委 26 集
22	角塚古墳	古墳	古墳	埴輪	古墳	胆沢町教委 28 集
23	塚田	散布地	奈良、平安	土師器、須恵器		胆沢町教委 14 集
24	堤	集落跡	奈良、平安	土師器、須恵器、灰釉陶器	竪穴住居、土坑など	本報告書
25	清水下	散布地	弥生、平安	縄文土器、弥生土器、土師器、石包丁		
26	二本木	散布地	奈良、平安	土師器、須恵器		胆沢町教委 13 集
27	漆町	集落跡	平安	土師器、須恵器	竪穴住居	H24・25 年度調査
28	川端	散布地	平安	土師器		岩埋文 569 集
29	広岡館	城館跡	中世		堀、土塁	
30	国分	散布地	古代、近世	縄文土器、石器、土師器、須恵器		岩埋文 569 集
31	森下	散布地	縄文、古代	土師器	竪穴住居	
32	新屋敷	散布地	平安	土師器		
33	河原田	散布地	平安	土師器		
34	寺屋敷	散布地	平安	土師器		
35	作屋敷	集落跡	平安	土師器、須恵器	竪穴住居、掘立柱建物跡、土坑など	
36	牡丹野	集落跡	弥生、平安	弥生土器、土師器、須恵器	竪穴住居	岩埋文 569 集
37	尼坂	散布地	縄文、平安、近世	縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器		岩埋文 569 集
38	小十文字	集落跡	縄文、平安	縄文土器、土師器		
39	新里館	城館跡	平安	土師器・須恵器	堀	
40	中井	散布地	平安	須恵器		
41	箸塚	散布地	縄文、古代	縄文土器、土師器		
42	若柳要害館	城館跡	中近世	土師器		
43	芦の随	散布地	縄文、平安	縄文土器、石器、土師器		胆沢町教委 21 集

（1:25,000「供養塚」）

第２図　周辺の遺跡

Ⅲ　調査の経過と方法

１　野　外　調　査

本調査に先立ち、岩手県教育委員会生涯学習文化課により試掘調査が実施され、委託者との協議を経て調査区が設定されている。

平成23年４月25日（月）より調査を開始している。調査員２名、野外作業員22名（最終的な登録人数26名）体制で行った。

担当調査員２名（須原・佐藤）は調査開始時に、任意に試掘トレンチを設定し、表土下の地層状況を確認した。その上で、重機（バックホー0.45㎥）による表土除去後、人力による遺構検出作業を行っている。検出した遺構は、規模や性格により、適宜に４分法と２分法を選択し、精査を行った。各遺構については平面と断面、また必要に応じ遺物出土状況の実測および、写真撮影を行った。　遺構平面図の実測には、ＣＵＢＩＣ社製遺構実測ソフト「遺構くん」を用いて光波トランシットによる測量を行った。

写真撮影は主に、デジタルカメラ１台（キャノンＥＯＳ50Ｄ）と６×７判カメラ1台（モノクローム）を使用し、同アングルのデジタル写真・銀塩写真両方撮影している。またセスナ機による航空撮影を用いた全景写真撮影を行った（東邦航空に委託している）。

遺物の取り上げには調査区に設定したグリッドによる表示を用いている。グリッドは平面直角座標第Ｘ系（世界測地系）にあわせている。まず、100×100ｍの大区画に区割りし、西から東にローマ数字（Ｉ～）を、北から南にアルファベット大文字（Ａ～）を付した。さらに大区画を５×５ｍの小区画に細分し、西から東にアラビア数字（１～20）を、北から南にアルファベット小文字（ａ～ｔ）を付した（第３図遺構配置図脇のマス目参照）。各グリッドの名称については、大区画と小区画の組み合わせで、例えば「ＩＡ１ａ」のように呼称している。

平成22年６月10日（金）に委託者、県教育委員会立ち会いの下、終了確認を受けた。

平成22年６月11日（土）に普及活動の一環として現地説明会を行い、調査成果を公表した。そして６月13日調査を終了し、撤収した。

２　室　内　整　理

平成23年11月1日から平成24年２月15日の期間に室内整理作業を行った。調査員１名、室内作業員２名体制で行っている。

遺物は概ね野外作業の段階で水洗を終えており、室内作業ではそれ以降の工程（注記、接合復元、実測、トレース、図版作成、収納）を作業員が分担した。調査員は、原稿執筆、遺物観察表作成、実測図や図版のチェックを行った。また石器については平成24年１月24日に花崗岩研究会による石材鑑定を受けた。

遺構図面の整理は、（有）不二出版に業務委託しており、野外調査時に作成した図面（「遺構くん」による平面図データと手実測による断面図）から、調査員の指示のもと、第２原図作成および遺構図版作成を行った。

遺物の写真撮影は当センターの写場において写真技師が撮影を行った。撮影にはデジタルカメラ

（ＥＯＳ１ｄｓ）を用いている。

なお本報告書作成にあたり、各遺構名を野外調査時（旧遺構名）から変更した。本報告書に記された遺構名を優先する。遺構名の変更については第２表の通りである。

第２表　遺構名変更表

新遺構名	旧遺構名
Ａ区	調査区④
Ｂ区	調査区⑤・⑥
Ｃ区	調査区②－１
Ｄ区	調査区②－２
Ｅ区	調査区①
Ｆ区	調査区③
１号住居	SI03
２号住居	SI02
３号住居	SI04
４号住居	SI01
５号住居	SE02/SK027
１号住居状遺構	SE01
１号溝	SD09
２号溝	SD08
５号溝	SD07
４号溝	SD02
３号溝	SD01
６号溝	SD06
７号溝	SD05
８号溝	SD04
９号溝	SD03
１号性格不明遺構	SK19
１号土坑	SK49
２号土坑	SK47
３号土坑	SK51
４号土坑	SK46
５号土坑	SK42
６号土坑	SK45
７号土坑	SK44
８号土坑	SK43
９号土坑	SK48
10 号土坑	SK40
11 号土坑	SK41
12 号土坑	SK37
13 号土坑	SK38
14 号土坑	SK35
15 号土坑	SK34
16 号土坑	SK36
17 号土坑	SK39
18 号土坑	SK32
19 号土坑	SK33
20 号土坑	SK31
21 号土坑	SK28
22 号土坑	SK29
23 号土坑	SK52
24 号土坑	SK26
25 号土坑	SK30
26 号土坑	SK23
27 号土坑	SK21
29 号土坑	SK24
28 号土坑	SK22
30 号土坑	SK25
31 号土坑	SK20
32 号土坑	SK18
33 号土坑	SK15
34 号土坑	SK16
35 号土坑	SK17
36 号土坑	SK11

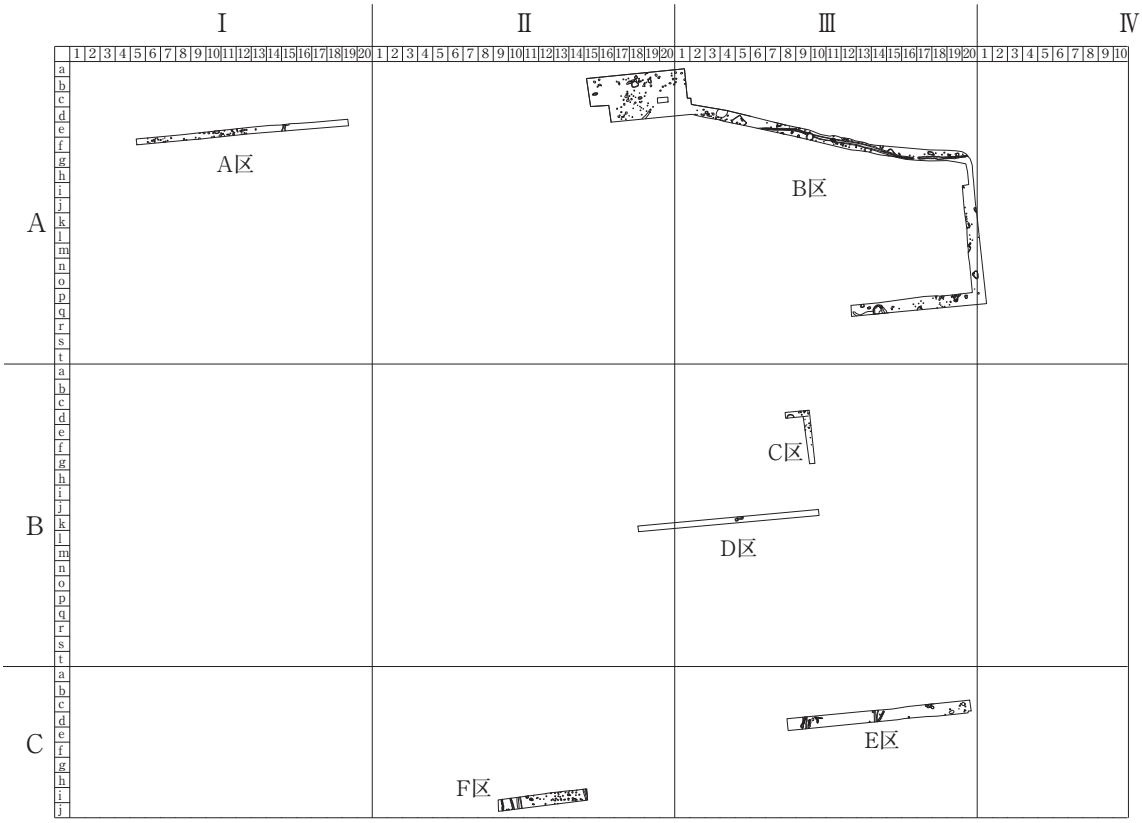
新遺構名	旧遺構名
37 号土坑	SK14
38 号土坑	SK12
39 号土坑	SK01
40 号土坑	SK02
41 号土坑	SK04
42 号土坑	SK03
43 号土坑	SK13
44 号土坑	SK06
45 号土坑	SK05
46 号土坑	SK08
47 号土坑	SK07
48 号土坑	SK10
49 号土坑	SK09

Ⅳ　検出した遺構・遺物

1　調査区の概要（第３図）

今回、発掘調査を行った場所は全体では、約250×250mの範囲の中に収まる。ただし第Ⅱ章でも述べた通り、パイプライン用地等のみが調査対象地であり、全域調査ではない。第３図に示した通り、対象となる調査区は６箇所に分かれており、便宜上、北西端の調査区からA～F区とした。B区をのぞき、いずれの調査区も水路分のみの調査のため、調査区範囲は細長い形状をなしている。B区も同様であるが、北西端のみは15×35mの広がりをもつ。またC区では遺構検出、半裁のみの精査にとどめる「確認調査区」が261㎡分含まれている（第37図参照）。

調査区全体の基本土層について触れておく。Ⅰ層とした現地表面直下の土は水田、および畑の耕作土で、10～50cm堆積する。その下Ⅱ層とした土層は黒色シルトを主体とする層であるが、調査区のほとんどで耕作による削平が進んでおり、Ⅱ層の堆積を確認できた場所はわずかであった。そのためⅡ層の内容を認知する根拠は少ないが、このⅡ層土と類似する土が遺構埋土となることが多いので、古代～近世の遺物包含層であったことが推定される。Ⅲ層は褐色シルト層でこの上面で遺構を検出した。粒子の細かいシルト層であるが、場所によってはやや砂質で礫を多く含む土質でもある。これはⅢ層上面がシルト質であるのに対し、下部に進むにつれ、砂質が強くなり、また礫も含まれるものであり、同一の層（Ⅲ層）でも細かい土質で２細分できると考えている。便宜上、シルト質の層をⅢa層、砂質シルトで礫の含まれる層をⅢb層とした。Ⅳ層は黄褐色砂質シルト層で礫を含む。遺物や炭化物等の混入物はなく、従ってこれ以下の掘り下げはしていない。



（縮尺1/2,500）

第３図　調査区位置図

２　Ａ　　区

（１）概　　要（第４図、写真図版１）

調査区は南北280m、東西２ｍの東西に長い形状で、ＩＡ５ｆ～ＩA15eグリッドの範囲に収まる。

土層は表土（Ｉ層）が約30cm堆積し、その下はⅢb層に達している。このⅢb層上面において、主に黒～黒褐色の遺構プランを確認したので、同面を遺構検出面とした。また遺構埋土類似のⅡ層土は、この調査区では認められなかった。耕作等による後世の削平により消失したものと想定する。なお基本土層確認のため一部深掘りをかけたが、Ⅲb層以下からは遺物は出土せず、また遺構と考えられるプランも認められないので、遺構面はⅢb層上面のみと判断した。

遺構は土坑３基、溝１条、掘立柱建物跡１棟、柱穴54個である。いずれの遺構からも遺物は出土しなかった。従って時期判断は遺構自体の形態や他の調査区の遺構との比較によるものでしかなく、特にＥ・Ｆ区の遺構と類似していることから近世以降ではないかと考えている。遺物は遺構外から土師器片が見つかっている。ただし遺物の残存状態からみても流れ込みの可能性が高い。

（２）土　　坑

１号土坑（第５図、写真図版４）

調査区ほぼ中央、ＩA10eグリッドに位置する。Ⅲb層上面で検出した。北側の一部は調査区外に及んでいる。他の遺構との重複はない。平面形は楕円形である。開口部径は162×（82）cmである。底面は概ね平坦で、壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深22cmである。埋土は３層からなる。黒色シルトを主体とし、灰黄褐色細砂が混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。

時期も不明であるが、調査区内で、Ⅱ層土が消失しており、判断する根拠がない。埋土の様相や他の調査区遺構との比較から近世以降と判断した。

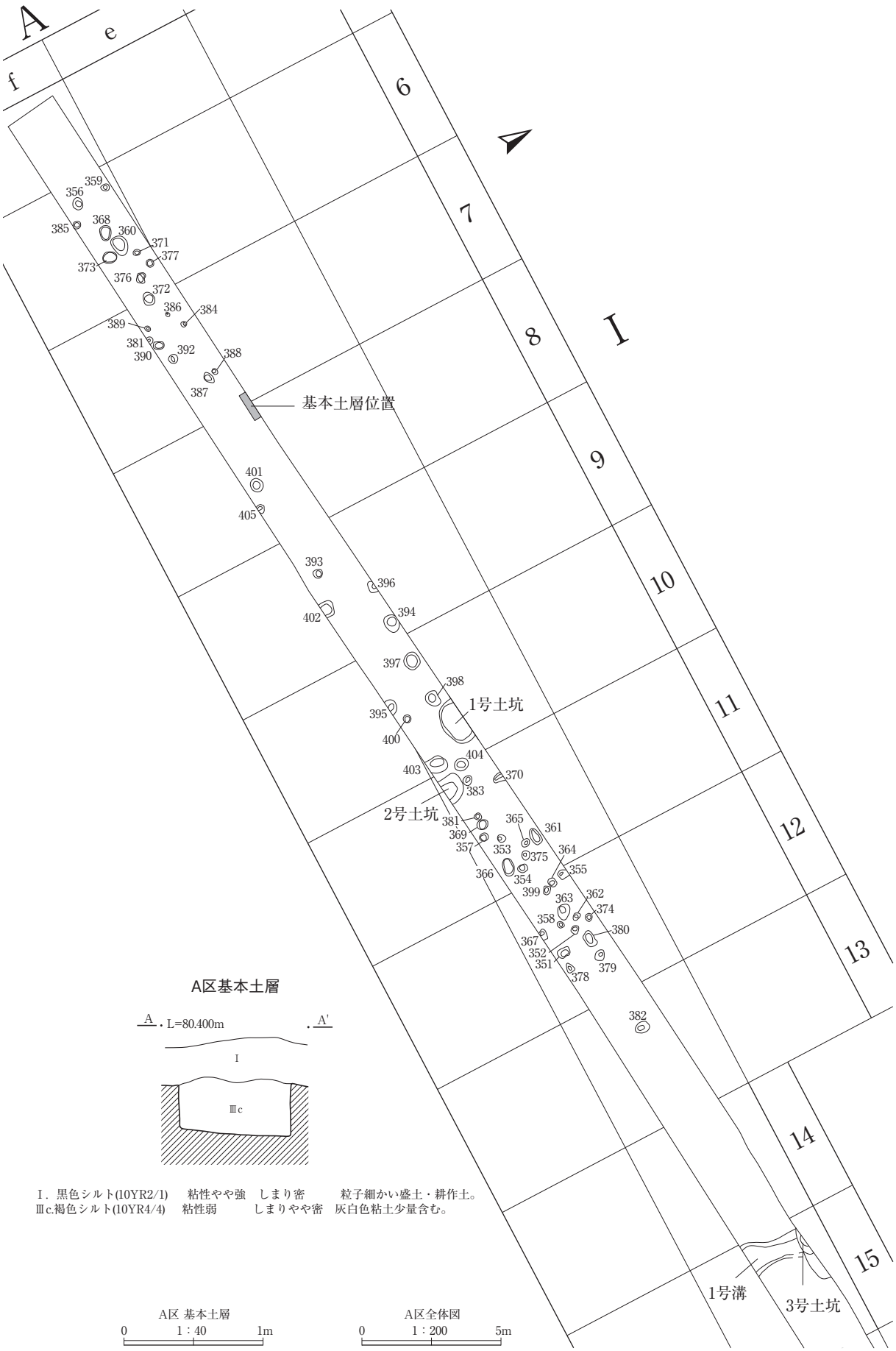
２号土坑（第５図、写真図版４）

調査区ほぼ中央、ＩA11eグリッドに位置する。Ⅲb層上面で検出した。南側の一部は調査区外に及んでいる。他の遺構との重複はない。平面形は楕円形である。開口部径は93×（71）cmである。底面は中央に窪んだ形状で、壁はやや大きく広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深26cmである。埋土は３層からなる。黒色シルトを主体とし、黒褐色シルトが混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。

時期も不明であるが、調査区内でⅡ層土が消失しており、判断する根拠がない。埋土の様相や他の調査区遺構との比較から近世以降と判断した

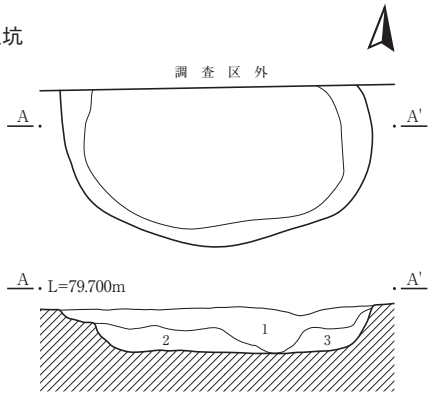
３号土坑（第５図、写真図版４）

調査区中央からやや東側、ＩA15eグリッドに位置する。Ⅲb層上面で検出した。遺構のほとんどは調査区外に及んでおり、南端の一部を検出したにすぎない。１号溝と重複し、本遺構の方が新しい。平面形は楕円形である。長軸方向は不明 で、開口部径は（104）×（27）cmである。また東側に遺構の掘り方と考えられるプランが認められ、それを含めると長さは211cmに及んでいる。底面は概ね平坦で、壁はほぼ直立気味である。確認面から底面まで最深76cmである。埋土は本体が２層（１・２層）、掘り方が２層（３・４層）からなる。遺構の埋土上位にはＩ層（表土）が厚く堆積しているので、本遺構は現代まで埋まりきっていなかったことが窺える。遺構埋土、掘り方埋土ともに黒褐色


A
e
f
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
I
359
356
385
368
360
371
377
373
376
372
386
384
389
381
390
392
388
387
基本土層位置
401
405
393
396
402
394
397
398
1号土坑
395
400
404
403
370
383
2号土坑
381
365
361
369
357
353
375
364
366
354
355
399
363
362
374
358
380
367
352
351
379
378
382
1号溝
3号土坑
A区基本土層
A
L=80.400m
A'
I
Ⅲc
Ⅰ．黒色シルト(10YR2/1)　粘性やや強　しまり密　粒子細かい盛土・耕作土。
Ⅲc.褐色シルト(10YR4/4)　粘性弱　しまりやや密　灰白色粘土少量含む。
A区 基本土層
0　1：40　1m
A区全体図
0　1：200　5m

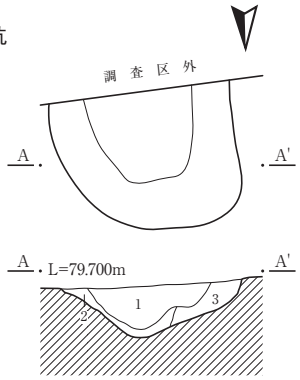
第４図　Ａ区全体図

1号土坑



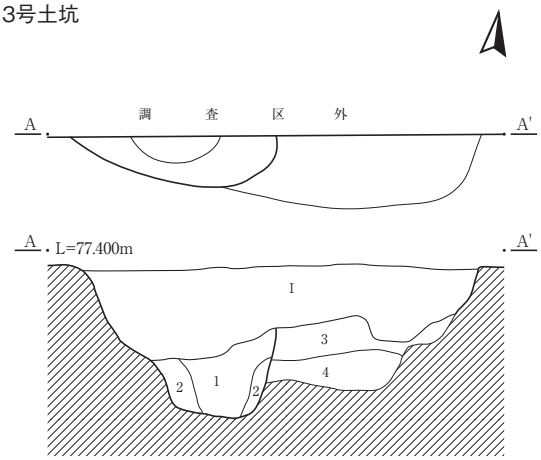
1.黒色シルト(10YR2/1)　粘性弱　しまりやや密
白色粒子やや多く、礫少量含む。
2.灰黄褐色細砂(10YR4/2)　粘性弱　しまりやや密
Ⅰ層土ブロック少量、礫少量含む。
3.黒褐色シルト(10YR3/2)　粘性やや強　しまりやや疎
Ⅲc層土ブロック中量、礫少量含む。

2号土坑



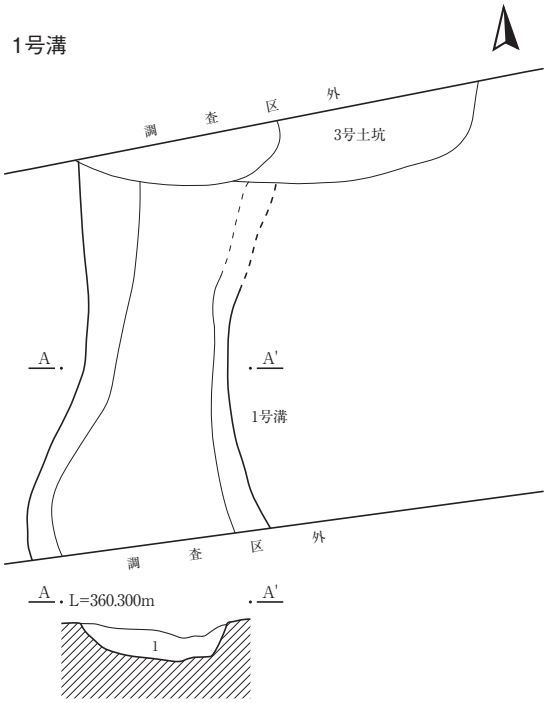
1.黒色シルト(10YR2/1)　粘性やや強　しまり密
Ⅲ層土ブロック少量含む。
2.黒褐色シルト(10YR2/2)　粘性やや弱　しまりやや密
Ⅲ層土ブロックやや多く含む。
3.黒褐色シルト(10YR3/2)　粘性弱　しまりやや密
Ⅲ層土ブロックやや多く、礫少量含む。

3号土坑



1.黒褐色シルト(10YR2/2)　粘性やや弱　しまりやや密
Ⅲc層土ブロックやや多く含む。
2.黒褐色シルト(10YR3/1)　粘性強　しまりやや疎
Ⅲc層土ブロック中量、酸化鉄微量含む。
3.黒褐色シルト(10YR2/2)　粘性強　しまり密　掘り方
黒色粘土ブロック少量、礫中量含む。
4.黒褐色シルト(10YR2/2)　粘性やや強　しまりやや疎　掘り方
Ⅲc層土ブロック中量、黒色粘土ブロック中量含む。

1号溝



1.黒色シルト(10YR1.7/1)　粘性弱　しまりやや密
Ⅲc層土ブロック少量、酸化鉄微量、礫少量含む。

0　1：40　1m

第５図　Ａ区１～３号土坑・１号溝

シルトを主体とする。両者の色調にはあまり差がないが、遺構埋土とした１・２層には混入物が少なく緻密であるのに対し、掘り方埋土とした３・４層には礫や黒色の粘土が混入する違いが認められる。遺物は出土していない。遺構の性格は不明であるが、形態から井戸の可能性が高い。ただし井戸とするには、検出できた範囲からみても深さがやや浅く、井戸の可能性の範疇にとどめておく。深さについては中心部分は調査区外にあり、窺い知れない。

時期も不明であるが井戸の可能性を考えると、近世以降であろうと考える。

（３）溝

１号溝（第５図、写真図版４）

調査区中央からやや東側、ⅠA15eグリッドに位置する。Ⅲb層上面で検出した。両端は調査区外に及んでいる。３号土坑と重複し、本遺構の方が古い。ほぼ直線的で、南側が若干膨らんでいる。開口部径は（205）×（122）cmである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深15cmである。埋土は１層のみで、黒色シルトを主体とする。Ⅲb層土がブロックで混入するが、堆積状況からみて自然堆積と推定する。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。ただし、検出状態が３号土坑と連結しているようにも見受けられる。３号土坑は井戸の可能性がある遺構であり、それに関連のある溝である可能性も考えられる。

時期は不明であるが、３号土坑との重複関係や埋土の様相から近世以降と判断した。

（４）柱穴群および掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡（第４・６図、写真図版５）

調査区ほぼ中央のＩＡ９e～ⅠA10eグリッドに位置し、Ⅲb層上面で検出した。重複する遺構はない。また長軸両側面は調査区外に及んでいるため、遺構の全容は定かではない。検出範囲での規模は桁行き8.7m、梁間3.3mを測るが、梁間はまだ長い可能性が高い。６個の柱穴を使用した。柱穴埋土から遺物は出土していない。

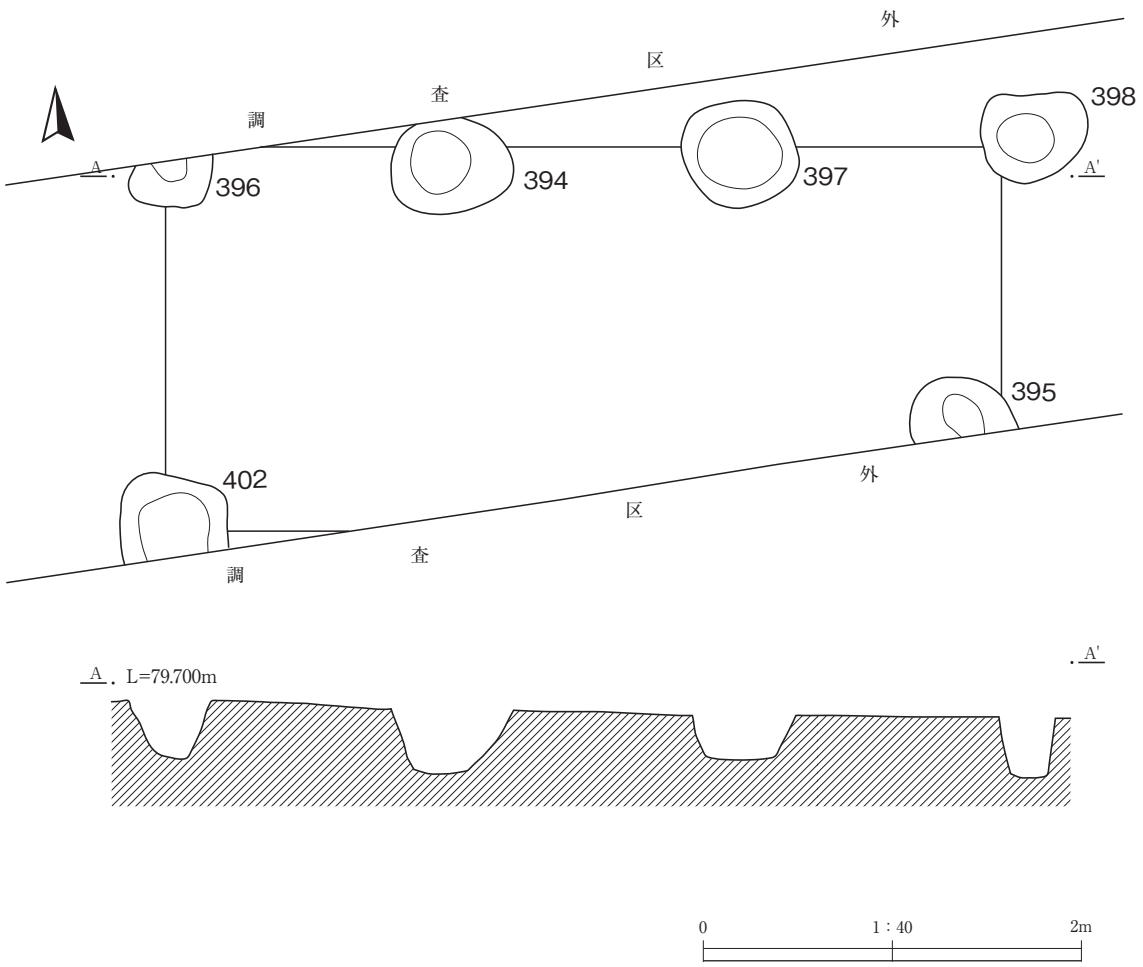
時期は不明であるが、柱穴の大きさから近世以降に比定されると推定する。

その他にも柱穴を多く検出しており、特にＩＡ６ｆグリッド周辺、またⅠA11eグリッド周辺にも密集して分布する。ただし、配列に規則性が見いだせず、したがって掘立柱建物跡等の遺構とは判断せず、柱穴群にとどめた。

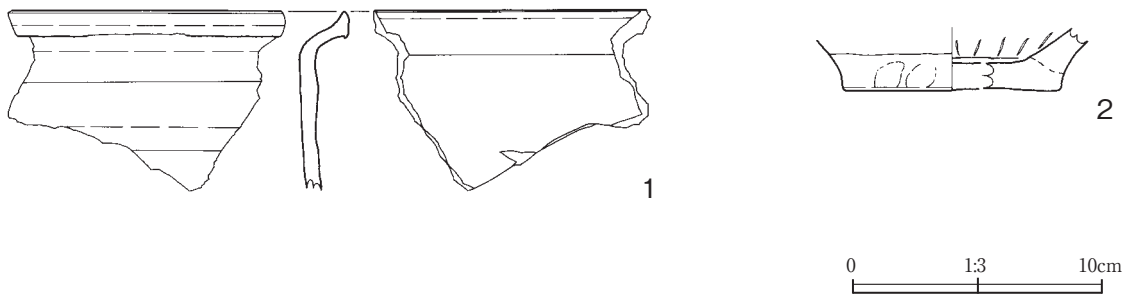
（５）遺構外出土遺物（第７図、写真図版 26）

調査区の西端から土師器の破片が出土している。ただしⅠ層出土であったり、またⅢb層出土であっても小片であることから、流れ込みの可能性が高い。

２点図示した。１は土師器甕の口縁部片で、ロクロ調整が施されている。口縁部の形状からみても９世紀代の所産と考えられる。２はⅢb上層から出土した土師器甕の底部片で、時期は不明。外面には底面付近に指頭による整形痕が、内面にはハケメの痕跡が見受けられる。



第６図　Ａ区１号掘立柱建物跡



第７図　Ａ区遺構外出土遺物

第３表　Ａ区遺構外出土遺物観察表

掲載番号	出土位置 層位	種別 器種	部位	胎土	法量（cm）			調整技法			焼成	外面色調 内面色調	備考
					口径	底径	器高	内面	外面	底面			
1	ＩＡ６ｆ Ｉ層	土師器甕	口縁部片	砂粒・長石	－	－	－	口～胴：回転ナデ	口～胴：回転ナデ	－	やや良好	にぶい黄橙 にぶい黄橙	
2	ＩＡ８ｆ Ⅲｂ層上面	土師器甕	底部片	砂粒	－	(8.4)	(2.5)	底：ハケメ	胴：ヨコナデ、指頭による整形	なし	やや不良	にぶい黄橙 橙	

3　B　　区

（1）概　　要（第８～10図、写真図版１・３）

調査域の北側に位置し、ⅡA15ｂ～ⅣＡ１ｐグリッドの範囲に収まる。今回の調査区では最も広い面積を有するが、水路分のみであるため、調査区幅自体は2m弱と狭く、また「コ」の字状にクランクしている（第９・10図）。ただ北西端部分のみは32×15mの調査区で面的に遺構の広がりを確認できた（第８図）。

基本土層を観察すると、後世による削平が激しく、ほとんどの場所でⅠ層下はⅢ層に達しており、Ⅱ層が残存する場所はわずかである。なお遺構検出はⅢ層上面である。A区のⅢb層と比べ、粒子の細かいシルト層で、Ⅲb層とはやや異なるので、区別するために「Ⅲa層」とした。この土層は遺構が多い場所で特に認められる傾向がある。

検出した遺構は竪穴住居5棟、住居状遺構1棟、土坑32基、溝1条、掘立柱建物跡1棟、柱穴213個で、竪穴住居や土坑の多くは奈良時代（８世紀代）の土師器、須恵器を共伴している。また柱穴群ではPit194の埋土から近世の無名銭が出土しており、近くに位置する掘立柱建物跡も含め、近世に該当するものと思われる。遺構外からも奈良時代および近世の遺物は出土している。またその他に調査区南東端の北から南へと緩やかに傾斜した範囲からは、Ⅱ層土中から平安時代（9世紀代）に帰属する土師器、須恵器が一括出土しており、またその近くで同時期の灰釉陶器1点も見つかっている。

（2）竪　穴　住　居

１号住居（第11・12図、写真図版５・26）

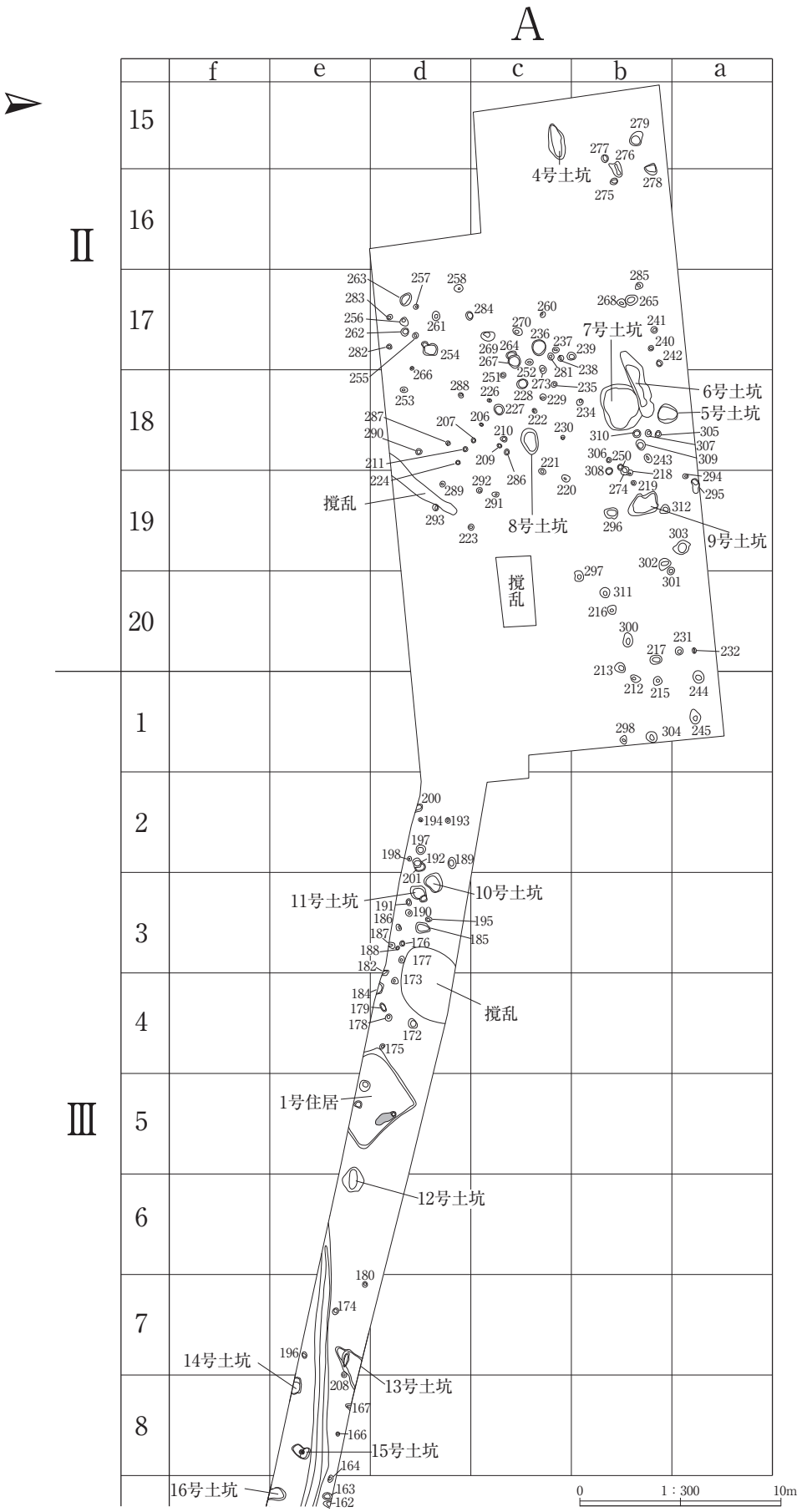
調査区北西端、ⅢＡ５ｄグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。他の遺構との重複はない。また遺構の南西側は調査区外に及んでおり、全体を検出していない。また後世の削平により、遺構の上部を大幅に消失しており、そのため検出できた範囲は床面近くのみであった。

平面形は不整な正方形と推定され、規模は検出できた範囲で359×352cmを測る。床面は概ね平坦で、壁はやや緩やかに広がりながら立ち上がる。確認面から床面まで最深で４cmである。埋土は１層で、黒褐色シルトを主体とし、炭化物・礫が混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。

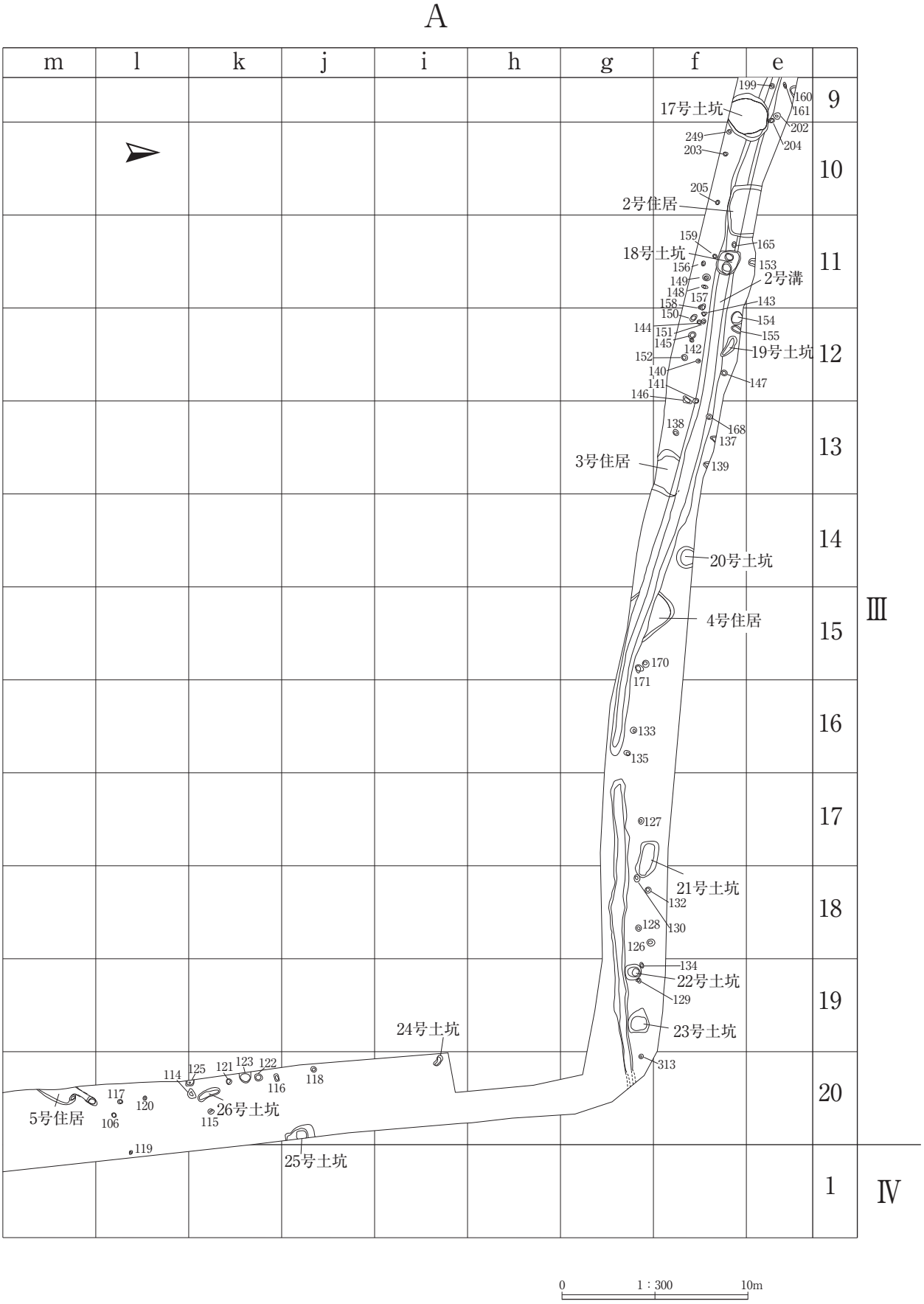
カマドは確認できていない。調査区外に及んでいる南西部分に付設されている可能性があるが定かではない。

柱穴は３個検出した。分布から主柱穴かどうかは定かではないが、Pit２・３は比較的深く、30cm以上を測る。また東壁際のPit１の西側に焼土粒が分布する範囲を確認した。この焼土範囲は規模が85×45cmの長楕円形を呈しており、断ち割ったところ、その範囲自体に被熱を受けた痕跡は認められなかった。埋土は褐色シルトを主体とし、多量の焼土粒が混入する。この焼土範囲の底面は住居自体の床面から17cmほど下がっている。用途は不明である。カマドの燃焼部の可能性も疑ったが、周辺の壁には煙道といったカマドの付属施設の痕跡はないので、カマドとは別に、床面上で火を使用したか、あるいは何らかの用途で、焼土を廃棄する小穴だったと推定する。他に貼床は認められなかった。

遺物は土師器、須恵器が1700.0ｇ出土している。遺構埋土の残りが悪いため、遺物の出土量は比較的少ない。ただし特筆すべき点としては床面上から脚付の土師器坏（第12図３）と土師器甕の大型破片（第12図７）が出土している。３は住居床面上に逆位の状態で出土した。底面には四脚が付されて

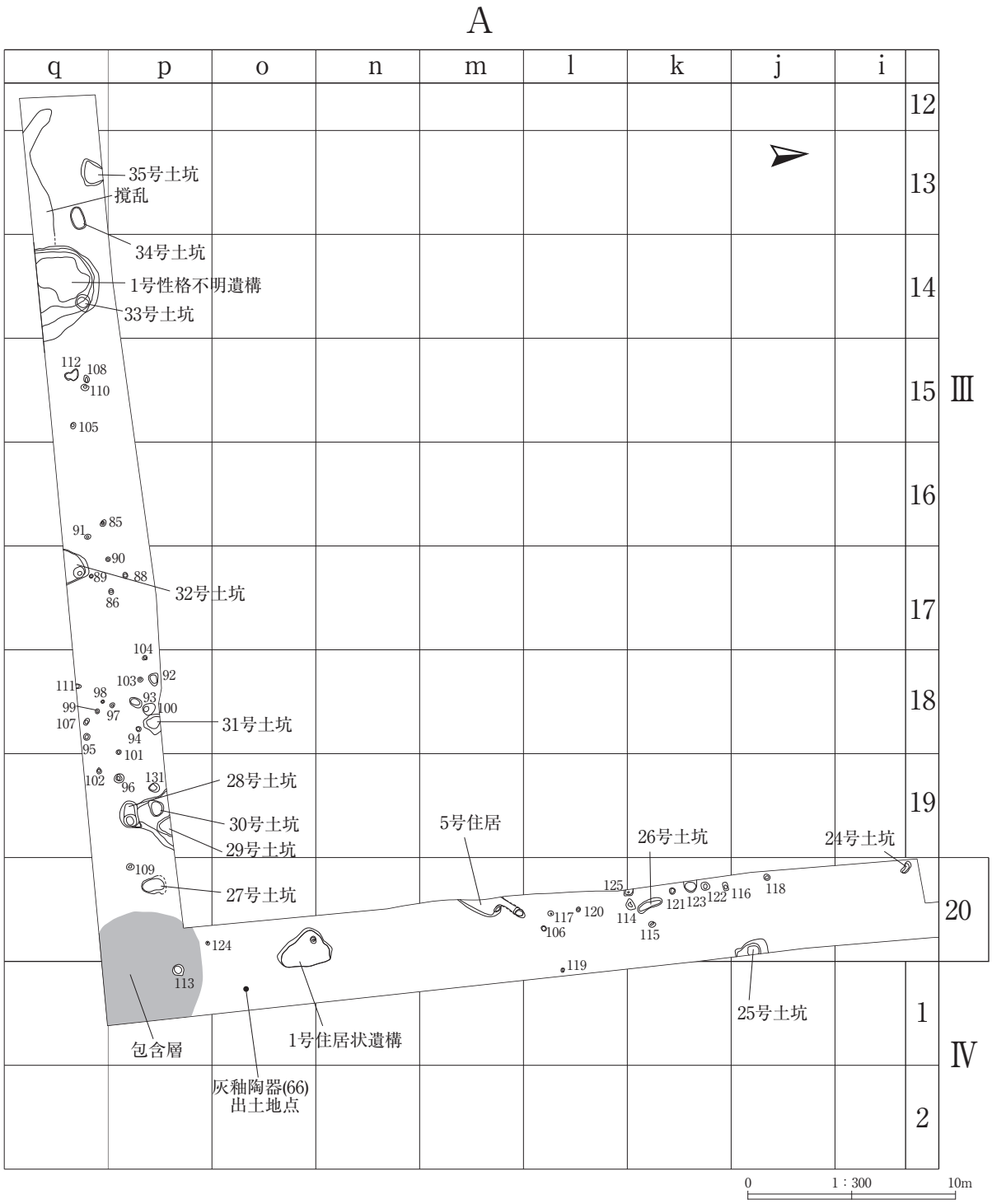

A
f
e
d
c
b
a
15
16
17
18
19
20
1
2
3
4
5
6
7
8
Ⅱ
Ⅲ
4号土坑
7号土坑
6号土坑
5号土坑
8号土坑
9号土坑
10号土坑
11号土坑
12号土坑
13号土坑
14号土坑
15号土坑
16号土坑
1号住居
撹乱
0
1：300
10m

第８図　Ｂ区全体図（1）

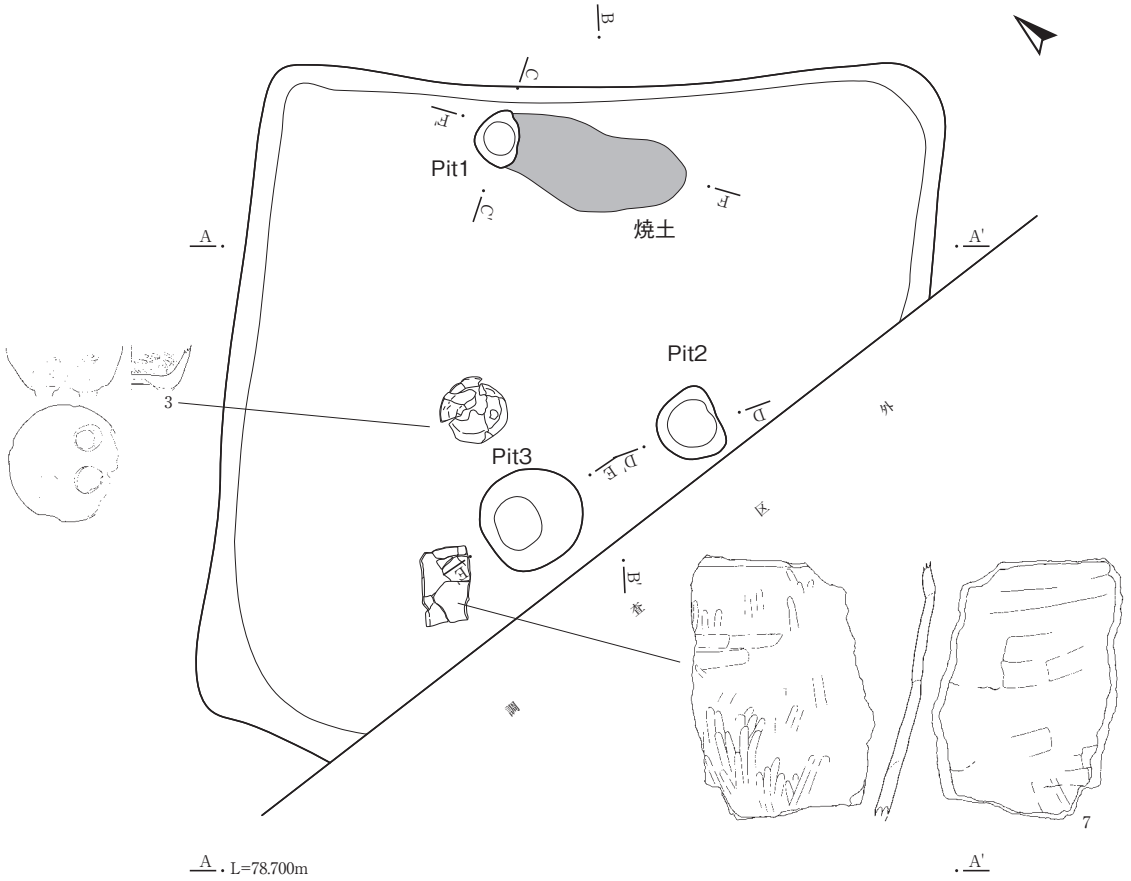


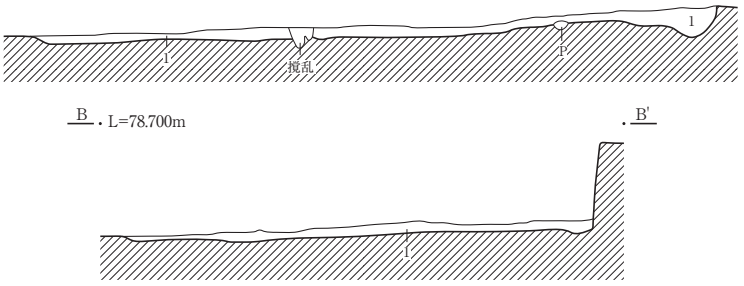
0　1：300　10m

第９図　Ｂ区全体図（2）


A
q
p
o
n
m
l
k
j
i
12
13
14
15
16
17
18
19
20
1
2
Ⅲ
Ⅳ
35号土坑
撹乱
34号土坑
1号性格不明遺構
33号土坑
32号土坑
31号土坑
28号土坑
30号土坑
29号土坑
27号土坑
5号住居
26号土坑
24号土坑
25号土坑
1号住居状遺構
包含層
灰釉陶器(66)
出土地点
0
1：300
10m

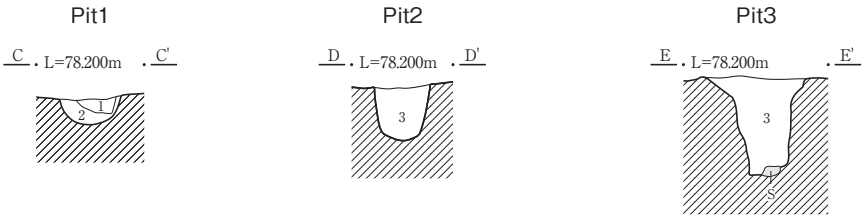
第10図　B区全体図（3）





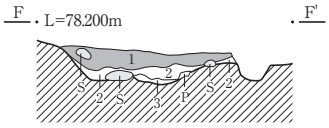
1.黒褐色シルト(10YR2/2)　粘性やや強　しまりやや密　Ⅲ層土ブロック微量、炭化物微量、礫少量含む。

柱穴



1.黒色シルト(10YR2/2)　粘性やや強　しまりやや密　赤褐色焼土ブロック少量含む。
2.にぶい黄褐色シルト(10YR5/4)　粘性やや強　しまりやや疎　Ⅲa層土ブロック少量含む。
3.黒褐色シルト(10YR3/1)　粘性強　しまりやや密。

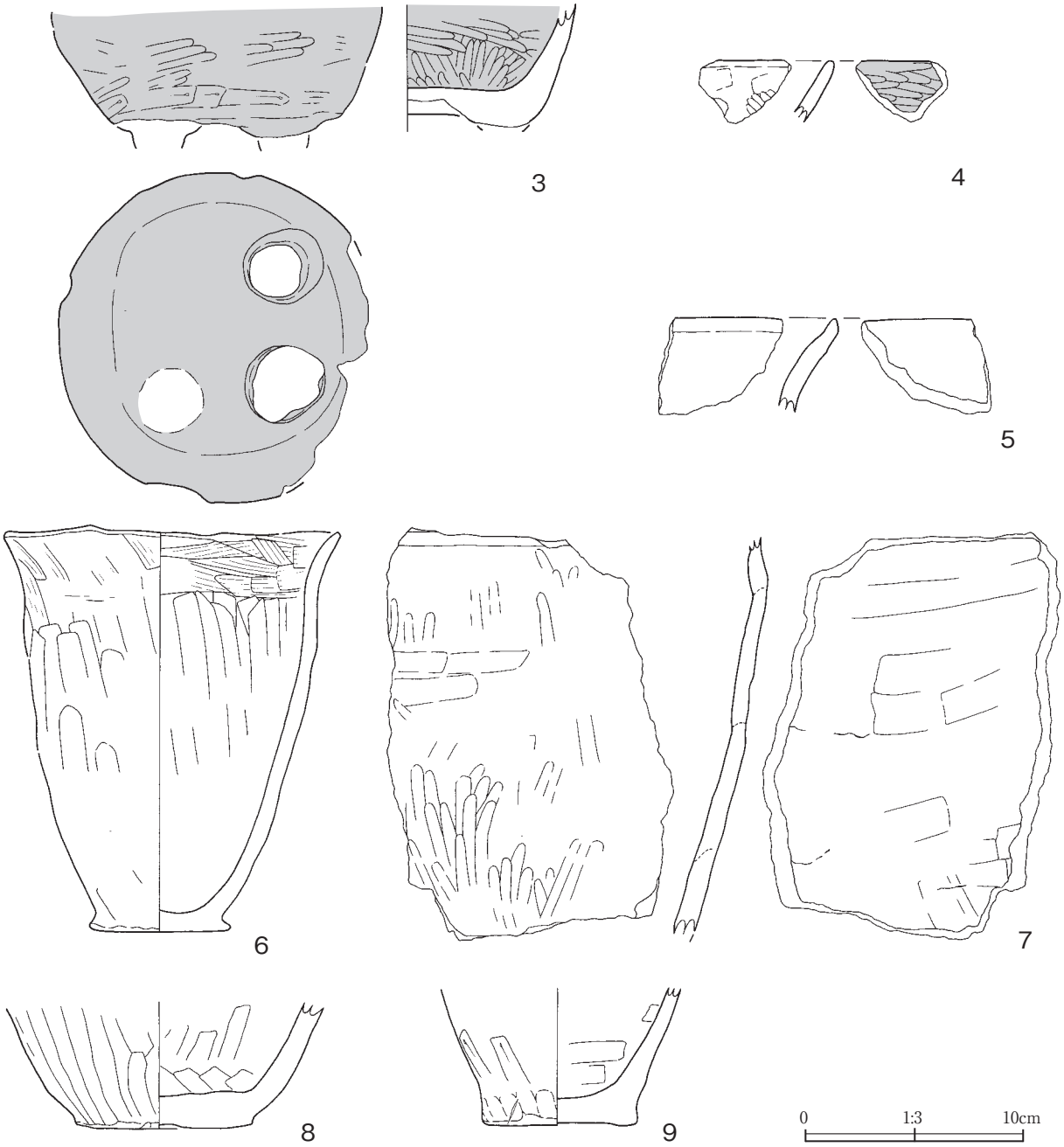
焼土



1.褐色シルト(7.5YR4/6)　粘性やや弱　しまりやや密　焼土多量、炭化物微量含む。
2.黒褐色シルト(10YR2/2)　粘性やや弱　しまりやや密　焼土少量、炭化物少量、土器片含む。

0　1：40　1m

第11図　B区1号住居



第12図　B区1号住居出土遺物

いたと推定されるがすべて欠損している。内外面を黒色処理されている。時期は判断できないが、四脚付坏は宮城・福島県でも見つかっており、それらは主に7世紀末～8世紀初頭のものが多く、3もそれらと同時期とも考えられる。4は内黒坏の口縁片で外面の磨滅が激しい。5は甕の口縁部片で磨滅しており、調整痕が確認できなかった。6は中型の甕で、口縁部に向かってほぼ直線的に開き、口縁部で外反する。また頸部に段は見受けられない。7は大型の甕の胴部分である。床面上から出土したが出土状態からは完形ではなく、この破片の状態で出土している。外面は縦方向にミガキを施す。

第４表　Ｂ区１号住居出土遺物観察表

掲載番号	出土層位	種別器種	部位	胎土	法量（cm）			調整技法			焼成	外面色調 内面色調	備考
					口径	底径	器高	内面	外面	底面			
3	床面直上	土師器 脚付坏	口縁、脚欠損	砂粒・白色粒	－	8.3	(4.7)	口～胴：ミガキ	口～胴：ケズリ→ミガキ	ミガキ	不良	黒 黒	四脚付
4	埋土中	土師器坏	口縁部片	白色粒	－	－	－	口：ミガキ	口：ヘラナデ→ミガキ	－	やや不良	褐 黒	
5	埋土中	土師器甕	口縁部片	白色粒・長石	－	－	－	口：ヨコナデ	口：ヨコナデ	－	やや不良	にぶい黄橙 灰黄褐	
6	埋土下位	土師器甕	口縁1/3のみ欠損	白色粒・長石	(15.2)	6.5	18.2	口：ハケメ 胴：ヘラナデ	口：ハケメ 胴：ヘラナデ	なし	やや良好	にぶい橙 にぶい黄橙	重量（511.0g） 外面にスス
7	床面直上	土師器甕	胴部片	砂粒・白色粒	－	－	－	胴：ヘラナデ	胴：ヘラナデ→ミガキ	－	やや良好	にぶい黄橙 にぶい黄橙	重量（281.4g）
8	埋土下位	土師器甕	胴～底部	砂粒・白色粒	－	8.0	(5.7)	胴：ヘラナデ	胴：ヘラケズリ	ミガキ	やや不良	にぶい橙 にぶい黄橙	
9	埋土下位	土師器甕	胴部～底部	砂粒	－	6.5	(6.2)	胴～底：ヘラナデ	胴：ヘラケズリ 底：ヨコナデ	ケズリ	やや不良	にぶい黄橙 にぶい黄橙	外面にスス

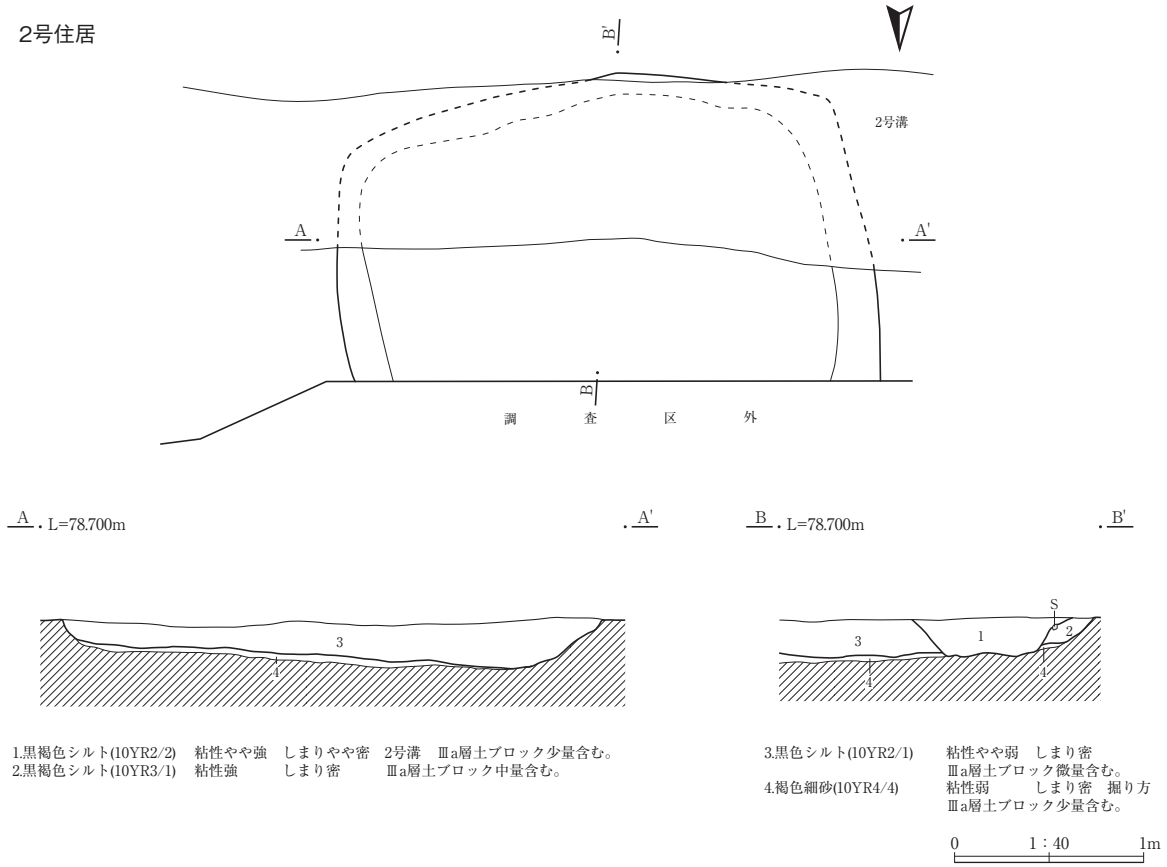
８・９は甕の底部分である。８は両面にヘラナデ、９は外面にヘラケズリを施し、また底面付近は指頭により、整形している。

出土した土師器の時期から８世紀初頭に比定されるものと思われる。

２号住居（第13図、写真図版６）

調査区北西端、ⅢＡ10ｆ・11ｆグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。遺構の北側は調査区外に及んでいる。また２号溝と重複し、本遺構の方が古い。

平面形は不整な方形で、開口部（163）×285cmである。床面は概ね平坦で、壁はやや緩やかに広がりながら立ち上がる。確認面から床面まで最深で37cmである。埋土は４層で、黒褐色シルトを主体とし、炭化物・焼土粒が混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。床面は概ね平坦である。硬化面は見受けられない。また床面全体に貼床を施しており、深さ４㎝の掘り方が認められた。掘り方



第13図　Ｂ区２号住居

埋土は褐色細砂を主体としており、遺構埋土とは異なる。

付属施設については、まずカマドは確認できていない。調査区外に及んでいる範囲や２号溝によって削平された南側に付設されているか、元々付設されていない可能性もある。また柱穴も認められなかった。

遺物は出土していない。

遺構の時期は、出土遺物がないので定かではないが、重複する２号溝や周辺の遺構の時期から考えて、奈良時代（８世紀代）と推定する。

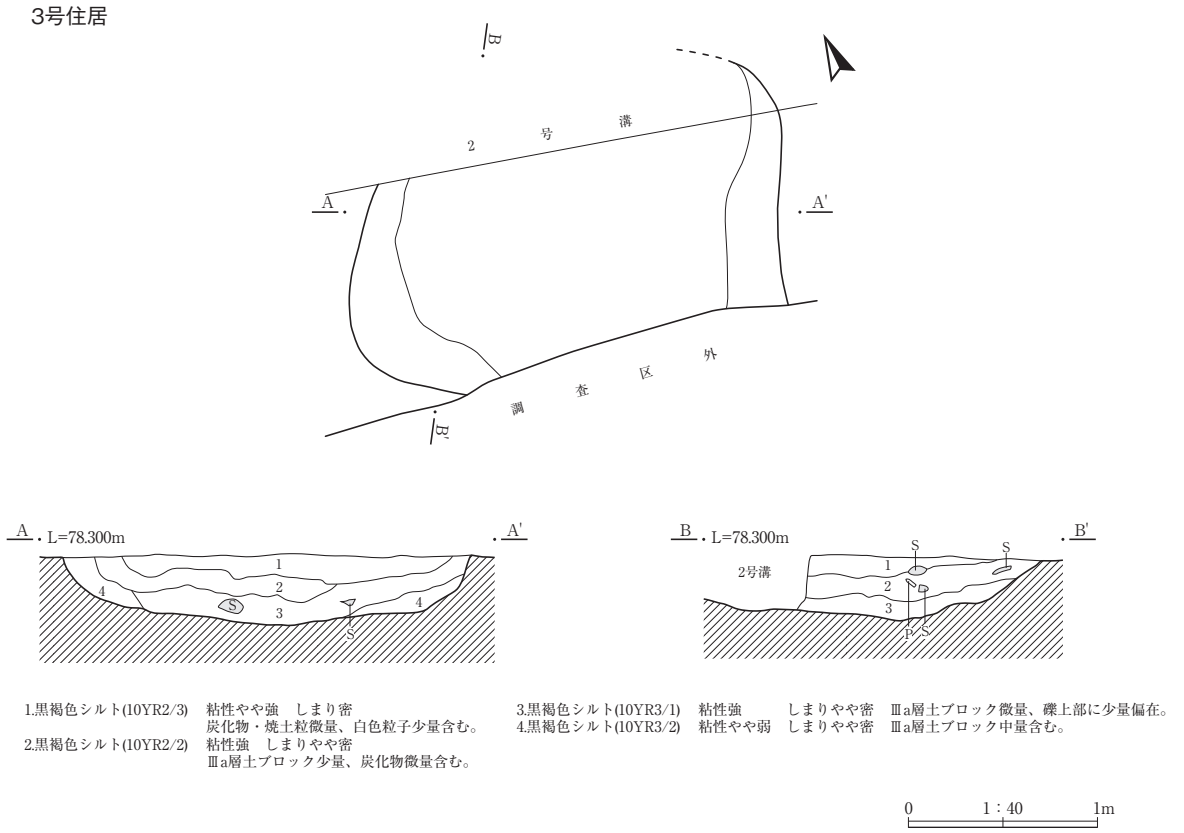
３号住居（第14・15図、写真図版６・７・26）

調査区北西端、ⅢA13ｆグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。

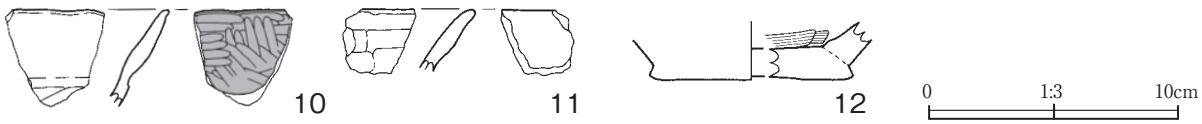
遺構の南側は調査区外に及んでいる。また２号溝と重複し、本遺構の方が古い。２号溝の底面部分で本遺構東壁の一部を検出したが、北壁は消失して残存していない。

平面形は不整な方形で、開口部（226）×（153）cmである。床面は概ね平坦で、壁はやや緩やかに広がりながら立ち上がる。確認面から床面まで最深で24cmである。埋土は４層で、黒褐色シルトを主体とし、Ⅲa層土が混入する。堆積状況から人為堆積と推定する。

付属施設については、カマドは確認できていない。調査区外に及んでいる南側部分や２号溝に削平



第14図　Ｂ区３号住居



第15図　Ｂ区３号住居出土遺物

第５表　Ｂ区３号住居出土遺物観察表

掲載番号	出土層位	種別器種	部位	胎土	法量（cm）			調整技法			焼成	外面色調内面色調	備考
					口径	底径	器高	内面	外面	底面			
10	埋土下位	土師器内黒坏	口縁部片	白色粒・長石	－	－	－	口～胴：ミガキ	口：ヨコナデ 胴：ヘラナデ	－	やや不良	にぶい黄橙 黒	
11	埋土上位	土師器甕	口縁部片	砂粒・白色粒	－	－	－	口：ヨコナデ	口：ヨコナデ	－	やや良好	にぶい黄橙 明黄褐	
12	埋土下位	土師器甕	底部片	砂粒	－	(7.5)	(2.3)	胴～底：ヘラケズリ	胴：ヘラナデ？	ケズリ	不良	にぶい橙 橙	

される北側に付設されていたか、元々付設されていない可能性がある。また柱穴は検出していない。床面は概ね平坦であるが、中央部がやや低くくぼんでいる。貼床は認められなかった。

遺物は少なく、土師器数点が埋土中に混入する程度である。３点図示した。10は内黒土師器坏の口縁部片で、わずかに残る胴部には段が認められる。内面にはミガキが施される。11は土師器坏の口縁部片で外面はヘラナデで整形する。12は土師器甕の底部片で、内面にハケメの痕跡が見受けられる。

遺構の時期は出土遺物が小片で、明確には判別できないが、10が有段坏であることを考慮にしつつ、８世紀代に比定されるものと推定する。

４号住居（第16～18図、写真図版７）

調査区北西端、ⅢＡ15ｇグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。遺構の南側は調査区外に及んでいる。また２号溝と重複し、本遺構の方が古い。したがって、本遺構は東側から西側にかけて２号溝に大きく削平されている。

平面形は不整な方形で、開口部（248）×（215）cmである。床面は概ね平坦で、壁は直立気味に立ち上がる。確認面から床面まで最深で18cmである。

埋土は３層（第16図３～５層）で、黒褐色シルトを主体とし、Ⅲa層土がブロックで混入する。遺構を縦断する２号溝埋土との違いは色調で本遺構の方がやや明るい。また本遺構は堆積状況から人為堆積と推定する。

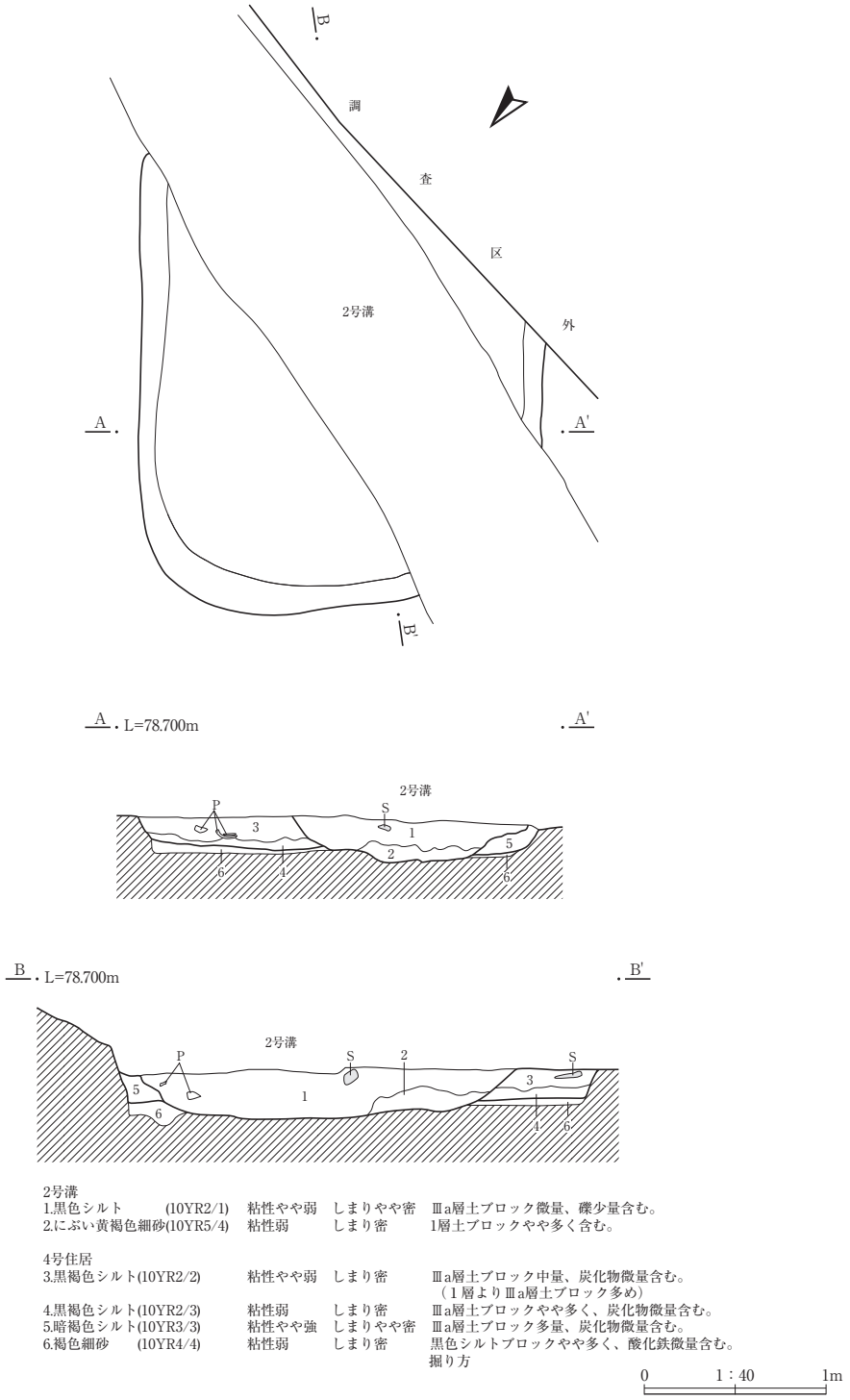
付属施設については、まずカマドは確認できなかった。特に調査区外に及んでいる南側部分に付設されているか、元々付設されていなかった可能性がある。柱穴は認められない。貼床は床面ほぼ全体に及んでおり、深さは最深６cmで、褐色細砂を埋土としている。

出土遺物は多く、土師器・須恵器が2816.2g分、石製品2点が出土している。13点図示した。13は内黒の土師器坏で、外面には野焼きの際の黒斑が残る。外へと大きく開く形態で段はつかない。内外面ともにミガキ調整を施している。14は鉢の口縁部片で外へと大きく開く形態と推定される。外面はヘラケズリ整形後、ミガキを施している。また内面にもミガキの痕跡が残る。15～23は甕である。15～17は胴張り、18～23は寸胴の形態を呈する。15は頸部に段が付き、口縁部はハケメ、胴部はヘラナデによって整形される。また口縁部と胴部上半に輪積みの痕跡が認められる。16も15と同形態で頸部に段がつくが、段は15より不明瞭である。外面の口縁部はヨコナデ、胴部は縦方向のヘラナデが見受けられる。17は頸部に段のない胴張りの甕である。磨滅しており、胴部の調整が定かではないが、口縁部の外面はヨコナデ後、縦方向にヘラナデを施す。内面はヘラケズリ後ミガキを施す。19・20は形態が復元できた寸胴甕であるが、これらにも段は認められない。19は口唇部に面を有する。外面の口縁部はヨコナデ、胴部は縦方向のヘラナデを施し、内面には斜位方向へとケズリが施される。20は口縁部が屈曲し、外へとひらく形態で、19同様に口唇部に面を有する。内外面ともヘラナデを施すが、外面は縦方向、内面は横方向である。21～23は形態の推定できない土師器甕の口縁部片で、整形技法や口端部形態から19・20と同形態であろうと推測する。ヘラナデ整形が見受けられる。13のような外へとひらく坏の形態や15・16のように甕の頸部に段が付くことなどの特徴を踏まえ、これらの遺物は奈

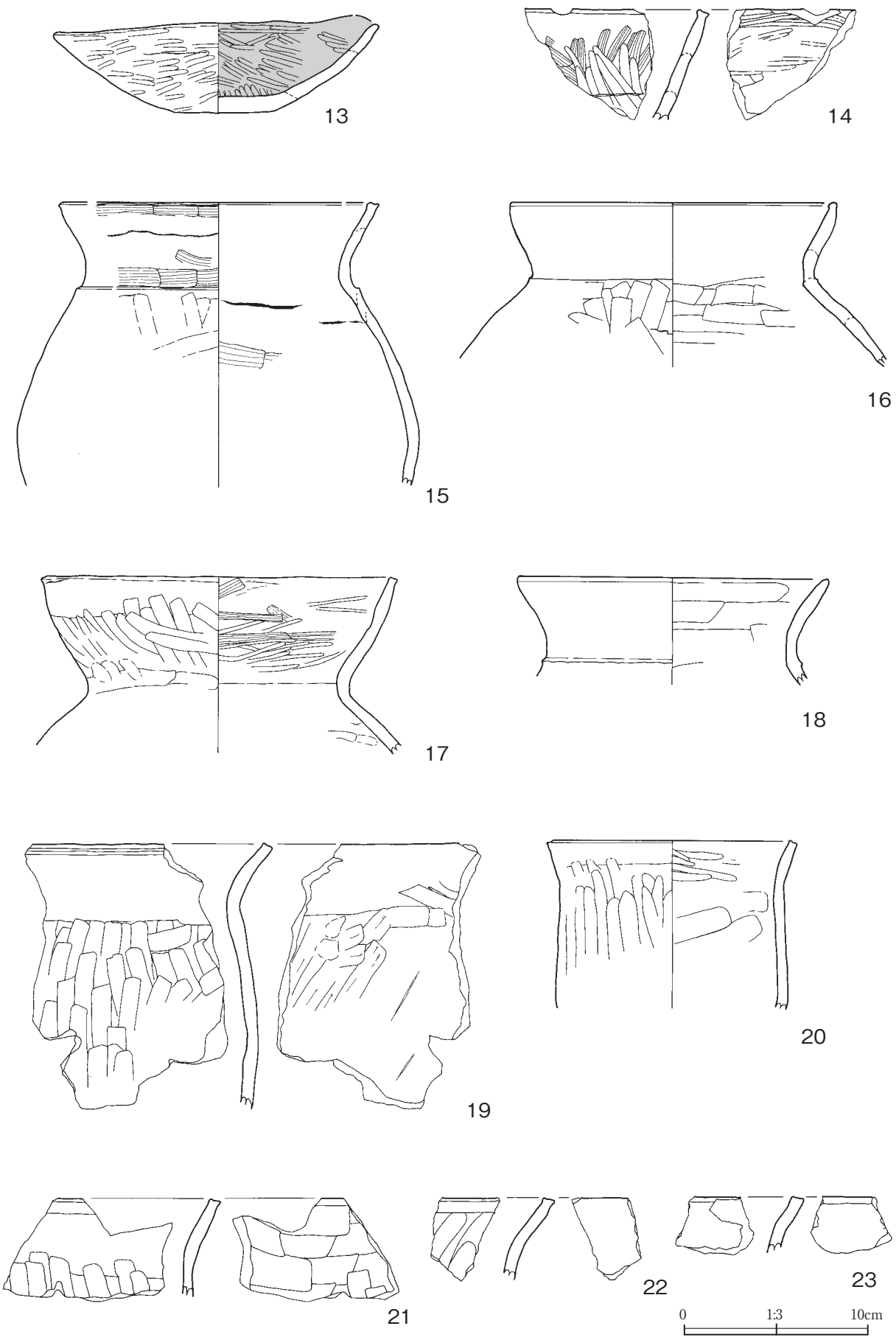
良時代（８世紀代）に帰属するものと推定する。

24・25は石製品とした。用途は不明。どちらも扁平な礫の両面に磨痕が認められるので磨石に類する用途と推測する。また25は被熱痕が認められる。火を用いた何らかの行為に使用されたことも考えられる。

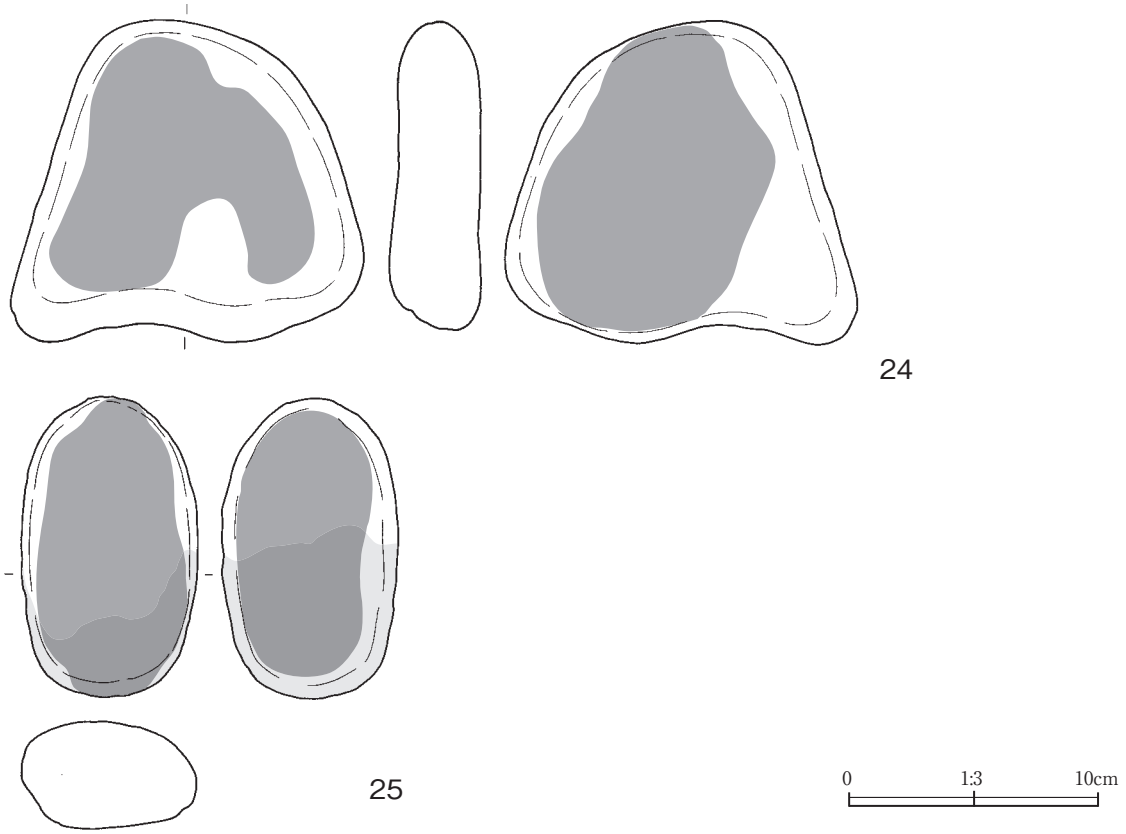
遺構の時期は13や15・16の年代から奈良時代（８世紀代）に比定されるものと推定する。



第16図　Ｂ区４号住居



第 17 図　B区 4 号住居出土遺物（1）



第 18 図　B 区 4 号住居出土遺物（2）

第 6 表　B 区 4 号住居出土遺物観察表　土師器・須恵器

掲載番号	出土層位	種別器種	残存部位	胎土	法量（cm）			調整技法		焼成	外面色調 内面色調	備考
					口径	底径	器高	内面	外面			
13	埋土上～下位	土師器坏（内黒）	口縁部のみ欠損	砂粒・長石	17.5	4.2	5.2	口～底：ミガキ	口～胴：ケズリ→ミガキ	ほぼ良好	にぶい黄橙 黒	重量（268.1g）
14	埋土下位	土師器鉢	口縁部片	白色粒・長石	–	–	–	口：ハケメ 胴：ヘラナデ→ミガキ	口～胴：ハケメ→ミガキ	良好	橙 橙	
15	埋土下位	土師器甕	口縁～胴 1/4	砂粒・長石	(17.0)	–	(15.2)	口：ヨコナデ 胴：ハケメ	口：ハケメ→ヨコナデ 胴：ヘラナデ	やや良好	にぶい黄橙 にぶい黄橙	重量（202.2g）
16	埋土上位	土師器甕	口縁～胴 1/5	長石・白色粒	–	–	–	口：ヨコナデ 胴：ヘラナデ	口：ヨコナデ 胴：ヘラナデ	やや不良	にぶい黄橙 にぶい黄橙	重量（134.9g）
17	埋土下位	土師器甕	口縁 1/2	砂粒・雲母	(19.2)	–	(9.4)	口：ヘラケズリ→ミガキ	口：ヨコナデ→ヘラナデ	良好	橙 橙	重量（223.2g）
18	埋土下位	土師器甕	口縁 1/3	砂粒・長石	(16.6)	(5.7)	–	口：ヘラナデ	口：ヨコナデ	良好	にぶい黄橙 にぶい黄橙	
19	埋土上位	土師器甕	口縁～胴 1/4	長石・白色粒	–	–	–	口：ヨコナデ 胴：ヘラナデ	口：ヨコナデ 胴：ケズリ→ヘラナデ	良好	にぶい黄橙 にぶい橙	重量（152.8g） 外面にスス
20	埋土上～下位	土師器甕	口縁～胴 1/2	砂粒・白色粒	3.2	–	(9.0)	口：ミガキ 胴：ヘラナデ	口：ヨコナデ 胴：ミガキ	不良	橙 橙	内外面にスス 重量（98.6g）
21	埋土上位	土師器甕	口縁部片	白色粒・長石	–	–	–	口：ヘラナデ	口：ヨコナデ→ヘラナデ	良好	にぶい橙 橙	
22	埋土中	土師器甕	口縁部片	砂粒・長石	–	–	–	口：ヨコナデ	口：ヘラナデ→ヨコナデ	不良	にぶい橙 にぶい黄橙	
23	埋土上～中位	土師器甕	口縁部片	白色粒・長石	–	–	–	口：ヨコナデ	口：ヨコナデ	良好	にぶい橙 にぶい黄橙	

石製品

掲載番号	出土層位	種別器種	残存部位	石材	産地	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	備考
24	埋土中	磨石	完形	デイサイト	奥羽山脈　新生代新第三紀	131.69	137.01	37.95	958.7	
25	埋土中	磨石	完形	安山岩	奥羽山脈　新生代新第三紀	118.40	69.56	44.74	494.5	被熱痕あり

５号住居（第19図、写真図版８）

調査区北西端、ⅢＡ20mグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。遺構の西側半分以上は調査区外に及んでおり、検出できたのはカマドの煙道部分と住居の東壁、およびその周辺部分のみである。

平面形は不整な方形を呈すると推定される。開口部は検出部分から（205）×（100）cmを測り、煙道部分は長さ120cmである。床面は概ね平坦で、壁はほぼ直立気味である。確認面から床面まで最深で24cmである。

埋土は５層（第19図断面１～５層）で、黒褐色シルトを主体とし、炭化物・焼土粒とⅢa層土のブロックが混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。

カマドは北壁に設置されている。袖は認められず、消失したものと思われる。調査区外に及んでいる北側部分に付設されている可能性があるが定かではない。柱穴は検出していない。貼床は床面ほぼ全体に及んでおり、貼床の深さは最深４cmを測る。埋土は褐色細砂を主体としており、遺構埋土の様相とは異なっていた。

遺物は出土していない。

遺構の時期は出土遺物がなく、不明であるが、隣接する１号住居状遺構の時期を参考にし、奈良時代（８世紀代）に帰属するものと推定する。

（３）住 居 状 遺 構

１号住居状遺構（第19・20図、写真図版８・９・27）

調査区南西端、ⅢA20oグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。他の遺構との重複はない。また遺構の東側半分は現代の水路によって削平されており、消失している。

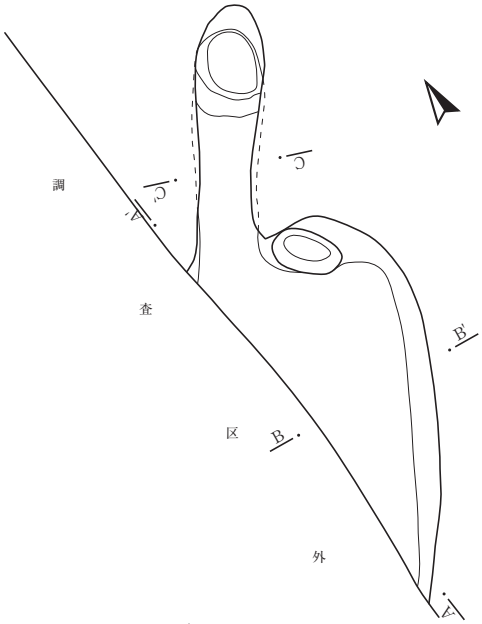
本遺構は平面形態をみると、竪穴住居ともとらえられるが、炉がなく、また床面がややいびつであること、また壁がゆるやかに広がる形態で、他の竪穴住居とは様相が異なることなどを考慮し、住居状遺構にとどめることとした。

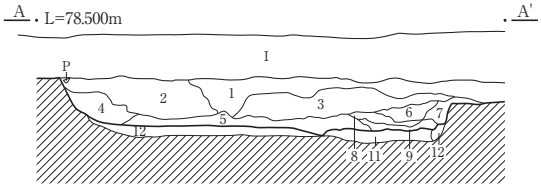
平面形は不整な方形を呈するものと推測される。開口部は（238）×（191）mである。床面は概ね平坦であるが、やや凹凸が認められる。壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。確認面から床面まで最深10cmである。埋土は２層からなる。黒色～黒褐色シルトを主体とし炭化物やⅢa層土のブロックが混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。また床面全体に貼床が施される。深さは床面から最深12cmで他の竪穴住居と比べて深い。褐色細砂を埋土としており、遺構自体の埋土の様相とは異なっている。西壁近くの床面で柱穴１個を検出した。底面はいびつで、深さは14cmを測る。他には見つかっていないので、主柱穴の１個であるかどうかは定かではない。

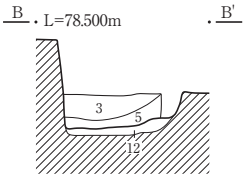
出土遺物は土師器・須恵器246.3g分である。ただし小片が多く、復元できたものは第20図に図示した26の1点のみである。26は土師器の内黒高坏で、口縁部から胴部は内湾気味にひらく形態を呈し、胴部に浅い段を有する。台部は比較的太い作りで底部との境にも段がつく。胴部に段を有することから奈良時代の範疇に含まれるが、このような高坏の出現時期や、26自体の形態から８世紀代に比定されると推察する。

遺構の時期は26から８世紀代に比定されるものと推測する。

5号住居



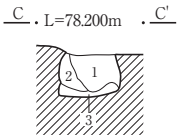




1.黒色シルト　(10YR2/1)　粘性やや強　しまり密
Ⅲa層土ブロック微量、焼土粒微量含む。
2.黒褐色シルト(10YR2/3)　粘性やや強　しまり密
Ⅲa層土ブロックやや多く、黒色シルトブロック微量含む。
3.黒褐色シルト(10YR2/2)　粘性やや強　しまり密
Ⅲa層土ブロック少量、炭化物微量含む。
4.黒褐色シルト(10YR3/1)　粘性やや強　しまりやや密
Ⅲa層土ブロック中量、黒色シルトブロック微量含む。
5.暗褐色シルト(10YR3/3)　粘性やや弱　しまりやや疎
Ⅲa層土ブロック下部に中量偏在、酸化鉄少量含む。
6.黒褐色シルト(10YR3/2)　粘性やや強　しまりやや疎
Ⅲa層土ブロック少量、炭化物・焼土粒少量含む。

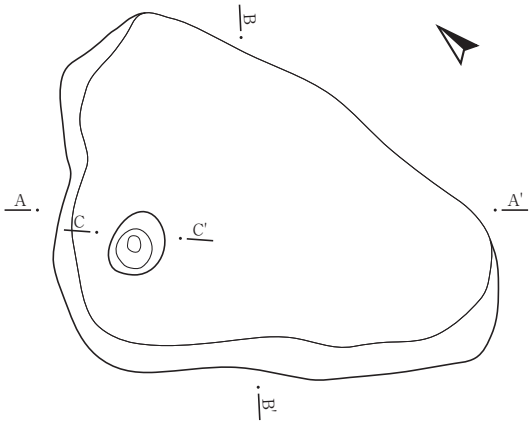
7. 黒褐色シルト(10YR3/1)　粘性強　しまり密　Ⅲa層土ブロック少量、焼土ブロック少量含む。
8. 黄褐色粘土(10YR5/6)　粘性強　しまり密　下部に少量の焼土ブロック偏在。天井崩落土？
9. にぶい赤褐色シルト(10YR5/3)　粘性強　しまり疎　焼土粒ブロック多量含む。
10. 黒色シルト(10YR2/1)　粘性やや強　しまりやや疎　焼土粒、炭化物多量含む。
11. にぶい黄褐色粘土(10YR5/4)　粘性強　しまりやや密　焼土粒少量含む。掘り方
12. にぶい黄褐色粘土(10YR5/4)　粘性強　しまり密　黒褐色シルトブロック中量、酸化鉄少量含む。掘り方

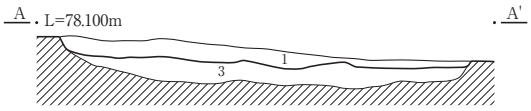
カマド煙道

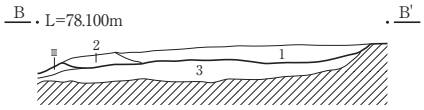


1.黒色シルト(10YR2/1)　粘性弱　しまりやや密　Ⅲa層土ブロック微量、炭化物・焼土粒微量含む。
2.黒色シルト(10YR1.7/1)　粘性やや強　しまり密　Ⅲa層土ブロック少量、焼土粒微量含む。
3.黒褐色シルト(10YR3/2)　粘性やや強　しまりやや疎　1層土ブロックやや多く含む。

1号住居状遺構

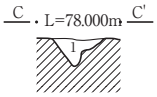






1.黒色シルト　(10YR2/1)　粘性やや弱　しまりやや密　Ⅲa層土ブロック少量、炭化物微量含む。
2.黒褐色シルト(10YR3/2)　粘性やや弱　しまりやや密　Ⅲa層土ブロック多量含む。
3.褐色細砂　(10YR4/4)　粘性弱　しまり密　2層土ブロックやや多く、酸化鉄微量含む。掘り方

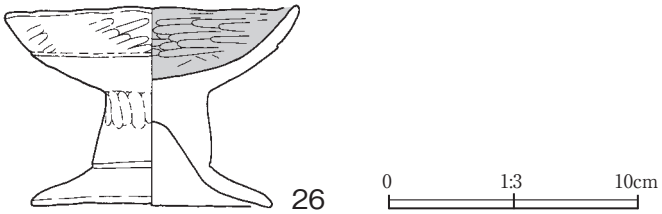
柱穴



1.黒色シルト(10YR2/1)　粘性やや強　しまりやや密
Ⅲa層土ブロック微量、炭化物微量含む。

0　1：40　1m

第19図　B区5号住居・1号住居状遺構



第20図　B区１号住居状遺構出土遺物

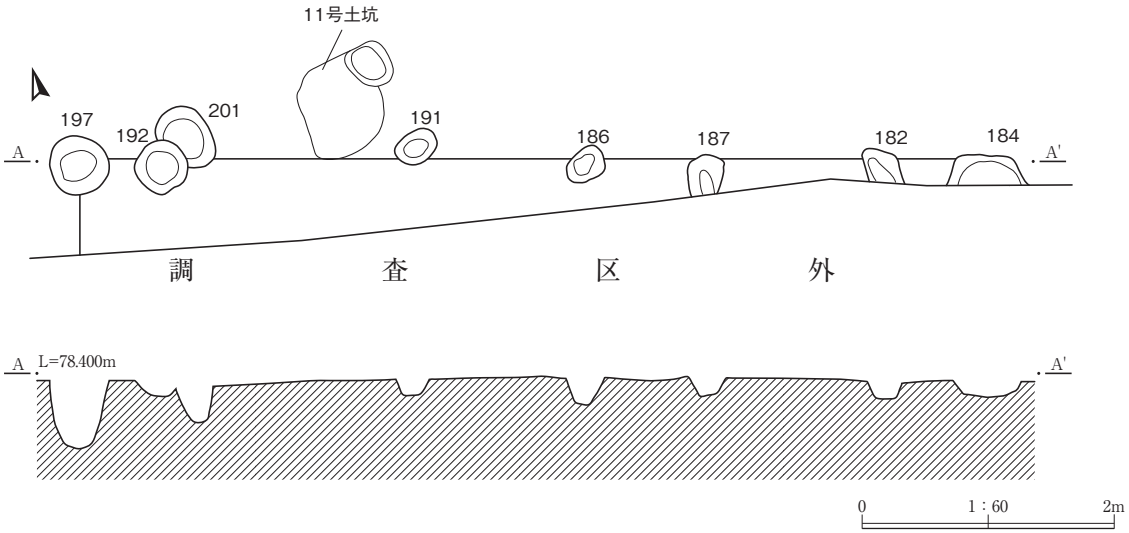
第７表　B区１号住居状遺構出土遺物観察表

掲載番号	遺構名	種別器種	残存部位	胎土	法量（cm）			調整技法			焼成	外面色調内面色調	備考
					口径	底径	器高	内面	外面	底面			
26	埋土下位	土師器高坏（内黒）	口縁部・底部欠損	砂粒	11.6	(9.4)	7.9	口～胴：ミガキ 底：ヘラナデ？	口～胴：指頭による整形	なし	やや良好	淡黄 黒	

（4）掘立柱建物跡

２号掘立柱建物跡（第21図、写真図版９）

調査区北端中央、ⅢＡ２ｄ～ⅢＡ３ｄグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した柱穴の中で列状に並ぶ柱穴（Pit182～197）について観察したところ、Pit197・201をのぞき、概ね同一の深さを有するので、これらの７個の柱穴の並びについて、掘立柱建物跡の長軸方側部分と考えた。梁行方向に相当する部分については調査区外に及んでいるものと考える。また建物ではなく柵列の可能性も捨てきれない。重複関係については11号土坑が柱穴配置上にあり、重複する。新旧関係は不明。規模は桁行きが6.3mを測り、桁間は不明。埋土中から遺物は出土していない。時期は不明だが、西側に隣接するPit194の埋土中から近世の無名銭が出土しており、本遺構も近世に帰属する可能性が高い。



第21図　B区２号掘立柱建物跡

（５）土　　坑

４号土坑（第22図、写真図版10）

調査区北西端、ⅡA15cグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。他の遺構との重複はない。平面形は楕円形である。開口部径は79×177cmである。底面は中央がややいびつで、壁はやや緩やかに広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深15cmである。埋土は２層からなる。黒色シルトを主体とし、にぶい黄橙色シルトが混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から近世以降と判断した。

５号土坑（第22図、写真図版10）

調査区北西端、ⅡA18aグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。他の遺構との重複はない。平面形は不整な円形である。開口部径は95×94cmである。底面は中央に窪んだ形状で、壁はほぼ直立気味である。確認面から底面まで最深14cmである。埋土は２層からなる。黒色シルトを主体とし、暗褐色シルトが混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から近世以降と判断した。

６号土坑（第22図、写真図版11）

調査区北西端、ⅡA18bグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。７号土坑と重複し、本遺構のほうが新しい。平面形は長楕円形である。開口部径は341×83cmである。底面は中央に窪んだ形状で、壁はやや大きく広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深27cmである。埋土は２層からなる。黒～褐色シルトを主体する。堆積状況から自然堆積と推定する。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から近世以降と判断した。

７号土坑（第22図、写真図版11）

調査区北西端、ⅡA18bグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。６号土坑と重複し、本遺構の方が古い。平面形は楕円形である。開口部径は225×（221）cmである。底面は中央に窪んだ形状で、壁はやや大きく広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深21cmである。埋土は２層からなる。黒色シルトを主体とし、褐色シルトが混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から近世以降と判断した。

８号土坑（第22図、写真図版11）

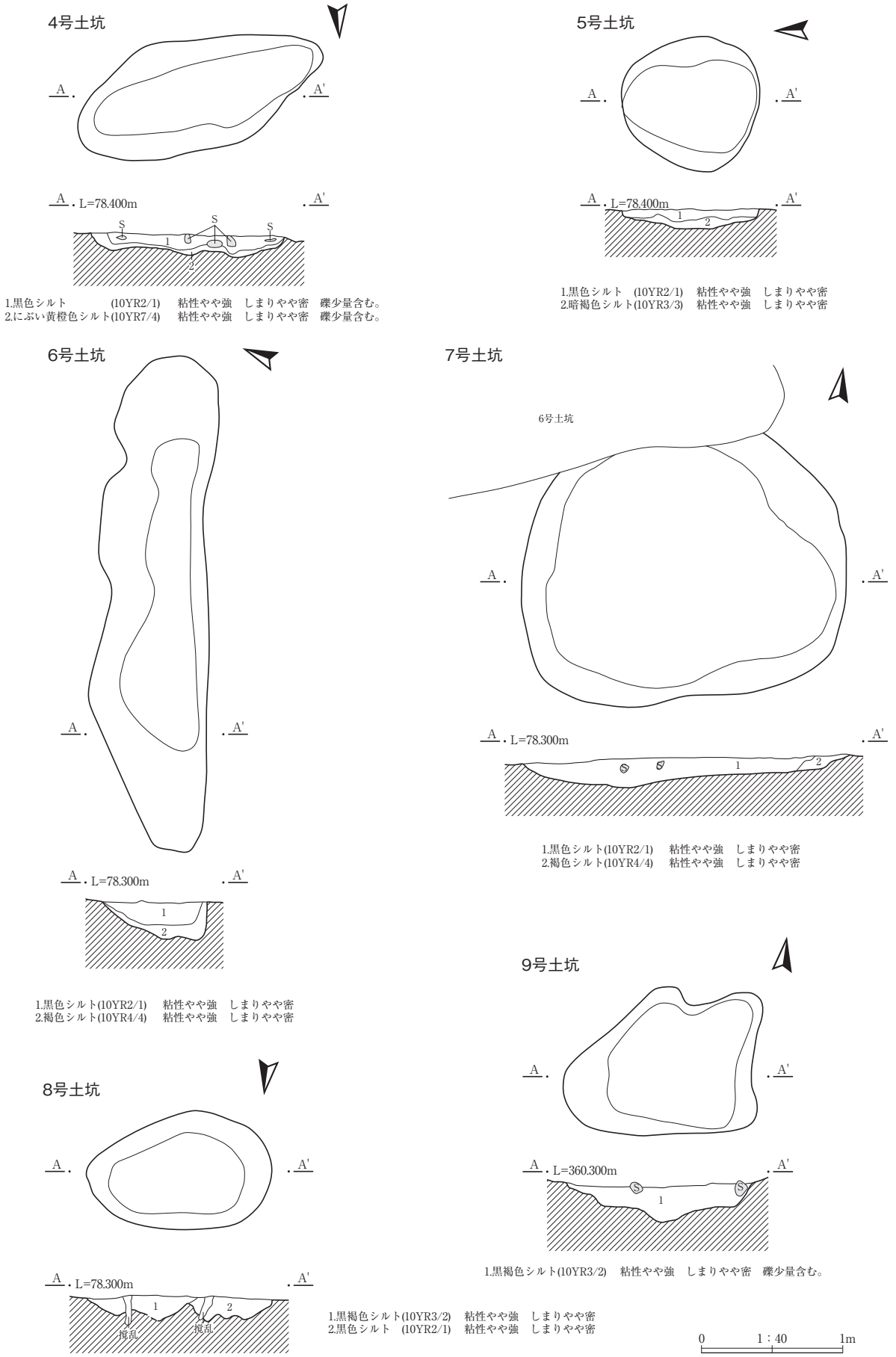
調査区西端、ⅡA18cグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。他の遺構との重複はない。平面形は楕円形である。開口部径は128×81cmである。底面はややいびつで、壁はやや緩やかに広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深17cmである。埋土は２層からなる。黒～黒褐色シルトを主体とする。堆積状況から自然堆積と推定する。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から近世以降と判断した。

９号土坑（第22図、写真図版12）

調査区北西端、ⅡA19bグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。他の遺構との重複はない。平面形は不整な楕円形である。開口部径は152×112cmである。底面は中央に窪んだ形状で、壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深23cmである。埋土は１層で、黒色シルトを主体とする。堆積状況から自然堆積と推定する。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から近世以降と判断した。

10号土坑（第23図、写真図版12）

調査区北端中央よりやや西側、ⅢＡ３dグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。他の遺構との



第22図　B区4～9号土坑

重複はない。平面形は楕円形である。開口部径は92×82cmである。底面は中央に窪んだ形状で、壁は大きく広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深８cmである。埋土は１層で、黒色シルトを主体とする。堆積状況から自然堆積と推定する。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から近世以降と判断した。

11号土坑（第23図、写真図版12）

調査区北端中央よりやや西側、ⅢＡ３dグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。他の遺構との重複はない。平面形は楕円形である。開口部径は83×70cmである。底面は中央に窪んだ形状で、壁はやや直立気味である。確認面から底面まで最深41cmである。埋土は２層からなる。黒～褐色シルトを主体とする。堆積状況から自然堆積と推定する。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から近世以降と判断した。

12号土坑（第23・27図、写真図版12・27）

調査区北端中央よりやや西側、ⅢＡ６eグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。他の遺構との重複はない。平面形は不整な円形である。開口部径は93×（71）cmである。底面は中央に窪んだ形状で、壁はやや大きく広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深22cmである。埋土は１層で黒色シルトを主体とする。堆積状況から自然堆積と推定する。出土遺物は土師器・須恵器396.1g分である。１点図示した。第27図27はミニチュア土器で底部の厚みに比べて、立ち上がりが非常に浅く、皿状の形態である。胴部には一条の沈線（段？）が巡る。形態の特徴から７世紀末から８世紀前半に比定されると推察する。遺構の性格は不明である。時期は出土遺物から８世紀前半と判断した。

13号土坑（第23図、写真図版13）

調査区北端中央よりやや西側、ⅢＡ７eグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。北側の一部は調査区外に及んでいる。他の遺構との重複はない。平面形は不整な楕円形である。開口部径は（183）×107cmである。底面は中央に窪んだ形状で、壁はやや直立気味である。確認面から底面まで最深53cmである。埋土は３層からなる。黒色シルトを主体とし、黒褐色シルトが混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から近世以降と判断した。

14号土坑（第23図、写真図版13）

調査区北端中央よりやや西側、ⅢＡ８eグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。南側の一部は調査区外に及んでいる。他の遺構との重複はない。平面形は楕円形である。開口部径は84×（42）cmである。底面は中央に窪んだ形状で、壁はやや大きく広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深13cmである。埋土は１層で黒色シルトを主体とする。堆積状況から自然堆積と推定する。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から近世以降と判断した。

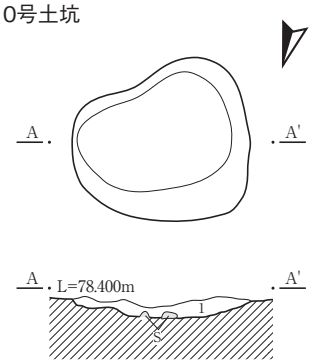
15号土坑（第23図、写真図版13）

調査区北端中央よりやや西側、ⅢＡ８eグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。他の遺構との重複はない。平面形は楕円形である。開口部径は85×（66）cmである。底面は中央に窪んだ形状で、壁はやや大きく広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深22cmである。埋土は３層からなる。黒褐色シルトを主体とし、黒色シルト、黄橙色シルトが混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から近世以降と判断した。

16号土坑（第23図、写真図版13）

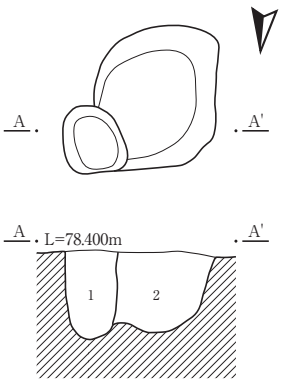
調査区北端中央よりやや西側、ⅢＡ９eグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。南側の一部は

10号土坑



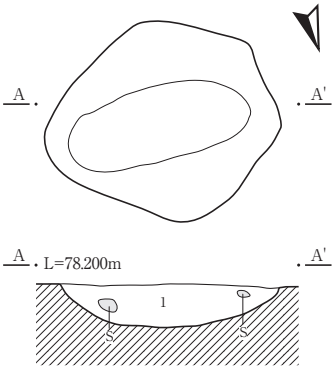
1.黒色シルト(10YR2/1)　粘性やや強　しまり密
礫少量、酸化鉄微量含む。

11号土坑



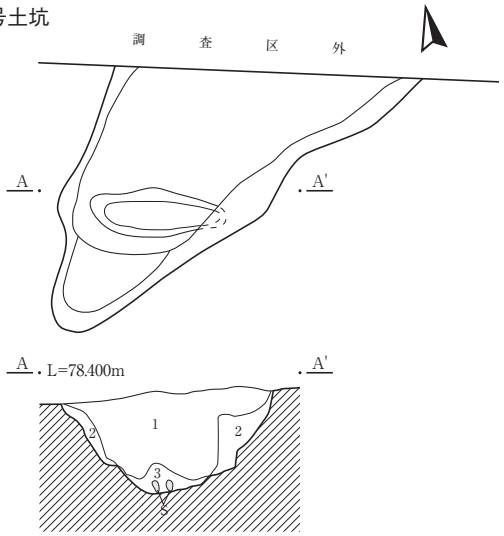
1.黒褐色シルト(10YR2/2)　粘性やや強　しまり疎
Ⅲa層土ブロック多量、酸化鉄微量含む。
2.黒色シルト　(10YR2/1)　粘性やや弱　しまり密
Ⅲa層土ブロック中量、白色粒子少量含む。

12号土坑



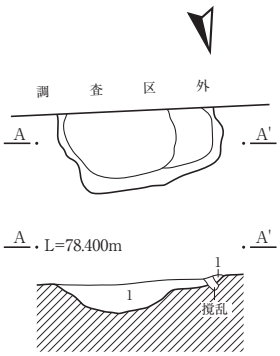
1.黒褐色シルト(10YR3/1)　粘性やや強　しまりやや密
礫少量、酸化鉄多量、
炭化物微量含む。

13号土坑



1.黒褐色シルト(10YR3/1)　粘性やや強　しまりやや密。
2.黒褐色シルト(10YR2/3)　粘性やや強　しまりやや密　砂混じり。
3.にぶい黄褐色シルト(10YR5/4)　粘性やや弱　しまりやや密　砂混じり、
礫少量含む。

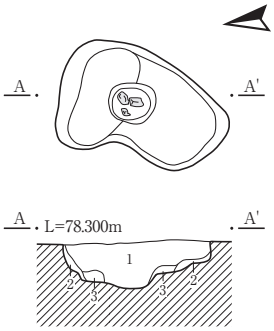
14号土坑



1.黒色シルト(10YR2/1)　粘性やや強　しまりやや密
Ⅲa層土ブロック多量含む

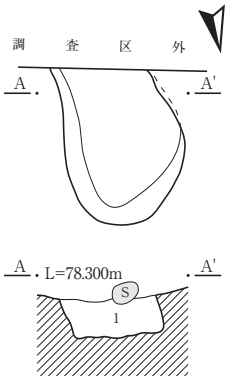
0　1：40　1m

15号土坑



1.黒褐色シルト(10YR3/1)　粘性やや強　しまりやや密
Ⅲa層土ブロック少量含む
2.黒色シルト　(10YR2/1)　粘性やや強　しまりやや密
Ⅲa層土ブロック多量含む
3.黄橙色シルト(10YR7/8)　粘性強　しまりやや密
黒色シルトブロック少量含む

16号土坑



1.黄橙色シルト(10YR7/8)粘性強　しまりやや密
黒色シルトブロック
やや多く含む

第23図　B区10～16号土坑

調査区外に及んでいる。他の遺構との重複はない。平面形は不整な楕円形である。開口部径は（85）×63cmである。底面は中央に窪んだ形状で、壁はやや大きく広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深18cmである。埋土は１層で黄橙色シルトを主体とし、黒色シルトが多量に混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から近世以降と判断した。

17号土坑（第24・28・29図、写真図版14・28）

調査区北端中央、ⅢＡ９e～９fグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。大型の遺構であるが、底面は平坦ではなく丸みをおびており、また断面形態からも土坑と判断した。南側の一部は調査区外に及んでいる。２号溝と重複し、本遺構の方が新しい。平面形は楕円形である。開口部径は252×（217）cmである。底面は中央に窪んだ形状で、壁はやや大きく広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深42cmである。埋土は４層からなる。黒色シルトを主体とする。混入物が少なく、人為堆積の可能性が高いと推定する。遺物は石製品９点が出土している。９点図示した。39は両端を欠損する。大型の偏平礫を素材とし、片面の中央には炭化物が広く付着する。またもう一方の面は磨った痕跡があり、大きくくぼんでいる。40は楕円形礫を素材とし、両面の側縁に被熱痕と炭化物の付着が認められた。39・40ともに用途は不明。41～43は厚みのある円形の礫で磨痕や敲打痕が認められる。44は楕円形礫を素材とし、片側の側縁に径２cmほどの溝状の貫通孔が穿たれている。45・46は破片で被熱が認められた。47は写真掲載のみであるが凝灰岩製の火打ち石である。遺物の時期については39や47から考えて近世と考える。遺構の性格は不明である。時期は出土遺物の時期から近世以降と判断した。

18号土坑（第24図、写真図版14）

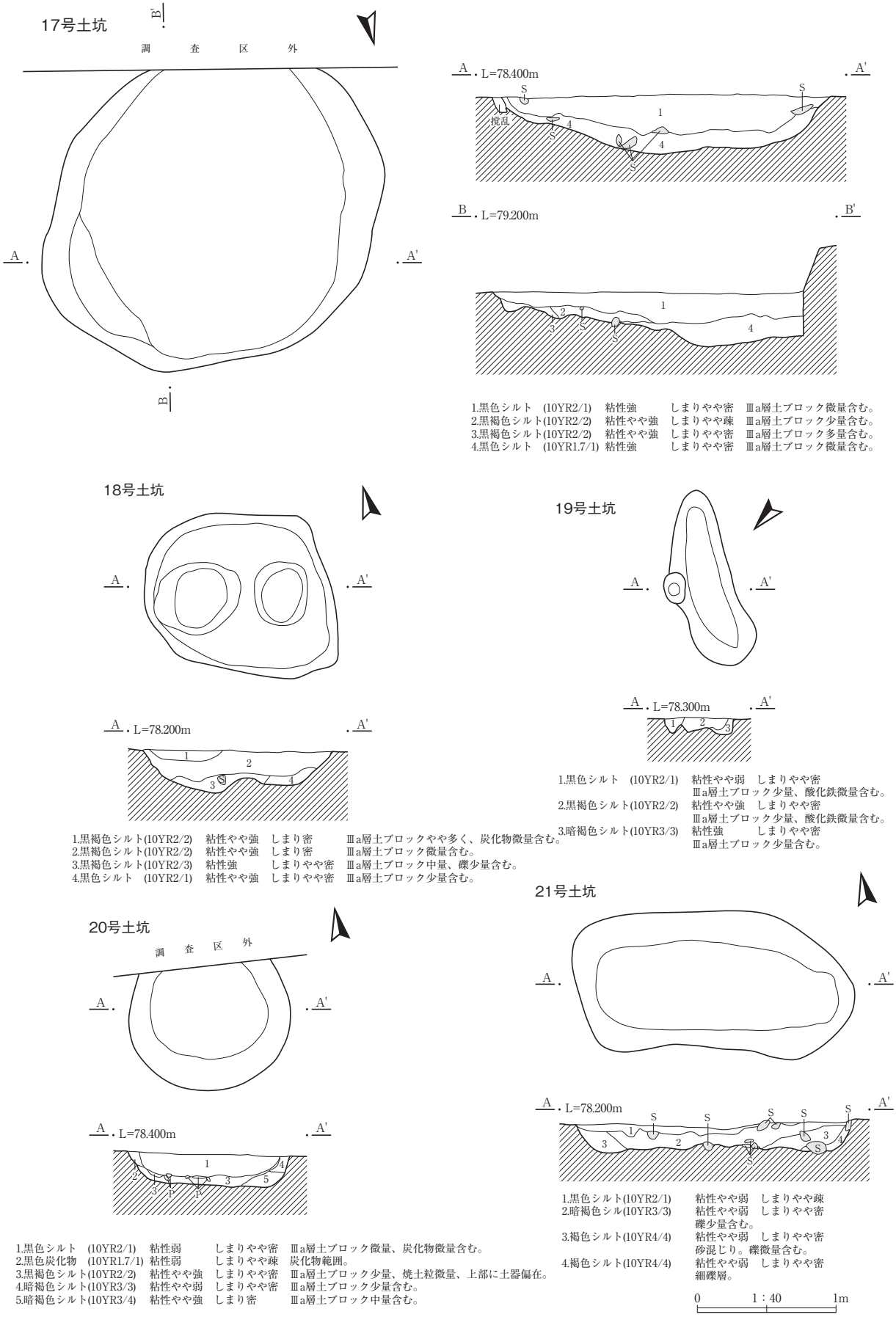
調査区北端中央、ⅢA11fグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。２号溝と重複し、本遺構の方が新しい。平面形は楕円形である。開口部径は132×113cmである。底面は中央に窪んだ形状で、壁はやや大きく広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深30cmである。埋土は４層からなる。黒褐色シルトを主体とし、Ⅲa層土がブロックで混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から近世以降と判断した。

19号土坑（第24図、写真図版14）

調査区北端中央、ⅢA12fグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。２号溝と重複し、本遺構の方が新しい。平面形は長楕円形である。開口部径は124×45cmである。底面は中央に窪んだ形状で、壁は直立気味である。確認面から底面まで最深11cmである。埋土は３層からなる。黒褐色シルトを主体とし、黒色～暗褐色シルトが混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から近世以降と判断した。

20号土坑（第24・27図、写真図版15・27）

調査区北端中央やや南側、ⅢA14fグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。北側の一部は調査区外に及んでいる。遺構の重複はない。平面形は円形である。開口部径は114×（87）cmである。底面は概ね平坦で、壁はやや緩やかに広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深21cmである。埋土は５層からなる。黒色シルトを主体とし、壁際に炭化物が混入していた。また１層と３層の境で土師器が多量に出土した。焼土粒も混入しており、人為堆積と推定する。また遺物が多く出土しており、特に埋土の中位から高坏（第27図28）が横倒しの状態で（巻頭カラー写真図版１・写真図版15）、またその周囲から他にも土師器・須恵器が、破片で出土している。ただし28は底部を欠損しており、出土状態にも意味合いがあるようには考えられない。埋土中位まで埋没した遺構内に他の遺物



第24図　B区17～21号土坑

とともに廃棄されたものと考える。出土遺物は土師器・須恵器1128.8gであり、他の遺構と比べて、出土量は非常に多いと言える。５点図示した。28は内黒の高坏で口縁部～胴部は内湾気味に立ち上がり、胴部には段がつく。内外面に丁寧なミガキが施される。形態の特徴から８世紀代に比定されると考える。29は形態が復元できた甕で口縁部が大きく開く。頸部に明確な段は付かないが、わずかにその痕跡が認められる。形態の特徴から８世紀代に比定され、28とは同時期と考える。30～32は甕で形態が復元できない破片である。30は磨滅が激しいが、頸部に段のある痕跡のみが認められる。両面にヘラケズリ調整を施す。32は頸部に明瞭な段がつく。外面はヘラケズリとヨコナデ、内面にはヘラナデが施される。いずれも8世紀代のものと考える。遺構の性格は不明である。時期は出土遺物から８世紀代と判断した。

21号土坑（第24図、写真図版14）

調査区北端中央やや南側、ⅢA17g～18gグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。遺構の重複はない。平面形は楕円形である。開口部径は200×100cmである。底面は概ね平坦で、壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深22cmである。埋土は２層からなる。黒色～暗褐色シルトを主体とし、褐色シルトが混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代～近世と判断した。

22号土坑（第25図、写真図版15）

調査区北東端、ⅢA19gグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。２号溝と重複し、本遺構の方が新しい。平面形は不整な円形である。開口部径は92×88cmである。底面は中央に窪んだ形状で、壁は直立気味である。確認面から底面まで最深16cmである。埋土は３層からなる。黒色～黒褐色シルトを主体とする。堆積状況から自然堆積と推定する。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代～近世と判断した。

23号土坑（第25図、写真図版15）

調査区北東端、ⅢA19gグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。遺構の重複はない。本遺構の方が新しい。平面形は不整な楕円形である。開口部径は127×111cmである。底面は丸みをおびており、中央はやや膨らむ。壁はやや大きく広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深31cmである。埋土は１層で、暗褐色シルトを主体とする。堆積状況から人為堆積と推定する。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代～近世と判断した。

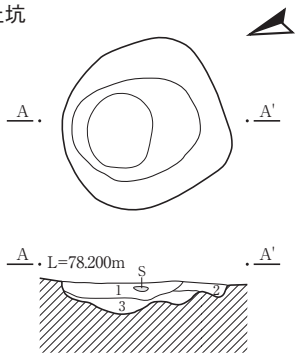
24号土坑（第25図、写真図版16）

調査区北東端、ⅢA20iグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。遺構の重複はない。本遺構の方が新しい。平面形は不整な楕円形である。開口部径は60×30cmである。底面はやや窪んだ形状で、壁はやや大きく広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深６cmである。埋土は１層で、黒色シルトを主体とする。堆積状況から人為堆積と推定する。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代～近世と判断した。

25号土坑（第25図、写真図版16）

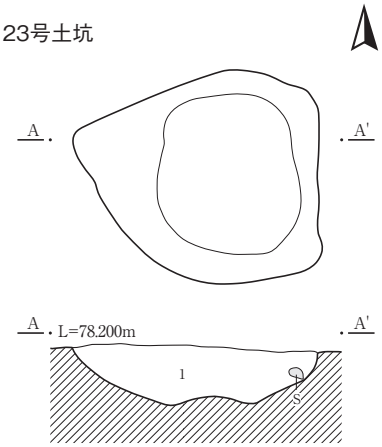
調査区東端、ⅢA20jグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。東側の一部は調査区外に及んでいる。遺構の重複はない。本遺構の方が新しい。平面形は不整な楕円形である。開口部径は153×（69）cmである。底面はいびつで中央が窪んだ形状で、壁は大きく広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深44cmである。埋土は４層からなる。黒色～黒褐色シルトを主体とし、Ⅲa層土ブロックや酸化鉄が混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代～近世と判断した。

22号土坑



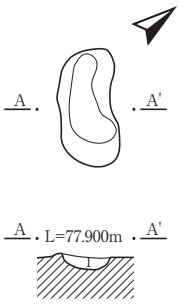
1.黒色シルト(10YR2/1)　粘性弱　しまりやや疎
Ⅲa層土ブロック微量、炭化物少量含む。
2.黒褐色シルト(10YR2/2)　粘性やや弱　しまりやや密
Ⅲa層土ブロック微量、炭化物・焼土粒微量含む。
3.黒褐色シルト(10YR3/1)　粘性弱　しまりやや疎
Ⅲa層土ブロック中量、炭化物微量含む。

23号土坑



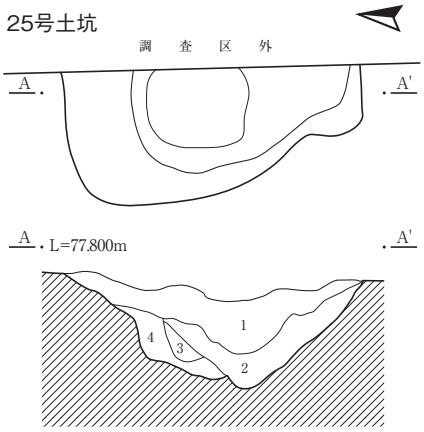
1.暗褐色シルト(10YR3/3)　粘性やや強　しまりやや密
礫少量含む。

24号土坑



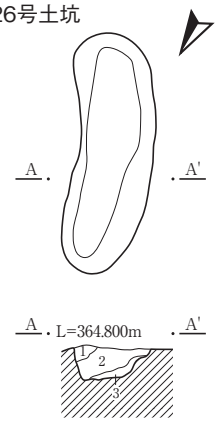
1.黒色シルト(10YR2/1)　粘性やや強　しまりやや密
焼土少量、礫少量含む。

25号土坑



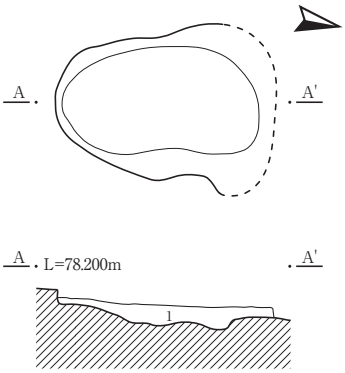
1.黒色シルト(10YR1.7/1)　粘性やや弱　しまりやや疎
Ⅲa層土ブロック微量、
酸化鉄少量含む。
2.黒褐色シルト(10YR2/2)　粘性やや強　しまりやや疎
Ⅲa層土ブロック少量含む。
3.黒褐色シルト(10YR3/2)　粘性強　しまりやや密
酸化鉄微量含む。
4.暗褐色シルト(10YR3/3)　粘性やや弱　しまりやや密
酸化鉄少量含む。

26号土坑



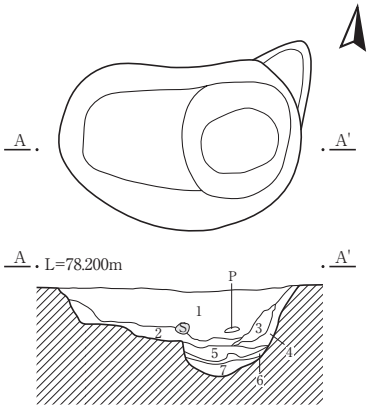
1.黒褐色シルト(10YR3/2)　粘性やや強
しまりやや密
酸化鉄微量含む。
2.黒褐色シルト(10YR2/2)　粘性やや弱
しまりやや密
Ⅲa層土ブロック微量、
酸化鉄微量含む。
3.暗褐色シルト(10YR3/4)　粘性弱
しまりやや密
酸化鉄微量含む。

27号土坑



1.黒色シルト(10YR2/1)　粘性やや強　しまり密
Ⅲa層土ブロック少量、
炭化物微量、酸化鉄微量含む。

28号土坑



1.黒色シルト　(10YR2/1)　粘性やや弱　しまりやや密　Ⅲa層土ブロック微量含む。
2.黒褐色シルト　(10YR3/1)　粘性やや強　しまりやや密　Ⅲa層土ブロック中量、灰白色粘土ブロック少量含む。
3.黒褐色シルト　(10YR2/2)　粘性強　しまり密　Ⅲa層土ブロック微量、酸化鉄少量、灰白色粘土少量含む。
4.灰黄褐色シルト(10YR4/2)　粘性強　しまりやや密　Ⅲa層土ブロック中量、灰白色粘土ブロック少量含む。
5.黒褐色シルト　(10YR2/2)　粘性強　しまりやや密　Ⅲa層土ブロック微量含む。
6.灰黄褐色シルト(10YR5/2)　粘性やや強　しまりやや密　灰白色粘土やや多く、酸化鉄微量含む。
7.黒色シルト　(10YR2/1)　粘性強　しまりやや密　灰白色粘土中量含む。

0　1：40　1m

第25図　B区22～28号土坑

26号土坑（第25図、写真図版16）

調査区東端、ⅢA20kグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。遺構の重複はない。平面形は不整な長楕円形である。開口部径は124×41cmである。底面はほぼ平坦で、壁は直立気味である。確認面から底面まで最深16cmである。埋土は３層からなる。黒褐色シルトを主体とし、Ⅲa層土ブロックや酸化鉄が混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代～近世と判断した。

27号土坑（第25・27図、写真図版16）

調査区南東端、ⅢA20pグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。遺構の重複はない。北端の一部は調査の際の掘りすぎにより消失している。平面形は不整な楕円形である。開口部径は（113）×（89）cmである。底面は概ね平坦だがやや歪で、壁は直立気味である。確認面から底面まで最深12cmである。埋土は１層で、黒色シルトを主体とする。堆積状況から人為堆積と推定する。出土遺物は土師器・須恵器263.3gである。遺物の出土量は比較的多いが、復元できたものは少ない。２点図示した。33ほぼ完形の須恵器坏で、ゆるく内湾しながら立ち上がる形態でロクロ整形を施す。34は須恵器坏の口縁部片で口端が外反気味である。どちらも９世紀代のものと推測する。遺構の性格は不明である。時期は出土した土師器から９世紀代と推測する。

28号土坑（第25・27図、写真図版17・27）

調査区南端やや東側、ⅢA19pグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。29号土坑と重複し、本遺構の方が新しい。平面形は不整な楕円形である。開口部径は126×86cmである。底面は概ね平坦で東側に柱穴状の窪みが認められる。壁は直立気味である。確認面から底面まで最深44cmである。埋土は７層からなる。黒色シルトを主体とし、Ⅲa層土がブロックで混入する。東側窪み部分は黒褐色シルトと灰黄褐色シルトが互層をなして堆積している。堆積状況から人為堆積と推定する。出土遺物は土師器・須恵器332.1gである。遺物の出土量は比較的多いが、これは須恵器の大甕の破片などが含まれるためで、点数自体は少ない。また形態を復元できるほどのものはない。２点図示した。どちらも須恵器甕の胴部片である。35は外面にハケ調整の痕跡が残る。36は外面にタタキが残る。いずれも９世紀代の範疇に収まると考える。遺構の性格は不明である。時期は出土遺物から９世紀代と判断した。

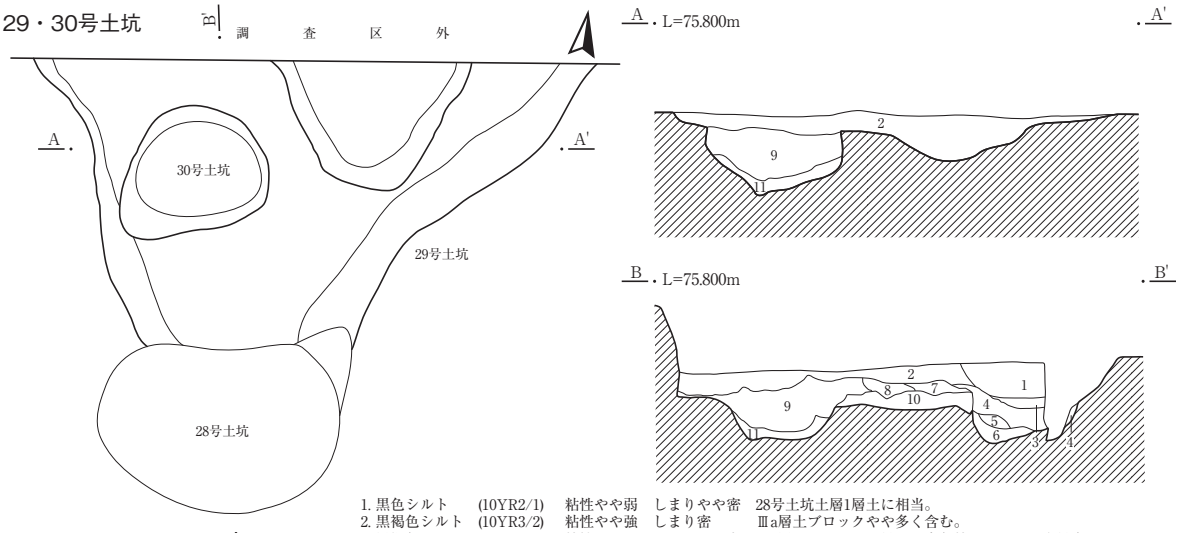
29号土坑（第26図、写真図版17）

調査区南端やや東側、ⅢA19pグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。北側の一部は調査区外に及んでいる。28号土坑・30号土坑と重複し、本遺構は30号土坑より新しく、28号土坑より古い。平面形は不整な楕円形である。開口部径は（286）×（149）cmである。底面は概ね平坦で、壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深22cmである。埋土は４層（２・７・８・10層）からなる。黒色～黒褐色シルトを主体とし、Ⅲa層のブロックや酸化鉄が混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。重複する30号土坑の埋土（９・11 層）と堆積状況を比較すると、一部30号土坑埋土に切られている部分が認められる。したがって29号土坑が使用された時期、30号土坑の一部はまだ若干開口していた可能性が考えられる。遺物は土師器、須恵器232.1gであるが、取り上げの際、30号土坑出土と一括している。いずれも小片で形態が復元できるものはなく、図示していない。時期は出土遺物や重複する28号土坑の時期を考え９世紀代と判断した。

30号土坑（第26・28図、写真図版17・27）

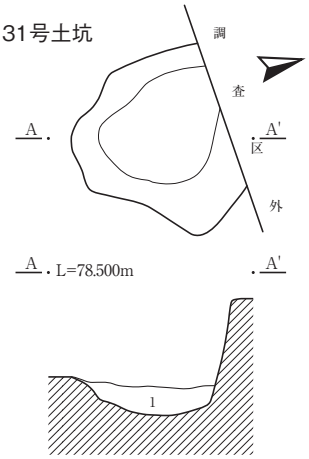
調査区南端やや東側、ⅢA19pグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。29号土坑と重複し、本遺構の方が古い。平面形は楕円形である。開口部径は82×70cmである。底面は中央に窪んだ形状

29・30号土坑



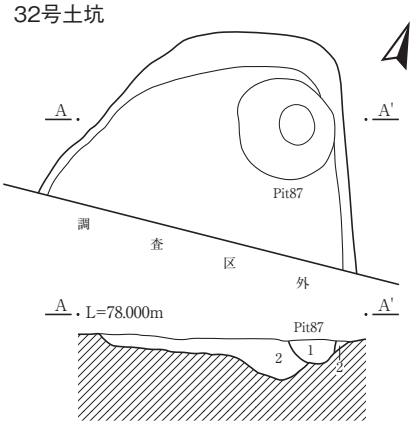
1. 黒色シルト　(10YR2/1)　粘性やや弱　しまりやや密　28号土坑土層1層土に相当。
2. 黒褐色シルト　(10YR3/2)　粘性やや強　しまり密　Ⅲa層土ブロックやや多く含む。
3. 黒褐色シルト　(10YR3/1)　粘性やや強　しまりやや密　Ⅲa層土ブロック中量、灰白色粘土ブロック少量含む。
4. 黒褐色シルト　(10YR2/2)　粘性強　しまり密　28号土坑土層2層土に相当。
5. 灰黄褐色シルト(10YR4/2)　粘性強　しまりやや密　28号土坑土層6層土に相当。
6. 黒褐色シルト　(10YR2/2)　粘性強　しまりやや密　Ⅲa層土ブロック微量含む。
7. 黒色シルト　(10YR1.7/1)　粘性やや強　しまり密　Ⅲa層土ブロック微量、酸化鉄微量含む。
8. 黒褐色シルト　(10YR2/2)　粘性やや弱　しまり密　Ⅲa層土ブロック微量、酸化鉄微量含む。
9. 黒褐色シルト　(10YR2/3)　粘性やや強　しまりやや密　Ⅲa層土ブロック中量、黒色シルトブロック少量、酸化鉄少量含む。
10.灰黄褐色細砂　(10YR4/2)　粘性弱　しまり密　黒色シルトブロックやや多く、酸化鉄微量含む。
11.黒色シルト　(10YR2/1)　粘性やや強　しまり密　Ⅲa層土ブロックやや多く、酸化鉄少量含む。

31号土坑



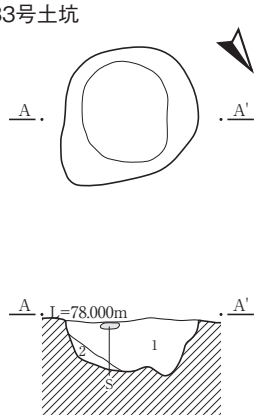
1.黒褐色シルト(10YR3/2)　粘性強　しまりやや密
Ⅲa層土ブロック中量
黒色シルトブロック少量含む

32号土坑



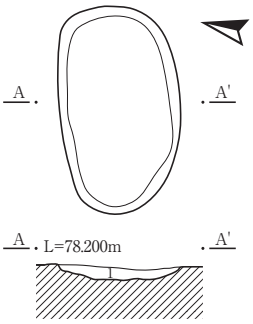
1.黒色シルト(10YR1.7/1)　粘性強　しまりやや密
酸化鉄少量含む。
2.黒褐色シルト(10YR3/2)　粘性強　しまりやや密
酸化鉄少量含む。

33号土坑



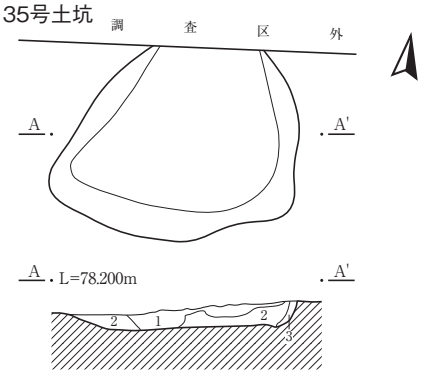
1.黒色シルト(10YR2/1)　粘性やや強　しまりやや密
礫微量に上部偏在、
酸化鉄少量含む。
2.褐色シルト(10YR4/4)　粘性弱　しまりやや密
Ⅲa層土ブロック少量含む。

34号土坑



1.暗褐色シルト(10YR3/3)　粘性やや弱　しまりやや密
礫多量、酸化鉄少量含む。

35号土坑



1.黒褐色シルト　(10YR2/2)　粘性やや強　しまりやや密　酸化鉄少量含む。
2.灰黄褐色シルト　(10YR5/2)　粘性やや強　しまりやや密　酸化鉄少量含む。
3.にぶい黄褐色シルト(10YR5/3)　粘性やや強　しまりやや密　酸化鉄少量含む。

0　1：40　1m

第26図　B区29～35土坑

で、壁は直立気味である。29号土坑の底面から本遺構底面まで最深34cmである。埋土は２層からなる。黒褐色シルトを主体とし、底面付近に黒色シルトが堆積する。堆積状況から自然堆積と推定する。出土遺物は土師器・須恵器232.1gであるが取り上げの際、29号土坑出土と一括している。いずれも小片で形態が復元できたものはない。２点図示した。どちらも土師器甕の胴部片である。37はロクロ整形後、縦方向のヘラケズリを施す。38は底部付近の破片である。外面にはヘラケズリ、内面にはヘラナデが施される。胴部のみで時期判断は難しい。遺構の性格は不明である。時期は出土した遺物の時期から９世紀代と判断した。

31号土坑（第26図、写真図版17）

調査区南端やや東側、ⅢA18pグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。北側の一部は調査区外に及んでいる。平面形はいびつな楕円形である。開口部径は94×（80）cmである。底面は概ね平坦で、壁はやや大きく広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深14cmである。埋土は１層で、黒褐色シルトを主体である。堆積状況から人為堆積と推定する。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代～近世と判断した。

32号土坑（第26図、写真図版18）

調査区南端中央、ⅢA17qグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。南側の一部は調査区外に及んでいる。Pit87と重複し、本遺構の方が古い。平面形は楕円形である。開口部径は（107）×170cmである。底面は概ね平坦で中央に窪みが認められる。壁はやや大きく広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深21cmである。埋土は１層（第26図２層）で黒褐色シルトを主体とする。堆積状況から人為堆積と推定する。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代～近世と判断した。

33号土坑（第26図、写真図版18）

調査区南端やや西側、ⅢA14qグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。南側の一部は調査区外に及んでいる。１号性格不明遺構と重複し、本遺構の方が新しい。平面形は楕円形である。開口部径は82×67cmである。底面はややいびつだが概ね平坦で、壁は直立気味である。確認面から底面まで最深29cmである。埋土は２層からなる。黒色シルトを主体とし、褐色シルトが混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は重複する１号性格不明遺構の時期から考えて近世以降と判断した。

34号土坑（第26図、写真図版18）

調査区南端やや西側、ⅢA13qグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。平面形は不整な楕円形である。開口部径は106×62cmである。底面は概ね平坦で、壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深６cmである。埋土は１層で暗褐色シルトを主体とする。堆積状況から自然堆積と推定する。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代～近世と判断した。

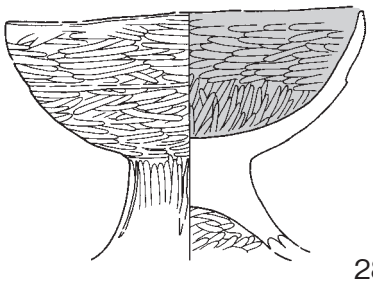
35号土坑（第26図、写真図版18）

調査区南端やや西側、ⅢA13qグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。北側の一部は調査区外に及んでいる。平面形は不整な楕円形である。開口部径は133×（101）cmである。底面は概ね平坦で、壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深12cmである。埋土は３層からなる。黒色シルトを主体とし、灰黄褐色シルトが混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代～近世と判断した。

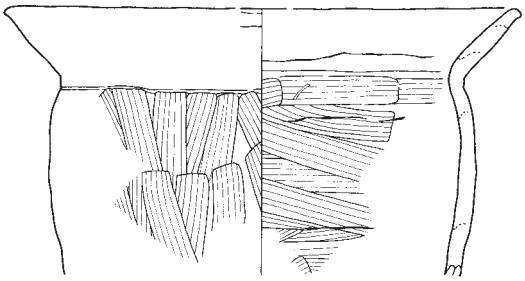
12 号土坑

27

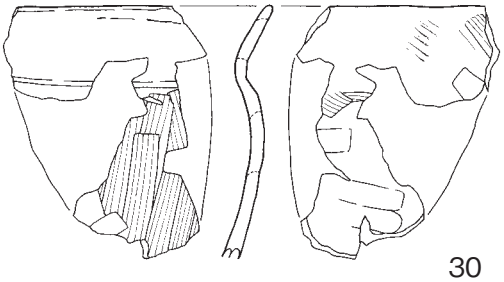
20 号土坑



28

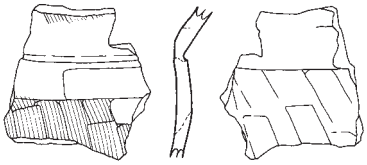


29



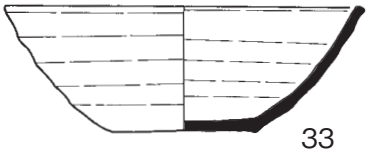
30

31

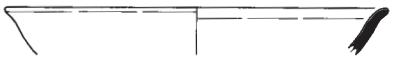


32

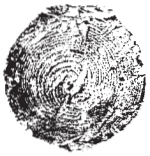
27 号土坑



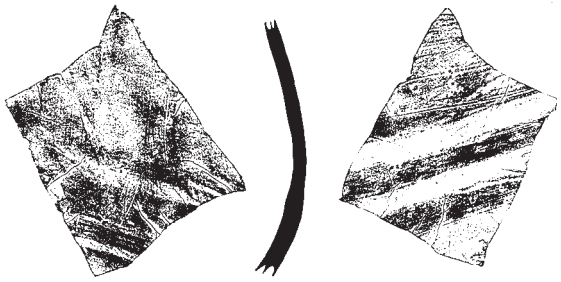
33



34



28 号土坑



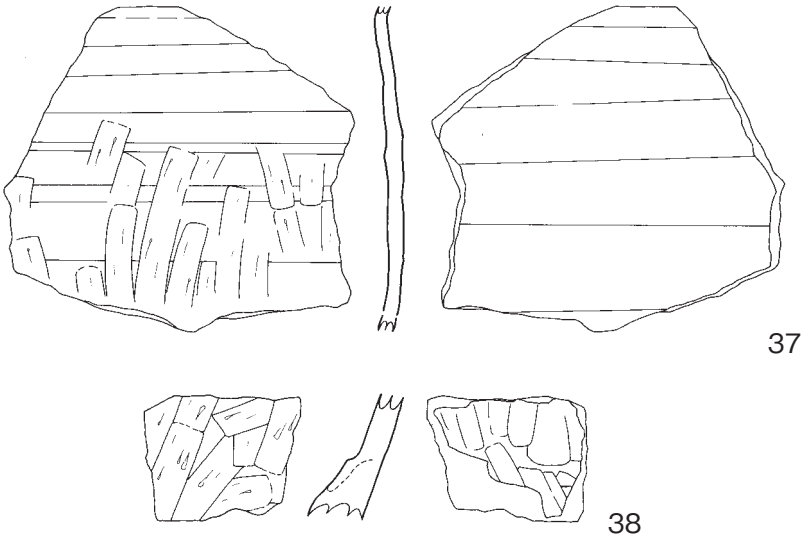
35

36

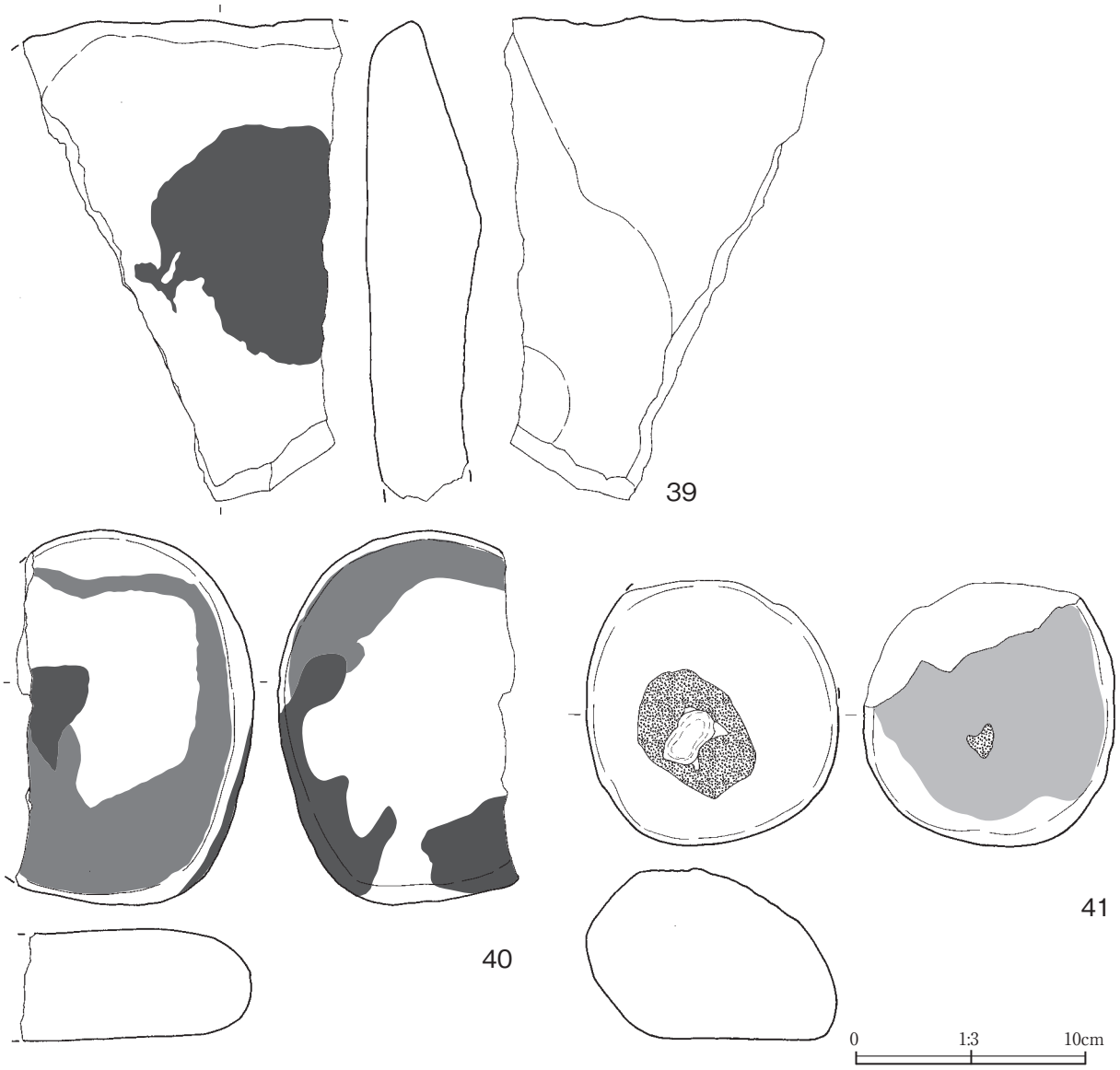
0　1:3　10cm

第 27 図　B 区土坑出土遺物（1）

30 号土坑

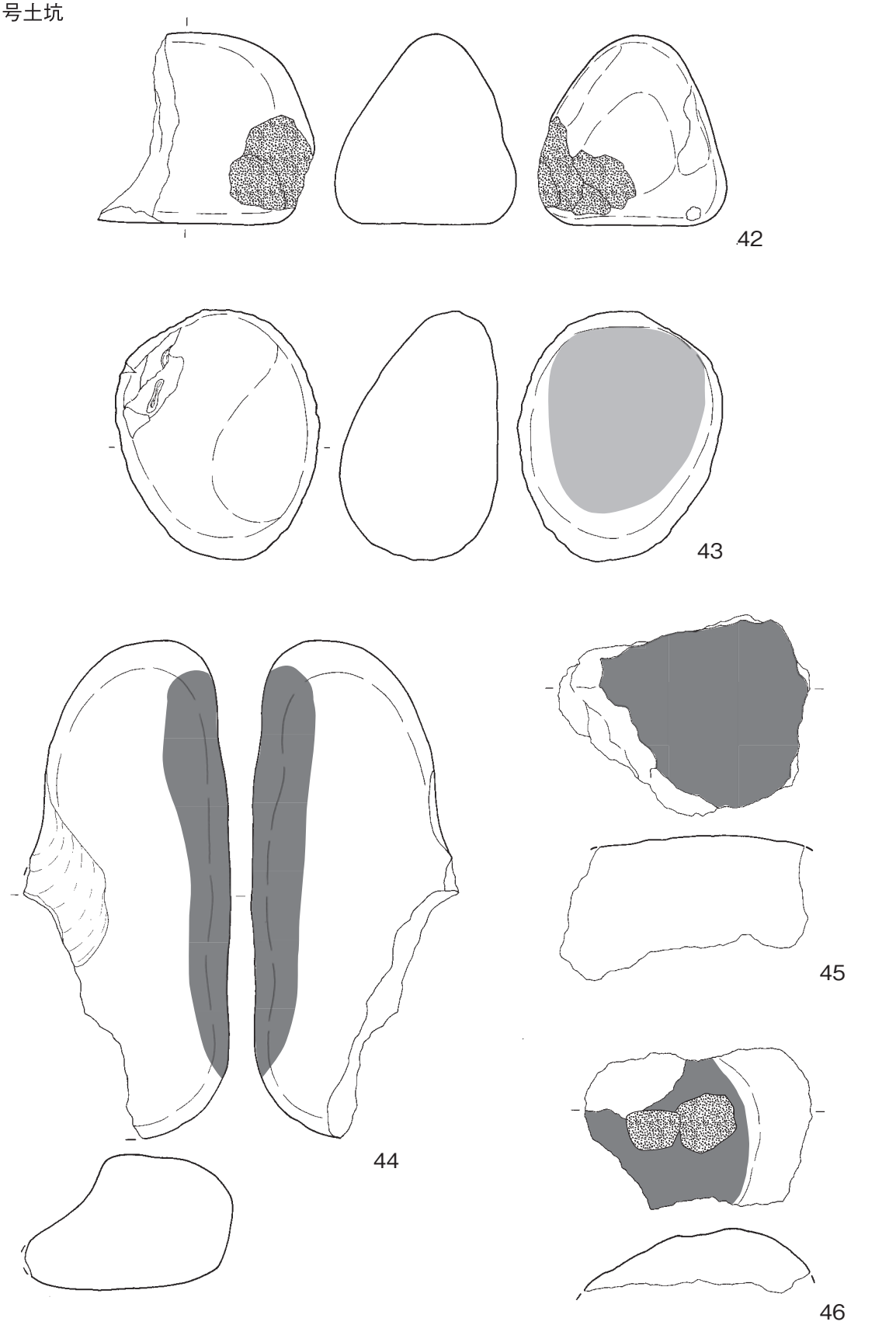


17 号土坑



第 28 図　B 区土坑出土遺物（2）

17 号土坑



第 29 図　B 区土坑出土遺物（3）

第８表　Ｂ区土坑出土遺物観察表　土師器・須恵器

掲載番号	遺構名 層位	種別 器種	残存部位	胎土	法量（cm）			調整技法			焼成	外面色調 内面色調	備考
					口径	底径	器高	内面	外面	底面			
27	12号土坑 埋土中	ミニチュア	口～底1/3	砂粒・長石	－	(8.0)	(2.2)	手捏ね	手捏ね	手捏ね	良好	橙 橙	
28	20号土坑 埋土中	土師器高坏 (内黒)	口縁部・ 底部欠損	白色粒・ 長石	(14.1)	(7.7)	(10.0)	口～胴：ミガキ	口～胴、坏：ミガキ	ミガキ	やや 良好	にぶい黄橙 黒	
29	20号土坑 埋土中	土師器甕	口～胴1/3	白色粒	(20.4)	－	(10.7)	口:ヨコナデ胴: ハケメ	口：ヨコナデ 胴：ハケメ	－	やや 良好	にぶい黄橙 浅黄	
30	20号土坑 埋土中	土師器甕	口縁部片	白色粒・ 長石	－	－	－	口:ヨコナデ胴: ハケメ	口：ヨコナデ 胴：ヘラナデ？→ ハケメ	－	やや 良好	にぶい黄橙 いぶい黄橙	
31	20号土坑 埋土中	土師器甕	口縁部片	白色粒・ 長石	－	－	－	口：ハケメ→ヘラナデ	口：ヨコナデ→ ヘラナデ	－	やや 不良	にぶい黄橙 暗灰黄	
32	20号土坑 埋土中	土師器甕	胴部片	白色粒	－	－	－	口：ヨコナデ	口：ヨコナデ 胴：ハケメ	－	良好	橙 橙	
33	27号土坑 埋土中	須恵器坏	ほぼ完形	白色粒	14.1	5.5	5.0	口～底：回転ナデ	口～底：回転ナデ	回転糸切り	良好	灰白 灰白	重量 (133.7g)
34	27号土坑 埋土中	須恵器坏	口縁部片	砂粒	－	－	－	口：回転ナデ	口：回転ナデ	－	不良	灰白 灰白	
35	29号土坑 埋土中	須恵器甕	胴部片	白色粒	－	－	－	胴：回転ナデ→ ハケメ	胴：回転ナデ→ ケズリ	－	良好	黄灰 灰白	
36	29号土坑 埋土中	須恵器甕	胴部片	白色粒	－	－	－	胴：タタキ (押さえ)	胴：タタキ	－	良好	黄灰 褐灰	自然釉
37	30号土坑 埋土中	土師器甕	胴部片	砂粒・長石	－	－	－	胴：ヨコナデ	胴：ヘラナデ→ ケズリ	－	やや 良好	浅黄橙 にぶい黄橙	
38	30号土坑 埋土中	土師器甕	胴部片	砂粒・長石	－	－	－	胴：ナデ	胴：ケズリ	－	やや 良好	灰黄褐 灰白	

石製品

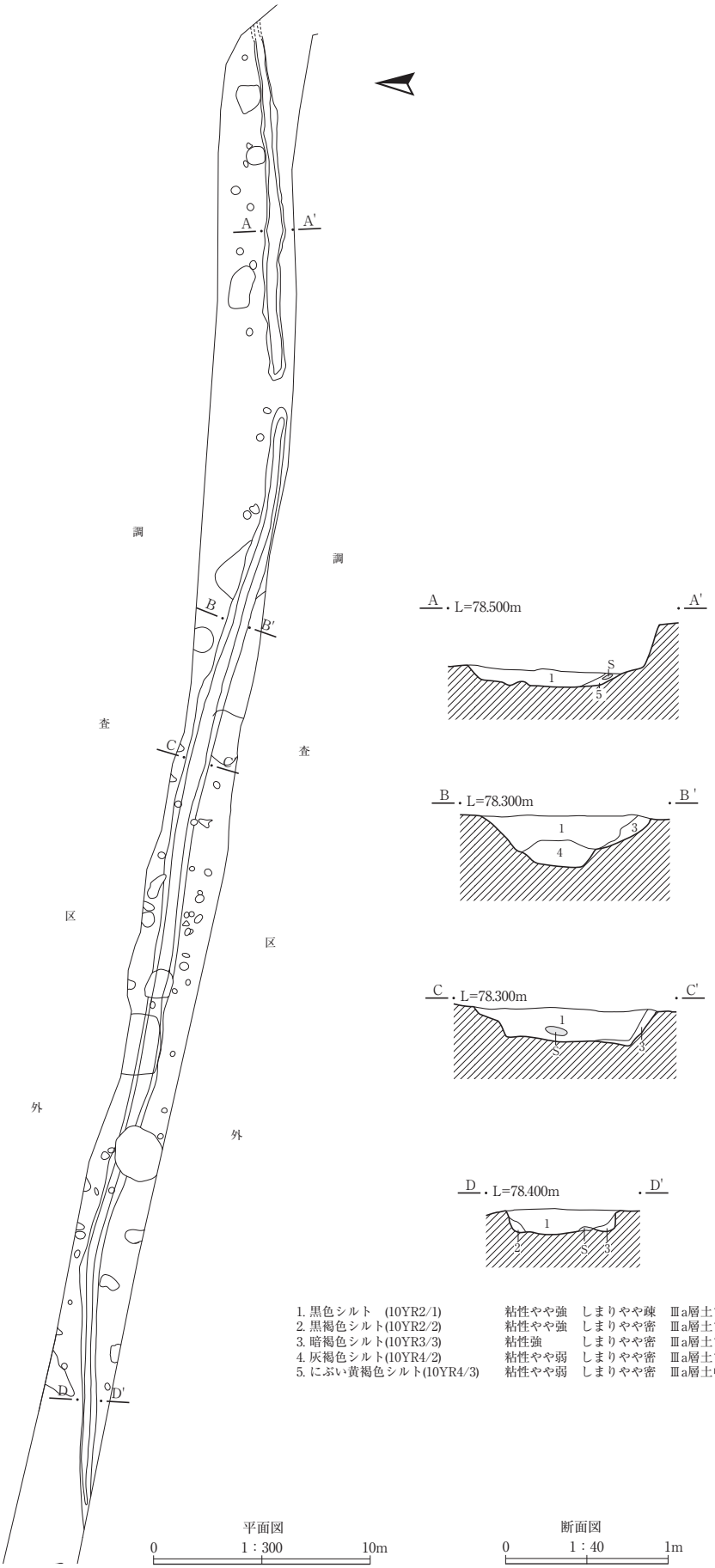
掲載番号	遺構名 層位	種別 器種	残存部位	時期	石材	産地	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
39	17号土坑 埋土上位	不明石器	両端欠損	近世	安山岩	奥羽山脈　新生代新第三紀	(208.00)	(134.45)	(53.29)	(1621.9)	片面中央に 円形のスス
40	17号土坑 埋土上位	不明石器	1/2 欠損	近世	安山岩	奥羽山脈　新生代新第三紀	159.00	(101.57)	45.40	(1399.1)	被熱痕あり
41	17号土坑 埋土上位	不明石器	端部欠損	近世	凝灰岩	奥羽山脈　新生代新第三紀	112.51	108.39	74.17	(1327.5)	敲打痕あり
42	17号土坑 埋土中	不明石器	1/2 欠損	近世	凝灰岩	奥羽山脈　新生代新第三紀	(109.89)	(90.48)	(100.72)	(1165.5)	敲打による 剥離
43	17号土坑 埋土上位	不明石器	完形	近世	安山岩	奥羽山脈　新生代新第三紀	126.07	99.65	75.79	110.3	磨痕あり
44	17号土坑 埋土上位	不明石器	端部欠損	近世	安山岩	奥羽山脈　新生代新第三紀	253.00	(101.39)	69.70	(2360.0)	被熱痕あり
45	17号土坑 埋土上位	不明石器	体部片	近世	デイサイト	奥羽山脈　新生代新第三紀	(125.96)	(90.87)	72.51	(715.7)	被熱痕のみ
46	17号土坑 埋土上位	不明石器	剥離片	近世	安山岩	奥羽山脈　新生代新第三紀	(114.40)	(79.97)	(29.20)	(311.2)	被熱痕・敲打に よる剥離
47	17号土坑 埋土中	火打ち石	完形	近世	凝灰岩	不明　　中生代？	44.38	48.50	28.62	68.1	

（６）溝

２号溝（第30・31図、写真図版９・10・27）

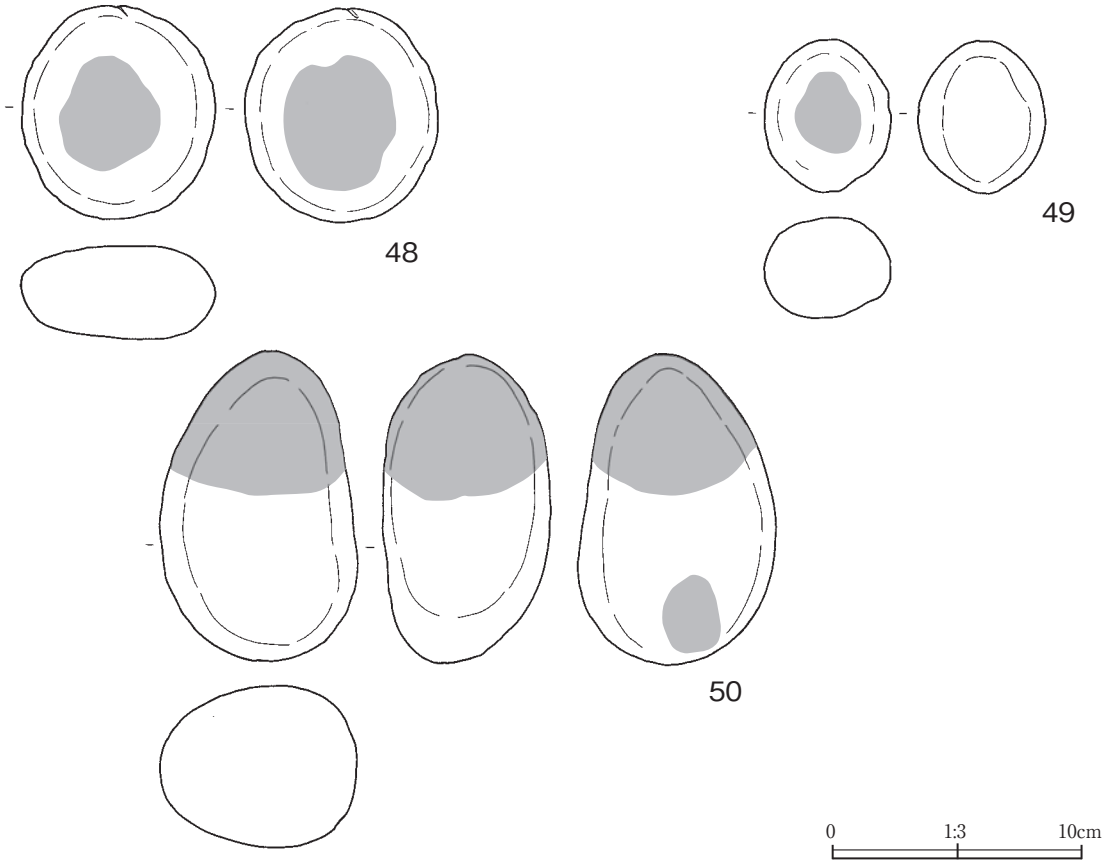
調査区北端中央から東側にかけて、ⅢＡ６e～ⅢA20ｇグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。両端は調査区外に及んでいる。またⅢA17ｇグリッド付近で一部途切れる部分が認められる。２・３・４号住居、17・18・19号土坑と重複し、本遺構は３・４号住居、17・18・19号土坑より古く、２号住居より新しい。若干蛇行しているが、ほぼ直線的に東西方向にのびており、規模は検出できた範囲で長さは67.8m、幅は70～100cmである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで10～30cmである。埋土は５層からなるが、概ね１層とした黒色シルト層を主体とする。堆積状況から自然堆積と推定する。

出土遺物は土師器・須恵器1535.3ｇで、比較的出土量は多い。ただし本遺構は古代の竪穴住居や土坑と重複しており、出土した土師器・須恵器も重複する遺構群から流れ込んだ可能性が高い。出土土器はいずれも小片であるので、図示していないが、石器３点が出土しており、そちらは図示した。48・49は磨石で、扁平な面に磨痕が認められ、また被熱痕も認められる。50は自然礫で、被熱痕のみが認められる。いずれも時代は不明で、縄文時代から古代までの広い範疇に含まれる。遺構の性格は


A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
調
査
区
外
A・L=78.500m・A'
B・L=78.300m・B'
C・L=78.300m・C'
D・L=78.400m・D'
1. 黒色シルト　(10YR2/1)　粘性やや強　しまりやや疎　Ⅲa層土ブロック微量、酸化鉄少量含む。
2. 黒褐色シルト(10YR2/2)　粘性やや強　しまりやや密　Ⅲa層土ブロック少量含む。
3. 暗褐色シルト(10YR3/3)　粘性強　しまりやや密　Ⅲa層土ブロック多量含む。
4. 灰褐色シルト(10YR4/2)　粘性やや弱　しまりやや密　Ⅲa層土ブロック少量含む。
5. にぶい黄褐色シルト(10YR4/3)　粘性やや弱　しまりやや密　Ⅲa層土中量含む。
平面図
0　1：300　10m
断面図
0　1：40　1m

第30図　B区2号溝

２号溝



第 31 図　Ｂ区２号溝出土遺物

第９表　Ｂ区２号溝出土遺物観察表

掲載番号	遺構名 層位	種別 器種	残存部位	時期	石材	産地	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
48	２号溝（Ⅲ A10 f）埋土中	磨石	完形	不明	デイサイト	奥羽山脈　新生代新第三紀	84.99	76.30	37.60	317.4	被熱痕あり
49	２号溝（Ⅲ A10 f）埋土中	磨石	完形	不明	安山岩	奥羽山脈　新生代新第三紀	60.40	50.54	40.29	129.3	被熱痕あり
50	２号溝（Ⅲ A14 f）埋土中	不明石器	完形	不明	凝灰岩	奥羽山脈　新生代新第三紀	121.85	76.50	65.29	886.9	磨痕・被熱痕あり

不明である。時期については、重複する遺構群の中で、古代に比定される遺構よりは新しく、近世に比定される遺構よりは古いため、古代～近世の範疇に収まるものと考える。

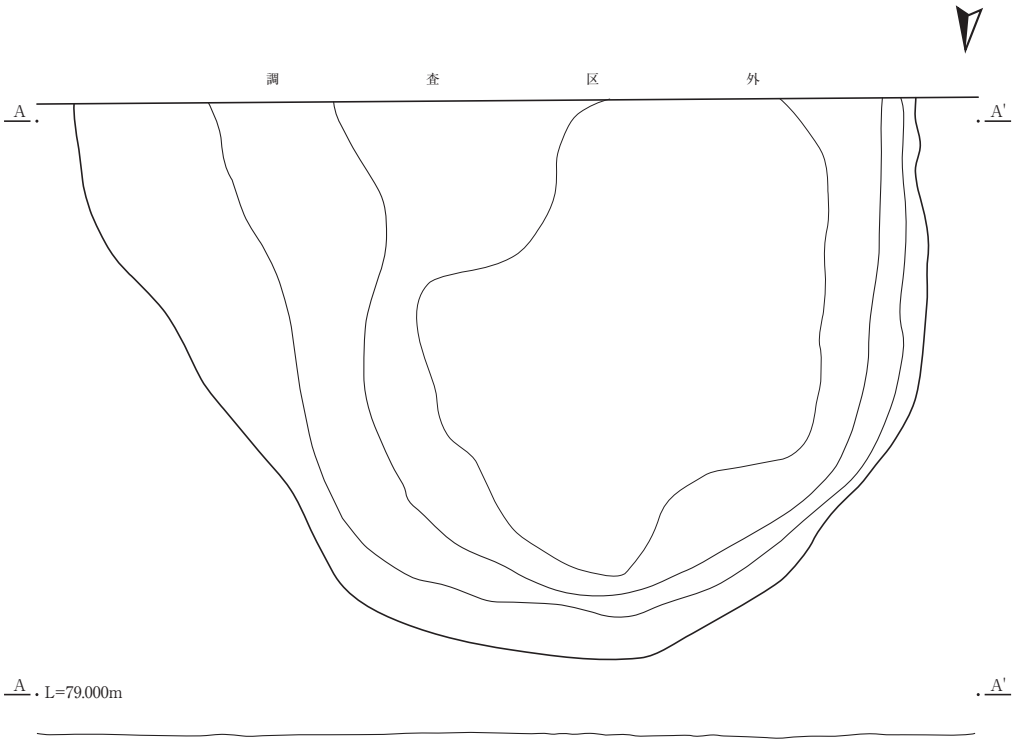
（7）性格不明遺構

１号性格不明遺構（第32・33図、写真図版19・29）

調査区南端やや西側、ⅢA14ｑグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。非常に大型の遺構であるが、平面・断面ともに形態がいびつで、埋土の堆積状況も他の遺構の様相とは異なっている。そこで本遺構は土坑などの他の遺構とは区別して性格不明遺構として扱うこととした。なお南側の一部は調査区外に及んでいる。

平面形はいびつな楕円形である。開口部径は426×（286）cmを測り、底面の形状は東側が概ね平坦で、西側はやや中央が窪んでいる。壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深62cmである。

埋土は15層からなる。黒色～黒褐色シルトを主体とするが、埋土下位から底面付近の層には酸化鉄

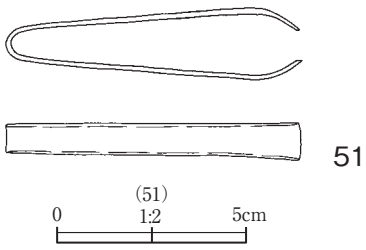


1. 黒褐色シルト(10YR3/1)	粘性強	しまり密	酸化鉄多量含む。
2. 黒褐色シルト(10YR3/1)	粘性やや強	しまりやや密	酸化鉄少量含む。
3. 黒色シルト(10YR1.7/1)	粘性強	しまり密	
4. 黒色シルト(10YR2/1)	粘性やや強	しまりやや密	酸化鉄少量含む。
5. 黒色シルト(10YR2/1)	粘性やや強	しまりやや密	灰黄褐色土(10YR6/2)ブロック少量含む。
6. 灰黄褐色シルト(10YR5/2)	粘性やや強	しまりやや密	酸化鉄少量含む。
7. 黒色シルト(10YR2/1)	粘性やや強	しまりやや密	
8. 灰黄褐色シルト(10YR6/2)	粘性やや強	しまりやや密	酸化鉄少量含む。5層類似。
9. 青灰色シルト(5BG6/1)	粘性やや強	しまりやや密	黒色土ブロック(10YR2/1)少量、酸化鉄少量含む。
10.黒色シルト(10YR2/1)	粘性やや強	しまりやや密	酸化鉄少量含む。
11.明黄褐色シルト(10YR7/6)	粘性やや強	しまりやや密	黒色土ブロック(10YR2/1)少量、Ⅲc層土ブロック少量含む。
12.黒色シルト(10YR1.7/1)	粘性強	しまり密	
13.黒色シルト(N1.5/0)	粘性強	しまり密	14層土ブロック少量、湿った植物少量含む。
14.青灰色シルト(5BG5/1)	粘性強	しまり密	グライ化した層。
15.灰オリーブ色シルト(7.5Y4/2)	粘性やや弱	しまりやや密	細礫混じり。

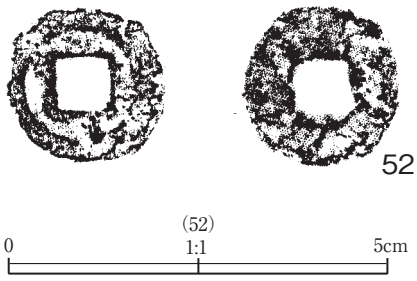
0　1：40　1m

第 32 図　B 区 1 号性格不明遺構

1 号性格不明遺構



Pit194



第 33 図　1 号性格不明遺構・柱穴出土遺物

第10表　Ｂ区１号性格不明遺構　鉄製品

掲載番号	遺構名・層位	種別	時期	残存部位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
51	１号性格不明遺構　埋土下位	毛抜きバサミ	近代以降	完形	7.8	1.9	1.0	12.8	

第11表　Ｂ区柱穴出土遺物　銭貨

掲載番号	遺構名・層位	銭貨名	材質	たて（mm）	よこ（mm）	厚さ（mm）	孔径（mm）	重量（g）	備考
52	Pit194　埋土中	無文	銅	21.26	20.96	1.61	7.18	1.67	近世か

が多く混入し、グライ化して変色している土層も認められるので、遺構底面付近は特に強い水気を帯びていたことが窺える。また堆積様相から自然堆積と推定する。

遺物は少なく、鉄製品１点（第33図51）のみである。51は毛抜きである。埋土下位から出土した。遺構の性格は不明。人為的に開口させたのであれば、何らかの利用目的があったと推測されるが、その根拠が乏しい。また何かの用途で構築された土坑状の大型の遺構が湧水などによる作用で、自然に崩落し原形が分からないほど変化したものの可能性もある。

時期は出土遺物から近世以降と判断した。

（８）柱　穴　群（第８～10・33図、写真図版29）

213個の柱穴を検出した。概ね調査区全体に分布している。特に２号掘立柱建物跡の位置する調査区北東端（２Ａ17ｂ～２Ａ19ｄ付近）で集中する傾向が見受けられる。ただしそれらの柱穴規模は径10～20cm、深さ５～30cmと一様ではなく、規則性が見出せない。従ってこれらの柱穴群は２号掘立柱建物跡と同様な、掘立柱建物跡や柵列等を構成する柱穴とは判断できなかった。また竪穴住居や土坑群の周囲にも柱穴は分布する。これらの遺構との関連が強いと考えるが、用途については定かではない。柱穴埋土は主に黒色～黒褐色シルトを主体とし、炭化物などの混入物が認められる、柱痕跡が見つかるものはほとんどなく、またいずれも自然堆積によって埋没したと考える。出土遺物を伴う柱穴は稀であり、流れ込みと考えられる土師器・須恵器の小片が出土する程度である。ただしPit194からは銭貨１枚が出土している（第33図52）。近世に比定されるものと考えるが、無名銭であり、年代は不明である。柱穴の時期については調査区北東端に分布するものは、Pit194出土の無名銭から考えて近世と考えるが竪穴住居周辺に分布するものは古代と考える。

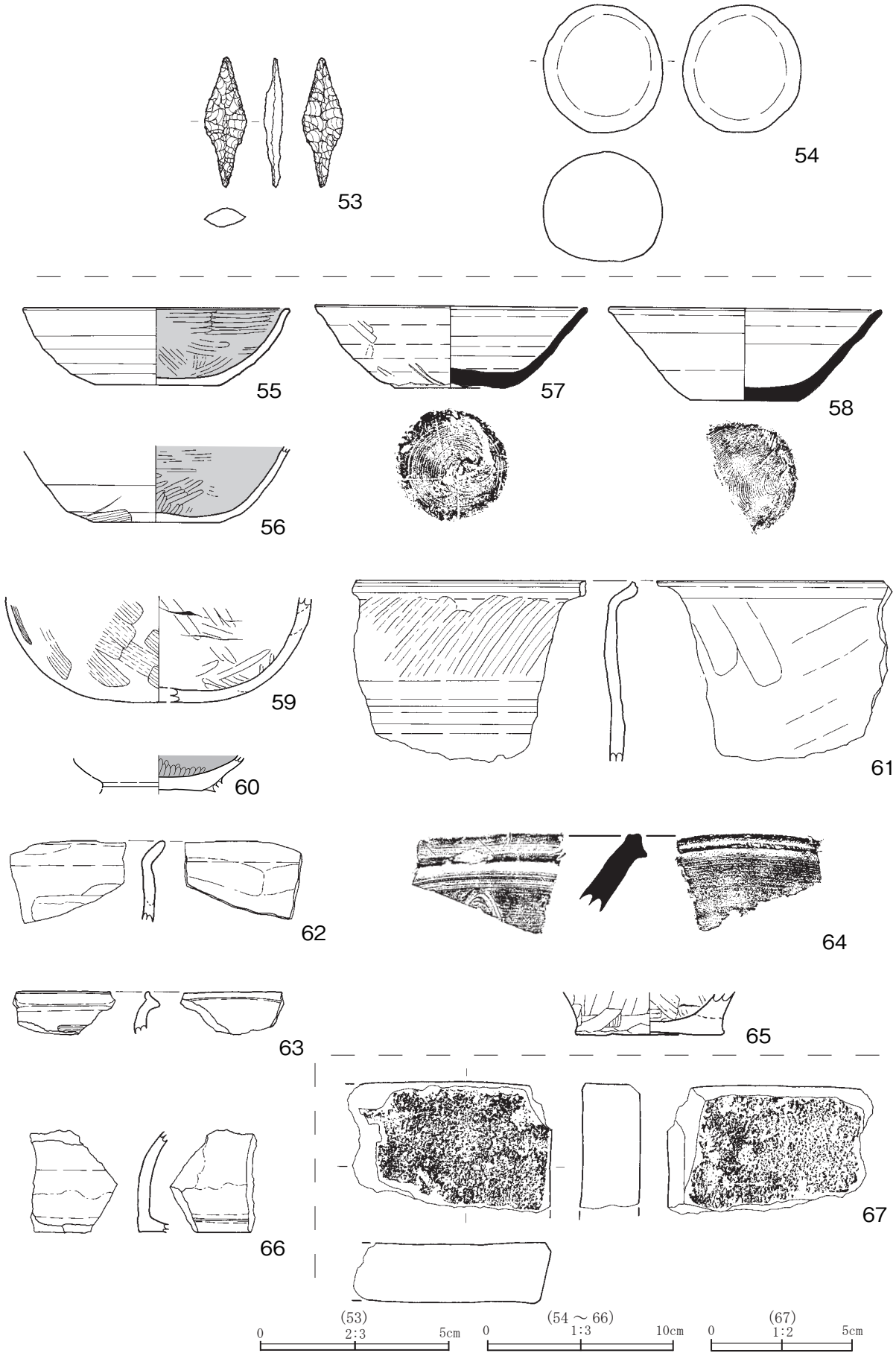
（９）遺構外出土遺物

調査区内の遺構外出土遺物（第10・34・35図、写真図版29・30）

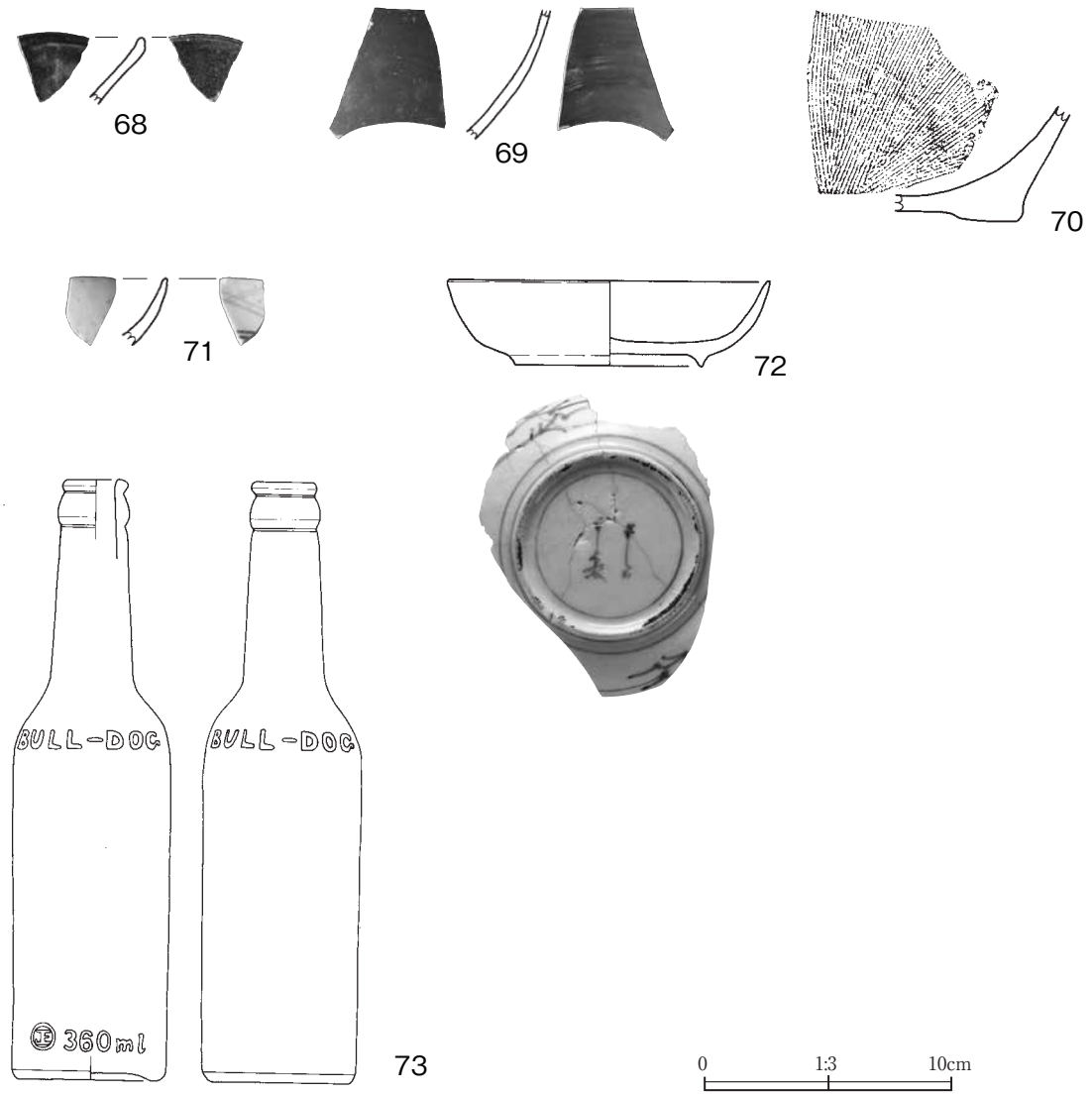
Ｂ区の遺構外からは縄文時代の石器２点、古代の土師器・須恵器4490.7ｇ分、灰釉陶器片１点、瓦１点、近世の陶磁器数点が出土し、また他に現代の陶磁器類とガラス瓶がみつかっている。

縄文時代の石器２点は調査区北側でみつかった。古代遺構面としたⅢａ層上面からの出土であり、また縄文時代の遺構も認められないので、これらの遺物は流れ込みによるものと推定する。２点とも図示した。53は石鏃で、細長い形態の有茎鏃である。54は磨石で球状の安山岩礫を素材とし、やや平坦な面に磨った痕跡が認められる。

土師器・須恵器は主に南東端の一角から出土している。この一帯は南に向かって緩やかに低くなっており、その下がった場所に土師器・須恵器が小片で多量に出土した。所謂「捨て場」とするには範囲が狭く、また出土遺物も土師器・須恵器の小片に限られているが、他の地点と比べると、遺物出土量は多めなので、「包含層」としてとらえることとした（第10図にアミカケで図示した範囲）。断面観察はしていないが、堆積土は水気を帯びた、黒褐色シルト層が５～15cm堆積し、その中に土師



第 34 図　B区遺構外出土遺物（1）



第 35 図　Ｂ区遺構外出土遺物（2）

器、須恵器の破片が混入する。遺物の分布状況は範囲全体に散在した状態で、集中する箇所までは認められない。遺物の多くは９世紀代に帰属すると考えられ、竪穴住居などの遺構群の時期とは異なっている。

10点図示した。第34図55～60は坏である。55・56は内黒の土師器、57・58は須恵器で全てロクロ整形を施している。59は丸底気味の坏で外面はハケメ調整を施す。60は高坏で、胴部下半のみしか残存しない。内面にミガキ調整を施す。61～63は土師器甕の口縁部片でいずれも破片で形態の分かるものはない。64は須恵器甕口縁部片で、こちらも破片のみで形態は定かではない。内外面にロクロ整形を施す。

第34図66は灰釉陶器の破片で、調査区東端ⅣＡ１ｏグリッドから出土している。壺の頸部片で内外面に緑色の釉がかかる。猿投産黒笹90号に類似し、９世紀後半に帰属するものと思われる。出土地点の周辺では、５ｍ南側に「包含層」があるが、他に該期に比定される遺構は認められないので調査区

第 12 表　B区遺構外出土遺物観察表　石器

掲載番号	種別	遺構名・層位	分類	残存部位	石材	年代・産地	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	備考
53	石鏃	調査区北側Ⅲ a 層	有茎鏃	完形	頁岩	奥羽山脈　新生代新第三紀	34.02	10.97	4.50	1.24	
54	磨石	調査区北側Ⅲ a 層	―	完形	安山岩	奥羽山脈　新生代新第三紀	68.53	63.74	58.17	209.00	

土師器・須恵器・灰釉陶器

掲載番号	遺構名 層位	種別 器種	部位	法量（cm）			調整技法			焼成	外面色調 内面色調	胎土	備考
				口径	底径	器高	内面	外面	底面				
55	包含層 Ⅱ層	土師器坏 (内黒)	口～底 1/4	(14.0)	(6.4)	4.1	口～底：ミガキ	口～胴：回転ナデ	回転糸切り→再調整	良好	浅黄橙 黒	砂粒	
56	出土地点不明 Ⅱ層	土師器坏 (内黒)	胴～底 1/4	－	(6.8)	(4.1)	胴：ミガキ	胴：回転ナデ→ハケメ	回転糸切り→ケズリ調整	良好	にぶい橙 黒	白色粒・長石	
57	包含層 Ⅱ層	須恵器坏	ほぼ完形	14.4	6.0	4.3	口～胴：回転ナデ	口～胴：回転ナデ→ケズリ	回転糸切り	良好	灰白 灰白	砂粒	重量（163.6g）
58	包含層 Ⅱ層	須恵器坏	口～底 2/3	(14.4)	5.8	4.9	口～胴：回転ナデ	口～胴：回転ナデ	回転糸切り	良好	灰 灰	砂粒	
59	包含層 Ⅱ層	土師器坏	胴～底 部片	－	(4.6)	(5.6)	胴～底：ミガキ	胴：ハケメ	－	やや不良	浅黄橙 にぶい黄橙	砂粒	
60	包含層 Ⅱ層	土師器高坏(内黒)	底部片	－	－	－	底：ミガキ	胴：回転ナデ？	回転糸切り→再調整	良好	にぶい黄橙黒	砂粒・長石	
61	包含層 Ⅱ層	土師器甕	口縁部片	－	－	－	口：回転ナデ→ヘラナデ	口：回転ナデ→ヘラケズリ	－	良好	灰白 灰白	砂粒	
62	出土地点不明 Ⅱ層	土師器甕	口縁部片	－	－	－	胴：ヘラナデ	胴：ヘラナデ	－	やや良好	暗灰黄 暗灰黄	砂粒・長石	
63	包含層 Ⅱ層	土師器甕	口縁部片	－	－	－	口：ヨコナデ	口：ハケメ	－	やや良好	にぶい黄橙 にぶい黄褐	砂粒・長石	
64	Ⅲ A12 g 周辺排土置き場	須恵器甕	口縁部片	－	－	－	口：回転ナデ	口：回転ナデ	－	良好	黄灰 黄灰	砂粒	
65	Ⅲ A12 g 周辺排土置き場	土師器甕	底部片	－	7.8	(2.3)	胴～底：ヘラケズリ	胴：ハケメ→ヘラナデ	ヘラケズリ	不良	にぶい黄橙 にぶい橙	砂粒	
66	Ⅳ A 1o Ⅱ層	灰釉陶器 壺	頸部片	－	－	－	頸：回転ナデ、灰釉	頸：回転ナデ、灰釉	－	良好	灰白 灰白	砂粒・黒色粒	猿投産 黒笹 90 号窯式 / 9 世紀後半

瓦

掲載番号	出土位置・層位	種別 器種	法量（cm）			焼成	色調	備考
			長さ	幅	厚さ			
67	Ⅱ A4d　Ⅱ層	瓦	7.3	4.3	2.1	やや良好	褐灰	

陶磁器

掲載番号	遺構名 層位	種別 器種	産地	部位	法量（cm）			焼成	胎土色調	年代	備考
					口径	底径	器高				
68	Ⅱ A15b ～Ⅲ A1b 周辺Ⅱ層	陶器蓋	不明	口縁部片	－	－	－	良好	灰色　白色粒	19 ～ 20 世紀	両面に鉄釉
69	Ⅱ A15b ～Ⅲ A1b 周辺Ⅱ層	陶器壺	不明	胴部片	－	－	－	良好	灰色	20 世紀	両面に錆釉？
70	Ⅲ A19p Ⅱ層	陶器擂鉢	不明	底部片	－	－	－	良好	褐色	20 世紀	外面に茶色の釉
71	Ⅱ A15b ～Ⅲ A1b 周辺Ⅱ層	磁器皿	肥前	口縁部片	－	－	－	良好	白色	18 世紀後半	
72	Ⅱ A15b ～Ⅲ A1b 周辺Ⅱ層	磁器皿	肥前	口縁部 3/4 欠損	(12.8)	7.4	3.4	良好	白色　黒粒	18 世紀	

ガラス製品

掲載番号	遺構名 層位	種別 器種	時期	残存部位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
73	Ⅲ A19p Ⅰ層	瓶	近代～現代	完形	23.9	6.2	6.2	329.6	「BULL-DOG」　丸正 360ml

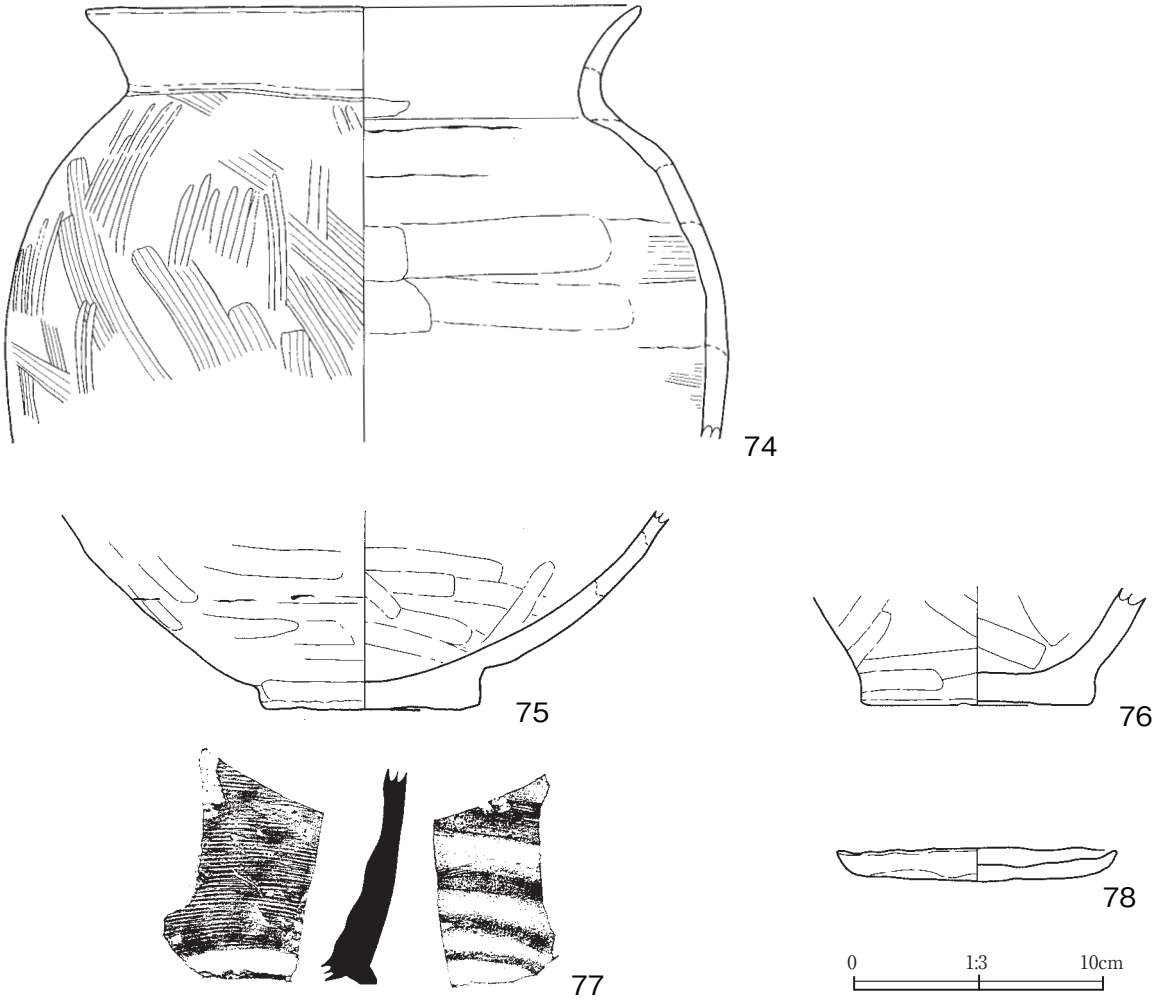
外に存在すると思われる別の集落域より廃棄されたものと考える。67は瓦の破片で、全体の1/4程度しか残存していない。調査区北側の１号住居の近くから見つかったこともあり、古代に比定されると推察する。瓦は表面に布目は残らず、また反りも大きくない。

陶磁器は調査区南端に集中する傾向が見受けられる。ほとんどが破片であるが、72のように形態が復元できたものも見つかっている。71・72は肥前産の磁器皿で18世紀代に帰属するが、その他は在地不明で時期は19～20世紀代に帰属すると考える。

このほかに現代のガラス製品が１点出土している。73は瓶で透明色。「BULL-DOG」・「360ｍｌ」・丸に「正」の３つの印字がある。

調査区外表採資料（第36図、写真図版30）

調査中、Ｂ区より南側の調査区外で第36図に図示した土師器４点分を表採した。調査区外から出土した遺物であり、本来掲載する必要のない資料ではあるが、資料は残りが良く、古代の遺構・遺物が調査区外にどのように広がるか考える上で、掲載する価値があると考え、図示することとした。74・75は胴張りの土師器甕で同一個体の可能性が高いが、胴部下半が一巡り欠損する。76は甕の底部片である。77は須恵器甕の底部片、78はミニチュア土器で皿状の形態である。



第 36 図　Ｂ区周辺調査区外出土遺物

第 13 表　Ｂ区周辺調査区外出土遺物観察表

掲載番号	出土地点	種別器種	部位	胎土	法量（cm）			調整技法			焼成	外面色調 内面色調	備考
					口径	底径	器高	内面	外面	底面			
74	調査区外	土師器甕	口縁部、胴下半欠損	砂粒	(22.0)	－	(17.2)	胴：ハケメ、ヘラナデ	胴：ハケメ→ミガキ	－	やや不良	にぶい橙 にぶい黄橙	
75	調査区外	土師器甕	胴部～底部	砂粒	－	7.9	(7.8)	胴：ヘラナデ	胴：ヘラナデ	ナデ？	良好	浅黄橙 にぶい黄橙	輪積み痕あり
76	調査区外	土師器甕	底部片	砂粒	－	8.8	(4.7)	胴～底：ヘラナデ	胴：ヘラナデ	ナデ？	やや良好	灰白 にぶい黄橙	
77	調査区外	須恵器甕	胴部～底部片	砂粒・長石	－	－	－	胴：回転ナデ	胴：回転ナデ→ハケメ	回転糸切り	やや不良	灰 黄灰	
78	調査区外	ミニチュア	口～底 1/2	砂粒・長石	(11.0)	(6.0)	1.3	手捏ね	手捏ね	手捏ね	良好	橙 橙	

4　C　　区

（1）概　　要（第37図、写真図版２・３）

調査域のほぼ中央、ⅢＢ８ｄ～ⅢB10ｇグリッドに収まる。調査区は17×８mの「L」字状を呈する。水路分のみの調査のため、調査区の幅自体は2mに満たない。調査前は水田であった。

基本土層Ⅰ層下はⅢ層に達しており、Ⅱ層は認められない。Ⅲ層はB区同様、細かいシルト層であり、「Ⅲa層」とした。

調査区のうち、南北方向の15.2×２m（30.4㎡分）は確認調査区に相当し、検出した遺構は半裁し、土層を確認するに留めた。確認調査区の検出遺構は柱穴12個である。半裁時、遺物は出土していない。柱穴は深さ10～20cmと、比較的浅い。柱痕跡を残すものは認められない。埋土の様相は黒色～黒褐色シルトを主体とし、本調査範囲からみつかった柱穴群と類似している。

残りの北側調査区８×２m（16㎡分）は本調査範囲に相当する。この範囲からの検出遺構は土坑１基、柱穴10個である。遺構群の時期は土坑（36号土坑）の共伴遺物の時期から奈良時代（８世紀代）に帰属すると推定する。

（2）土　　坑

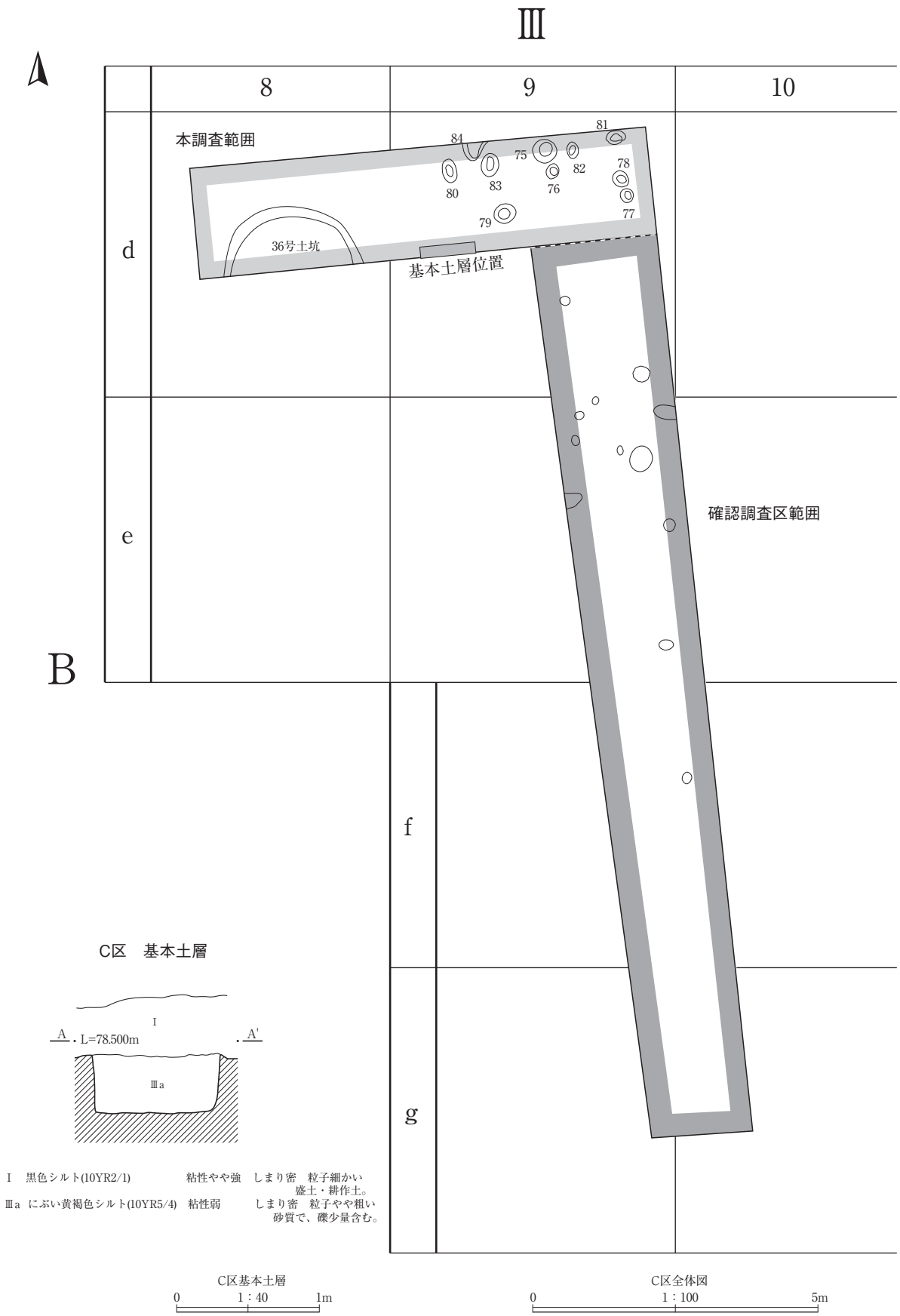
36号土坑（第38～40図、写真図版20・30・31）

調査区北端、ⅢＢ８ｄグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。南側の一部は調査区外に及んでいる。調査当初は検出時のプラン形態と規模から近世の井戸跡と考えていたが、非常に浅く、また埋土上位から多量の土師器・須恵器が出土したので、古代の土坑とした。

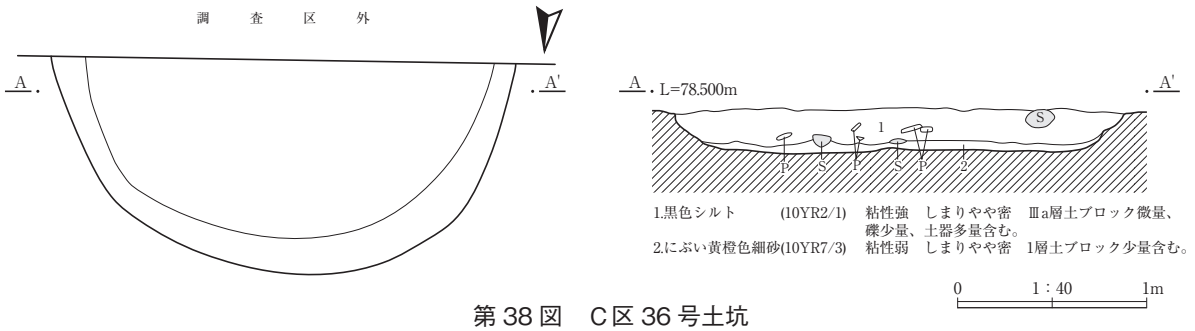
平面形は不整な円形と推定する。開口部径は237×（110）cmである。底面は概ね平坦で、壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深21cmである。

埋土は２層からなる。黒色シルトを主体とし、底面付近ににぶい黄橙色細砂が層的に偏在する（２層）。また１層のほぼ中央埋土上位から多量の土師器・須恵器が出土しており、それらの様相から人為堆積と推定する。

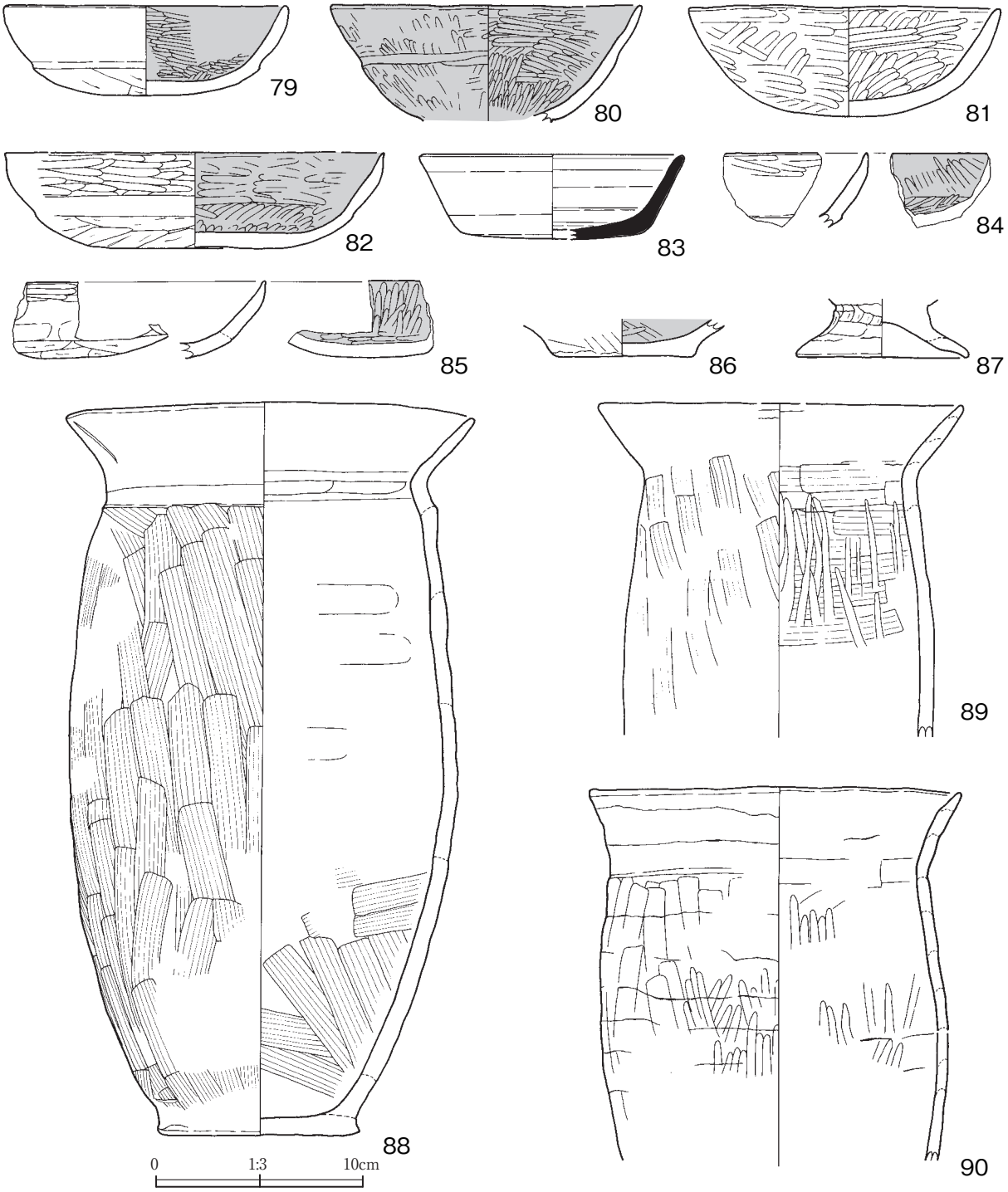
出土遺物は土師器・須恵器6304.1g分である。検出遺構の中では最も出土量が多く、また形態が復元できたものも多い。20点図示した。79～86は坏で、83は須恵器、それ以外は土師器である。内面黒色処理したもの（79・80・82・84・85）には胴部に段がつく傾向が見受けられる。ただし81・82は段がやや不明瞭で外面にミガキを施した後、胴部中ばに沈線のような痕をつけ、段としている。81は内外面にミガキが施されており、元々内面に黒色処理されていた可能性がある。形態は内湾気味に立ち上がり、胴部には段がない。83は須恵器坏で１/３程度しか残在していないが、やや外へと開く形態である。87は高坏の台部片である。台部の外面はヘラケズリを施し整形する。また底面の先端が内面から尖るように整形されている。86は底面の破片で形態から鉢であろうと推察する。内面黒色処理で、内面にミガキの痕跡が見受けられる。88～97は甕で、いずれも土師器である。88～91は口縁部から胴部まで復元できた資料である。寸胴の甕で口縁部が大きく開く特徴をもつ。88・90は頸部に明瞭な段がつく。89・91は段らしき痕跡が認められるが、胴部に施したハケメやヘラナデ調整によって消されている。また89～91は輪積み痕が見受けられる。特に90は顕著である。92・93は土師器甕の頸部片で、92はわずかに段が認められ、93は頸部の段は認められない。95～97は甕の底部片で、底面から直線的に開く形態（95）、底面に段がつく形態（96）、内湾気味に立ち上がる形態（97）と様々であ


Ⅲ
8
9
10
d
e
f
g
B
本調査範囲
84
81
75
82
78
80
83
76
77
79
36号土坑
基本土層位置
確認調査区範囲
C区　基本土層
A
L=78.500m
A'
Ⅰ
Ⅲa
Ⅰ　黒色シルト(10YR2/1)　粘性やや強　しまり密　粒子細かい
盛土・耕作土。
Ⅲa　にぶい黄褐色シルト(10YR5/4)　粘性弱　しまり密　粒子やや粗い
砂質で、礫少量含む。
C区基本土層
0　1：40　1m
C区全体図
0　1：100　5m

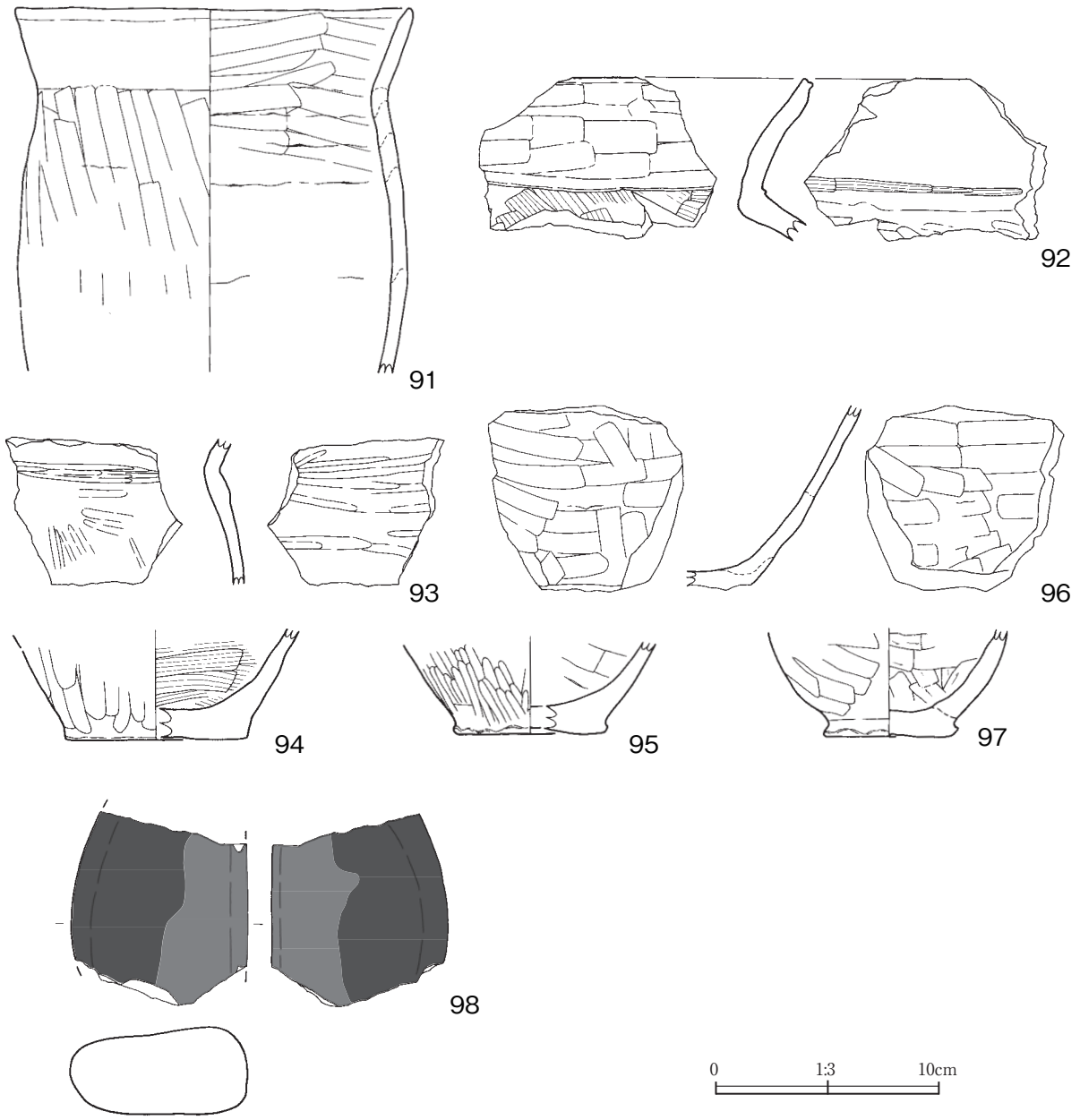
第 37 図　C区全体図



第 38 図　C区 36 号土坑



第 39 図　C区 36 号土坑出土遺物（1）



第 40 図　C 区 36 号土坑出土遺物（2）

る。

他に石製品が出土している。１点図示した。第40図98は扁平な礫を素材とし、両面は被熱により赤色化していた。また両端が欠損している。被熱による破損の可能性もあるが、定かではない。

第14表　C区土坑出土遺物観察表　土師器・須恵器

掲載番号	遺構名層位	種別器種	残存部位	胎土	法量（cm）			調整技法			焼成	外面色調内面色調	備考
					口径	底径	器高	内面	外面	底面			
79	36号土坑埋土上位	土師器坏（内黒）	口～底1/4	砂粒・長石	(13.2)	(4.0)	4.3	口～底：ミガキ	口～胴：ヨコナデ	ヘラケズリ	やや不良	にぶい黄橙黒	
80	36号土坑埋土上位	土師器坏（内外黒）	底面欠損	白色粒・長石	14.8	－	(5.6)	口～胴：ミガキ	口～胴：ケズリ→ミガキ	－	不良	灰黄褐黒	胴部に段有り外面の黒やや剥げ
81	36号土坑埋土下位	土師器坏	口～底2/3	砂粒・長石	14.7	3.0	5.2	胴：ミガキ	胴：ミガキ？	ケズリ	良好	灰白浅黄橙	摩滅激しい
82	36号土坑埋土上位	土師器坏（内黒）	口～底1/3	砂粒・白色粒	(18.0)	(8.0)	4.6	口～底：ミガキ	口～胴：ミガキ→ヨコナデ	ヘラケズリ	やや不良	褐黒	
83	36号土坑埋土上位	須恵器坏	口～底1/3	砂粒	(12.4)	(8.4)	4.0	口～底：回転ナデ	口～胴：回転ナデ	再調整？	良好	灰白灰白	
84	36号土坑埋土上位	土師器坏（内黒）	口縁部片	砂粒・白色粒	－	－	－	口：ミガキ	口：ヨコナデ	－	不良	にぶい黄橙黒	胴部に段有り
85	36号土坑埋土上位	土師器坏（内黒）	底部片	白色粒・長石	－	6.2	(1.8)	胴～底：ミガキ	胴：ヘラナデ	なし	やや良好	浅黄橙褐灰	
85	36号土坑埋土下位	土師器坏（内黒）	口縁部片	砂粒・白色粒	－	－	－	口～胴：ミガキ	口：ミガキ胴：ケズリ	－	不良	にぶい黄橙黒	
87	36号土坑埋土上位	土師器高坏（内黒）	台部片	砂粒・白色粒	－	(8.2)	(3.1)	－	台：ヘラナデ／ヨコナデ→ヘラケズリ	ヨコナデ	やや不良	にぶい黄橙にぶい黄橙	
88	36号土坑埋土上位	土師器甕	口縁部欠損	砂粒・長石	20.0	9.4	34.4	口：ヨコナデ　胴：ハケメ→ヘラナデ	口：ヨコナデ胴：ハケメ	なし	やや不良	にぶい黄橙にぶい黄橙	重量（1574.5g）
89	36号土坑埋土上位	土師器甕	口縁～胴1/3	砂粒・白色粒	(17.2)	－	(15.9)	口：ヨコナデ？胴：ハケメ→ミガキ	胴：ハケメ	－	良好	浅黄橙にぶい黄橙	
90	36号土坑埋土上位	土師器甕	口縁～胴部	砂粒・長石	17.6	－	(17.7)	口：ヨコナデ胴：ヘラナデ→ミガキ	口：ヨコナデ胴：ミガキ	－	やや良好	にぶい褐にぶい黄橙	輪積み痕明瞭
91	36号土坑埋土上位	土師器甕	口縁～胴部	砂粒・長石	17.4	－	(16.1)	口～胴：ヘラナデ	口：ヨコナデ胴：ヘラナデ	－	やや良好	にぶい黄橙にぶい黄橙	
92	36号土坑埋土上位	土師器甕	口縁部片	白色粒・長石	－	－	－	口：ハケメ→ヨコナデ	口：ヘラナデ胴：ハケメ	－	やや良好	にぶい黄橙にぶい黄橙	
93	36号土坑埋土上位	土師器甕	胴部片	白色粒・長石	－	－	－	胴：ヨコミガキ	口：ヨコナデ胴：ミガキ	－	やや良好	にぶい黄橙にぶい黄橙	
94	36号土坑埋土上位	土師器甕	底部片	砂粒・長石	－	(8.0)	(4.8)	胴～底：ハケメ	胴：ヘラナデ	なし	やや良好	にぶい黄橙明黄褐	
95	36号土坑埋土上位	土師器甕	底部片	白色粒・長石	－	(6.6)	(4.1)	胴～底：ヘラナデ	胴：ヨコナデ→ミガキ	なし	不良	明黄褐にぶい黄橙	外面にスス
96	36号土坑埋土下位	土師器甕	胴部片	砂粒・長石	－	－	－	胴：ヘラナデ	胴：ヘラナデ	－	不良	灰白灰黄	
97	36号土坑埋土上位	土師器甕	底部片	砂粒	－	5.9	(4.9)	胴～底：ヘラケズリ	胴：ハケメ	なし	やや良好	にぶい黄橙にぶい黄橙	

石製品

掲載番号	遺構名層位	種別器種	残存部位	石材	産地	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	備考
98	36号土坑埋土下位	不明石器	両端欠損	デイサイト	奥羽山脈　新生代新第三紀	(75.71)	77.83	35.39	(341.8)	両面に被熱痕が認められる

（3）柱　穴　群（第37図）

10個検出した。調査区北側ⅢＢ９dグリッド付近に集中する傾向が見受けられる。

柱穴の規模は径20cm前後に収まるが深さは一様ではない。埋土は黒色～黒褐色シルトを主体とし、埋土中から遺物は出土していない。

分布状態は不規則で、また36号土坑と若干離れているので、これら柱穴群の性格は不明であり、建物や柵列を構成する柱穴ではないと推測する。また出土遺物がなく、時期は不明。36号土坑の時期から考えれば古代だが、隣接するＢ区南端では近世の遺構（１号性格不明遺構・33号土坑）も分布するので、ここでは古代～近世とする。

5　D　　区

（1）概　　要（第41図、写真図版2）

調査域のほぼ中央、ⅡB18ｊ～ⅢB10ｊグリッドの範囲に収まる。水路幅分のみのため、60×2ｍの細長い調査区である。調査前は水田であった。

削平が激しく、Ⅰ層下は砂礫層であるⅣ層に達しており、Ⅱ・Ⅲ層は消失していた。したがって本来の遺構検出面（Ⅲ層上面）はもう少し高い位置にあったものと推測する。したがって遺構はⅣ層上面で検出した。

検出した遺構は土坑2基である。どちらからも遺物は出土しておらず、時期は不明である。周辺の調査区から検出した遺構の時期から古代～近世の範疇に収まると推測する。

（2）土　　坑

37号土坑（第42図、写真図版20）

調査区中央、ⅢＢ５ｋグリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出した。北側の一部は調査区外に及んでいる。

平面形は楕円形である。開口部径は201×（88）cmである。底面は西側が大きく窪んでおり、壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深48cmである。

埋土は1層で黒色シルトを主体する。1層のみであるが、Ⅳ層中に含まれる礫が多量に混入しており、自然堆積と推定する。

遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。

時期判断できる根拠はないが、隣接するB・C区の遺構の時期から考えて、古代～近世の範疇に含まれる。

38号土坑（第42図、写真図版20）

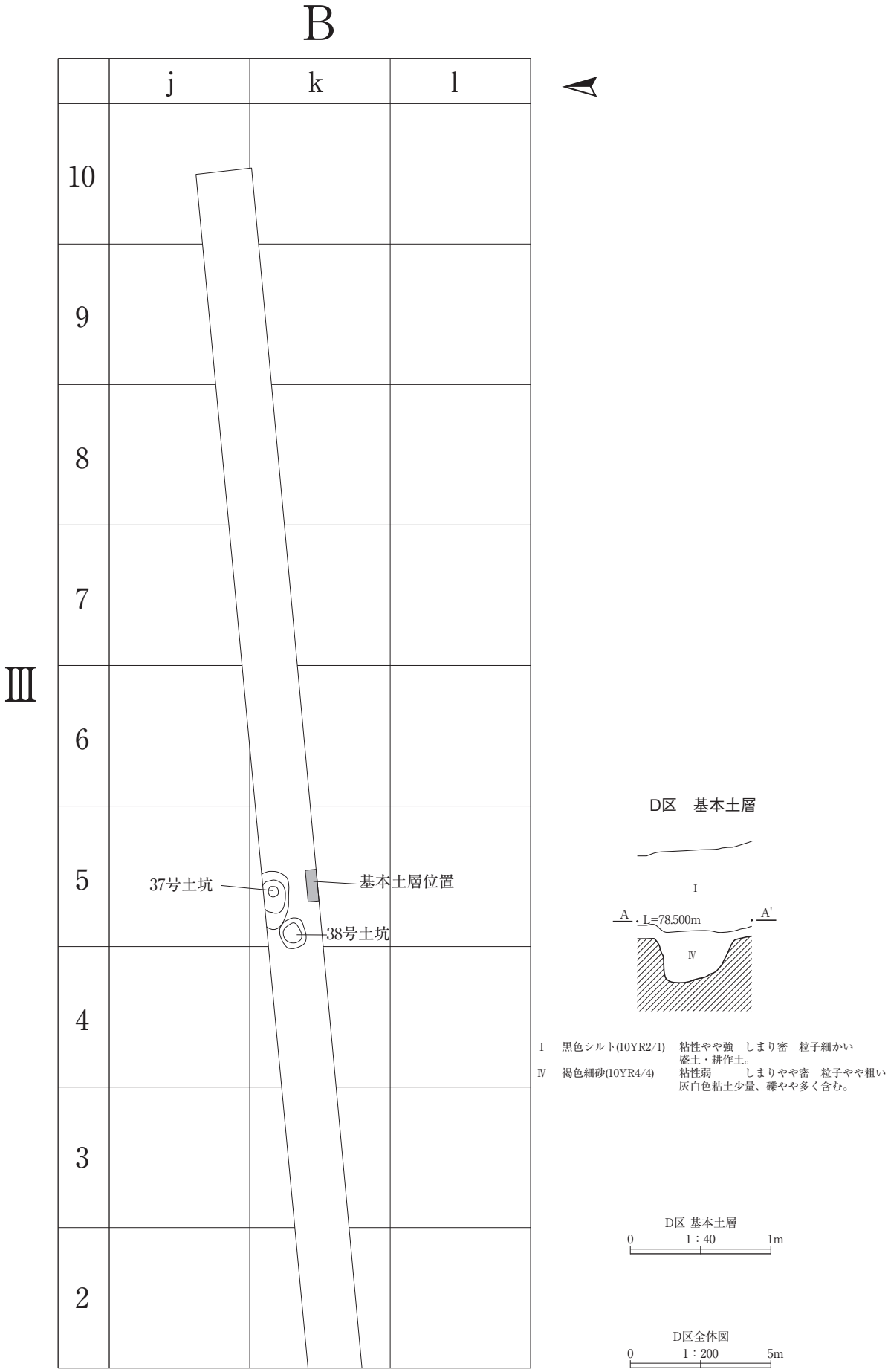
調査区中央、ⅢＢ５ｋグリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出した。

平面形は不整な楕円形である。開口部径は101×89cmである。底面はやや丸みを帯び、壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深32cmである。

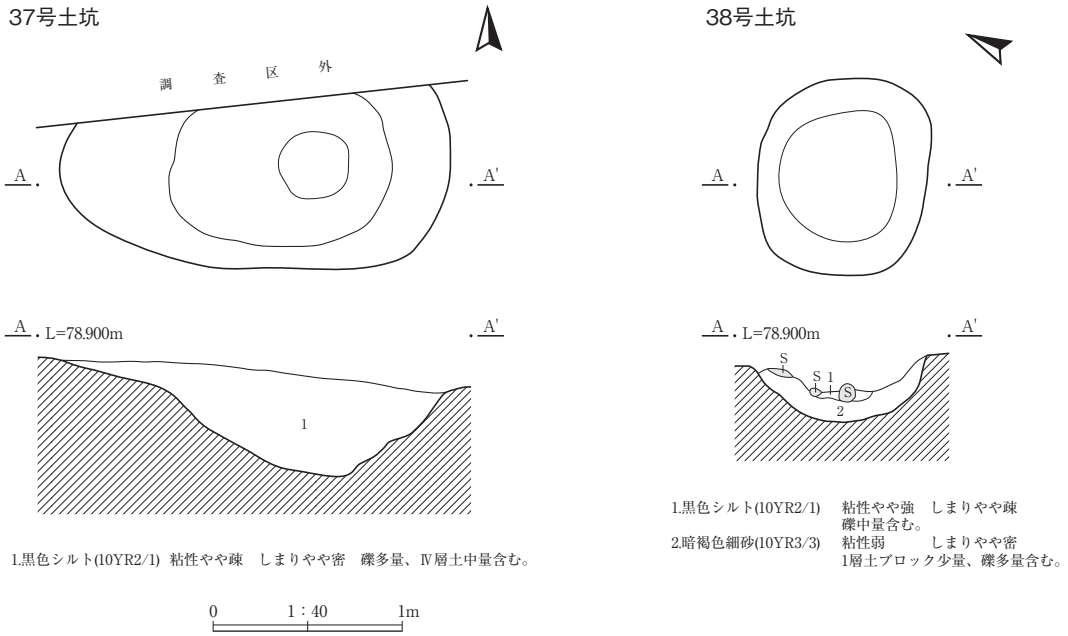
埋土は2層で埋土上位に黒色シルトが堆積するが、主体は暗褐色細砂であり、礫が多量に混入する。周辺のⅣ層が崩れ、埋没し2層が形成されたと考えられ、したがって自然堆積と推定する。

遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。

時期判断できる根拠はないが、隣接するB・C区の遺構の時期から考えて、古代～近世の範疇に含まれる。


B
j
k
l
10
9
8
7
6
5
4
3
2
Ⅲ
37号土坑
38号土坑
基本土層位置
D区　基本土層
I
A
L=78.500m
A'
Ⅳ
I　黒色シルト(10YR2/1)　粘性やや強　しまり密　粒子細かい
盛土・耕作土。
Ⅳ　褐色細砂(10YR4/4)　粘性弱　しまりやや密　粒子やや粗い
灰白色粘土少量、礫やや多く含む。
D区 基本土層
0　1：40　1m
D区全体図
0　1：200　5m

第 41 図　D区全体図



第 42 図　D区 37・38 号土坑

6　E　　区

（1）概　　要（第 43 図、写真図版２・３）

調査域の南端に位置し、ⅢC15ｃ～ⅢC10eグリッドに収まる。調査区は47×３mの細長い形状で調査前は水田であった。Ⅰ層は厚く堆積しており、水田の層（Ⅰa層）と床土層（Ⅰb層）に分層できる。Ⅱ層も残りが良く10～20cm堆積する。遺物の混入がわずかに認められるが、後述する通り、検出遺構より古い遺物ばかりなので、流れ込みの混入の可能性が高い。Ⅱ層とⅢ層との境は明瞭だが、他の調査区と異なり、起伏が認められる。またⅢ層は砂質であるⅢb層が堆積する。

検出した遺構は土坑９基、溝３条、柱穴19個である。遺構に共伴する遺物は近世陶磁器であり、したがって遺構群の時期も近世以降と推定する。

（2）土　　坑

39号土坑（第44図、写真図版20）

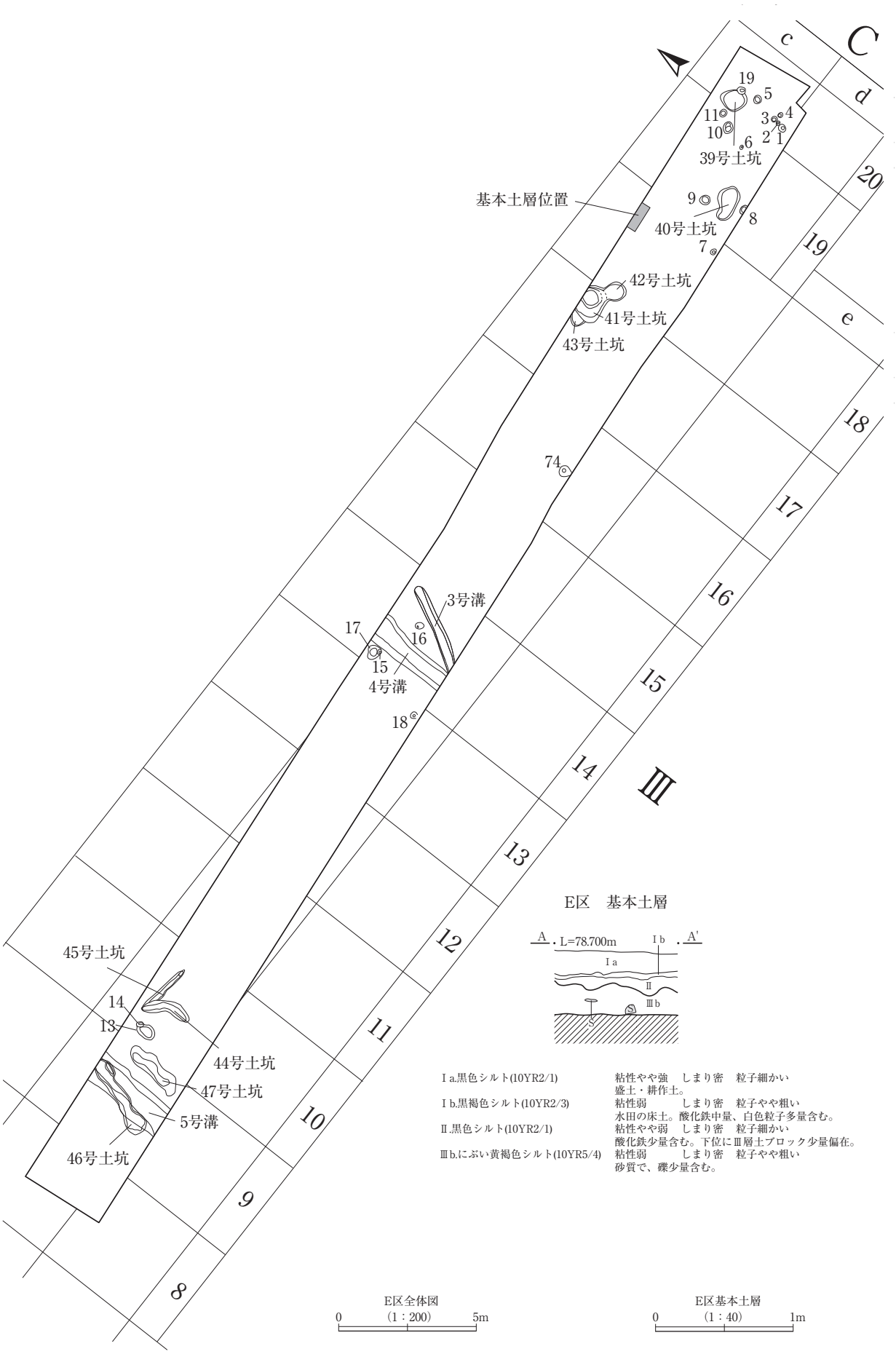
調査区東端、ⅢＣ20cグリッドに位置する。Ⅲb層上面で検出した。Pit19と重複し、本遺構の方が古い。平面形は楕円形である。開口部径は118×98cmである。底面は概ね平坦で、壁は直立気味である。確認面から底面まで最深23cmである。

埋土は２層からなり、黒褐色シルトを主体とし、礫が多く混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。

遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から近世以降と判断した。

40号土坑（第44図、写真図版21）

調査区東端、ⅢＣ19dグリッドに位置する。平面形は不整な楕円形で、開口部径は159×144cmである。底面は概ね平坦で、壁は大きく広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深18cmであ


c
C
d
e
19
5
11
3
4
10
2
1
6
39号土坑
20
基本土層位置
9
8
40号土坑
7
19
42号土坑
41号土坑
43号土坑
18
74
17
3号溝
16
17
16
15
4号溝
18
15
14
Ⅲ
13
E区　基本土層
A
L=78.700m
Ⅰb
A'
Ⅰa
Ⅱ
Ⅲb
12
45号土坑
14
13
11
44号土坑
47号土坑
5号溝
10
46号土坑
9
8
Ⅰa.黒色シルト(10YR2/1)　粘性やや強　しまり密　粒子細かい
盛土・耕作土。
Ⅰb.黒褐色シルト(10YR2/3)　粘性弱　しまり密　粒子やや粗い
水田の床土。酸化鉄中量、白色粒子多量含む。
Ⅱ.黒色シルト(10YR2/1)　粘性やや弱　しまり密　粒子細かい
酸化鉄少量含む。下位にⅢ層土ブロック少量偏在。
Ⅲb.にぶい黄褐色シルト(10YR5/4)　粘性弱　しまり密　粒子やや粗い
砂質で、礫少量含む。
E区全体図
0　(1：200)　5m
E区基本土層
0　(1：40)　1m

第43図　E区全体図

る。

埋土は１層で黒色シルトを主体とし、黄褐色細砂が混入する。単層であるが、細礫の混入などの堆積状況から自然堆積と推定する。

遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から近世以降と判断した。

41号土坑（第44図、写真図版21）

調査区中央、ⅢＣ７cグリッドに位置する。Ⅲb層上面で検出した。北側の一部は調査区外に及んでいる。また42号土坑と重複している。土層断面で、本遺構の方が新しいと推測する。平面形は不整な楕円形で、開口部径は166×（112）cmである。底面は概ね平坦で、壁は大きく広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深45cmである。

埋土は４層からなり、黒褐色～黒色シルトを主体とする。堆積状況から人為堆積と推定する。

遺物は出土していない。遺構の性格は不明であるが、壁面に直立気味に竹製と思われる部材の一部が貼りついていた。残りも悪く、また時期も不明であるため、遺物としては扱っていないが、桶や葛籠の類ではないかと推察する。そういった道具類を収納、あるいは廃棄する穴であった可能性が高い。時期は埋土の様相から近世以降と判断した。

42号土坑（第44図、写真図版21）

調査区東側、ⅢＣ18cグリッドに位置する。Ⅲb層上面で検出した。41号土坑と重複し、本遺構の方が古い。平面形は不整な楕円形で、開口部径は（110）×83cmである。底面は概ね平坦で、壁は直立気味である。確認面から底面まで最深35cmである。

埋土の様相を断面で確認していないが、黒色シルトを主体し、検出面から埋土上位にかけて多量の礫が混入しており、投げ込まれたものと推定する。この礫の堆積状況から人為堆積により埋没したと推定する。

遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から近世以降と判断した。

43号土坑（第44・45図、写真図版21・31）

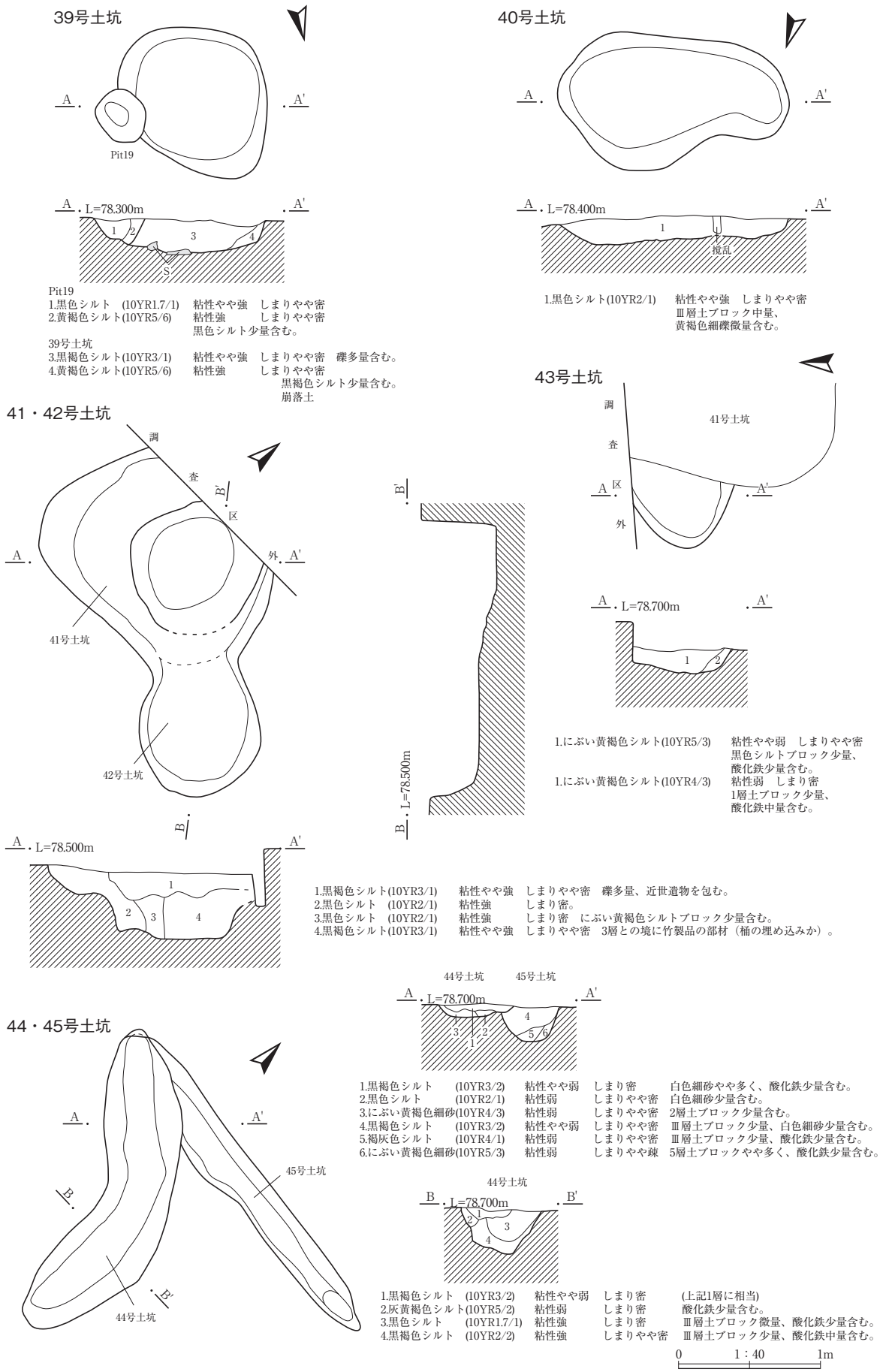
調査区東側、ⅢＣ17cグリッドに位置する。Ⅲb層上面で検出した。北側の一部は調査区外に及んでおり、また41号土坑と重複し、本遺構の方が古い。平面形は不整な楕円形で、開口部径は（76）×（52）cmである。底面は概ね平坦で、壁は大きく広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深16cmである。

埋土は２層からなるが、にぶい黄褐色シルトが主体であり、黒色シルトや酸化鉄が混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。

出土遺物は須恵器、陶磁器片、鉄製品である。須恵器（第45図99）は甕の胴部片で内外面にロクロ整形痕が認められる。流れ込みによる混入と判断した。陶磁器はいずれも小片で、形態が復元できたものはわずかである。第45図100・102・104は大堀相馬産の鉢類、土瓶である。時期的には18～19世紀でやや時期幅がある。109は肥前産の磁器皿で、18世紀後半の所産である。鉄製品（110）は煙管の吸い口で、完形である。表面に整形時に削った痕跡が残る。いずれの遺物も近世に帰属し、18世紀から19世紀の範疇に収まる。遺構の性格は不明である。時期は出土遺物から近世（18～19世紀）と判断した。

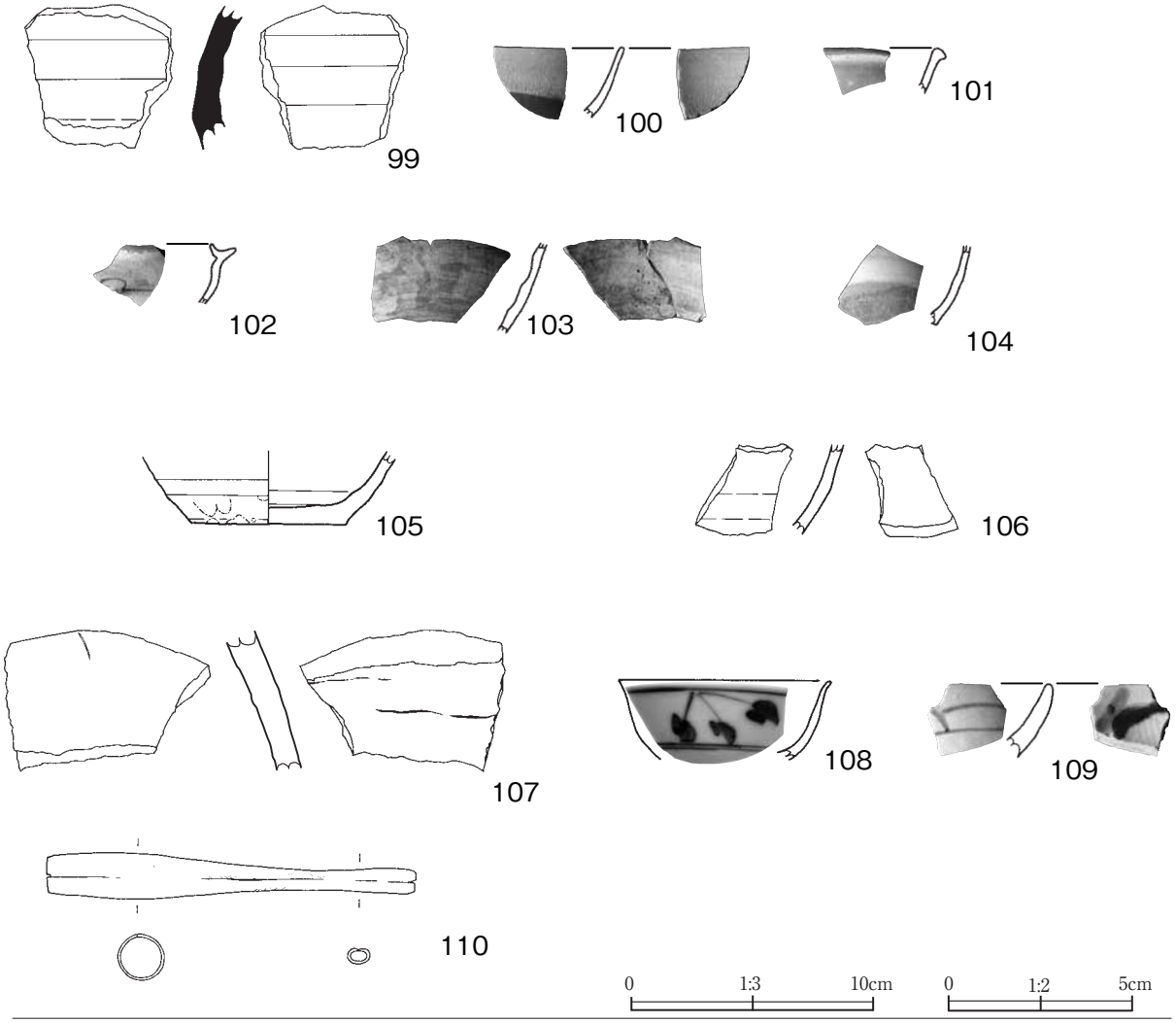
44号土坑（第44図、写真図版22）

調査区西側、ⅢＣ10dグリッドに位置する。Ⅲb層上面で検出した。45号土坑と重複し、本遺構の方が新しい。平面形は長楕円形でややいびつである。開口部径は210×56cmである。底面は概ね平坦であるが、北西から南東へと深くなる。壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで

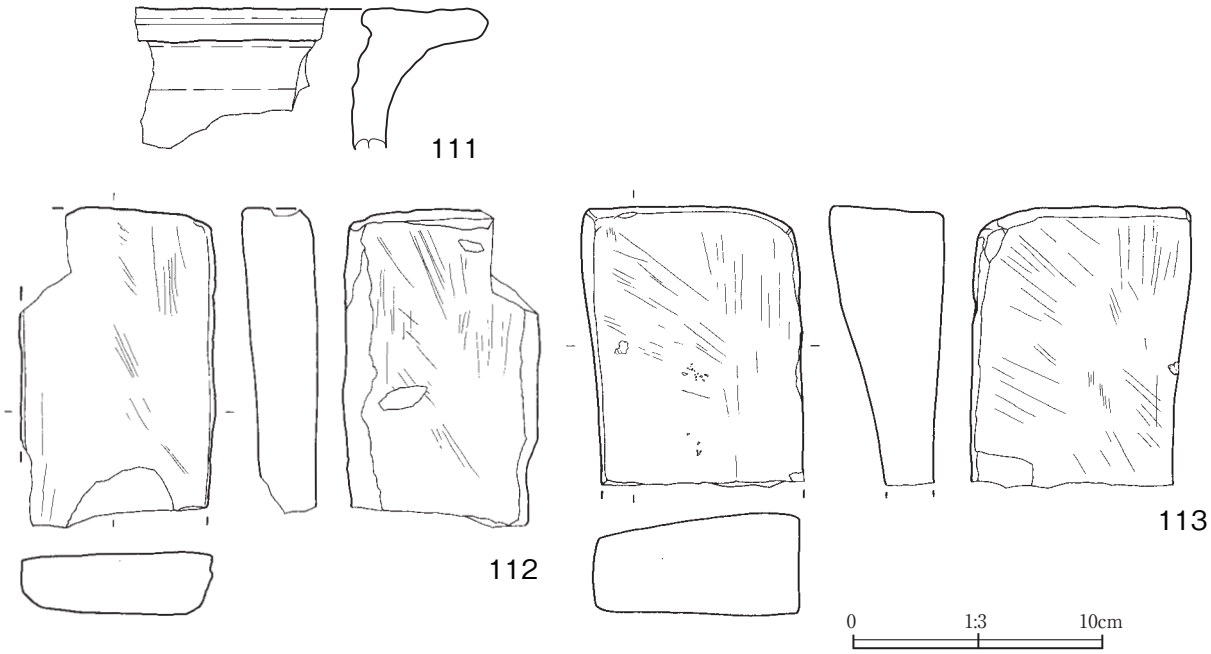


第44図　E区39～45号土坑

43 号土坑

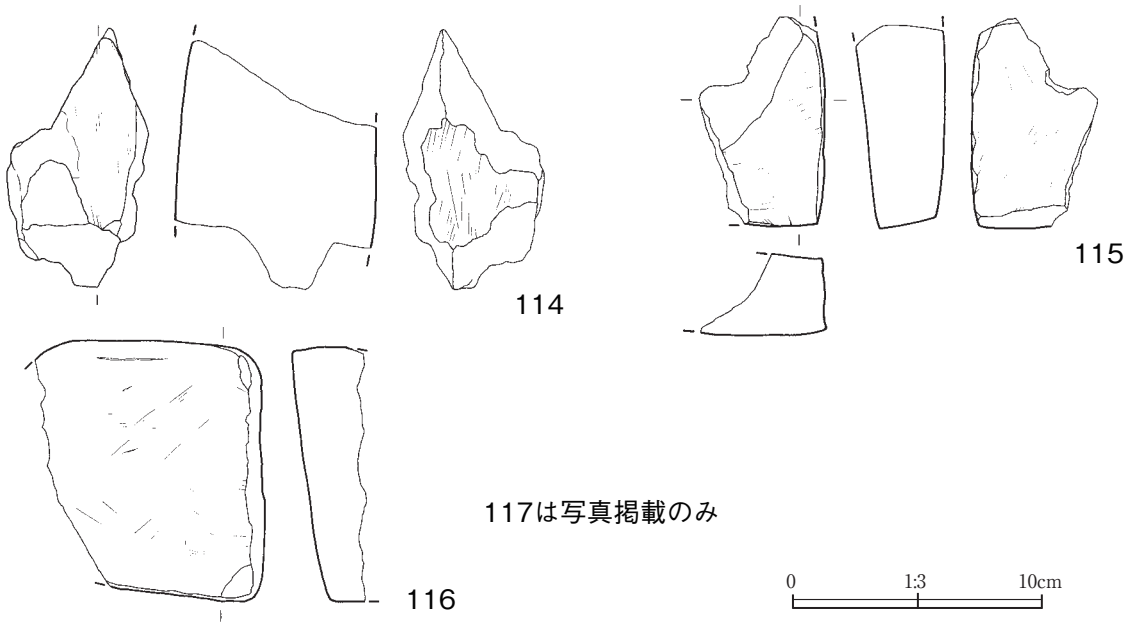


45 号土坑



第 45 図　E 区土坑出土遺物（1）

45号土坑



第46図　E区土坑出土遺物（2）

第15表　E区土坑出土遺物観察表

須恵器・陶磁器

掲載番号	遺構名 層位	種別 器種	残存部位	法量（cm） 口径	底径	器高	焼成	胎土	胎土色調	産地	年代	備考
99	43号土坑埋土中	須恵器甕	胴部片	－	－	－	良好		黄灰 黄灰	－	9～10 c	自然釉
100	43号土坑埋土中	陶器碗	口縁部片	－	－	－	良好		灰色	大堀相馬	18 c	両面に透明釉
101	43号土坑埋土中	陶器鉢類	口縁部片	－	－	－	良好		灰色	不明	19 c	
102	43号土坑埋土中	陶器土瓶	口縁部片	－	－	－	良好		灰色やや 赤味帯びる	大堀相馬	19 c	蓋受あり 外面に透明釉
103	43号土坑埋土中	陶器土瓶	胴部片	－	－	－	良好		灰白色	不明	19 c	外面にスス
104	43号土坑埋土中	陶器土瓶	胴～底部片	－	－	－	良好		灰色	大堀相馬	19 c	外面に透明釉
105	43号土坑埋土中	陶器壺類	底部片	－	(6.3)	(3.0)	良好		褐色	不明	19 c	両面に鉄釉
106	43号土坑埋土中	陶器壺類	胴部片	－	－	－	良好	砂粒・長石	暗褐 暗褐	不明	20 c	内外面に鉄釉
107	43号土坑埋土中	陶器壺類	胴部片	－	－	－	良好	砂粒	にぶい褐 灰褐	不明	20 c	
108	43号土坑埋土中	磁器染付碗	口～胴部1/4	(8.6)	－	(3.2)	良好	黒色粒	灰白色	不明	20 c	
109	45号土坑埋土中	磁器皿	口縁部片	－	－	－	良好		灰白色	肥前	18 c後半	
111	45号土坑埋土中	陶器甕	砂粒	－	－	－	良好		黄灰 暗褐	不明	19 c	自然釉？

鉄製品

掲載番号	遺構名　層位	種別　器種	残存部位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	器厚（mm）	重量（g）	時期	備考
110	43号土坑埋土下位	煙管（吸口）	完形	9.9	1.25	1.2	0.5	11.4	近代以降	

石製品

掲載番号	遺構名 層位	種別 器種	残存部位	石材	産地	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	備考
112	45号土坑1層	砥石	端部欠損	安山岩	奥羽山脈　新生代新第三紀	(125.73)	75.76	28.91	(434.9)	研ぎ面2面 被熱痕あり
113	45号土坑1層	砥石	端部欠損	安山岩	奥羽山脈　新生代新第三紀	(110.09)	83.81	47.11	(730.8)	研ぎ面4面
114	45号土坑1層	砥石	体部のみ	安山岩	奥羽山脈　新生代新第三紀	(105.91)	(52.65)	76.27	(365.8)	残存する研ぎ面は2面
115	45号土坑1層	砥石	端部のみ	凝灰岩	奥羽山脈　新生代新第三紀	(79.38)	(48.84)	(35.38)	(156.8)	残存する研ぎ面は3面
116	45号土坑1層	砥石	剥離片	凝灰岩	奥羽山脈　新生代新第三紀	(102.37)	(86.02)	(28.53)	(270.6)	残存する研ぎ面は1面
117	45号土坑埋土下位	火打	完形	玉随	不明　不明	58.94	85.54	31.87	201.6	

８～30cmである。

埋土は４層からなり、黒色～黒褐色シルトを主体とする。堆積状況から自然堆積と推定する。

遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から近世以降と判断した。

45号土坑（第44～46図、写真図版22・32）

調査区西側、ⅢＣ10dグリッドに位置する。Ⅲb層上面で検出した。44号土坑と重複し、本遺構の方が古い。平面形は長楕円形である。開口部径は248×33cmである。底面は概ね平坦で、壁はほぼ直立気味である。確認面から底面まで最深23cmである。

埋土は３層からなり、黒色～黒褐色シルトを主体とする。堆積状況から自然堆積と推定する。

出土遺物は陶磁器片、石製品である。７点図示した。陶器片（第45図111）は甕の口縁部片で、産地は不明。在地産か。外面に自然釉が施釉される。近世の所産。石製品は砥石５点、火打ち石１点である。砥石はいずれも欠損品。形態は扁平な長方形である。どちらも片面の片側部分が片減りしているが特に113は顕著で、両端で厚みが異なる。他の３点（114～116）は著しく欠損しているが、概ね112・113と同様な形態であったと推測する。117は火打ち石で、白色透明な玉随を素材とする。縁辺に不規則な剥離が並んでいる。遺構の性格は不明である。時期は出土遺物から近世と判断した。

46号土坑（第47図、写真図版22）

調査区西端、ⅢＣ９～10dグリッドに位置する。Ⅲb層上面で検出した。北側の端部が調査区外に及んでいる。平面形は長楕円形である。開口部径は（380）×91cmである。底面は概ね平坦で、壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深15cmである。

埋土は３層からなり、黒色シルトを主体とする。堆積状況から自然堆積と推定する。

遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から近世以降と判断した。

47号土坑（第47図、写真図版23）

調査区西側、ⅢＣ10dグリッドに位置する。Ⅲb層上面で検出した。５号溝と重複しており、本遺構の方が新しい。平面形は長楕円形で、ややいびつである。開口部径は282×86cmである。底面は概ね平坦で、壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深34cmである。

埋土は２層からなり、黒色シルトを主体とする。堆積状況から自然堆積と推定する。

遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から近世以降と判断した。

（３）溝

３号溝（第47図、写真図版23）

調査区中央からやや東側、ⅢＣ14dグリッドに位置する。Ⅲb層上面で検出した。南端は調査区外に及んでいる。また４号溝と重複するが、調査区内ではその新旧関係を確認できなかった。ほぼ直線的で、長さ410cm、幅40cmである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深３cmである。

埋土は１層のみで、黒色シルトを主体とする。堆積状況から自然堆積と推定する。

遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から近世以降と判断した。

４号溝（第47図、写真図版23）

調査区中央からやや東側、ⅢＣ14dグリッドに位置する。Ⅲb層上面で検出した。両端は調査区外に及んでいる。３号溝と重複するが、調査区内ではその新旧関係を確認できなかった。ほぼ直線的で、長さ370cm、幅90～140cmである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深12cmである。

埋土は４層からなり、黒色シルトを主体とする。断面を観察する限りでは、1層が本体の埋土で、２～４層は掘り方にもみえるが、溝全体が一様にそのような様相を呈するわけではないので、定かではない。堆積状況から自然堆積と推定する。

遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から近世以降と判断した。

５号溝（第47図、写真図版23）

調査区西側、ⅢＣ10dグリッドに位置する。Ⅲb層上面で検出した。両端は調査区外に及んでいる。また46号土坑と重複し、本遺構の方が古い。平面形はほぼ直線的であるが、一部、肩部分がややいびつである。長さ3.9m、幅4mである。底面は概ね平坦であるが、ややいびつである。壁は大きく広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深40cmである。

埋土は６層からなり、黒褐色～暗褐色シルトを主体とし、灰黄褐色シルトがブロックで混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。

遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から近世以降と判断した。

（４）柱　穴　群（第 43 図）

19個検出した。概ね土坑や溝の周辺に分布しており、それらの遺構群に伴い機能したと推察する。柱穴の規模は径10～20cm、深さ５～25cmで、規則性は見いだせない。埋土は黒色～黒褐色シルト主体で概ね一様である。

出土遺物はいずれからも認められない。

時期は周辺の遺構の時期と埋土の様相から近世以降と判断した。

（５）遺構外出土遺物（第 48 図、写真図版 32）

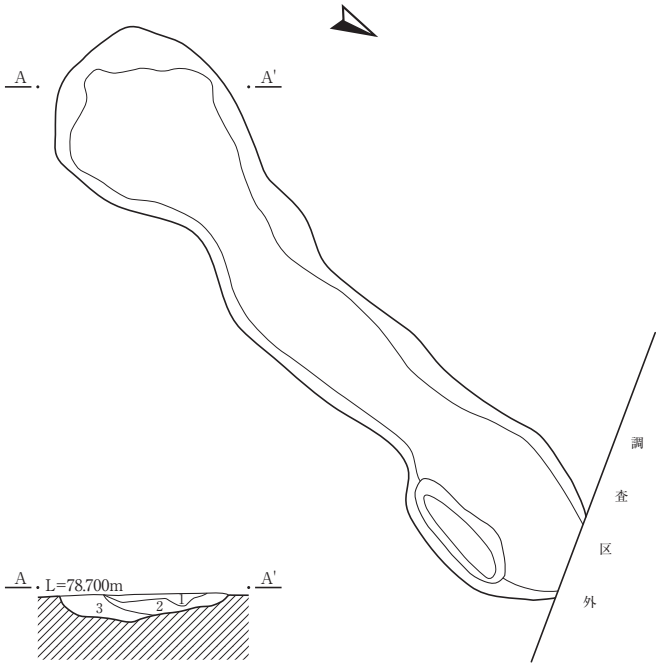
遺構外のⅡ層から縄文時代の石器、古代の土師器・須恵器・土製品が出土している。E区で検出した遺構群の時期は近世を主体としており、縄文時代、古代に比定される遺構はみつかっていない。したがって、遺構外出土遺物と検出遺構とには関連性は見いだせない。

縄文時代の石器は石鏃（118）と磨石（119）である。118は４号溝の埋土中から出土している。流れ込みによる混入と判断した。平基鏃と考えられるが、両端を欠損している。119はやや厚みのある楕円形の自然礫を素材とし、両面に磨面が認められる。

土師器・須恵器はいずれも破片で、形態が復元できたものはない。２点図示した。120は須恵器の大甕の胴部片である。外面にはタタキメの痕跡が残る。121は土師器甕の底部片である。外面にハケメの痕跡があり、底面付近はヘラナデ調整を施している。

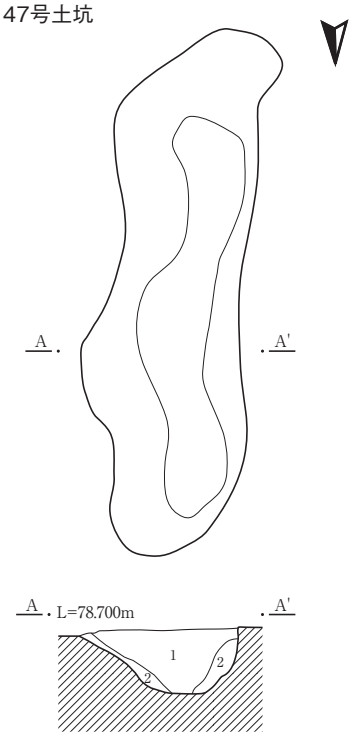
土製品は完形の紡錘車（122）である。外面全体にミガキ調整を施し、さらに黒色処理されている。

46号土坑



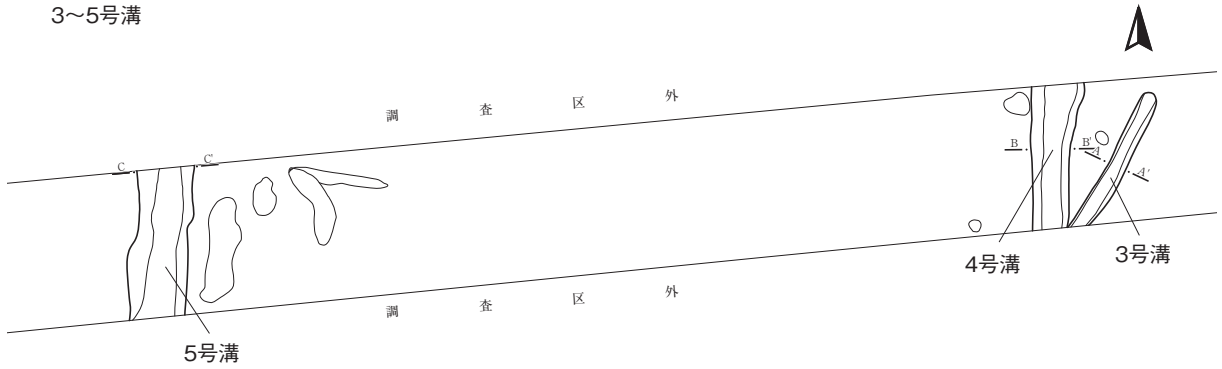
1.黒色シルト　(10YR2/1)　粘性やや弱　しまり密　Ⅲa層土ブロック少量、酸化鉄少量含む。
2.褐灰色シルト(10YR4/1)　粘性弱　しまりやや密　Ⅲa層土ブロック少量、酸化鉄少量含む。
3.黒色シルト　(10YR1.7/1)　粘性強　しまりやや密　Ⅲa層土ブロック少量、酸化鉄微量含む。

47号土坑

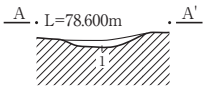


1.黒色シルト　(10YR2/1)　粘性やや強　しまり密
炭化物微量、酸化鉄やや多く含む。
2.黒褐色シルト(10YR3/1)　粘性やや強　しまりやや密
Ⅲa層土ブロック少量、酸化鉄少量含む。

3～5号溝

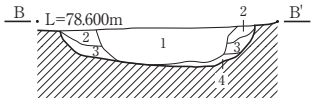


3号溝



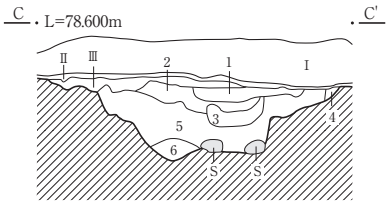
1.黒色シルト(10YR2/1)　粘性やや強　しまりやや密

4号溝



1.黒色シルト(10YR2/1)　粘性やや強　しまりやや密
2.黒色シルト(10YR2/1)　粘性やや強　しまりやや密　Ⅲa層土ブロック少量、酸化鉄少量含む。
3.黒色シルト(10YR2/1)　粘性やや強　しまりやや密　Ⅲa層土ブロック中量、酸化鉄少量含む。
4.黒色シルト(10YR2/1)　粘性やや強　しまりやや密　Ⅲa層土ブロック微量に含む。

5号溝

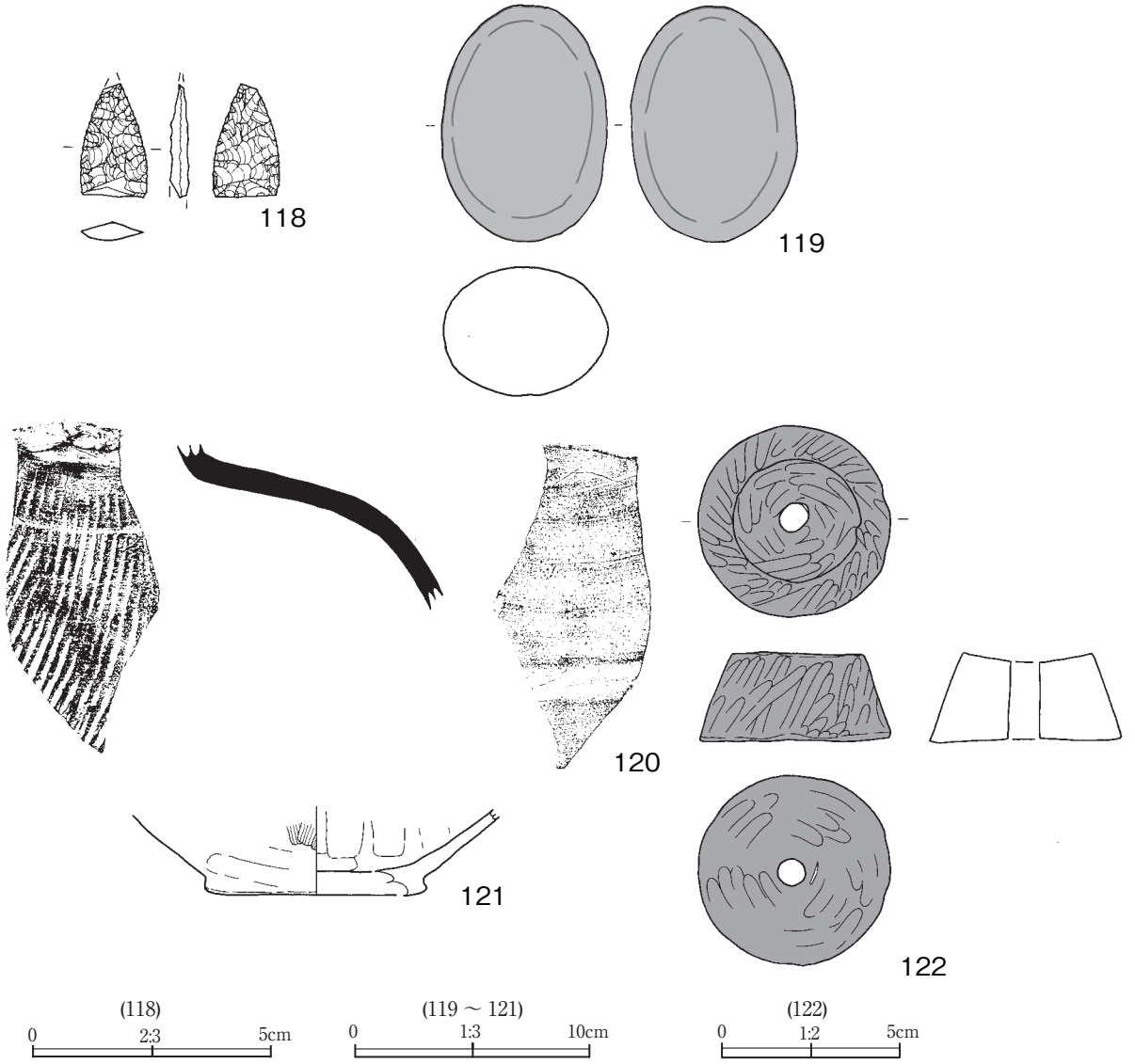


1.灰黄褐色シルト(10YR4/2)　粘性弱　しまりやや疎　Ⅲc層土少量。礫中量含む。
2.黒色シルト　(10YR2/1)　粘性やや強　しまりやや密　灰黄褐色シルトブロック微量に含む。
3.黒褐色シルト　(10YR3/1)　粘性やや強　しまりやや密　灰黄褐色シルトブロック微量に含む。
4.褐灰色シルト　(10YR4/1)　粘性やや弱　しまりやや密
5.暗褐色シルト　(10YR3/3)　粘性やや弱　しまりやや密　Ⅲc層土少量、酸化鉄少量含む。
6.黒褐色シルト　(10YR2/2)　粘性やや弱　しまりやや密　Ⅲc層土少量、礫やや多く含む。

3～5号溝(平面)
0　1：200　5m

46・47号土坑(平面・断面)・3～5号溝(断面)
0　1：40　1m

第47図　E区46・47号土坑・3～5号溝



第 48 図　E区遺構外出土遺物

第 16 表　E区遺構外出土遺物観察表

石器

掲載番号	遺構名 層位	種別 器種	分類	残存部位	石材	産地　年代	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
118	4 号溝 埋土下位	石鏃	平基鏃	両端欠損	頁岩	奥羽山脈　新生代新第三紀	(24.34)	13.98	4.93	(1.39)	
119	出土地点不明 Ⅱ層	磨石	－	完形	安山岩	奥羽山脈　新生代新第三紀	98.79	69.04	56.06	582.8	被熱痕あり

土師器・須恵器

掲載番号	遺構名 層位	種別器種	残存部位	胎土	法量（cm）			調整技法			焼成	外面色調 内面色調	備考
					口径	底径	器高	内面	外面	底面			
120	排土置場	須恵器甕	胴部片	砂粒・長石	－	－	－	胴：回転ナデ	頸：回転ナデ　胴：回転ナデ→タタキ	－	良好	褐灰 褐灰	
121	出土地点不明 Ⅱ層	土師器甕	底部片	砂粒・長石	－	(7.6)	(3.7)	胴：ヘラナデ	胴：ハケメ→ヘラナデ	なし	不良	灰白 淡黄	

土製品

掲載番号	遺構名　層位	種別　器種	残存部位	法量			重量（g）	調整技法	色調
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）			
122	Ⅲ C20 c　Ⅱ層	紡錘車	完形	5.4	5.4	2.5	69.0	ミガキ	黒

７　Ｆ　　区

（１）概　　要（第 48 図、写真図版２）

調査域の南西端に位置し、ⅡＣ９j～ⅡC15iグリッドの範囲に収まる。調査区は29×3.5mの長方形を呈する。調査前は水田であった。

基本土層を観察すると、Ⅰ層（表土）下には、Ⅱ層が良好な状態で10～20cm堆積していた。ただし遺物は包含されていない。Ⅲ層は細かいシルト層であり、Ⅲa層とした。遺構はⅢa層上面で検出している。

検出遺構は掘立柱建物跡１棟、土坑２基、溝４条、柱穴54個である。遺構に共伴する遺物は無い。したがって遺構の時期についてを遺物からは類推できないが、掘立柱建物跡の柱穴埋土から出土した炭化物の年代が近世であり、その点を考慮すれば他の遺構も近世と推定する。

（２）掘立柱建物跡

３号掘立柱建物跡（第50図、写真図版25）

調査区北東側、ⅡC12i～ⅡC14iグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。北側の一部が調査区外に及んでいる。重複する遺構はない。検出できた範囲では少なくとも３方向に庇の付く建物で、桁行きが8.05m、桁間は検出できた範囲で3.30mを測る。

21個の柱穴を使用した。柱穴の規模は径20～30cm、深さは15～35cmの範囲に収まり、概ね一様である。柱痕跡は認められず、埋土は黒色シルトを主体として地山であるⅢa層土がブロック状に混入するので、柱を抜いて人為的に埋められたものと推定する。

出土遺物はない。したがって遺構の時期を遺物から推定することはできないが、Pit35の埋土から出土した炭化物の放射性炭素年代測定（AMS測定）から、「400±20yrBP」との結果を得ており（第Ⅴ章参照）、従って本遺構の時期は1600年代（近世）以降に帰属するものと推定する。

（３）土　　坑

48号土坑（第50図、写真図版24）

調査区中央やや西側、ⅡC11iグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。平面形は楕円形である。開口部径は126×76cmである。底面は中央が窪んでおり、壁は大きく広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深20cmである。

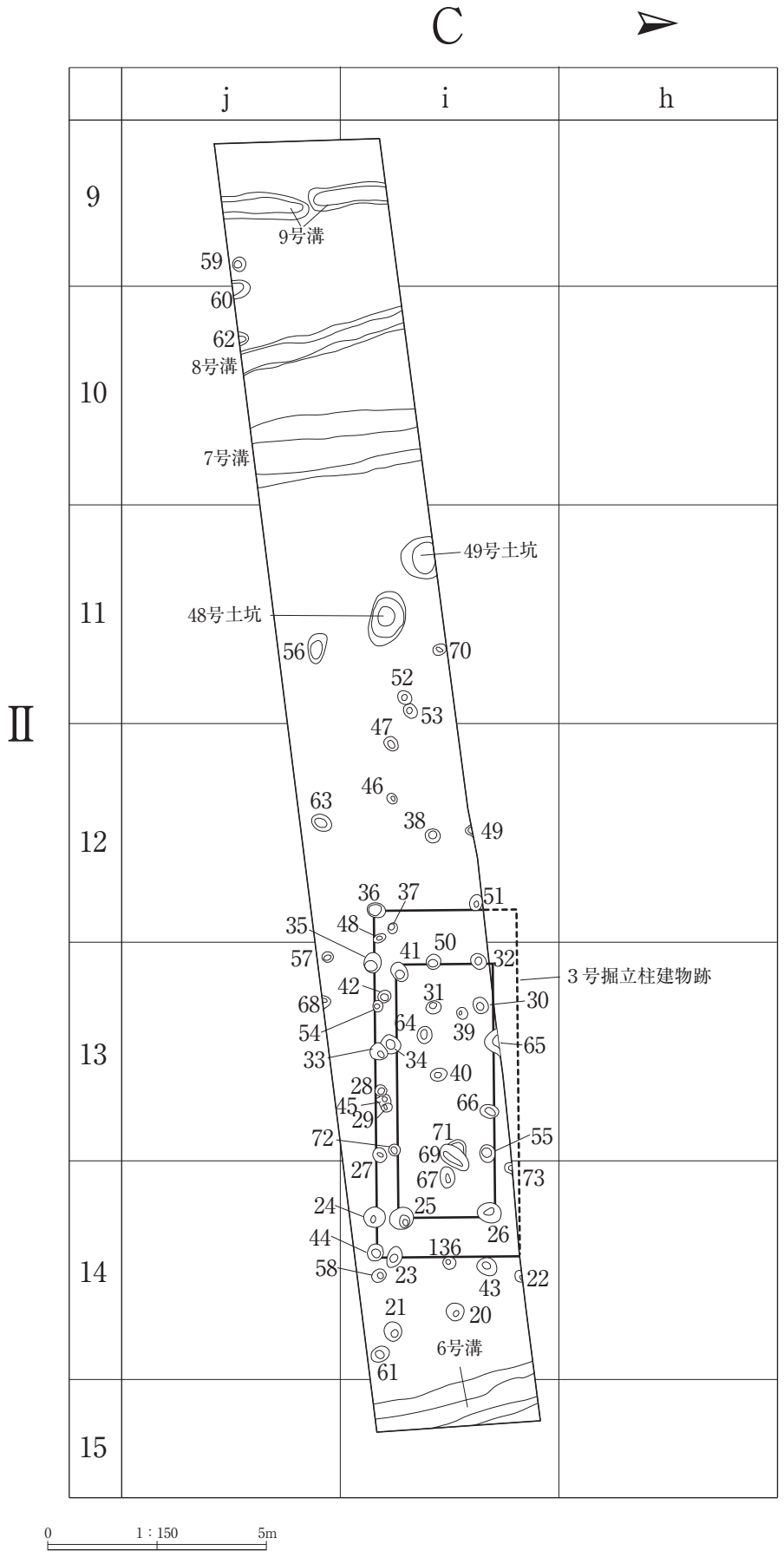
埋土は１層で黒褐色シルトを主体する。堆積状況から自然堆積と推定する。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は出土遺物がないので、定かではないが、埋土の様相や隣接する３号掘立柱建物跡の時期から近世以降と判断した。

49号土坑（第50図、写真図版24）

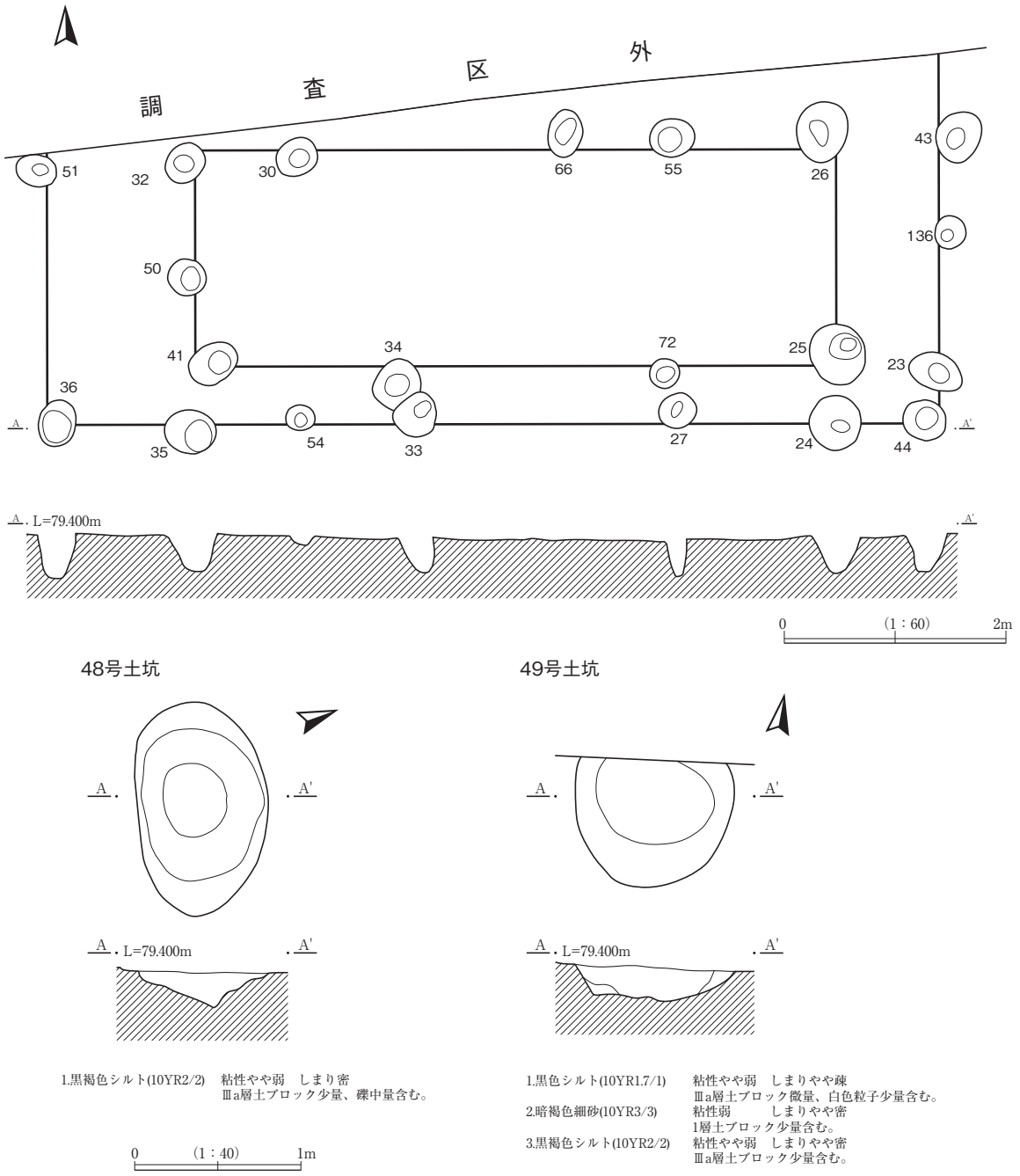
調査区中央やや西側、ⅡC11iグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。北側の一部は調査区外に及んでいる。平面形は楕円形である。開口部径は94×（74）cmである。底面は概ね平坦で、壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深19cmである。

埋土は３層からなるが、主体は１層（黒色シルト）で、暗褐色細砂、黒褐色シルトが混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。

遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は出土遺物がないので、定かではないが埋


C
j
i
h
9
10
11
12
13
14
15
Ⅱ
9号溝
8号溝
7号溝
49号土坑
48号土坑
3号掘立柱建物跡
6号溝
59
60
62
56
70
52
53
47
46
63
38
49
36
37
51
35
48
57
41
50
32
42
31
30
68
54
64
39
65
33
34
40
28
45
29
66
72
71
69
55
27
67
73
24
25
26
44
136
58
23
43
22
21
20
61
0
1：150
5m

第49図　F区全体図



第50図　Ｆ区３号掘立柱建物跡・48・49号土坑

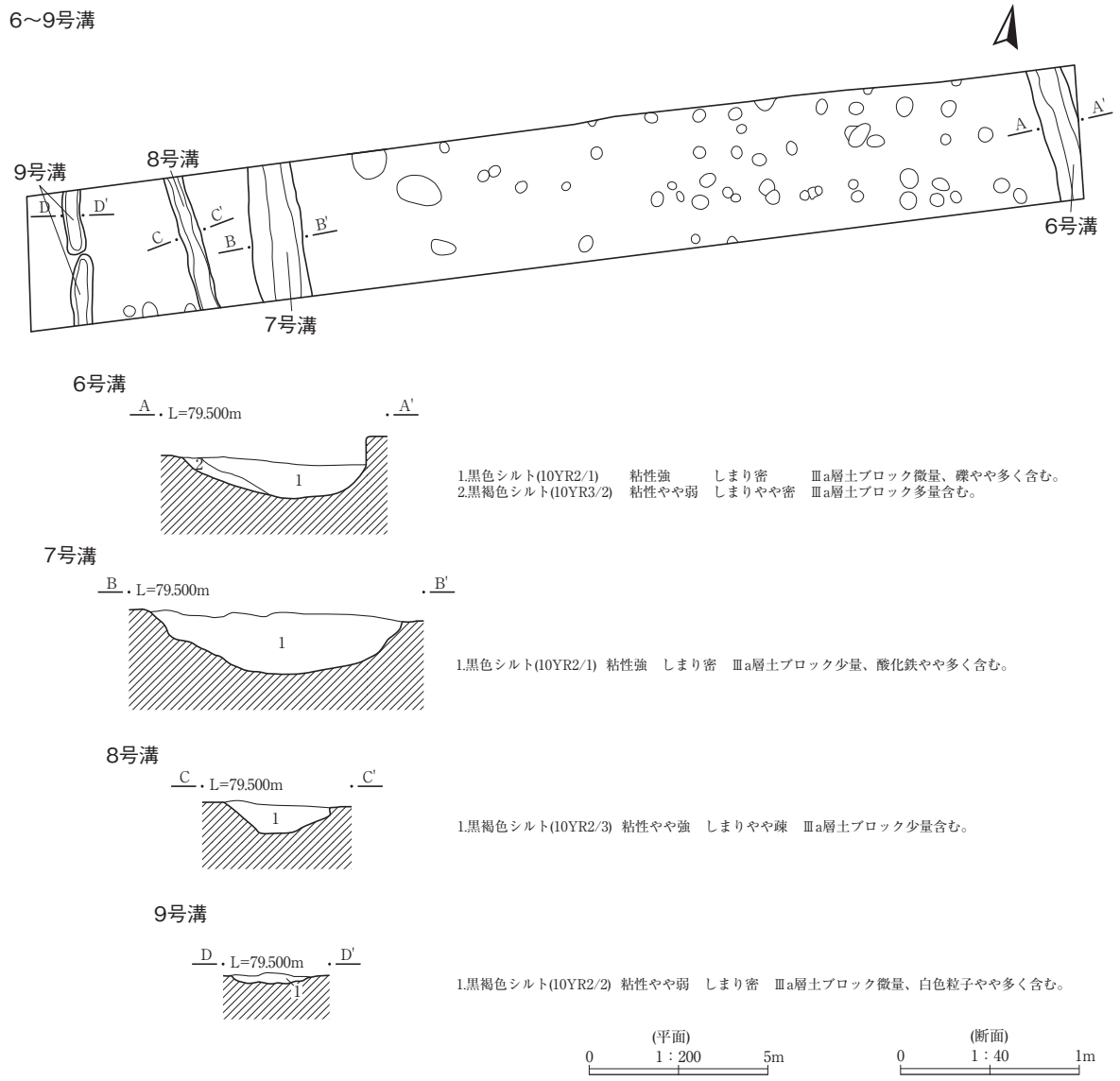
土の様相や隣接する３号掘立柱建物跡の時期から近世以降と判断した。

（４）溝

６号溝（第51図、写真図版24）

調査区東端、ⅡＣ15iグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。両端は調査区外に及んでいる。平面形はほぼ直線である。規模は長さ365cm、幅99cmである。底面はやや丸みを帯びており。壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深18cmである。

埋土は２層からなり、黒色シルトを主体とし、黒褐色シルトが混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。



第51図　Ｆ区６～９号溝

遺物は出土していない。時期は埋土の様相と隣接する３号掘立柱建物跡の時期から近世以降と判断した。

７号溝（第51図、写真図版24）

調査区西端、ⅡＣ10i～10jグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。両端は調査区外に及んでいる。平面形は直線である。規模は長さ370cm、幅137cmである。底面はやや丸みを帯びており。壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深33cmである。

埋土は１層で黒色シルトを主体する。堆積状況から自然堆積と推定する。

遺物は出土していない。時期は埋土の様相と隣接する３号掘立柱建物跡の時期から近世以降と判断した。

８号溝（第51図、写真図版25）

調査区西端、ⅡＣ10i～10jグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。両端は調査区外に及んでいる。平面形は直線である。規模は長さ365cm、幅58cmである。底面は中央にむかい窪んでおり、壁は大きく広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深15cmである。

埋土は１層で黒色シルトを主体する。堆積状況から自然堆積と推定する。

遺物は出土していない。時期は埋土の様相と隣接する３号掘立柱建物跡の時期から近世以降と判断した。

９号溝（第51図、写真図版25）

調査区西端、ⅡＣ９i～９jグリッドに位置する。Ⅲa層上面で検出した。両端は調査区外に及んでいる。平面形は直線で、検出できた部分のほぼ中央で一部途切れる箇所がある。規模は長さ370cm、幅40cmである。底面は概ね平坦であるが、ややいびつである。壁は大きく広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深４cmである。

埋土は１層で黒褐色シルトを主体する。堆積状況から自然堆積と推定する。

遺物は出土していない。時期は埋土の様相や３号掘立柱建物跡の時期から近世以降と判断した。

（５）柱　穴　群（第 48 図、写真図版 25）

54個検出した。そのうち21個は３号掘立柱建物跡の柱穴と判断した。他の柱穴群も３号掘立柱建物跡の周辺に集中しており、したがって３号掘立柱建物跡の他にも掘立柱建物跡が存在する可能性が考えられる。ただし、柱穴群の分布からは明確に推定できなかった。いずれにせよこれらの柱穴群は３号掘立柱建物跡に伴う何らかの建物や柵列を構成するものであったと考える。柱穴の規模は径20～25cm、深さ20cm前後が主体で、他の調査区から見つかった柱穴に比べて、範囲が限定されるといえる。埋土は黒色シルトを主体とし、概ね一様である。３号掘立柱建物跡の柱穴埋土もこれとほぼ同様でもある。柱穴からの出土遺物は認められないが、３号掘立柱建物跡と同時期と考え、近代に比定されると推定する。

第 17 表　柱穴一覧表

番号	調査区	グリッド	深さ(cm)	上端標高(m)	底面標高（m）	色調	土質	粘性	しまり	混入物	備考
1	E	Ⅲ C20c	15.2	78.270	78.118	10YR1.7/1	黒色シルト	◎	◎		
2	E	Ⅲ C20c	7.3	78.256	78.183	10YR1.7/1	黒色シルト	◎	◎		
3	E	Ⅲ C20c	6.1	78.239	78.178	10YR1.7/1	黒色シルト	◎	◎		
4	E	Ⅲ C20c	6.6	78.250	78.184	10YR1.7/1	黒色シルト	◎	◎		
5	E	Ⅲ C20c	7.7	78.241	78.164	10YR1.7/1	黒色シルト	◎	◎		
6	E	Ⅲ C19c	5.3	77.687	77.634	10YR1.7/1	黒色シルト	◎	◎	Ⅲ a 層土ブロック少量	
7	E	Ⅲ C18d	28.5	78.420	78.135	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
8	E	Ⅲ C19d	24.4	78.328	78.084	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	人為
9	E	Ⅲ C19c	28.7	78.270	77.983	10YR2/1	黒色シルト	○	○	礫中量	
10	E	Ⅲ C19c	30.1	78.154	77.853	10YR2/1	黒色シルト	◎	◎	Ⅲ a 層土ブロック少量	人為
11	E	Ⅲ C19c	31.4	78.187	77.873	10YR2/1	黒色シルト	◎	◎	Ⅲ a 層土ブロック少量	
13	E	Ⅲ C10d	9.8	78.605	78.507	10YR2/1	黒色シルト	◎	◎	Ⅲ a 層土ブロック少量	
14	E	Ⅲ C10d	26.3	78.605	78.342	10YR2/1	黒色シルト	◎	○	黄褐色粘土ブロック少量	
15	E	Ⅲ C14d	26.1	78.457	78.196	10YR2/1	黒色シルト	○	○		
16	E	Ⅲ C14d	8.2	78.576	78.494	10YR2/1	黒色シルト	△	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
17	E	Ⅲ C14d	10.5	78.457	78.352	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
18	E	Ⅲ C13d	38.7	78.618	78.231	10YR6/6	明黄褐色シルト	×	△	砂混じり、上位に礫	人為
19	E	Ⅲ C20c	10.6	78.239	78.133	10YR1.7/1	黒色シルト	○	○	黒色シルトブロック少量	人為
20	F	Ⅱ C14i	31.3	79.289	78.976	10YR2/1	黒色シルト	△	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	人為
21	F	Ⅱ C14i	60.8	79.474	78.866	10YR2/1	黒色シルト	◎	△	Ⅲ a 層土ブロック中量	人為
22	F	Ⅱ C14i	16.5	79.307	79.142	10YR2/1	黒色シルト	◎	○	Ⅲ a 層土ブロック微量	人為？
23	F	Ⅱ C14i	13.7	79.307	79.170	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	人為
24	F	Ⅱ C14i	34.8	79.290	78.942	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	人為
25	F	Ⅱ C14i	55.7	79.300	78.743	10YR2/1	黒色シルト	○	△	Ⅲ a 層土ブロックやや多い	人為
26	F	Ⅱ C14i	31.7	79.315	78.998	10YR2/1	黒色シルト	△	△	Ⅲ a 層土ブロック中量	人為
27	F	Ⅱ C13i	41.8	79.263	78.845	10YR2/1	黒色シルト	◎	△	Ⅲ a 層土ブロック少量、炭化物微量	人為
28	F	Ⅱ C13i	35.8	79.248	78.890	10YR2/1	黒色シルト	○	△	Ⅲ a 層土ブロックやや多い	人為
29	F	Ⅱ C13i	12.2	79.228	79.106	10YR2/1	黒色シルト	○	△	Ⅲ a 層土ブロック少量、炭化物微量	人為
30	F	Ⅱ C13i	23.0	79.294	79.064	10YR2/1	黒色シルト	◎	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	人為
31	F	Ⅱ C13i	41.7	79.288	78.871	10YR2/1	黒色シルト	△	○	黄褐色粘土ブロック微量、炭化物微量	人為
32	F	Ⅱ C13i	49.4	79.299	78.805	10YR1.7/1	黒色シルト	○	△	Ⅲ a 層土ブロック中量	人為
33	F	Ⅱ C13i	33.5	79.278	78.943	10YR2/1	黒色シルト	△	◎	Ⅲ a 層土ブロック少量、炭化物微量	人為
34	F	Ⅱ C13i	12.4	79.265	79.141	10YR1.7/1	黒色シルト	△	○	Ⅲ a 層土ブロック微量	人為
35	F	Ⅱ C13i	33.7	79.295	78.958	10YR1.7/1	黒色シルト	◎	◎	Ⅲ a 層土ブロック中量、炭化物微量	人為
36	F	Ⅱ C12i	37.5	79.308	78.933	10YR1.7/1	黒色シルト	△	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	人為
37	F	Ⅱ C12i	14.1	79.296	79.155	10YR2/1	黒色シルト	○	△	Ⅲ a 層土ブロック微量	人為
38	F	Ⅱ C12i	8.1	79.314	79.233	10YR1.7/1	黒色シルト	○	△	Ⅲ a 層土ブロック少量	人為
39	F	Ⅱ C13i	31.5	79.300	78.985	10YR1.7/1	黒色シルト	○	◎	Ⅲ a 層土ブロック中量	人為
40	F	Ⅱ C13i	13.7	79.256	79.119	10YR2/1	黒色シルト	○	△	Ⅲ a 層土ブロック中量	人為
41	F	Ⅱ C13i	27.5	79.289	79.014	10YR1.7/1	黒色シルト	○	△	Ⅲ a 層土ブロック微量	柱痕跡
						10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック多量	掘り方
42	F	Ⅱ C13i	24.7	79.304	79.057	10YR2/1	黒色シルト	△	△	Ⅲ a 層土ブロックやや多く	人為
43	F	Ⅱ C14i	41.1	79.311	78.900	10YR2/1	黒色シルト	△	○	Ⅲ a 層土ブロック多量	人為
44	F	Ⅱ C14i	21.9	79.290	79.071	10YR2/1	黒色シルト	○	△	Ⅲ a 層土ブロック少量	人為
45	F	Ⅱ C13i	22.6	79.244	79.018	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	人為
46	F	Ⅱ C12i	15.2	79.279	79.127	10YR1.7/1	黒色シルト	△	△	Ⅲ a 層土ブロック少量	人為
47	F	Ⅱ C12i	20.7	79.288	79.081	10YR2/1	黒色シルト	△	○	Ⅲ a 層土ブロック中量	人為
48	F	Ⅱ C12i	12.8	79.286	79.158	10YR2/1	黒色シルト	△	○	Ⅲ a 層土ブロック微量	人為
49	F	Ⅱ C12i	10.4	79.337	79.233	10YR2/1	黒色シルト	◎	△	Ⅲ a 層土ブロック少量	人為
50	F	Ⅱ C13i	15.0	79.305	79.155	10YR2/1	黒色シルト	△	△	Ⅲ a 層土ブロック少量	人為
51	F	Ⅱ C12i	45.1	79.276	78.825	10YR2/1	黒色シルト	◎	○	Ⅲ a 層土ブロック少量、炭化物微量	人為？
52	F	Ⅱ C11i	18.3	79.284	79.101	10YR2/1	黒色シルト	○	◎	Ⅲ a 層土ブロック多量	人為
53	F	Ⅱ C11i	17.9	79.279	79.100	10YR2/1	黒色シルト	○	△	Ⅲ a 層土ブロック中量	人為
54	F	Ⅱ C13i	22.0	79.293	79.073	10YR2/1	黒色シルト	○	◎	Ⅲ a 層土ブロック微量、炭化物微量	人為？
55	F	Ⅱ C13i	17.9	79.278	79.099	10YR2/1	黒色シルト	○	◎	Ⅲ a 層土ブロック微量、炭化物微量	人為？
56	F	Ⅱ C11j	11.9	79.301	79.182	10YR3/2	黒褐色シルト	×	○	Ⅲ a 層土ブロック少量、小礫少量	
57	F	Ⅱ C13j	9.4	79.276	79.182	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック中量	人為
58	F	Ⅱ C14i	42.4	79.278	78.854	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック多量	人為
59	F	Ⅱ C9j	8.2	79.461	79.379	10YR2/1	黒色シルト	○	△	Ⅲ a 層土ブロック少量	人為
60	F	Ⅱ C10j	7.0	79.461	79.391	10YR2/1	黒色シルト	○	◎	Ⅲ a 層土ブロックやや多い	人為
61	F	Ⅱ C14i	18.4	79.249	79.065	10YR2/1	黒色シルト	◎	△	Ⅲ a 層土ブロック中量	人為
62	F	Ⅱ C10j	30.7	79.464	79.157	10YR2/1	黒色シルト	◎	△	Ⅲ a 層土ブロック微量	柱痕跡
						10YR3/2	黒褐色シルト	◎	○	Ⅲ a 層土ブロック多量	掘り方
63	F	Ⅱ C12j	9.2	79.228	79.136	10YR3/2	黒褐色シルト	◎	△	Ⅲ a 層土ブロック中量	
64	F	Ⅱ C13i	10.3	79.284	79.181	10YR3/2	黒褐色シルト	○	△	小礫やや多い	
65	F	Ⅱ C13i	18.9	79.253	79.064	10YR2/1	黒色シルト	○	◎	Ⅲ a 層土ブロック多量	人為

粘性　◎：強　○：やや強　△：やや弱　×：弱／しまり　◎：密　○：やや密　△：やや疎　×：疎

番号	調査区	グリッド	深さ(cm)	上端標高(m)	底面標高（m）	色調	土質	粘性	しまり	混入物	備考
66	F	Ⅱ C13i	15.4	79.278	79.124	10YR2/1	黒色シルト	○	◎	Ⅲ a 層土ブロック少量	人為
67	F	Ⅱ C14i	19.6	79.290	79.094	10YR2/1	黒色シルト	△	◎	Ⅲ a 層土ブロック中量、炭化物微量	人為
68	F	Ⅱ C13j	14.2	79.264	79.122	10YR2/1	黒色シルト	○	◎	Ⅲ a 層土ブロック微量	柱痕跡
						10YR2/2	黒褐色シルト	◎	○	Ⅲ a 層土ブロック多量	掘り方
69	F	Ⅱ C13i	22.0	79.275	79.055	10YR2/1	黒色シルト	○	△	Ⅲ a 層土ブロック中量	人為
70	F	Ⅱ C11i	12.9	79.272	79.143	10YR2/1	黒褐色シルト	○	△	Ⅲ a 層土ブロック中量	人為
71	F	Ⅱ C13i	15.7	79.264	79.107	10YR2/1	黒色シルト	△	○	Ⅲ a 層土ブロック多量	
72	F	Ⅱ C13i	13.7	79.263	79.126	10YR2/1	黒色シルト	×	○	Ⅲ a 層土ブロック少量、炭化物微量	人為？
73	F	Ⅱ C14i	7.3	79.133	79.060	10YR2/1	黒色シルト	△	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	人為？
74	E	Ⅲ C12d	28.4	78.395	78.111	10YR1.7/1	黒色シルト	×	◎	Ⅲ a 層土ブロックやや多い	人為
75	C	Ⅲ B9d	8.3	78.412	78.329	10YR3/2	黒褐色シルト	○	△	Ⅲ a 層土ブロック少量	人為
76	C	Ⅲ B9d	10.7	78.408	78.301	10YR3/2	黒褐色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック微量	
77	C	Ⅲ B9d	4.6	78.344	78.298	10YR3/2	黒褐色シルト	○	△	Ⅲ a 層土ブロック少量	
78	C	Ⅲ B9d	5.5	78.361	78.306	10YR3/2	黒褐色シルト	◎	△	Ⅲ a 層土ブロック微量	
79	C	Ⅲ B9d	6.0	78.366	78.306	10YR2/2	黒褐色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック中量	
80	C	Ⅲ B9d	9.0	78.4	78.275	10YR2/3	黒褐色シルト	○	△	黒色シルト少量、Ⅲ a 層土ブロック微量	
81	C	Ⅲ B9d	10.8	78.438	78.330	10YR2/2	黒褐色シルト	◎	○	Ⅲ a 層土ブロック微量	
82	C	Ⅲ B9d	7.2	78.410	78.338	10YR3/2	黒褐色シルト	×	○	Ⅲ a 層土ブロック中量	
83	C	Ⅲ B9d	14.3	78.385	78.242	10YR3/2	黒褐色シルト	◎	△	Ⅲ a 層土ブロック少量	
84	C	Ⅲ B9d	11.7	78.428	78.311	10YR3/2	黒褐色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック微量	
85	B	Ⅲ A16q	38.5	77.933	77.548	10YR2/1	黒色シルト	◎	◎		
86	B	Ⅲ A17p	32.2	77.895	77.573	10YR2/1	黒色シルト	◎	◎		
88	B	Ⅲ A17p	26.7	77.855	77.588	10YR2/1	黒色シルト	◎	◎		
89	B	Ⅲ A17q	15.3	77.854	77.701	10YR2/1	黒色シルト	◎	◎		
90	B	Ⅲ A17p	15.4	77.853	77.699	10YR2/1	黒色シルト	◎	◎		
91	B	Ⅲ A16q	15.9	77.867	77.708	10YR2/1	黒色シルト	◎	◎		
92	B	Ⅲ A18p	7.9	77.966	77.887	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
93	B	Ⅲ A18p	3.7	77.917	77.880	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
94	B	Ⅲ A18p	32.8	78.028	77.700	10YR2/1	黒色シルト	◎	◎		
95	B	Ⅲ A18q	9.0	78.070	77.980	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
96	B	Ⅲ A19p	14.7	78.035	77.888	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
97	B	Ⅲ A18p	18.3	78.038	77.855	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロックやや多く	人為
98	B	Ⅲ A18q	8.2	78.028	77.946	10YR2/1	黒色シルト	△	◎	Ⅲ a 層土ブロック少量	人為
99	B	Ⅲ A18q	14.0	77.974	77.834	10YR2/1	黒色シルト	△	◎	Ⅲ a 層土ブロック少量	人為
100	B	Ⅲ A18p	19.3	77.920	77.727	10YR3/2	黒褐色シルト	○	◎	Ⅲ a 層土ブロック微量、炭化物微量	
101	B	Ⅲ A19p	31.9	78.028	77.709	10YR2/1	黒色シルト	△	◎	Ⅲ a 層土ブロック微量、炭化物微量	人為？
102	B	Ⅲ A19p	24.6	78.035	77.789	10YR2/1	黒色シルト	○	◎	Ⅲ a 層土ブロック微量	人為？
103	B	Ⅲ A18p	9.1	77.967	77.876	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	人為？
104	B	Ⅲ A18p	9.7	77.955	77.858	10YR2/1	黒色シルト	×	◎	Ⅲ a 層土ブロックやや多く	人為
105	B	Ⅲ A15q	9.2	78.006	77.914	10YR2/1	黒色シルト	△	○	Ⅲ a 層土ブロック微量	人為？
106	B	Ⅲ A20l	5.7	77.995	77.938	10YR1.7/1	黒色シルト	×	◎	Ⅲ a 層土ブロック微量、酸化鉄少量	人為？
107	B	Ⅲ A18q	8.1	78.070	77.989	10YR2/1	黒色シルト	△	◎	Ⅲ a 層土ブロック中量	人為？
108	B	Ⅲ A15q	9.8	78.043	77.945	10YR2/3	黒褐色シルト	×	◎	礫微量	
109	B	Ⅲ A20p	19.4	78.089	77.895	10YR2/1	黒色シルト	◎	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
110	B	Ⅲ A15q	11.4	78.027	77.913	10YR3/2	黒褐色シルト	×	◎	Ⅲ a 層土ブロック少量	
111	B	Ⅲ A18q	7.2	78.089	78.017	10YR1.7/1	黒色シルト	△	○	Ⅲ a 層土ブロック多量	人為
112	B	Ⅲ A15q	13.4	78.061	77.927	10YR2/3	黒褐色シルト	×	○	Ⅲ a 層土ブロック微量、酸化鉄少量	
113	B	Ⅳ A1p	9.6	77.860	77.764	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
114	B	Ⅲ A20k	21.0	77.785	77.575	10YR2/1	黒色シルト	△	○	Ⅲ a 層土ブロック微量	
115	B	Ⅲ A20k	13.9	77.778	77.639	10YR3/2	黒褐色シルト	◎	○	Ⅲ a 層土ブロック中量、礫少量	
116	B	Ⅲ A20k	47.7	77.822	77.345	10YR2/1	黒色シルト	◎	○	Ⅲ a 層土ブロック微量	
117	B	Ⅲ A20l	17.0	77.960	77.790	10YR2/1	黒色シルト	△	○	Ⅲ a 層土ブロック微量	
118	B	Ⅲ A20j	11.7	77.898	77.781	10YR2/1	黒色シルト	○	◎	Ⅲ a 層土ブロック微量、礫少量	
119	B	Ⅳ A1l	7.7	77.900	77.823	10YR2/1	黒色シルト	×	◎	Ⅲ a 層土ブロック少量	
120	B	Ⅲ A20l	12.4	77.874	77.750	10YR2/1	黒色シルト	○	△	Ⅲ a 層土ブロック微量	
121	B	Ⅲ A20k	17.4	77.866	77.692	10YR2/1	黒色シルト	◎	△	礫少量	
122	B	Ⅲ A20k	19.4	77.841	77.647	10YR2/1	黒色シルト	○	○	礫少量	
123	B	Ⅲ A20k	11.4	77.783	77.669	10YR2/1	黒色シルト	◎	○	礫少量	
124	B	Ⅲ A20p	4.6	78.020	77.974	10YR2/1	黒色シルト	×	○	Ⅲ a 層土ブロック中量	
125	B	Ⅲ A20k	19.2	77.858	77.666	10YR3/2	黒褐色シルト	△	△	Ⅲ a 層土ブロック少量	
126	B	Ⅲ A18f	10.4	78.147	78.043	10YR2/3	黒褐色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック微量、炭化物微量	
127	B	Ⅲ A17f	14.2	78.122	77.980	10YR2/1	黒色シルト	○	◎	礫少量	
128	B	Ⅲ A18f	8.3	78.148	78.065	10YR2/3	黒褐色シルト	◎	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
129	B	Ⅲ A19f	21.2	78.146	77.934	10YR2/1	黒色シルト	×	○	Ⅲ a 層土ブロック微量、炭化物微量	
130	B	Ⅲ A18f	13.8	78.178	78.040	10YR2/1	黒色シルト	×	◎	Ⅲ a 層土ブロック微量	
131	B	Ⅲ A19p	4.2	78.070	78.028	10YR3/2	黒褐色シルト	×	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
132	B	Ⅲ A18f	15.8	78.107	77.949	10YR3/2	黒褐色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック微量、焼土粒子微量	
133	B	Ⅲ A16f	17.3	78.202	78.029	10YR3/2	黒褐色シルト	○	○	礫少量	

粘性　◎：強　○：やや強　△：やや弱　×：弱／しまり　◎：密　○：やや密　△：やや疎　×：疎

番号	調査区	グリッド	深さ(cm)	上端標高(m)	底面標高（m）	色調	土質	粘性	しまり	混入物	備考
134	B	Ⅲ A19f	18.6	78.143	77.957	10YR2/1	黒色シルト	△	×	Ⅲ a 層土ブロック微量	
135	B	Ⅲ A16f	15.4	78.204	78.050	10YR3/2	黒褐色シルト	×	◎	Ⅲ a 層土ブロック微量、礫少量	
136	F	Ⅱ C14i	23.7	79.307	79.070	10YR3/2	黒褐色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
137	B	Ⅲ A13f	16.3	78.254	78.091	10YR2/1	黒色シルト	○	◎	Ⅲ a 層土ブロック微量	
138	B	Ⅲ A13f	16.7	78.224	78.057	10YR2/1	黒色シルト	◎	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
139	B	Ⅲ A13f	12.5	78.248	78.123	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック微量	
140	B	Ⅲ A12f	13.7	78.217	78.080	10YR1.7/1	黒色シルト	△	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
141	B	Ⅲ A12f	9.2	78.096	78.004	10YR2/1	黒色シルト	○	◎	Ⅲ a 層土ブロック微量	
142	B	Ⅲ A12f	7.1	78.230	78.159	10YR2/1	黒色シルト	△	○	Ⅲ a 層土ブロック中量、炭化物微量	
143	B	Ⅲ A12f	9.9	78.253	78.154	10YR2/1	黒色シルト	○	△	Ⅲ a 層土ブロック少量、焼土粒子微量	
144	B	Ⅲ A12f	11.9	78.232	78.113	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック中量	
145	B	Ⅲ A12f	8.6	78.238	78.152	10YR2/1	黒色シルト	△	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
146	B	Ⅲ A12f	20.1	78.177	77.976	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック微量、炭化物微量	
147	B	Ⅲ A12f	6.2	78.208	78.146	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック微量、焼土粒子微量	
148	B	Ⅲ A11f	23.6	78.234	77.998	10YR2/1	黒色シルト	○	◎	Ⅲ a 層土ブロック少量	
149	B	Ⅲ A11f	65.4	78.214	77.560	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック微量、 焼土粒子・炭化物微量	
150	B	Ⅲ A12f	0.7	79.434	79.427	10YR2/1	黒色シルト	○	△	Ⅲ a 層土ブロック少量	
151	B	Ⅲ A12f	10.5	78.247	78.142	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
152	B	Ⅲ A12f	24.8	78.202	77.954	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
153	B	Ⅲ A11e	15.8	78.188	78.030	10YR3/2	黒褐色シルト	○	○	礫少量	
154	B	Ⅲ A12f	14.8	78.252	78.104	10YR3/2	黒褐色シルト	○	△	Ⅲ a 層土ブロック中量、炭化物微量	
155	B	Ⅲ A12f	14.4	78.237	78.093	10YR3/2	黒褐色シルト	◎	△	Ⅲ a 層土ブロック微量	
156	B	Ⅲ A11f	2.4	78.045	78.021	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
157	B	Ⅲ A11f	8.1	78.193	78.112	10YR3/2	黒褐色シルト	◎	○	Ⅲ a 層土ブロック微量、酸化鉄微量	
158	B	Ⅲ A11f	8.9	78.261	78.172	10YR3/2	黒褐色シルト	△	◎	Ⅲ a 層土ブロック少量	
159	B	Ⅲ A11f	15.4	78.227	78.073	10YR2/2	黒色シルト	◎	○	Ⅲ a 層土ブロック中量、炭化物微量	
160	B	Ⅲ A9e	22.3	78.254	78.031	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
161	B	Ⅲ A9e	9.0	78.250	78.160	10YR6/6	明黄褐色シルト	○	○	黒色シルトブロック少量	人為
162	B	Ⅲ A9e	7.8	78.234	78.156	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		
163	B	Ⅲ A9e	79.7	78.837	78.040	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		柱痕、 人為
164	B	Ⅲ A9e	10.9	78.233	78.124	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
165	B	Ⅲ A11f	20.7	78.110	77.903	10YR6/6	明黄褐色シルト	△	○	砂混じり	
166	B	Ⅲ A8e	12.7	78.224	78.097	10YR2/1	黒色シルト	○	○		
167	B	Ⅲ A8e	16.5	78.240	78.075	10YR2/1	黒色シルト	○	○		
168	B	Ⅲ A13f	1.6	78.096	78.080	10YR2/1	黒色シルト	○	○	地山ブロック少量	
170	B	Ⅲ A15f	26.4	78.244	77.980	10YR2/1	黒色シルト	○	○		
171	B	Ⅲ A15f	5.9	78.201	78.142	10YR2/1	黒色シルト	○	○		
172	B	Ⅲ A4d	10.0	78.277	78.177	10YR2/1	黒色シルト	◎	○		
173	B	Ⅲ A4d	31.7	78.330	78.013	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
174	B	Ⅲ A7d	13.4	78.275	78.141	10YR2/1	黒色シルト	○	○		
175	B	Ⅲ A4d	20.4	78.277	78.073	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○	礫中量、酸化鉄少量	
176	B	Ⅲ A3d	17.5	78.344	78.169	10YR1.7/1	黒色シルト	◎	○		
177	B	Ⅲ A3d	37.1	78.315	77.944	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック微量	
178	B	Ⅲ A4d	26.0	78.280	78.020	10YR2/1	黒色シルト	○	○		
179	B	Ⅲ A4d	7.7	78.373	78.296	10YR2/1	黒色シルト	○	○		
180	B	Ⅲ A7d	13.8	78.251	78.113	10YR2/1	黒色シルト	○	○		
182	B	Ⅲ A3d	16.5	78.309	78.144	10YR2/1	黒色シルト	◎	○	Ⅲ a 層土ブロック中量	
184	B	Ⅲ A4d	11.9	78.361	78.242	10YR2/1	黒色シルト	◎	○	酸化鉄微量	
185	B	Ⅲ A3d	21.7	78.359	78.142	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
186	B	Ⅲ A3d	22.5	78.358	78.133	10YR2/1	黒色シルト	○	○		
187	B	Ⅲ A3d	15.5	78.341	78.186	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
188	B	Ⅲ A3d	10.3	78.332	78.229	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		
189	B	Ⅲ A2d	10.3	78.324	78.221	10YR2/1	黒色シルト	△	○		
190	B	Ⅲ A3d	48.4	78.370	77.886	10YR2/1	黒色シルト	△	◎	Ⅲ a 層土ブロック少量	人為
191	B	Ⅲ A3d	12.2	78.361	78.239	10YR2/1	黒色シルト	○	◎	Ⅲ a 層土ブロック微量	人為
192	B	Ⅲ A2d	13.6	78.309	78.173	10YR2/1	黒色シルト	○	◎	Ⅲ a 層土ブロック少量	人為
193	B	Ⅲ A2d	11.3	78.369	78.256	10YR2/1	黒色シルト	○	◎	Ⅲ a 層土ブロック微量	人為？
194	B	Ⅲ A2d	8.3	78.352	78.269	10YR2/1	黒色シルト	△	○	Ⅲ a 層土ブロック微量	人為？
195	B	Ⅲ A3d	8.4	78.351	78.267	10YR2/1	黒色シルト	○	△	Ⅲ a 層土ブロック微量	人為？
196	B	Ⅲ A7d	20.1	78.275	78.074	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック微量、礫少量	人為？
197	B	Ⅲ A2d	47.1	78.341	77.870	10YR2/1	黒色シルト	△	○	Ⅲ a 層土ブロックやや多く	人為
198	B	Ⅲ A2d	11.4	78.330	78.216	10YR2/1	黒色シルト	○	◎	Ⅲ a 層土ブロック微量	
199	B	Ⅲ A9e	4.4	78.255	78.211	10YR2/1	黒色シルト	○	◎	Ⅲ a 層土ブロック微量	人為？
200	B	Ⅲ A2d	31.8	78.351	78.033	10YR2/1	黒色シルト	○	◎	Ⅲ a 層土ブロックやや多く、炭化物微量	
201	B	Ⅲ A2d	24.2	78.314	78.072	10YR2/3	黒褐色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック微量	
202	B	Ⅲ A9e	19.6	78.255	78.059	10YR2/2	黒褐色シルト	◎	△	Ⅲ a 層土ブロック微量、酸化鉄微量	

粘性　◎：強　○：やや強　△：やや弱　×：弱／しまり　◎：密　○：やや密　△：やや疎　×：疎

番号	調査区	グリッド	深さ(cm)	上端標高(m)	底面標高（m）	色調	土質	粘性	しまり	混入物	備考
203	B	Ⅲ A10f	3.9	78.139	78.100	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
204	B	Ⅲ A9e	12.4	78.245	78.121	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
205	B	Ⅲ A10f	7.9	78.219	78.140	10YR2/1	黒色シルト	△	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
206	B	Ⅱ A18c	15.3	78.351	78.198	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
207	B	Ⅱ A18c	21.4	78.403	78.189	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
208	B	Ⅲ A7d	35.4	78.315	77.961	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
209	B	Ⅱ A18c	6.3	78.337	78.274	10YR2/3	黒褐色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
210	B	Ⅱ A18c	7.4	78.328	78.254	10YR2/3	黒褐色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
211	B	Ⅱ A18d	15.3	78.438	78.285	10YR2/3	黒褐色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
212	B	Ⅲ A1b	12.4	78.324	78.200	10YR2/1	黒色シルト	△	△	礫少量	
213	B	Ⅱ A20b	14.1	78.288	78.147	10YR2/1	黒色シルト	△	△	礫少量	
215	B	Ⅲ A1b	22.2	78.251	78.029	10YR2/1	黒色シルト	△	△	礫少量	
216	B	Ⅱ A20b	9.0	78.325	78.235	10YR2/1	黒色シルト	△	△	礫少量	
217	B	Ⅱ A20b	3.6	78.284	78.248	10YR2/1	黒色シルト	△	△		
218	B	Ⅱ A19b	22.1	78.232	78.011	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		
219	B	Ⅱ A19b	15.0	78.216	78.066	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		
220	B	Ⅱ A19c	19.5	78.229	78.034	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		
221	B	Ⅱ A19c	10.0	78.293	78.193	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
222	B	Ⅱ A18c	25.0	78.284	78.034	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		
223	B	Ⅱ A19c	14.1	78.384	78.243	10YR6/6	明黄褐色シルト	◎	○		
224	B	Ⅱ A18d	15.3	78.427	78.274	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
226	B	Ⅱ A18c	6.8	78.275	78.207	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		
227	B	Ⅱ A18c	12.1	78.253	78.132	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		
228	B	Ⅱ A18c	8.5	78.241	78.156	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
229	B	Ⅱ A18c	17.5	78.199	78.024	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
230	B	Ⅱ A18c	14.3	78.151	78.008	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
231	B	Ⅱ A20a	10.1	78.200	78.099	10YR2/1	黒色シルト	△	△	砂混じり	
232	B	Ⅱ A20a	6.0	78.247	78.187	10YR2/1	黒色シルト	△	△	礫少量	
234	B	Ⅱ A18b	9.0	78.214	78.124	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		
235	B	Ⅱ A18c	5.0	78.187	78.137	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		
236	B	Ⅱ A17c	7.6	78.214	78.138	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		
237	B	Ⅱ A17c	11.0	78.194	78.084	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		
238	B	Ⅱ A17c	8.8	78.168	78.080	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
239	B	Ⅱ A17c	15.0	78.242	78.092	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		
240	B	Ⅱ A17b	20.8	78.207	77.999	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		
241	B	Ⅱ A17b	13.7	78.208	78.071	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		
242	B	Ⅱ A17b	8.2	78.180	78.098	10YR2/1	黒色シルト	○	○		
243	B	Ⅱ A18b	30.0	78.202	77.902	10YR2/1	黒色シルト	○	○		
244	B	Ⅱ A20a	25.1	78.241	77.990	10YR2/1	黒色シルト	△	△		
245	B	Ⅱ A20a	14.8	78.283	78.135	10YR2/1	黒色シルト	△	△		
249	B	Ⅲ A10f	7.5	78.235	78.160	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
250	B	Ⅱ A18b	22.1	78.232	78.011	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
251	B	Ⅱ A18c	17.6	78.227	78.051	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
252	B	Ⅱ A17c	13.3	78.230	78.097	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
253	B	Ⅱ A18d	16.6	78.314	78.148	10YR3/3	暗褐色シルト	◎	○		
254	B	Ⅱ A17d	19.2	78.254	78.062	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		
255	B	Ⅱ A17d	9.8	78.226	78.128	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		
256	B	Ⅱ A17d	18.1	78.250	78.069	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		
257	B	Ⅱ A17d	12.1	78.251	78.130	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
258	B	Ⅱ A17d	22.2	78.235	78.013	10YR2/1	黒色シルト	○	○	礫少量	
260	B	Ⅱ A17c	25.3	78.218	77.965	10YR2/1	黒色シルト	○	○		
261	B	Ⅱ A17d	14.3	78.217	78.074	10YR2/1	黒色シルト	○	○	礫少量	
262	B	Ⅱ A17d	9.4	78.245	78.151	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		
263	B	Ⅱ A17d	12.4	78.239	78.115	10YR2/1	黒色シルト	○	○	礫少量	
264	B	Ⅱ A17c	7.0	78.214	78.144	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		
265	B	Ⅱ A17b	6.4	78.214	78.150	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		
266	B	Ⅱ A18d	12.0	78.286	78.166	10YR2/1	黒色シルト	◎	○		
267	B	Ⅱ A17c	10.5	78.203	78.098	10YR2/1	黒色シルト	△	○	礫少量	
268	B	Ⅱ A17b	18.8	78.213	78.025	10YR2/1	黒色シルト	△	○		
269	B	Ⅱ A17c	22.7	78.242	78.015	10YR3/3	暗褐色シルト	△	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
270	B	Ⅱ A17c	22.8	78.206	77.978	10YR3/3	暗褐色シルト	△	○		
273	B	Ⅱ A18c	22.1	78.184	77.963	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
274	B	Ⅱ A18b	22.1	78.232	78.011	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		
275	B	Ⅱ A16b	4.2	78.198	78.156	10YR2/1	黒色シルト	△	○		
276	B	Ⅱ A15b	13.5	78.235	78.100	10YR2/1	黒色シルト	△	○		
277	B	Ⅱ A15b	14.4	78.237	78.093	10YR2/1	黒色シルト	△	○		
278	B	Ⅱ A15b	11.8	78.241	78.123	10YR2/1	黒色シルト	△	○		
279	B	Ⅱ A19c	8.8	78.256	78.168	10YR2/1	黒色シルト	△	○		

粘性　◎：強　○：やや強　△：やや弱　×：弱／しまり　◎：密　○：やや密　△：やや疎　×：疎

番号	調査区	グリッド	深さ(cm)	上端標高(m)	底面標高（m）	色調	土質	粘性	しまり	混入物	備考
281	B	Ⅱ A17d	11.5	78.190	78.075	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		
282	B	Ⅱ A17d	4.5	78.224	78.179	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		
283	B	Ⅱ A17d	11.3	78.241	78.128	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
284	B	Ⅱ A17d	11.9	78.241	78.122	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		
285	B	Ⅱ A17b	24.2	78.246	78.004	10YR2/1	黒色シルト	△	○		
286	B	Ⅱ A18c	6.6	78.326	78.260	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
287	B	Ⅱ A18d	10.2	78.408	78.306	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
288	B	Ⅱ A18d	6.9	78.287	78.218	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
289	B	Ⅱ A19d	17.2	78.419	78.247	10YR2/1	黒色シルト	◎	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
290	B	Ⅱ A18d	20.7	78.449	78.242	10YR2/1	黒色シルト	◎	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
291	B	Ⅱ A19c	20.0	78.337	78.137	10YR2/1	黒色シルト	◎	○	Ⅲ a 層土ブロック少量、酸化鉄少量	
292	B	Ⅱ A19c	8.9	78.390	78.301	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		
293	B	Ⅱ A19d	13.3	78.447	78.314	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
294	B	Ⅱ A19a	5.6	78.154	78.098	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		
295	B	Ⅱ A19a	32.7	78.116	77.789	10YR2/1	黒色シルト	○	○	下位粘性強まる、Ⅲ a 層土ブロック少量	人為
296	B	Ⅱ A19b	4.6	78.239	78.193	10YR2/1	黒色シルト	△	○		
297	B	Ⅱ A20b	17.6	78.351	78.175	10YR2/1	黒色シルト	△	○		
298	B	Ⅲ A1b	20.0	78.335	78.135	10YR2/1	黒色シルト	○	○		
300	B	Ⅱ A20b	18.2	78.295	78.113	10YR2/1	黒色シルト	△	○		
301	B	Ⅱ A19b	11.7	78.271	78.154	10YR3/3	暗褐色シルト	△	○		
302	B	Ⅱ A19b	12.9	78.262	78.133	10YR3/3	暗褐色シルト	△	○		
303	B	Ⅱ A19a	15.5	78.228	78.073	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		
304	B	Ⅲ A1b	37.1	78.340	77.969	10YR2/1	黒色シルト	○	○		
305	B	Ⅱ A18b	16.0	78.173	78.013	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		
306	B	Ⅱ A18b	21.5	78.229	78.014	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ a 層土ブロック少量	
307	B	Ⅱ A18b	16.4	78.144	77.980	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		
308	B	Ⅱ A19b	12.1	78.231	78.110	10YR2/1	黒色シルト	○	○		
309	B	Ⅱ A18b	24.6	78.157	77.911	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○	礫少量	
310	B	Ⅱ A18b	13.4	78.167	78.033	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		
311	B	Ⅱ A20b	15.0	78.348	78.198	10YR3/2	黒褐色シルト	○	○	礫少量	
312	B	Ⅱ A19b	12.4	78.225	78.101	10YR3/2	黒褐色シルト	○	○	礫少量	
313	B	Ⅲ A19f	4.3	77.976	77.933	10YR3/3	暗褐色シルト	○	○		
351	A	Ⅰ A12e	31.9	79.578	79.259	10YR2/1	黒色シルト	△	○		
352	A	Ⅰ A12e	18.7	79.549	79.362	10YR2/1	黒色シルト	◎	△	Ⅲ c 層土ブロック少量	
353	A	Ⅰ A11e	14.8	79.558	79.410	10YR3/2	黒褐色シルト	△	◎	Ⅲ c 層土ブロック少量	
354	A	Ⅰ A11e	25.2	79.546	79.294	10YR2/1	黒色シルト	○	△	Ⅲ c 層土ブロック中量	
355	A	Ⅰ A12e	30.7	79.534	79.227	10YR2/1	黒色シルト	△	○	Ⅲ c 層土ブロック少量	
356	A	Ⅰ A6f	20.9	79.777	79.568	10YR3/2	黒褐色シルト	△	◎	Ⅲ c 層土ブロック少量	
357	A	Ⅰ A11e	6.1	79.550	79.489	10YR2/1	黒色シルト	△	○	Ⅲ c 層土ブロック多量	
358	A	Ⅰ A12e	8.9	79.533	79.444	10YR2/1	黒色シルト	○	△	Ⅲ c 層土ブロック中量	
359	A	Ⅰ A6f	9.3	79.760	79.667	10YR3/2	黒褐色シルト	△	◎	Ⅲ c 層土ブロック少量	
360	A	Ⅰ A6f	14.0	79.516	79.376	10YR3/2	黒褐色シルト	○	○	Ⅲ c 層土ブロック微量	
361	A	Ⅰ A11e	15.1	79.760	79.609	10YR2/1	黒色シルト	◎	△	Ⅲ c 層土ブロック少量	
362	A	Ⅰ A12e	11.1	79.526	79.415	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ c 層土ブロック微量	
363	A	Ⅰ A12e	13.1	79.523	79.392	10YR3/2	黒褐色シルト	○	◎	Ⅲ c 層土ブロック微量	
364	A	Ⅰ A12e	19.0	79.528	79.338	10YR2/1	黒色シルト	◎	△	Ⅲ c 層土ブロック微量	人為
365	A	Ⅰ A11e	8.2	79.538	79.456	10YR2/1	黒色シルト	△	○	Ⅲ c 層土ブロック少量	人為
366	A	Ⅰ A11e	9.1	79.549	79.458	10YR3/2	黒褐色シルト	◎	○	Ⅲ c 層土ブロック微量	
367	A	Ⅰ A12e	8.7	79.544	79.457	10YR2/1	黒色シルト	△	×	Ⅲ c 層土ブロック少量	人為
368	A	Ⅰ A6f	8.3	79.773	79.690	10YR3/2	黒褐色シルト	×	○	Ⅲ c 層土ブロック微量	
369	A	Ⅰ A11e	14.0	79.568	79.428	10YR3/2	黒褐色シルト	△	○	Ⅲ c 層土ブロック微量	
370	A	Ⅰ A11e	22.0	79.566	79.346	10YR3/2	黒褐色シルト	△	◎	Ⅲ c 層土ブロック少量	
371	A	Ⅰ A6f	18.0	79.526	79.346	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ c 層土ブロック微量	
372	A	Ⅰ A7f	10.9	79.718	79.609	10YR3/2	黒褐色シルト	×	○	Ⅲ c 層土ブロック微量	
373	A	Ⅰ A6f	7.4	79.774	79.700	10YR3/2	黒褐色シルト	○	○	Ⅲ c 層土ブロック微量	
374	A	Ⅰ A12e	11.0	79.538	79.428	10YR3/2	黒褐色シルト	△	◎	Ⅲ c 層土ブロック少量	
375	A	Ⅰ A11e	13.9	79.544	79.405	10YR3/2	黒褐色シルト	○	×	Ⅲ c 層土ブロック微量	
376	A	Ⅰ A6f	9.4	79.732	79.638	10YR2/1	黒色シルト	○	◎	Ⅲ c 層土ブロック微量	
377	A	Ⅰ A6f	16.2	79.705	79.543	10YR3/2	黒褐色シルト	△	◎	Ⅲ c 層土ブロック微量	
378	A	Ⅰ A12e	8.3	79.604	79.521	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ c 層土ブロック少量	
379	A	Ⅰ A12e	15.6	79.488	79.332	10YR2/1	黒色シルト	◎	◎	Ⅲ c 層土ブロックやや多く	人為
380	A	Ⅰ A12e	13.3	79.545	79.412	10YR2/1	黒色シルト	○	◎	Ⅲ c 層土ブロック微量	
381	A	Ⅰ A11e	15.1	79.562	79.411	10YR2/1	黒色シルト	△	△	Ⅲ c 層土ブロック少量	
382	A	Ⅰ A13e	30.2	79.598	79.296	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ c 層土ブロック微量、礫少量	
383	A	Ⅰ A11e	15.5	79.598	79.443	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ c 層土ブロック微量	
384	A	Ⅰ A7f	12.5	79.750	79.625	10YR2/1	黒色シルト	△	○	Ⅲ c 層土ブロック少量	
385	A	Ⅰ A6f	6.9	79.778	79.709	10YR3/2	黒褐色シルト	○	◎	Ⅲ c 層土ブロック微量	
386	A	Ⅰ A7f	12.9	79.754	79.625	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ c 層土ブロック微量	

粘性　◎：強　○：やや強　△：やや弱　×：弱／しまり　◎：密　○：やや密　△：やや疎　×：疎

番号	調査区	グリッド	深さ(cm)	上端標高(m)	底面標高（m）	色調	土質	粘性	しまり	混入物	備考
387	A	Ⅰ A7f	25.9	79.769	79.510	10YR3/2	黒褐色シルト	△	◎	Ⅲ c 層土ブロック少量	
388	A	Ⅰ A7f	34.6	79.752	79.406	10YR2/1	黒色シルト	○	◎	Ⅲ c 層土ブロックやや多く	
389	A	Ⅰ A7f	7.4	79.764	79.690	10YR2/1	黒色シルト	○	◎	Ⅲ c 層土ブロック微量、炭化物微量	
390	A	Ⅰ A7f	11.8	79.767	79.649	10YR2/1	黒色シルト	○	◎	Ⅲ c 層土ブロック微量	
392	A	Ⅰ A7f	7.5	79.778	79.703	10YR2/1	黒色シルト	○	◎	Ⅲ c 層土ブロック微量	
393	A	Ⅰ A9f	15.0	79.673	79.523	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ c 層土ブロック微量	
394	A	Ⅰ A9e	22.8	79.667	79.439	10YR2/1	黒色シルト	△	△	Ⅲ c 層土ブロック微量、礫少量	
395	A	Ⅰ A10f	8.6	79.656	79.570	10YR2/1	黒色シルト	△	×	Ⅲ c 層土ブロック少量	
396	A	Ⅰ A9e	28.6	79.691	79.405	10YR2/1	黒色シルト	△	×	Ⅲ c 層土ブロック少量	
397	A	Ⅰ A10e	25.6	79.634	79.378	10YR2/1	黒色シルト	○	△	Ⅲ c 層土ブロック微量、礫少量	
398	A	Ⅰ A10e	29.8	79.611	79.313	10YR2/1	黒色シルト	△	○	Ⅲ c 層土ブロック微量、礫微量	
399	A	Ⅰ A12e	15.2	79.528	79.376	10YR3/2	黒褐色シルト	○	○	Ⅲ c 層土ブロック少量	
400	A	Ⅰ A10e	6.8	79.673	79.605	10YR2/1	黒色シルト	△	◎	Ⅲ c 層土ブロック中量、礫中量	
401	A	Ⅰ A8f	17.7	79.678	79.501	10YR2/1	黒色シルト	△	○	礫少量	
402	A	Ⅰ A9f	30.9	79.703	79.394	10YR2/1	黒色シルト	×	◎	Ⅲ c 層土ブロック少量、礫少量	
403	A	Ⅰ A10e	23.2	79.693	79.461	10YR2/1	黒色シルト	○	×	Ⅲ c 層土ブロック少量、礫微量	
404	A	Ⅰ A10e	7.1	79.633	79.562	10YR2/1	黒色シルト	○	◎	Ⅲ c 層土ブロック中量、白色粒子少量	
405	A	Ⅰ A8f	14.3	79.672	79.529	10YR2/1	黒色シルト	○	○	Ⅲ c 層土ブロック中量	

粘性　◎：強　○：やや強　△：やや弱　×：弱／しまり　◎：密　○：やや密　△：やや疎　×：疎

Ⅴ　自然科学分析

放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

（1）　測定対象試料

堤遺跡は、岩手県奥州市胆沢区南都田四ッ柱208（北緯39°08′13″、東経141°05′26″）に所在する。胆沢扇状地の水沢高位段丘面上に立地し、遺跡から約10km東に北上川が流れる。測定対象試料は、20号土坑（旧遺構名SK31）埋土中位出土炭化物（No.１：IAAA-111856）、Pit35埋土中出土炭化物（No.２：IAAA-111857）の合計２点である（表１）。

（2）　測定の意義

炭化物が出土した遺構の時期を明らかにする。また、No.１の測定では、遺構から出土した土師器の時期の確認も行う。

（3）　化学処理工程

1）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
2）酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常１mol/ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」、１M未満の場合は「AaA」と表１に記載する。
3）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。
4）真空ラインで二酸化炭素を精製する。
5）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
6）グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

（4）　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

（5） 算　出　方　法

1）δ^{13}C は、試料炭素の^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表１）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

2）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±１σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

3）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため、補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。

4）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（１σ＝68.2％）あるいは２標準偏差（２σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース（Reimer et al. 2009）を用い、OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表２に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

（6） 測　定　結　果

炭化物の^{14}C年代は、20号土坑埋土中位出土のNo.１が1310±20yrBP、Pit35埋土中出土のNo.２が400±20yrBPである。暦年較正年代（１σ）は、No.１が662～765cal ADの間に２つの範囲、No.２が1446～1481cal ADの範囲で示される。

試料の炭素含有率はいずれも60％を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表１

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）（AMS）	δ^{13}C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-111856	No.1	20 号土坑 埋土中位	炭化物	AAA	-23.11±0.43	1,310±20	84.93±0.25
IAAA-111857	No.2	Pit35 埋土中	炭化物	AAA	-24.45±0.42	400±20	95.10

[#4736]

表２

測定番号	δ^{13}C 補正なし		暦年較正用（yrBP）	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-111856	1,280 ± 20	85.26 ± 0.24	1,312 ± 23	662calAD-694calAD（49.7%） 748calAD-765calAD（18.5%）	657calAD-722calAD（70.1%） 741calAD-770calAD（25.3%）
IAAA-111857	390 ± 20	95.21 ± 0.24	404 ± 21	1446calAD-1481calAD（68.2%）	1440calAD-1500calAD（87.6%） 1508calAD-1511calAD（0.7%） 1601calAD-1615calAD（7.1%）

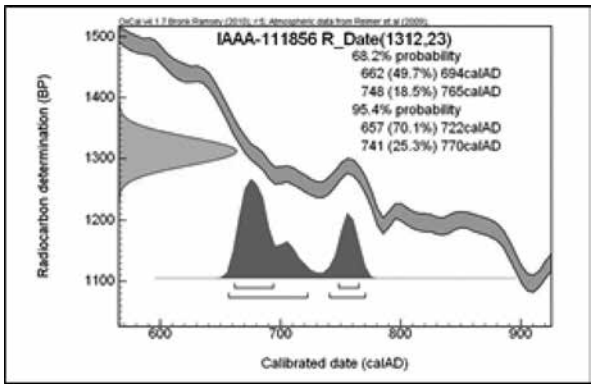
［参考値］

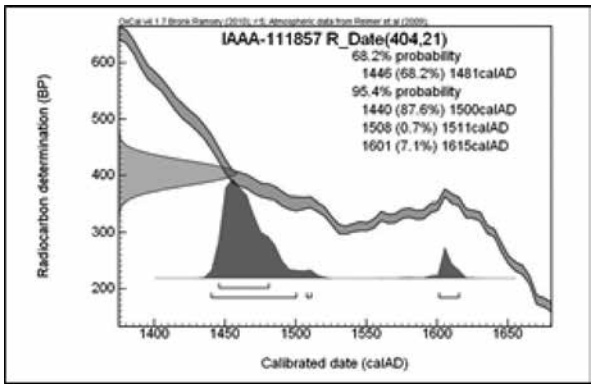
文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150





［参考］暦年較正年代グラフ

（７） 調査者のコメント

時代の異なる遺構から出土した炭化物について、具体的な時期を判断する手がかりを得るために、炭素年代測定を依頼した。また20号土坑は炭化物を採取した埋土中位から多量の土師器・須恵器が出土しているが、型式学的な検証から同一時期の一群と考えている。これら土器群の実年代を知ることも目的の１つである。

試料２点は測定結果から、20号土坑は700年代（８世紀）、Pit35（３号掘立柱建物）は1600年代（17世紀代）に帰属するとの結果を得た。20号土坑は出土遺物の検証から奈良時代に比定されると推察しており、従って測定結果と合わせても矛盾しない。加えて20号土坑から出土した土師器・須恵器の具体的な時期を示す参考資料となり得る結果でもあった。Pit35は３号掘立柱建物を構成する柱穴であるが、Pit35はもとより、他の柱穴からも出土遺物がなく、遺構の時期判断できない状態であり、かろうじて、別の調査区で検出した同様の柱穴から近世と考える銭貨が出土していたので、３号掘立柱建物も近世以降と推察していた。測定結果はその推定の時期の範囲であり、柱穴群の時期を裏付ける根拠を得ることができた。特に近世でもやや古い時期に比定される可能性があることが判明したことは意義が大きい。

Ⅵ　総　　括

1　は　じ　め　に

６か所の調査区で、遺構は奈良時代、平安時代、近世に帰属するものが、遺物は縄文時代、奈良時代、平安時代、近世、近世～現代に比定されるものが見つかっている。

この章では調査全体の総括として出土遺物を概観し、それを踏まえた上で、各時代の遺構の分布から堤遺跡の性格を推察する。

2　出土遺物について（第52図）

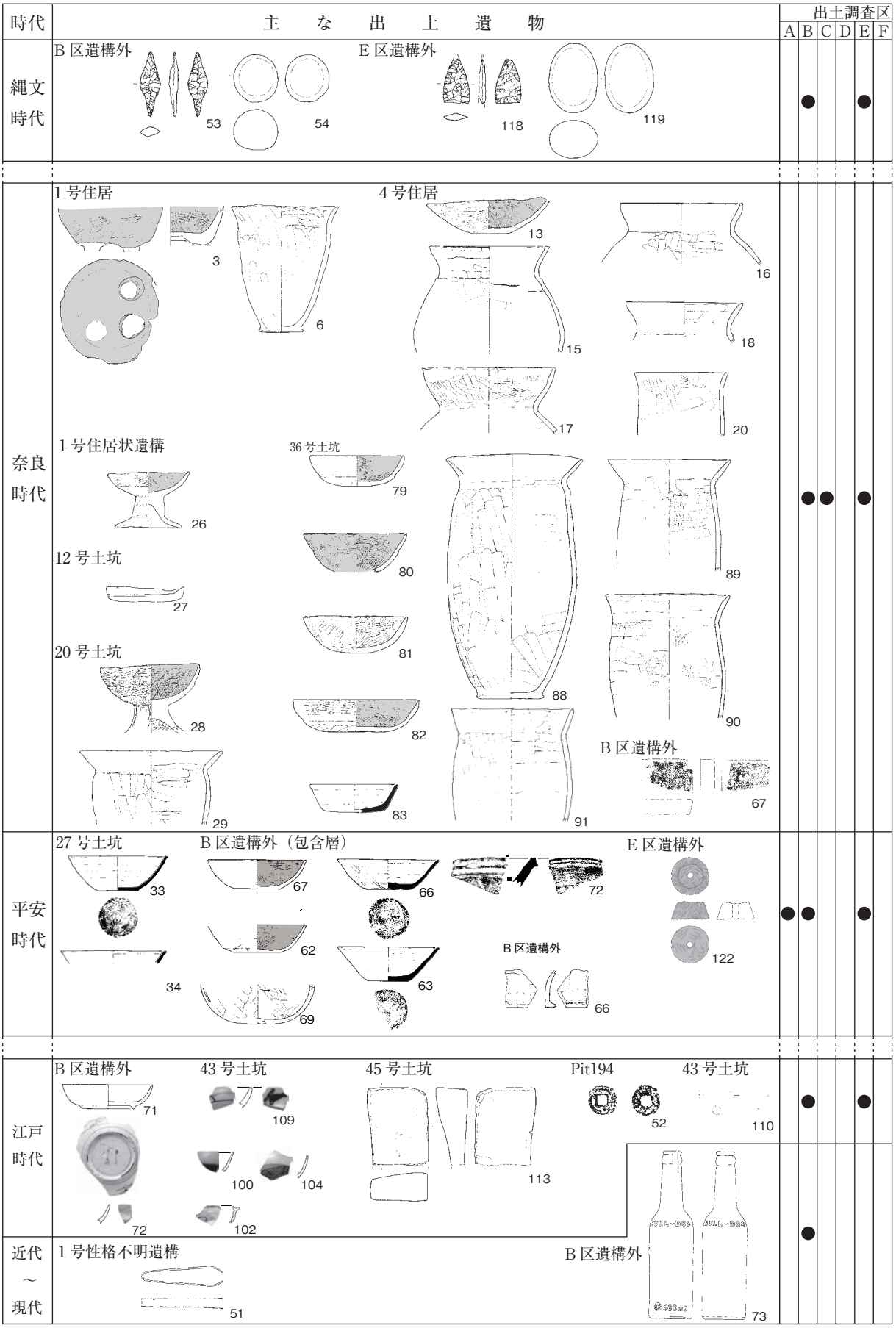
（1）縄　文　時　代

B区、E区の遺構外から石鏃２点、磨石１点が出土している。出土層位はⅡ～Ⅲa層上面であり、各調査区での古代～近世の遺構面である。同検出面から縄文時代の遺構は検出しておらず、したがってこれらの遺物は流れ込みの可能性が大きい。それは今回の調査で縄文土器が１点も見つかっていないことからも言えるものと考える。出土した石鏃の形態は有茎鏃と平基鏃１点ずつである。時期は定かではないが、強いていえば縄文時代前期か中期に比定すると推測する。

（2）奈　良　時　代

土師器・須恵器がB区、C区、E区から出土している。特にB区では１号住居、４号住居、20号土坑からC区では36号土坑の埋土中からまとまって出土している。また１号住居状遺構、12号土坑では出土量こそわずかだが形態復元できる土師器が１点のみ出土する。遺物の形態を比較すると、いずれもほぼ同形態であるので同時期の可能性が高いと考える。なお近年、県南地域、特に胆沢・水沢地域における６世紀から８世紀にかけての土師器編年案は高橋千晶氏によってまとめられている（東北学院大2007）。この高橋氏の編年案に出土遺物を照らし合わせ、その時期を判断する。

まず出土した土師器の坏類は丸底、あるいは底が半球状を呈し、内面に黒色処理されるものが多い傾向が見受けられる。また36号土坑から出土した坏（82）は平底風で口縁部が直線的に伸びる形態を有する。これらは高橋氏の編年でいうところの７期（８世紀中葉～後葉）に盛行する形態である。そして高坏では20号土坑から出土した28が丸底の坏に脚部に付く形態を呈する。これは３、４期（６～７世紀代）に盛行する形態とされているが、７期にも見られ、その際、脚部に透かしが入る特徴を有するとされ、その点で28の脚部の特徴と符合する。36号土坑からは須恵器の坏が見つかっているが、高橋氏によれば須恵器が多く見受けられるようになるのも７期前後である。甕はほとんどが口縁部に最大径を有し、胴上半から胴中央が膨れる形態を有する。この形態の甕は６世紀から８世紀を通じ見受けられるものであり、時期判断の根拠としては弱いが、言い方を変えればどの時期にも当てはまってくる。12号土坑から出土したミニチュア土器は皿状の形態で、あまり類例が見受けられないものの、周辺地域からは７期に比定されるミニチュア土器が多く見つかっている。以上のように、坏、高坏、甕、ミニチュア土器について形態的特徴などをもとに高橋氏の編年案に照らし合わせて検討してみると、堤遺跡の出土遺物は高橋氏のいう７期（８世紀中葉～後葉）に相当する可能性が高いと考える。またＢ区の竪穴住居群周辺で瓦の破片が１点見つかっている。形態的な特徴からは時期不明であるが、周辺遺構との関連を考えると、



（縮尺：石鏃 1/3　銭貨 1/4　その他 1/8）

第 52 図　時代毎にみた出土遺物

８世紀代の範疇に収まる可能性が高い。

また１号住居跡の床面上から出土した遺物の中に、土師器の脚付坏１点（３）が認められる。この脚付坏は内外面を黒色処理しており、底面に四つの脚が付くが、脚は全て欠損し、その痕跡のみであった。この脚付坏は口縁部も欠損しており、形態全体が定かではないが、胴部形態（やや直立気味で段を有しない点）が、他の遺構から出土した坏の形態とは異なる。また底部に脚が付く点はこの脚付坏が仏器の模造品の可能性も考えられるが、岩手県内での事例が多くないため定かではない。なお県外では宮城県・福島県で数例知られており、それらは７世紀末葉～８世紀初頭に比定されるものが多い。堤遺跡から出土した脚付坏は欠損が激しく、形態からは時期を推し量れない。ただし共伴する甕の形態が他の遺構から出土している甕類の形態と異なっており、１号住居の遺物は他の遺構の遺物より時期がやや古い可能性がある。したがって第52図には奈良時代に含めているが、奈良時代以前、７世紀代に帰属する可能性がある。

なお、瓦、ミニチュア土器、そして脚付坏と、時期は同一のものではない可能性があるが、堤遺跡でこのような特異な遺物類、祭司的と言うべきか、あるいは仏教的な要素をもつ遺物が見つかったことは意義が大きい。ただしこれらに関連すると推定できる遺構、あるいは検出遺構自体にそういった要素が見いだせるものが認められなく、どのような経緯でこれらの遺物が堤遺跡にもたらされたかは定かではない。

（３）平　安　時　代

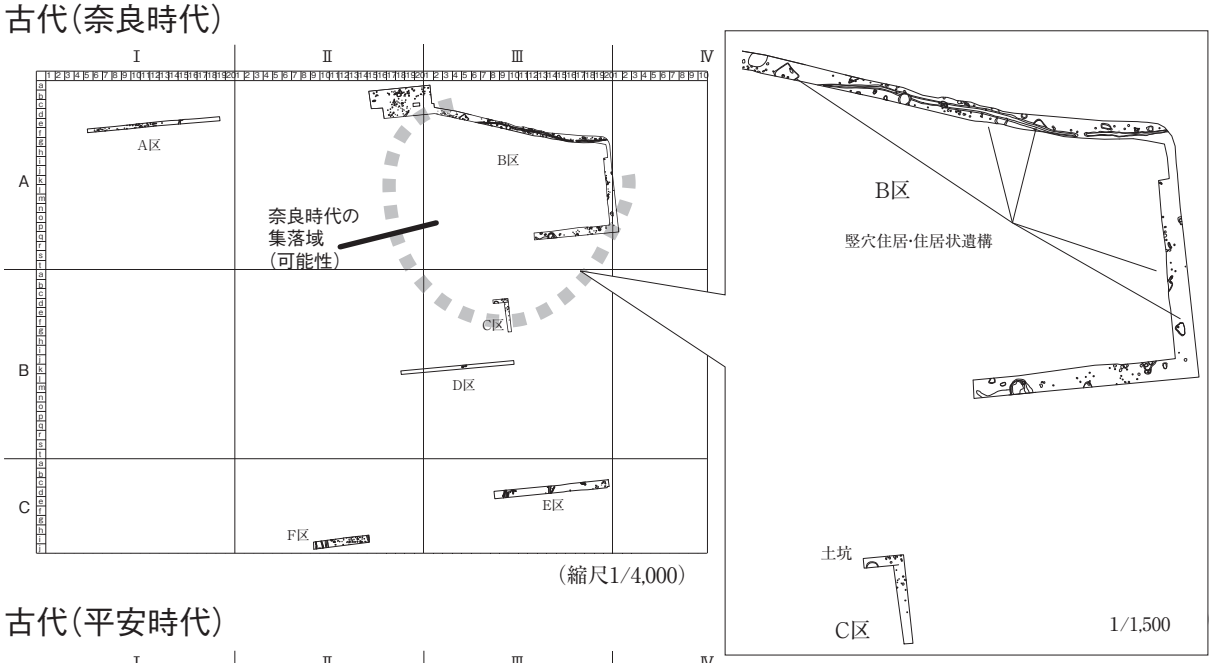
土師器・須恵器がA区、B区、E区から、また灰釉陶器の破片がB区から出土している。A区の遺物は土師器の小片が出土したにすぎず、またA区の遺構は近世に比定されると考えており、したがってこれらの遺物は流れ込みの可能性が高い。B区では調査区南東側に位置する27号土坑とその周辺から出土している。またB区東南端の「包含層」とした範囲からは比較的まとまって該期の土師器・須恵器が出土しており、一括性が高い一群と判断している。主な出土資料は第52図に図示したが、甕は破片のみで形態が分からないものばかりで、むしろ形態の分かるものは坏に多かった。時期については堤遺跡周辺で同時期の遺物が出土している作屋敷遺跡の土師器群と比較し９世紀代に比定されると考えている。また灰釉陶器片は「包含層」の北側、遺構外から出土している。猿投産の壺頸部片で９世紀後半に帰属すると考えられる資料であり、他の「包含層」出土の土師器・須恵器の年代とも概ね符合する。平安時代に比定される遺物群は出土量こそけっして多くないが、時期的にはまとまりのある一群であると考えられそうである。

（４）江　戸　時　代

Ｂ区、Ｅ区から出土している。出土量は少ないが種類自体は豊富であり、陶磁器、銭貨、鉄製品、砥石、火打石また用途不明の石製品が見受けられる。出土位置についてみてみると、銭貨や砥石は柱穴や土坑などの遺構内から出土しており、その他の遺物は遺構外から出土している。なお遺構外出土の遺物は、近世に比定される遺構周辺に分布する傾向が見受けられた。

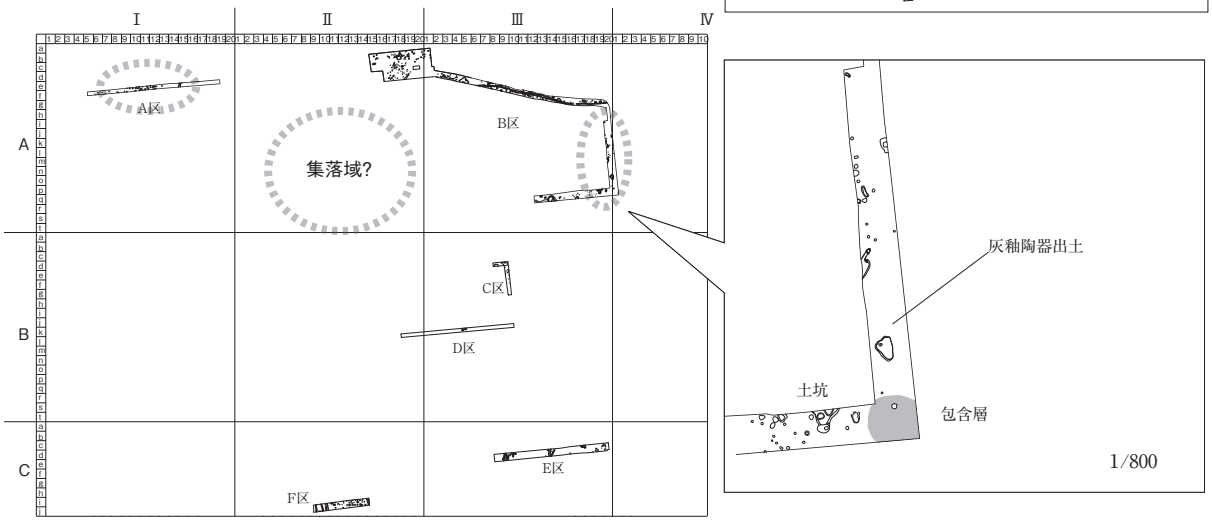
陶磁器はＢ区から肥前産の磁器皿（18世紀）が、Ｅ区からは大堀相馬産の陶器碗、土瓶（18・19世紀）と肥前産の磁器皿（18世紀）が見受けられる。ただしいずれも小片である。銭貨は柱穴（Pit194）の埋土中から出土している。無名銭であり、詳細な年代は不明であるが、近世（江戸時代）の可能性が高い。砥石は比較的出土点数が多く、特に45号土坑からまとまって出土している。凝灰岩製で形態は方形基調をとる。いずれも欠損しており、また使用面の磨滅が著しいものも見受けら

古代（奈良時代）



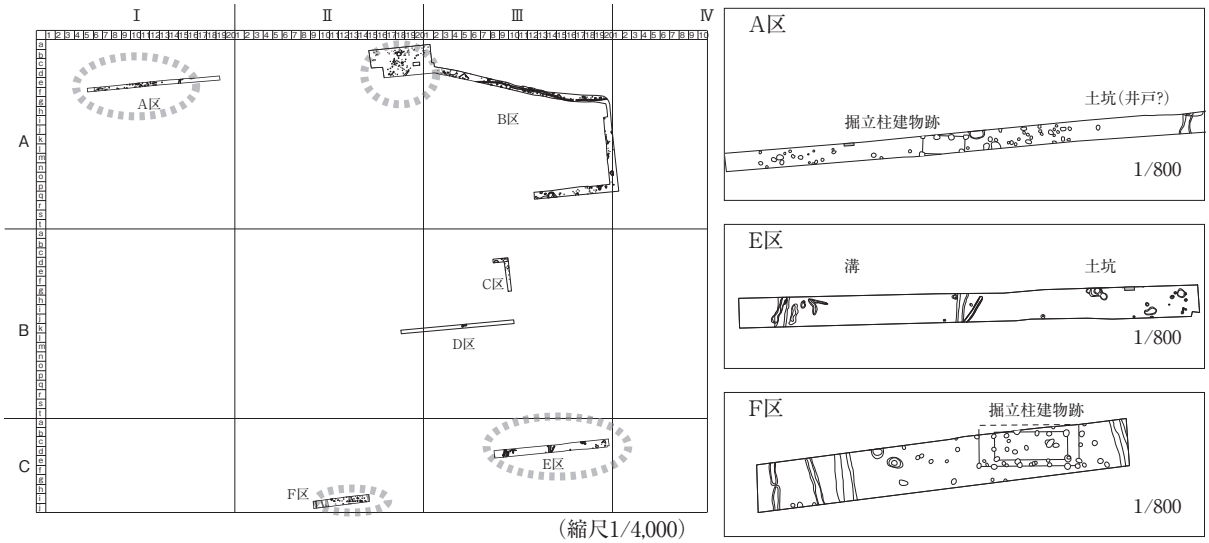
（縮尺1/4,000）

古代（平安時代）



（縮尺1/4,000）

近世（江戸時代）



（縮尺1/4,000）

第 53 図　調査区位置図

れる。火打ちは２点（47・117）見受けられ、硬質の石材を素材とし、不規則な剥離が認められた。金属製品は煙管の吸い口１点（110）で、遺構内から出土している。

（5）近 代 ～ 現 代

１号性格不明遺構から金属製品１点（51）、Ｂ区の攪乱から陶磁器類やガラス製品数点が出土している。他の遺物と比べて新しい遺物であり、かつ多くが攪乱出土ということもあり、それらは堤遺跡自体の性格からかなりかけ離れるが、金属製品１点と特徴的なガラス製品１点について述べる。

金属製品（51）は毛抜きバサミである。共伴遺物がなく、従って詳細な時期は不明であったが、形態からみても現代に近いものと判断するがもっと古い可能性がある。ガラス製品（73）は瓶で、外面に「BULL-DOG」と印字されている。この印字からソース瓶と推測され、従って現代の遺物であると考える。容量は360mlである。

3　遺構について（第53図）

（1）奈　良　時　代（８世紀代）

Ｂ区とＣ区の北側で該期に比定される遺構がみつかっている。特にＢ区は竪穴住居５棟、住居状遺構１棟が分布する調査区である。遺構はＢ区の北側に集中する傾向があるものの、５号住居や１号住居状遺構はその範囲より離れた南側に位置するので、比較的広い範囲（第53図上、トーンで示した範囲）で該期の集落域が展開したものと考える。またＢ区では５号住居・１号住居状遺構より南側には該期の遺構は認められないが、さらに南に位置するＣ区では遺物が多量に出土した36号土坑がみつかっており、そこまで集落域は広がっているか、あるいは別の集落域が南側に展開しているかのいずれかであろうと推察する。どちらにせよ、今回の調査から、堤遺跡においては８世紀代の集落が１～２単位で広がっていることが分かった。また遺構の分布をみても比較的狭い範囲に遺構が集中する小規模な集落であったことが想像できる。ちなみに平成22年度調査区はＡ区の約20m西に位置し、平安時代の竪穴住居がみつかっている。またＡ区およびＢ区の北東側には古代の遺構そのものが認められない。したがって奈良時代の竪穴住居群による集落は今回みつかった遺構群の範囲より西側には広がらないものと推測する。

遺構は竪穴住居、住居状遺構、土坑がみつかっている（溝は時期不明）。竪穴住居・住居状遺構の分布は前述の通りである。今回カマドが確認できた竪穴住居は５号住居1棟のみで、１号住居については調査区外に付されている可能性がある。２～４号住居跡は形態からみて元々カマドの付属しない小型の竪穴住居と考えるべきかもしれない。土坑は竪穴住居の周辺に分布する。詳しい関連性は定かではないが、遺構の位置や出土遺物の類似性から、おそらく竪穴住居と土坑はセット関係にあると考えられる。

堤遺跡の今回の遺構群の在り方を周辺の遺跡と比べてみる。隣接する小十文字遺跡にも該期に相当する竪穴住居群がみつかっている。集落規模は小十文字遺跡の方が大規模であるが、竪穴住居の規模では堤遺跡の２～４号住居にみられる小型の竪穴住居と同様のものが多く、両遺跡は類似した内容を有すると言える。そういった点からは堤遺跡の奈良時代集落は、この地域内における、普遍的に広がる集落の一つと言えそうである。なお、前述の通り、１号住居跡から脚付坏が出土しており、１号住居は８世紀代よりやや古い可能性がある。また12号土坑からはミニチュア土器が、またその周辺からは瓦の破片が出土しており、こういった出土遺物から堤遺跡の奈良時代集落が他の遺跡とは異なった

性格（祭祀というべきか、または仏教的な要素をもっていたか）を有していた集落の可能性もある。ただし、それを裏付ける遺構はみつかっていない。

（2）平　安　時　代（9世紀代）

Ｂ区の27号土坑が相当する。27号土坑はＢ区東南端に位置し、それと隣接して「包含層」が広がっている（第53図中）。したがってＢ区では調査区の南東端に限定して平安時代の遺構・遺物が分布する傾向にある。ただＢ区では該期に比定される竪穴住居がみつかっていないため、具体的な集落域は定かではない。みつかった遺構は土坑のみで、それ自体は形態の不整形な用途不明なものでもあり、集落もまたその中での遺構の位置付けも不明である。27号土坑群の東側に位置する「包含層」は層厚が10～20cmで、若干北から南へと傾斜する。出土遺物は土師器・須恵器で概ね９世紀代に帰属するものが多い。出土量は比較的多くないが、遺物の出土状況からみても、所謂「捨て場」的な用途を有する場であったと推測する。この包含層の北側からは猿投窯産の灰釉陶器１点が出土している。灰釉陶器は壺の頸部片で猿投産黒笹90号に類似し、９世紀後半に帰属する。したがって包含層出土の土師器・須恵器とも時期的に符合し、包含層、灰釉陶器出土地点合わせて平安時代の生活域と言えそうである。これらの遺物の存在は周辺のどこかに該期の集落があったことを想起させる。今回みつかった遺構・遺物群はその集落域（生活圏）の一端に相当する可能性が高い。

（3）江　戸　時　代

この時代については前述の通り、遺物の種類が豊富だが、出土量自体は少なく、加えて遺構に共伴するものはさらに少ない。したがって平面形や埋土の様相から該期に比定させた遺構の広がりをもって述べる（第53図下）。今回、検出遺構のなかで最も多かった柱穴は多くが該期に相当すると考えるが、F区のPit35の埋土から出土した炭化物を年代測定したところ、1600年代という測定結果を得た（Ｖ章参照）。また遺構内外から出土した陶磁器片で時期が分かるものは概ね18世紀代である。それを根拠として、柱穴群については近世（17～18世紀、またはそれ以降）に帰属するものと推定した。またB区のPit184の埋土からは近世に推定される銭貨（無名銭）が出土している。

該期の遺構はA区、B区、E区、F区で点在して、特にA区、B区、F区では掘立柱建物跡がみつかっている。ただしA区とF区、それぞれでみつかった掘立柱建物跡同士は距離にして約100m離れており、別戸の建物であると考える。古代同様、遺跡内で大きくまとまるというより、遺跡内に小規模な集落（民家？）が点在する様相が窺える。

各調査区を概観すると、A区では１号掘立柱建物跡の他、井戸の可能性が考えられる大型の土坑（３号土坑）がみつかっており、民家とその付属施設の可能性が高い。B区では２号掘立柱建物跡がみつかったが、全体のほとんどが調査区外に及んでおり、どのような建物であったかは定かではないが、その周辺には多数の同様な柱穴が点在しているので、それらも含め、何らかの建物や柵列が複数、存在したものと考える。17号土坑は比較的大型の土坑だが砥石などがまとまって出土している。E区では掘立柱建物跡はみつかっていないが該期に比定される土坑が少なくとも３基みつかっている。出土遺物は砥石、火打ち石で周辺に居住施設としての建物があったことが想起される。土坑自体の用途は不明であるが、41号土坑は竹材で壁を補強しており、生活用具などを収納した土坑（施設）であったかと思われる。F区からは庇付の掘立柱建物跡が１棟みつかっており、民家の可能性が高い。またその周辺から柱穴が多数みつかっており、推定できなかったが、他にも別棟の民家や付属施設としての建物があった可能性が高い。

こうしてみていくとA区、F区には居住施設（民家）と考えられる掘立柱建物跡が存在し、B区、E区はその他に生活に関わる施設や作業スペースがあったと捉えることできそうである。

以上のように、今回の発掘調査では奈良時代（８世紀代）、平安時代（９世紀代）、江戸時代（17～18世紀）の３つの時代において、それぞれに小規模な集落（単位）が転々と地点を変えながら展開していく様子が明らかになった。

限られた範囲での調査で推定の部分も多々ある。それらは今後も続く周辺地区での発掘調査で得られる成果と比較検討されることで、少しずつ、明らかになっていくものと思われる。

参考文献

胆沢町教育委員会　1981 『胆沢町史Ⅰ　原始古代編』

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

2010 『尼坂遺跡・牡丹野遺跡・作屋敷遺跡発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 569 集）

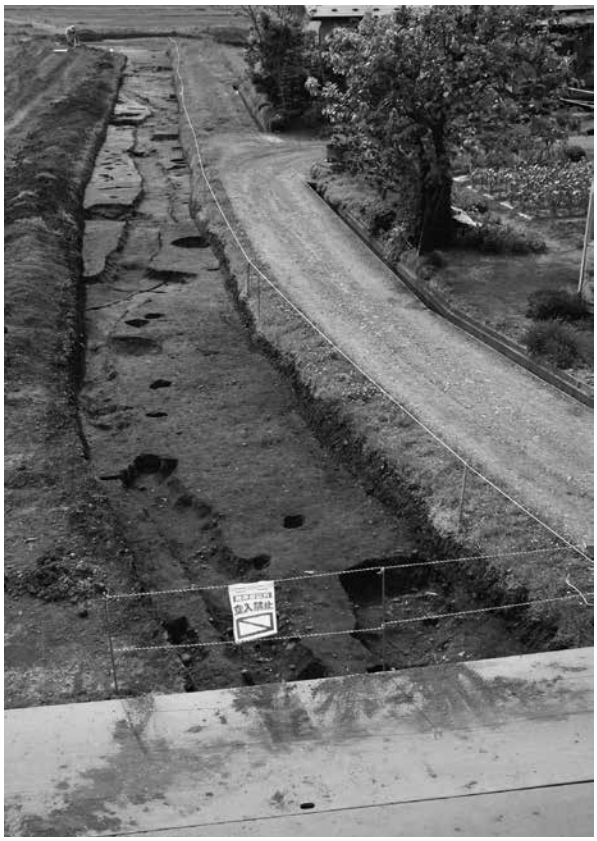
2012 『国分・川端・堤遺跡発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 600 集）

東北学院大学文学部　2007 『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』

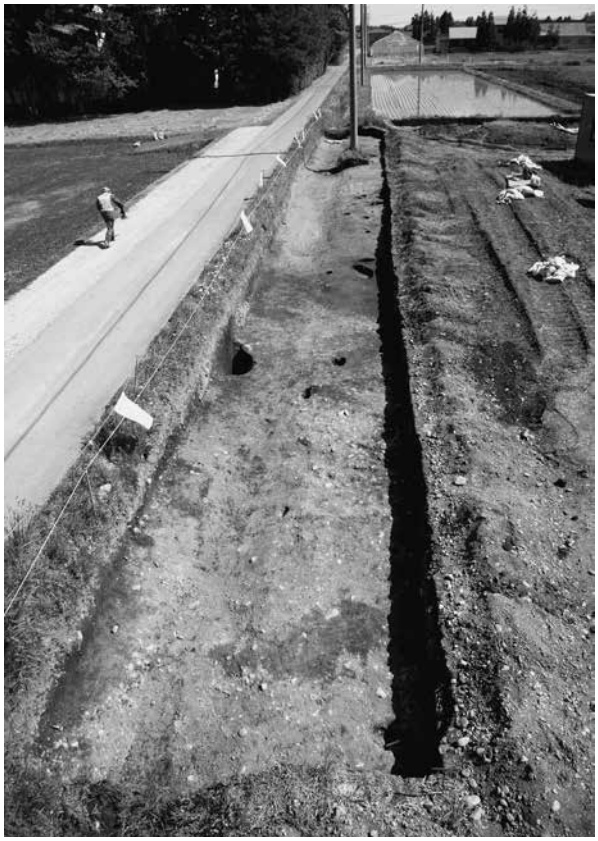
（平成 15 年度～平成 18 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）研究成果報告書）

写　真　図　版

A区（西から）



B区北側（東から）



B区東側（北から）

B区南側（西から）

写真図版１　調査区全景（1）

C区本調査区範囲（東から）

D区（西から）

E区（西から）

F区（西から）

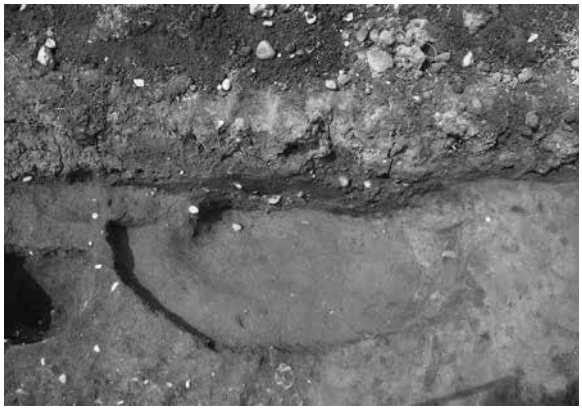
写真図版２　調査区全景（2）

B区基本土層（南から）

C区基本土層（北から）

E区基本土層（南から）

写真図版３　基本土層



１号土坑全景（南から）

１号土坑断面（南から）

２号土坑全景（東から）

２号土坑断面（北から）

３号土坑全景（西から）

３号土坑断面（南東から）

１号溝全景（南から）

１号溝断面（南から）

写真図版４　Ａ区検出遺構（１）

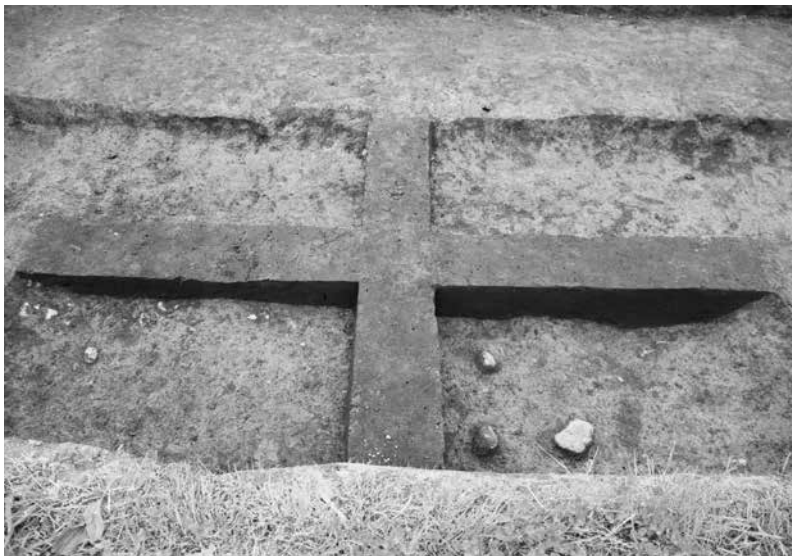
A区柱穴群（西から）

B区１号住居全景（南東から）

B区１号住居断面Ａ－Ａ’（北西から）

写真図版５　Ａ区検出遺構（2）・Ｂ区検出遺構（1）

２号住居全景（南から）



２号住居断面Ａ－Ａ’（北から）

３号住居全景（北東から）

写真図版６　Ｂ区検出遺構（2）

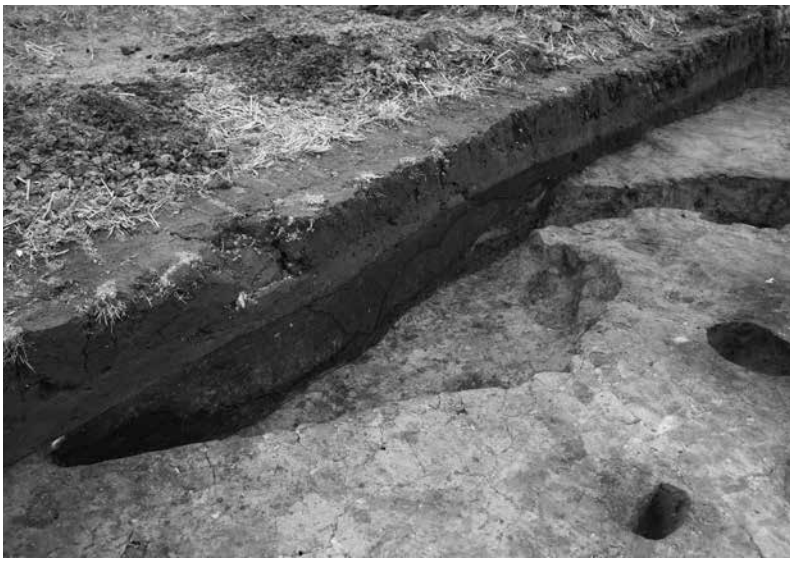
３号住居断面Ａ－Ａ’（南から）

４号住居全景（北西から）

４号住居断面Ａ－Ａ’（北西から）

写真図版７　Ｂ区検出遺構（3）

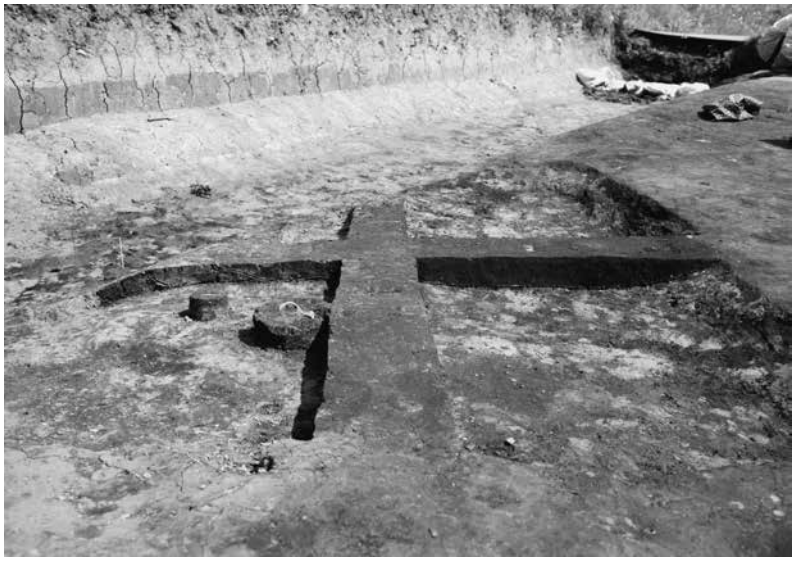
５号住居全景（南西から）



５号住居断面Ａ－Ａ’（南東から）

１号住居状遺構全景（南東から）

写真図版８　Ｂ区検出遺構（4）



1号住居状遺構断面Ｂ－Ｂ’（北西から）

Ｂ区柱穴群全景（東から）

２号溝全景（東から）

写真図版９　Ｂ区検出遺構（5）

２号溝断面Ａ－Ａ’（西から）

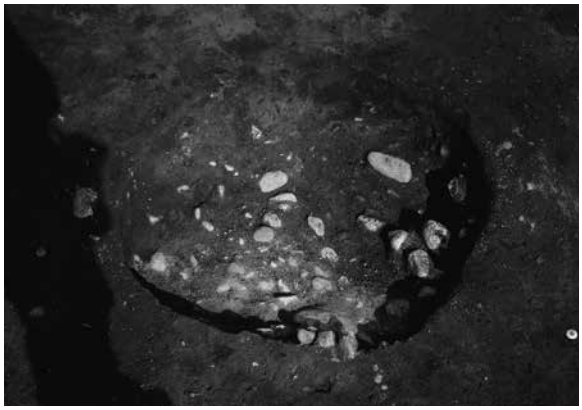
２号溝断面Ｂ－Ｂ’（西から）

２号溝断面Ｃ－Ｃ’（西から）

２号溝断面Ｄ－Ｄ’

４号土坑全景（北から）

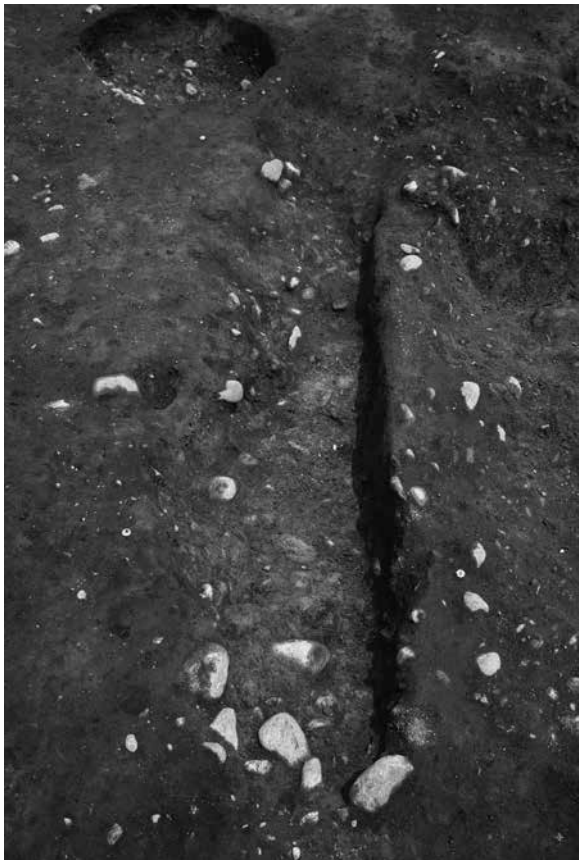
４号土坑断面（北から）



５号土坑全景（西から）

５号土坑断面（西から）

写真図版 10　Ｂ区検出遺構（6）



６号土坑全景（西から）

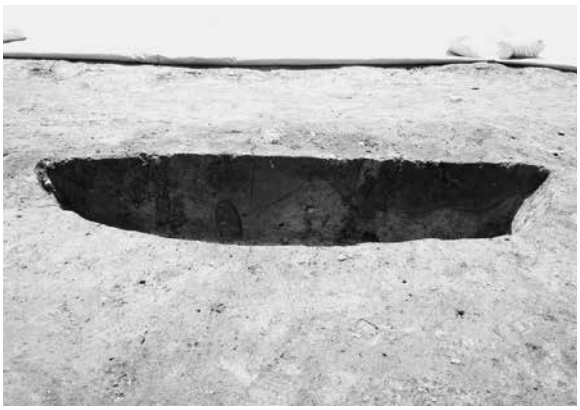
６号土坑断面（西から）

作業風景

７号土坑全景（西から）

７号土坑断面（西から）

８号土坑全景（西から）

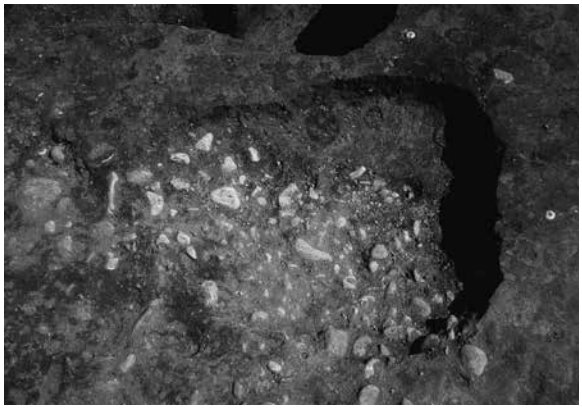


８号土坑断面（西から）

写真図版 11　Ｂ区検出遺構（7）

9 号土坑全景（東から）

9 号土坑断面（東から）

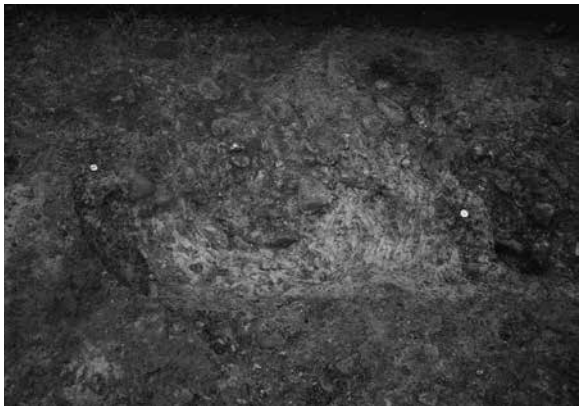


10 号土坑全景（北から）

10 号土坑断面（北西から）

11 号土坑全景（南から）

11 号土坑断面（北から）



12 号土坑全景（北から）

12 号土坑断面（北から）

写真図版 12　B 区検出遺構（8）

13 号土坑全景（北から）

13 号土坑断面（南から）

14 号土坑全景（南から）

14 号土坑断面（北から）

15 号土坑全景（西から）

15 号土坑断面（西から）

16 号土坑全景（南から）

16 号土坑断面（北から）

写真図版 13　B 区検出遺構（9）

17 号土坑全景（北から）

17 号土坑断面Ａ－Ａ’（北から）

18 号土坑全景（東から）

18 号土坑断面（南から）

19 号土坑全景（北東から）

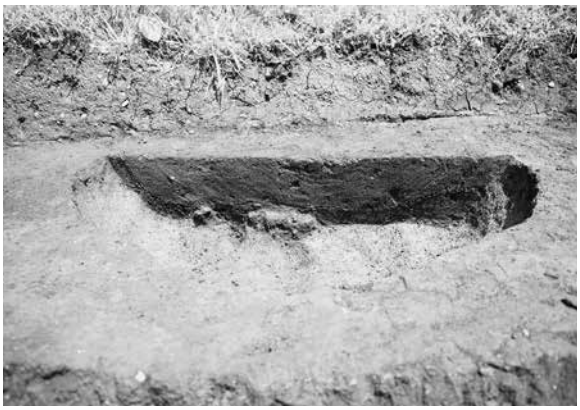
19 号土坑断面（北西から）

21 号土坑全景（北から）

21 号土坑断面（南から）

写真図版 14　Ｂ区検出遺構（10）

20 号土坑全景（北から）



20 号土坑断面（南から）

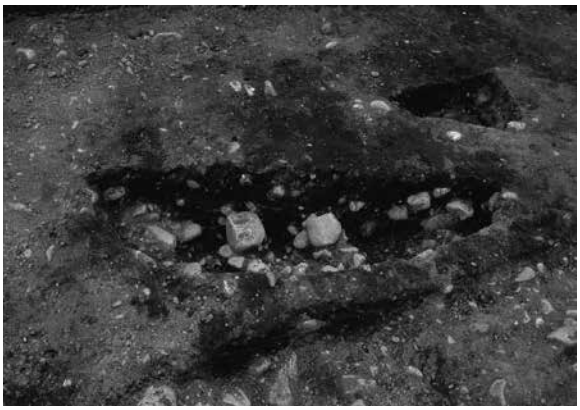
20 号土坑高坏出土状況（西から）

作業風景

22 号土坑全景（北から）

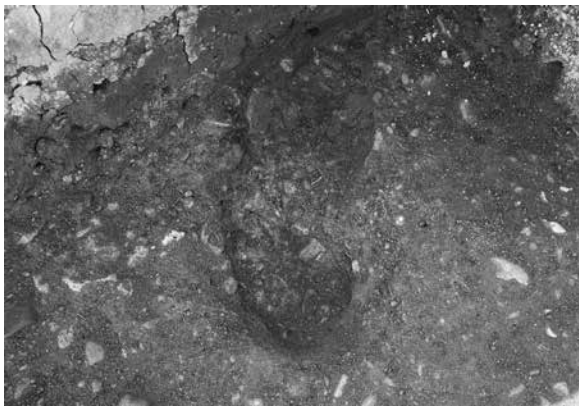
22 号土坑断面（西から）

23 号土坑全景（東から）



23 号土坑断面（南から）

写真図版 15　B 区検出遺構（11）



24 号土坑全景（南西から）

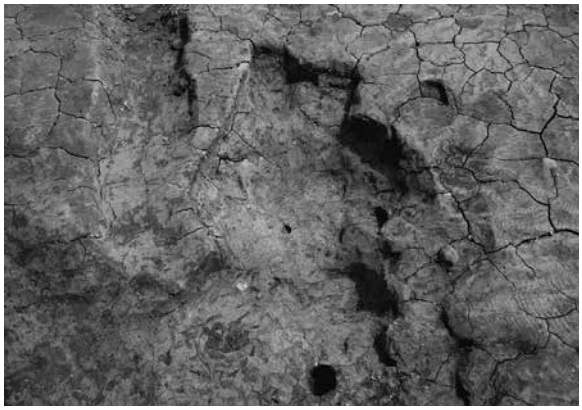
24 号土坑断面（南東から）

25 号土坑全景（北から）

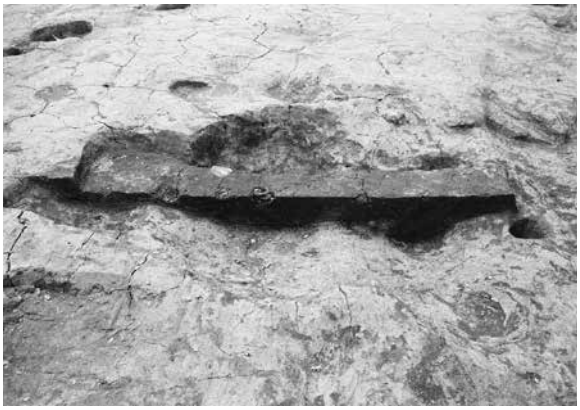
25 号土坑断面（西から）

26 号土坑全景（南から）

26 号土坑断面（南から）



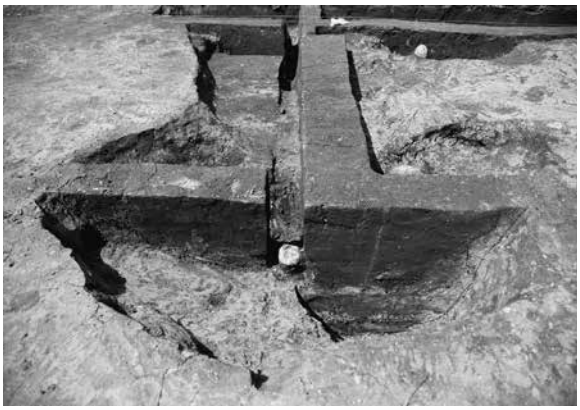
27 号土坑全景（北から）



27 号土坑断面（東から）

写真図版 16　B 区検出遺構（12）

28 号土坑全景（東から）



28 号土坑断面（南から）

29・30 号土坑全景（西から）

29・30 号土坑断面Ａ－Ａ’（南西から）

30 号土坑全景（西から）

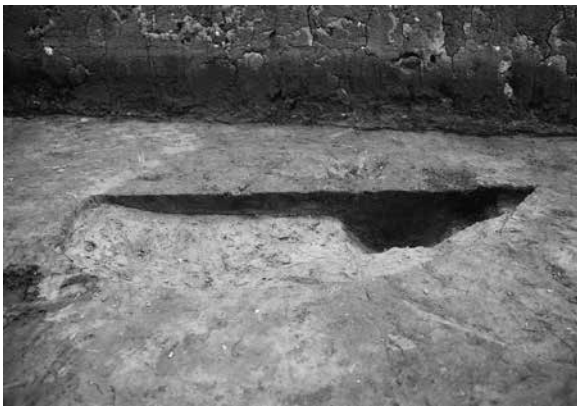
29・30 号土坑断面Ｂ－Ｂ’（南西から）

31 号土坑全景（南から）

31 号土坑断面（東から）

写真図版 17　Ｂ区検出遺構（13）

作業風景



32 号土坑断面（北から）

33 号土坑全景（東から）

33 号土坑断面（北東から）

34 号土坑全景（南から）

34 号土坑断面（東から）

35 号土坑全景（北から）

35 号土坑断面（南から）

写真図版 18　B 区検出遺構（14）

1 号性格不明遺構全景（北から）

1 号性格不明遺構断面（北から）

Ｂ区南東端遺物包含層遺物出土状況 1（北東から）

Ｂ区南東端遺物包含層遺物出土状況 2（北東から）

Ｃ区確認調査区遺構検出状況（南から）

写真図版 19　Ｂ区検出遺構（15）・Ｃ区確認調査区

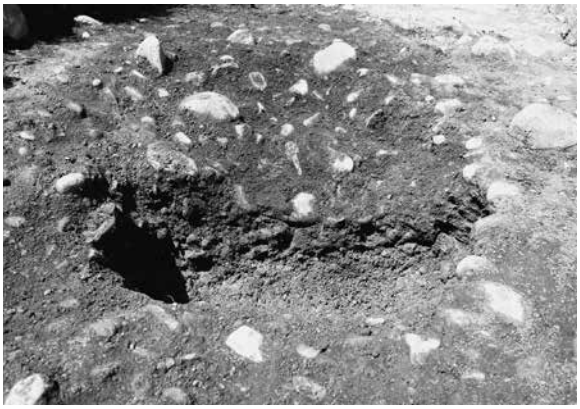
36 号土坑全景（北から）

36 号土坑断面（北から）

D区基本土層（北から）

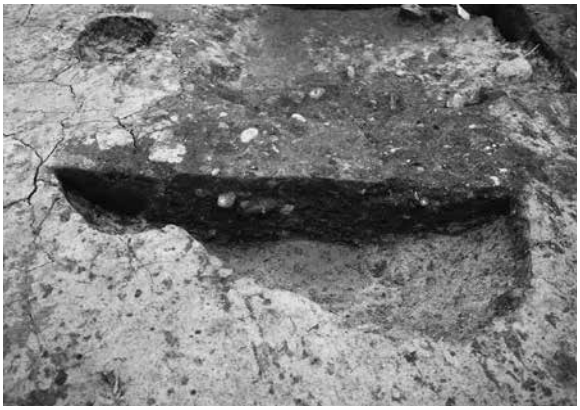
37 号土坑全景（南から）

38 号土坑全景（北から）



38 号土坑断面（東から）

39 号土坑全景（北から）



39 号土坑断面（北東から）

写真図版 20　C区～E区検出遺構

40 号土坑全景（北から）

40 号土坑断面（北から）

41・42 号土坑全景（南西から）

41 号土坑断面（北東から）

41 号土坑竹材出土状況（東から）

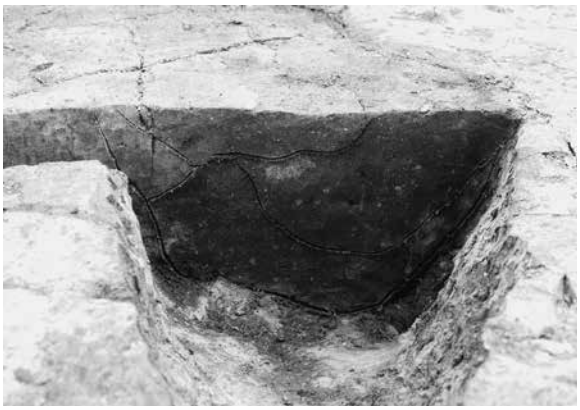
42 号土坑礫出土状況（東から）

43 号土坑全景（南から）

43 号土坑断面（西から）

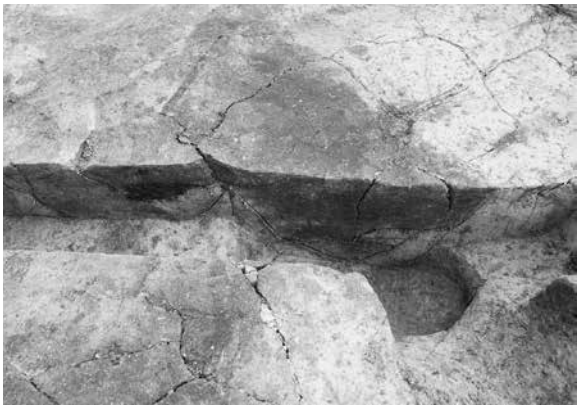
写真図版 21　Ｅ区検出土遺構（1）

44 号土坑全景（北から）



44 号土坑断面（南から）

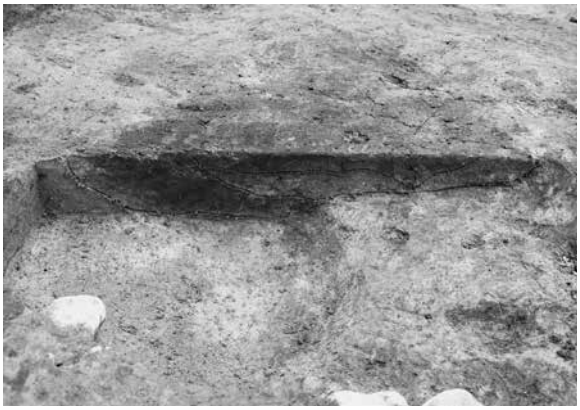
45 号土坑全景（東から）



44・45 号土坑断面（南東から）

作業風景

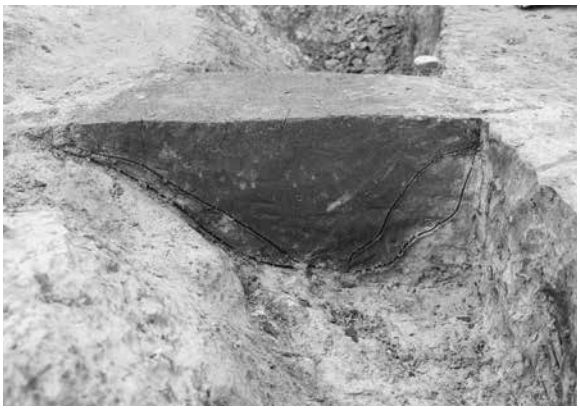
46 号土坑全景（北から）



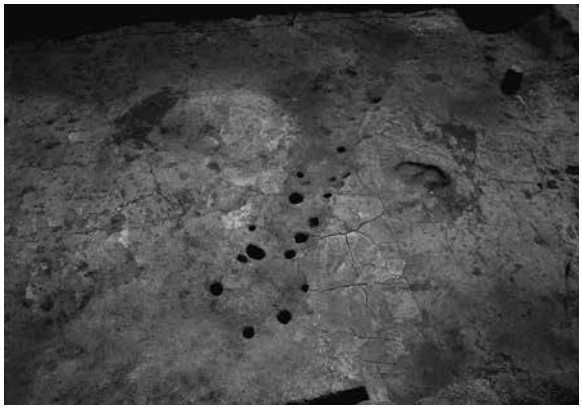
46 号土坑断面（東から）

写真図版 22　E 区検出遺構（2）

47 号土坑全景（北東から）



47 号土坑断面（北から）



3 号溝全景（北から）

3 号溝断面（南から）

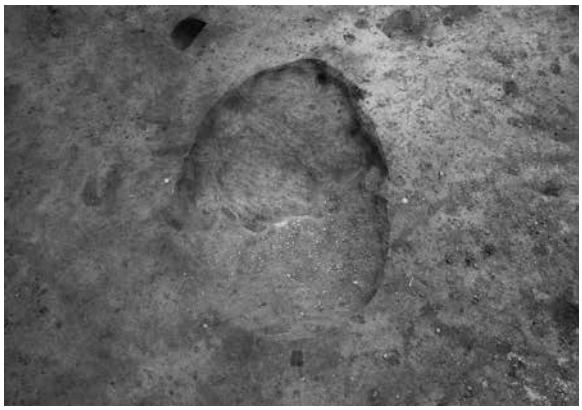
4 号溝全景（北から）

4 号溝断面（南から）

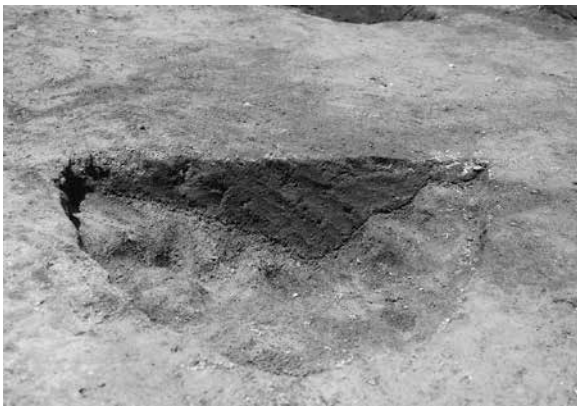
5 号溝全景（北から）

5 号溝断面（南から）

写真図版 23　E 区検出遺構（3）

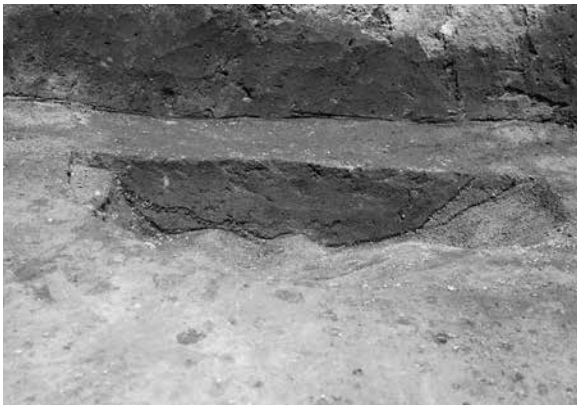


48 号土坑全景（西から）



48 号土坑断面（南東から）

49 号土坑全景（北から）



49 号土坑断面（南から）

6 号溝全景（南から）

6 号溝断面（南から）

7 号溝全景（南から）

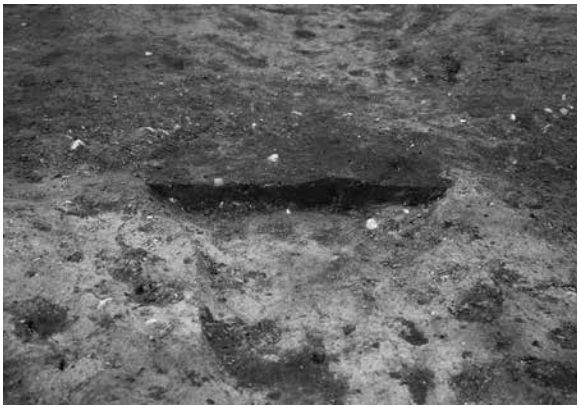
7 号溝断面（南から）

写真図版 24　F 区検出遺構（1）

８号溝全景（北から）

８号溝断面（南から）

９号溝全景（南から）

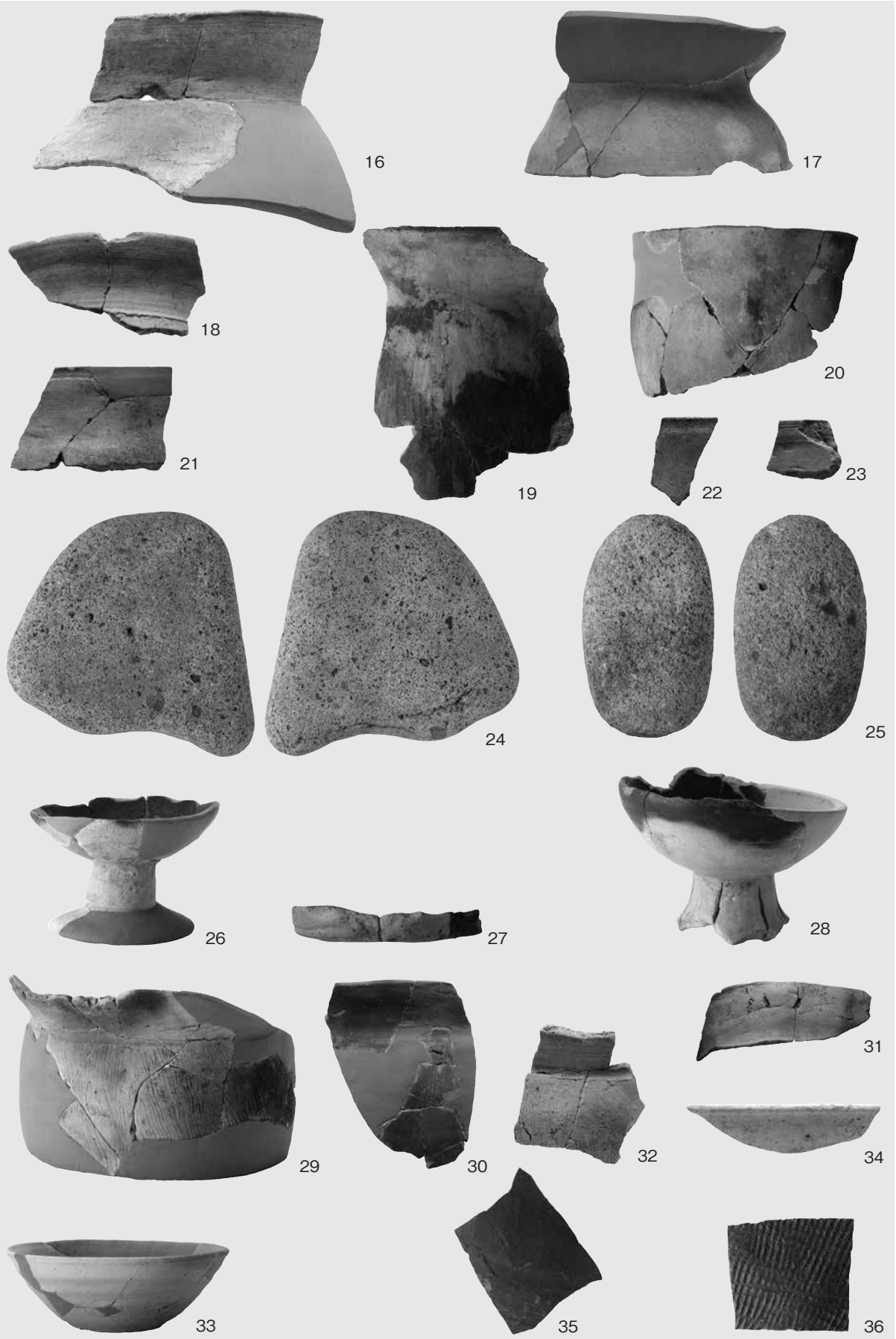


９号溝断面（南から）

Ｆ区柱穴群（西から）

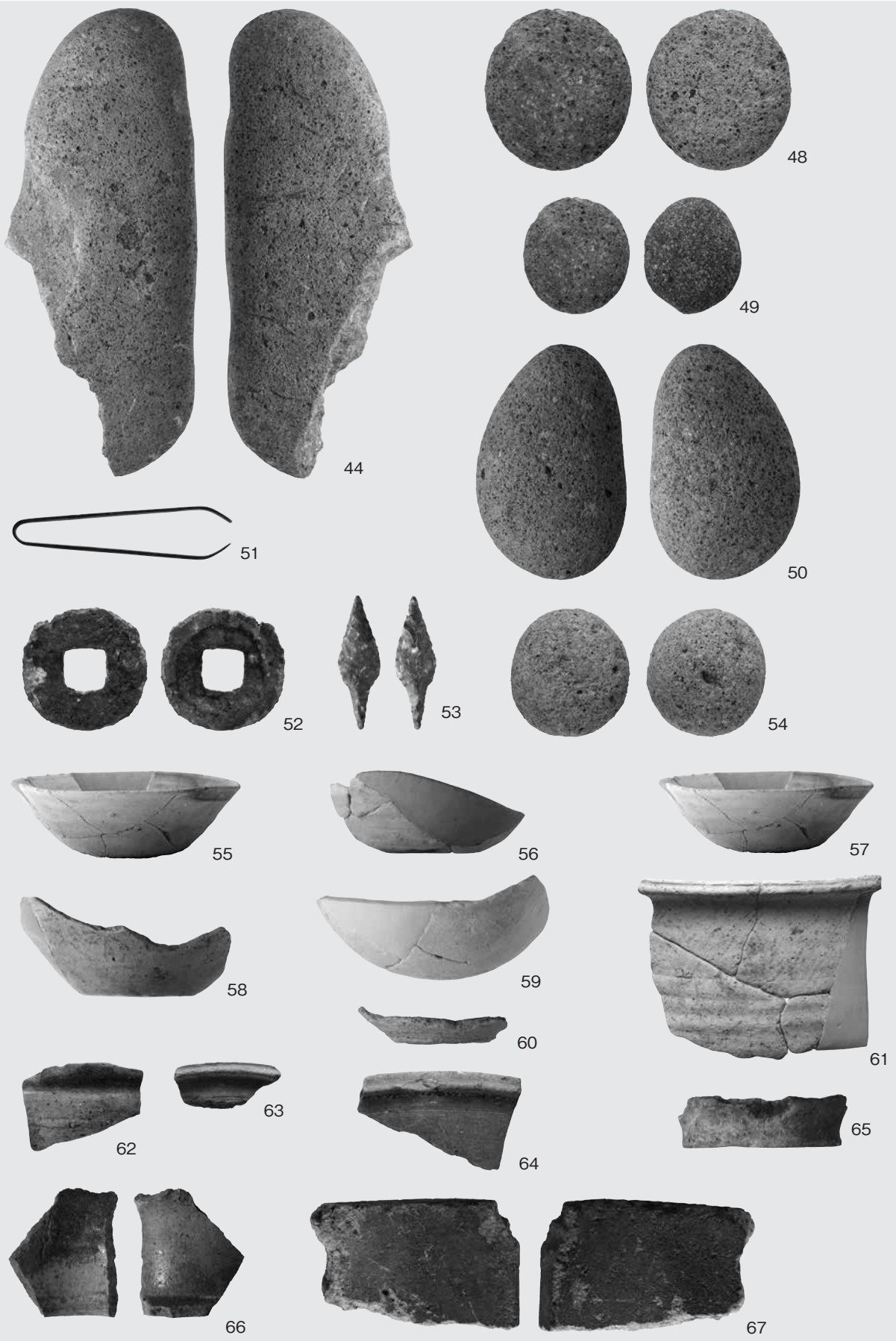
写真図版 25　Ｆ区検出遺構（2）

写真図版 26　A 区出土遺物・B 区 1 ～ 4 号住居出土遺物

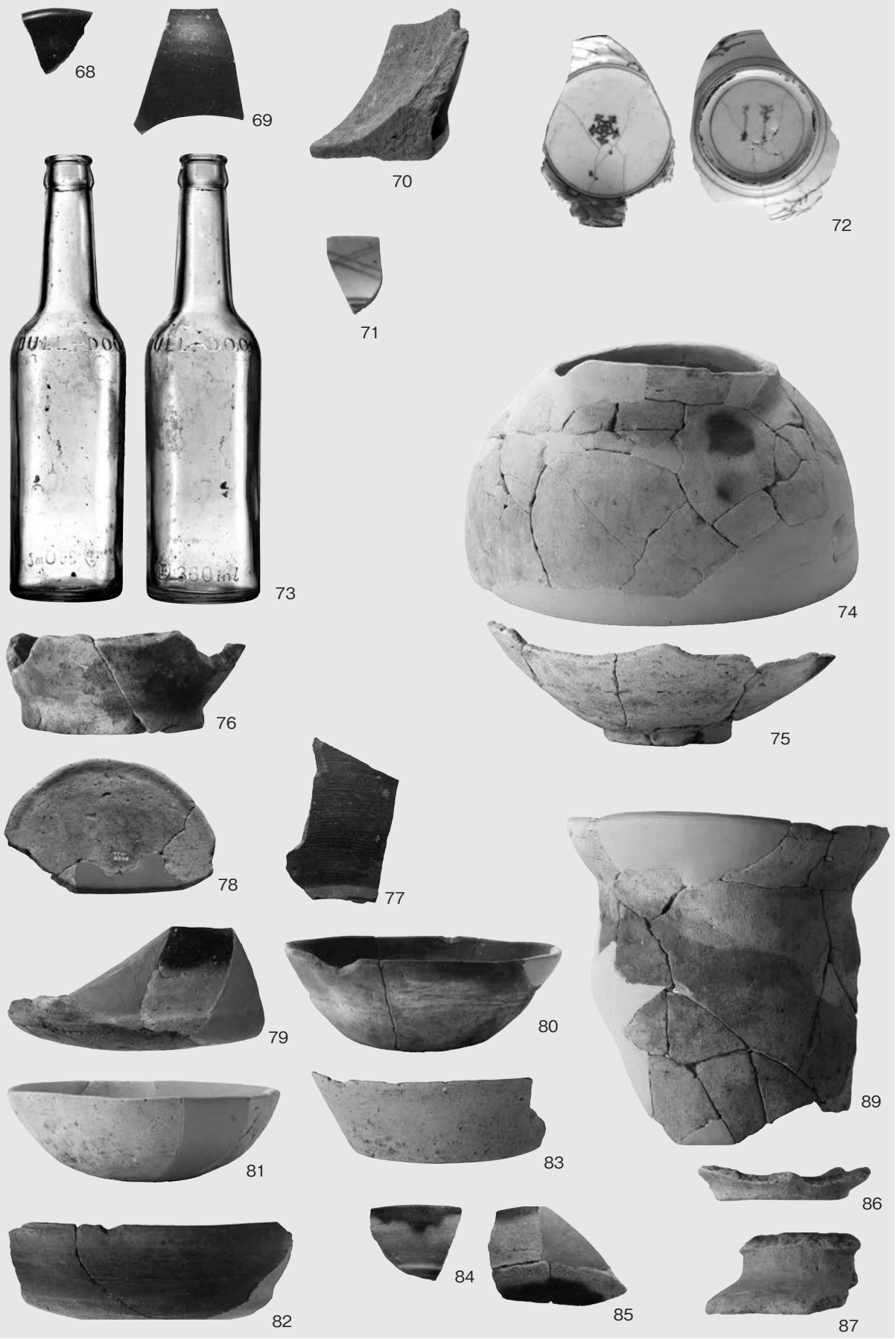


写真図版 27　B 区 4 号住居・土坑出土遺物

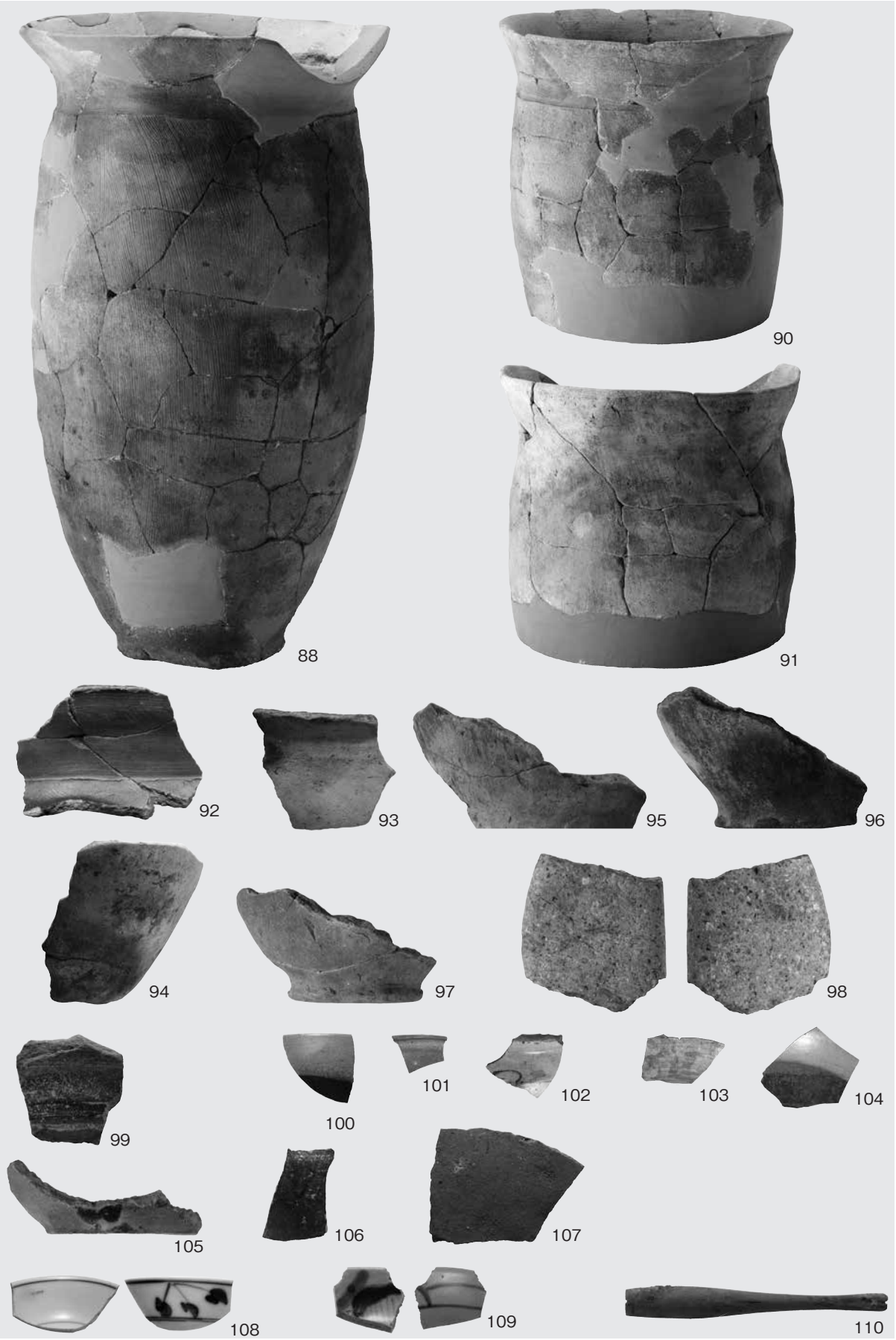
写真図版 28　B区土坑出土遺物



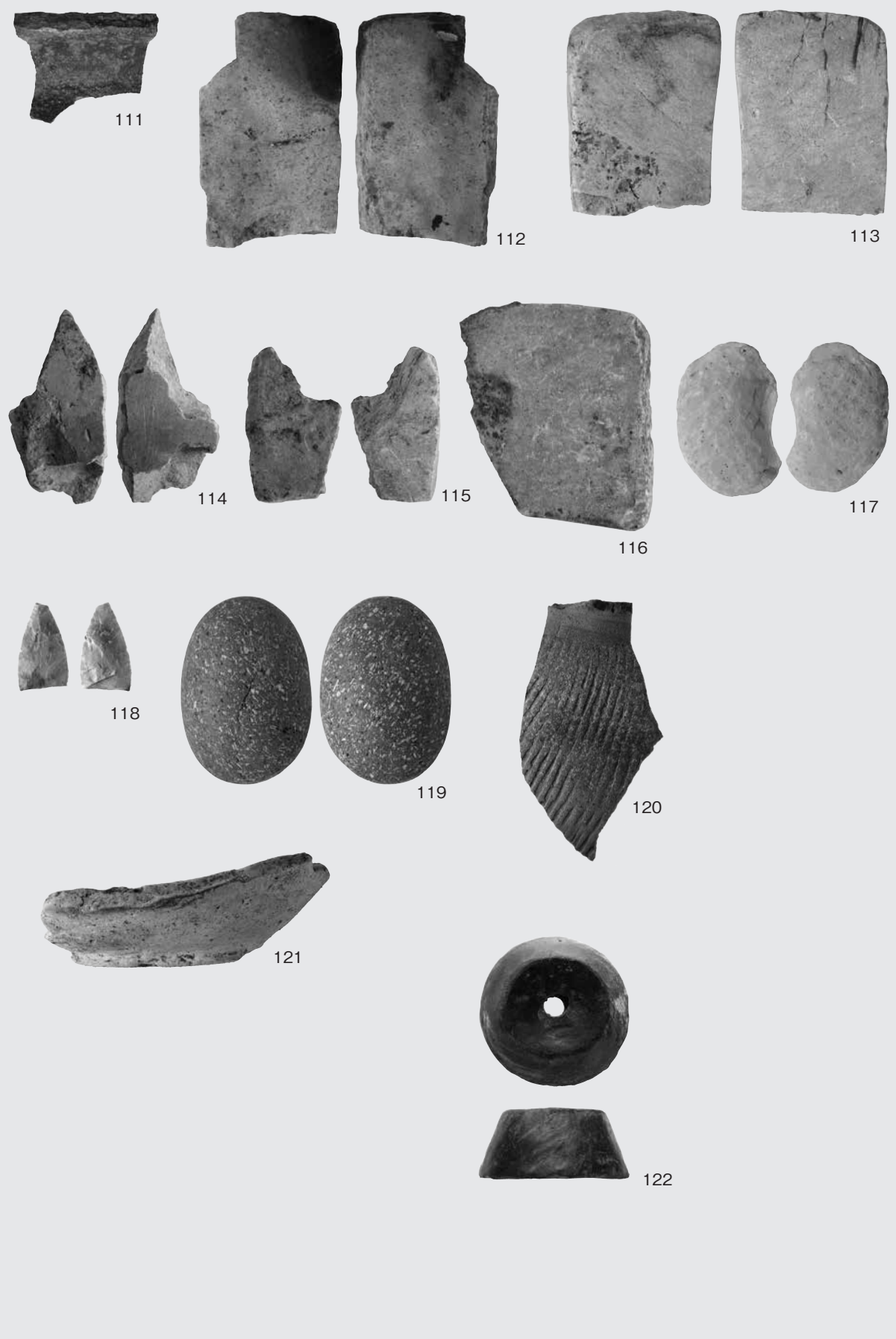
写真図版 29　B 区土坑・遺構外出土遺物



写真図版 30　B区遺構外・C区土坑出土遺物



写真図版 31　C区土坑・E区土坑出土遺物



写真図版 32　E区土坑・遺構外出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	つつみいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	堤遺跡発掘調査報告書
副 書 名	経営体育成基盤整備事業都鳥２地区関連遺跡発掘調査
巻　　次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 615 集
編 著 者 名	須原　拓
編 集 機 関	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所　在　地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地　ＴＥＬ（019）638-9001
発行年月日	2013 年　月　　日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所収遺跡	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つつみ 堤　遺跡	いわてけんおうしゅうしいさわく 岩手県奥州市胆沢区 なつたあざよつはしら 南都田字四ッ柱 201 ほか	03215	NE25-0226	39 度 08 分 13 秒	141 度 05 分 26 秒	2011.04.25 ～ 2011.06.13	1,671 ㎡	経営体育成 基盤整備事業 都鳥２地区

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
堤　遺跡	集落跡	古代 （奈良時代／ 平安時代）	竪穴住居５棟 住居状遺構１棟 土坑 36 基	土師器、須恵器 石製品 灰釉陶器片 瓦	
	集落跡	近世	土坑 13 基 掘立柱建物跡４棟 柱穴 352 個	陶磁器類 銭貨・煙管・ 砥石・石製品	
	不明	不明	溝９条		

要約	水路部分のみの調査で、調査区は６箇所に及ぶ。奈良時代（８世紀代）の竪穴住居が調査区内に点在し、またその周辺には土坑や溝が密集する。おそらくはある程度大きな規模を有する集落が存在したものと推定される。またそれらの遺構とは別のエリアで柱穴群や近世陶磁器を伴う土坑などが認められ、本遺跡内において古代のみならず、近世においても集落が営まれていたことが分かる調査となった。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第615集

堤遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業都鳥２期地区関連遺跡発掘調査

印　刷　平成25年３月18日

発　行　平成25年３月21日

編　集　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電話（019）638－9001

発　行　岩手県県南広域振興局農政部農村整備室

〒023-1111　岩手県奥州市江刺区大通り7－13

電話（0197）35－8443

（公財）岩手県文化振興事業団

〒020-0023　岩手県盛岡市内丸13番１号

電話（019）654－2235

印　刷　㈲ジロー印刷企画

〒020-0066　岩手県盛岡市上田2丁目17番4号

電話（019）651－6644

©（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2013